

基本計画書

基本計画書									
事項		記入欄						備考	
計画の区分		学部設置							
フリガナ設置者		ガッコウホウシン リツメイカン 学校法人 立命館							
フリガナ大学の名称		リツメイカンダク 立命館大学							
大学本部の位置		京都府京都市中京区西ノ京東梅尾町8番地							
大学の目的		立命館大学は、建学の精神と教学理念にもとづき、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努め、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献することを目的とする。							
新設学部等の目的		デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請にこたえるために、本学園の根幹である「建学の精神」、「教学理念」および「立命館憲章」に則り、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨がる知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」、「問い直し力」、「共創力」、「問題発見力」および「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地
	デザイン・アート学部	年	人	年次人	人			年 月 第 年次	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	デザイン・アート学科	4	180	—	720	学士（デザイン・アート）	美術関係	令和8年4月第1年次	
	計		180	—	720				
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	立命館大学 理工学部電気電子工学科〔定員減〕（△20）（令和7年6月認可申請済） 理工学部数理科学科〔定員増〕（ 20）（令和7年6月認可申請済） 総合心理学部総合心理学科〔定員増〕（ 30）（令和7年6月認可申請済） デザイン・アート学部デザイン・アート学科〔定員増〕（ 180）（令和7年6月認可申請済） 立命館大学大学院 法学研究科法学専攻博士課程前期課程〔定員減〕（△10）（令和7年4月届出済） 理工学研究科基礎理工学専攻博士課程前期課程〔定員増〕（20）（令和7年4月届出済） 理工学研究科電子システム専攻博士課程前期課程〔定員増〕（15）（令和7年4月届出済） 理工学研究科機械システム専攻博士課程前期課程〔定員増〕（15）（令和7年4月届出済） 理工学研究科都市システム専攻博士課程前期課程〔定員増〕（25）（令和7年4月届出済） 人間科学研究科人間科学専攻博士課程前期課程〔定員増〕（10）（令和7年4月届出済） デザイン・アート学研究科デザイン・アート学専攻修士課程（令和7年4月届出済） 令和8年4月名称変更予定 理工学研究科環境都市専攻→理工学研究科都市システム専攻（令和7年4月届出済）								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	デザイン・アート学部 デザイン・アート学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位			
学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員（助手を除く）	
		教授	准教授	講師	助教	計			
新設	デザイン・アート学部	人	人	人	人	人	人	人	
	デザインアート学科	16 (16)	7 (7)	0 (0)	2 (2)	25 (25)	0 (0)	170 (170)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	16 (16)	7 (7)	0 (0)	2 (2)	25 (25)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	16 (16)	7 (7)	0 (0)	2 (2)	25 (25)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	16 (16)	7 (7)	0 (0)	2 (2)	25 (25)				
分	計	16 (16)	7 (7)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	170 (170)	

既	法学部 法学科	52 (52)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	61 (61)	0 (0)	452 (452)	大学設置基準別表第一-I に定める基幹教員数の四 分の三の数 23人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	52 (52)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	61 (61)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	52 (52)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	61 (61)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	52 (52)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	61 (61)			
	経済学部 経済学科	51 (51)	15 (15)	0 (0)	0 (0)	66 (66)	0 (0)	405 (405)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	50 (50)	14 (14)	0 (0)	0 (0)	64 (64)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	50 (50)	14 (14)	0 (0)	0 (0)	64 (64)				
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (2)				
計（a～d）	51 (51)	15 (15)	0 (0)	0 (0)	66 (66)				
設	経営学部 経営学科	27 (27)	17 (17)	0 (0)	0 (0)	44 (44)	0 (0)	392 (392)	大学設置基準別表第一-I に定める基幹教員数の四 分の三の数 19人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	27 (27)	17 (17)	0 (0)	0 (0)	44 (44)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	27 (27)	17 (17)	0 (0)	0 (0)	44 (44)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	27 (27)	17 (17)	0 (0)	0 (0)	44 (44)			
	経営学部 国際経営学科	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	341 (341)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)				
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
計（a～d）	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)				
分									大学設置基準別表第一-I に定める基幹教員数の四 分の三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	5 (5)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	10 (10)			

既	産業社会学部 現代社会学科						53 (53)	26 (26)	0 (0)	0 (0)	79 (79)	2 (2)	517 (517)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 31人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	51 (51)	26 (26)	0 (0)	0 (0)	77 (77)								
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)								
	小計（a～b）	53 (53)	26 (26)	0 (0)	0 (0)	79 (79)								
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	計（a～d）	53 (53)	26 (26)	0 (0)	0 (0)	79 (79)								
	文学部 人文学科						51 (51)	27 (27)	0 (0)	0 (0)	78 (78)	1 (1)	640 (640)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	51 (51)	27 (27)	0 (0)	0 (0)	78 (78)								
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
小計（a～b）	51 (51)	27 (27)	0 (0)	0 (0)	78 (78)									
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)									
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)									
計（a～d）	51 (51)	27 (27)	0 (0)	0 (0)	78 (78)									
設	理工学部 電気電子工学科						12 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	404 (404)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	19 (19)								
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	小計（a～b）	12 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	19 (19)								
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	計（a～d）	12 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	19 (19)								
	理工学部 機械工学科						12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	417 (417)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)								
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
小計（a～b）	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)									
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)									
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)									
計（a～d）	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)									
分							12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)								
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	小計（a～b）	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)								
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)								
	計（a～d）	12 (12)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	19 (19)								

既	理工学部 環境都市工学科						15 (15)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	23 (23)	0 (0)	408 (408)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの						15 (15)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	23 (23)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）						15 (15)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	23 (23)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）						15 (15)	7 (7)	1 (1)	0 (0)	23 (23)			
	理工学部 ロボティクス学科						7 (7)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	404 (404)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの						7 (7)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
設	小計（a～b）						7 (7)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 7人
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）						7 (7)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			
	理工学部 数理科学科						7 (7)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	416 (416)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの						7 (7)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）						7 (7)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
分	計（a～d）						7 (7)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 8人
	理工学部 物理科学科						11 (11)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	401 (401)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの						10 (10)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	12 (12)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）						10 (10)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	12 (12)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）						0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）						1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)			
	計（a～d）						11 (11)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			

既

理工学部 電子情報工学科		10 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	406 (406)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 7人
a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		10 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		10 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	13 (13)			
理工学部 建築都市デザイン学科		6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)	1 (1)	402 (402)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 7人
a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		6 (6)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	11 (11)			
国際関係学部 国際関係学科		28 (28)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	39 (39)	0 (0)	384 (384)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 12人
a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	28 (28)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	39 (39)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		28 (28)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	39 (39)			
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		28 (28)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	39 (39)			
国際関係学部 アメリカン大学・立命館大学国際連携学科		10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	55 (55)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
a.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)			
b.	基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)			
c.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d.	基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		10 (10)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	13 (13)			

分

既

政策科学部 政策科学科		21 (21)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	32 (32)	0 (0)	262 (262)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 16人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		21 (21)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	32 (32)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		21 (21)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	32 (32)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		21 (21)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	32 (32)			
情報理工学部 情報理工学科		40 (40)	7 (7)	2 (2)	0 (0)	49 (49)	0 (0)	292 (292)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 20人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		40 (40)	7 (7)	2 (2)	0 (0)	49 (49)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		40 (40)	7 (7)	2 (2)	0 (0)	49 (49)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		40 (40)	7 (7)	2 (2)	0 (0)	49 (49)			
映像学部 映像学科		22 (22)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	34 (34)	0 (0)	323 (323)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 13人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		22 (22)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		22 (22)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		22 (22)	10 (10)	2 (2)	0 (0)	34 (34)			
薬学部 薬学科		13 (13)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	288 (288)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 19人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		13 (13)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	26 (26)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）		13 (13)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	26 (26)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）		13 (13)	8 (8)	5 (5)	0 (0)	26 (26)			

分

既	薬学部 創薬科学科						0	270
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	(270)
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)		
	生命科学部 応用化学科						0 (0)	339 (339)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
設	小計（a～b）	11 (11)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	11 (11)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	12 (12)		
	生命科学部 生物工学科						0 (0)	340 (340)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	8 (8)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
分	計（a～d）	8 (8)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	生命科学部 生命情報学科						0 (0)	345 (345)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)		

既	生命科学部 生命医科学科		7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	341 (341)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)				
	スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科		14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	1 (1)	320 (320)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
設		小計（a～b）	14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	14 (14)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	19 (19)				
	総合心理学部 総合心理学科		20 (20)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	27 (27)	0 (0)	246 (246)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	20 (20)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	27 (27)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	20 (20)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	27 (27)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
分		計（a～d）	20 (20)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	27 (27)			
	食マネジメント学部 食マネジメント学科		15 (15)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	25 (25)	3 (3)	280 (280)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	15 (15)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	25 (25)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	15 (15)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	25 (25)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	15 (15)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	25 (25)				

既 設 分	グローバル教養学部 グローバル教養学科		6 (6)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	31 (31)	大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 9人			
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの		6 (6)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	14 (14)						
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
	小計（a～b）		6 (6)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	14 (14)						
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)						
	計（a～d）		6 (6)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	14 (14)						
分	計		548 (548)	218 (218)	20 (20)	2 (2)	786 (786)	0 (0)	- (-)				
合 計			564 (564)	225 (225)	20 (20)	2 (2)	811 (811)	8 (8)	- (-)				
職 種			専 属		その他			計					
事 務 職 員			605 (605)		437 (437)			1042 (1042)					
技 術 職 員			1 (1)		0 (0)			1 (1)					
図 書 館 職 員			5 (5)		0 (0)			5 (5)					
そ の 他 の 職 員			0 (0)		0 (0)			0 (0)					
指 導 補 助 者			0 (0)		0 (0)			0 (0)					
計			611 (611)		437 (437)			1048 (1048)					
校 地 等	区 分		専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計				
	校 舎 敷 地		1,015,668.85㎡		0㎡		0㎡		1,015,668.85㎡				
	そ の 他		391,596.33㎡		0㎡		0㎡		391,596.33㎡				
	合 計		1,407,265.18㎡		0㎡		0㎡		1,407,265.18㎡				
校 舎			専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計				
			580,361.44㎡ (577,580.49㎡)		0㎡ (0㎡)		0㎡ (0㎡)		580,361.44㎡ (577,580.49㎡)				
教 室 ・ 教 員 研 究 室			教 室		1,683室		教 員 研 究 室		27室		大学全体		
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕 冊		電子図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕 種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕		機械・器具 点	標本 点	学部等単位での 特定不能のため 大学全体の数 ただし「図書」 のうち「電子図 書」は本学が公 表している蔵書 数には計上して いない
	デザイン・アート学部 デザイン・アート学科		3,593,573 [1,095,042] (3,593,573 [1,095,042])		81,312 [60,545] (81,312 [60,545])		129,440 [82,367] (129,440 [82,367])		65,322 [65,298] (65,322 [65,298])		1,019 (1,019)	0 (0)	
	計		3,593,573 [1,095,042] (3,593,573 [1,095,042])		81,312 [60,545] (81,312 [60,545])		129,440 [82,367] (129,440 [82,367])		65,322 [65,298] (65,322 [65,298])		1,019 (1,019)	0 (0)	
スポーツ施設等			スポーツ施設		講堂		厚生補導施設		大学全体				
			2,025.00㎡		836.51㎡		61,324.81㎡						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費 の見 積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は 大学全体の経費 を記載してい る。図書購入費 には、電子ジャー ナル、データ ベースの整備費 （運用コスト含 む）を含む。			
		教員1人当り研究費等		1,030千円	1,033千円	1,036千円	1,039千円	-	-				
		共同研究費等		72,869千円	73,233千円	73,599千円	73,967千円	-	-				
		図 書 購 入 費	1,418,446千円	1,442,159千円	1,460,062千円	1,468,235千円	1,476,408千円	-	-				
	設 備 購 入 費	1,131,250千円	1,166,097千円	1,178,333千円	1,183,919千円	1,189,506千円	-	-					
	学生1人当り 納付金			第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
				1,900千円	1,700千円	1,700千円	1,700千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、寄付金収入及び補助金収入等により維持する。										

既設大学等の状況	大 学 等 の 名 称	立命館大学								
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所 在 地	
	法学部	年	人	年次人	人		倍			
	法学科	4	720	-	2,880	学士（法学）	1.08 ≪1.03≫	昭和23年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1	
	経済学部									
	経済学科	4	760	-	3,040	学士（経済学）	1.09 ≪1.04≫	昭和23年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	
	経営学部									
	経営学科	4	650	-	2,600	学士（経営学）	1.07 ≪1.02≫ 1.07 ≪1.03≫	昭和37年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号	
	国際経営学科	4	145	-	580	学士（経営学）	1.07 ≪1.01≫	平成18年度		
	産業社会学部									
	現代社会学科	4	810	-	3,240	学士（社会学）	1.08 ≪1.02≫	平成19年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1	
	文学部									
	人文学科	4	1,035	-	4,140	学士（文学）	1.10 ≪1.04≫	平成16年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1	
	理工学部									
電気電子工学科	4	154	3年次12	640	学士（工学）	1.09 ≪1.04≫ 1.16 ≪1.10≫	昭和24年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号		
機械工学科	4	173	3年次10	712	学士（工学）	1.08 ≪1.03≫	昭和24年度			
環境都市工学科	4	166	3年次4	672	学士（工学）	1.09 ≪1.05≫	平成30年度			
ロボティクス学科	4	90	3年次6	372	学士（工学）	1.06 ≪1.01≫	平成8年度			
数理科学科	4	97	-	388	学士（理学）	1.06 ≪1.00≫	平成12年度			
物理科学科	4	86	3年次2	348	学士（理学）	1.07 ≪1.02≫	平成12年度			
電子情報工学科	4	102	3年次8	424	学士（工学）	1.11 ≪1.03≫	平成16年度			
建築都市デザイン学科	4	91	3年次4	372	学士（工学）	1.04 ≪1.01≫	平成16年度			

既設大学等の状況	国際関係学部						1.05 《0.96》			
	国際関係学科	4	335	-	1,340	学士（国際関係学）	1.08 《0.98》	昭和63年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1	
	アメリカ大学・立命館大学国際連携学科	4	25	-	100	学士（グローバル国際関係学）	0.75 《0.73》	平成30年度		
	政策科学部									
	政策科学科	4	410	-	1,640	学士（政策科学）	1.05 《1.02》	平成6年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号	
	情報理工学部									
	情報理工学科	4	475	3年次 40	1,980	学士（工学）	1.06 《0.99》	平成29年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号	
	映像学部									
	映像学科	4	240	-	800	学士（映像学）	1.11 《1.04》	平成19年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号 京都府京都市北区等持院北町56番地の1	令和6年度入学定員増（80人）
	薬学部									
	薬学科	6	100	-	600	学士（薬学）	1.03	平成20年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	6年制学科
	創薬科学科	4	60	-	240	学士（薬科学）	1.08	平成27年度		4年制学科
	生命科学部						1.05 《1.01》			
	応用化学科	4	111	-	444	学士（理学） 学士（工学）	0.96 《0.93》	平成20年度		
	生物工学科	4	86	-	344	学士（工学）	1.10 《1.06》	平成20年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	
	生命情報学科	4	64	-	256	学士（理学） 学士（工学）	1.13 《1.09》	平成20年度		
	生命医科学科	4	64	-	256	学士（理学）	1.04 《1.01》	平成20年度		
	スポーツ健康科学部									
	スポーツ健康科学科	4	235	-	940	学士（スポーツ健康科学）	1.09	平成22年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	
	総合心理学部									
	総合心理学科	4	280	-	1,120	学士（心理学）	1.11 《1.06》	平成28年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号	
	食マネジメント学部									
	食マネジメント学科	4	320	-	1,280	学士（食マネジメント）	1.09 《1.03》	平成30年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	
	グローバル教養学部									
	グローバル教養学科	4	100	-	400	学士（グローバル教養学）	1.05	平成31年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号	
	法学研究科									
	法学専攻									
	博士課程前期課程	2	60	-	120	修士（法学）	0.40	昭和25年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1	
	博士課程後期課程	3	10	-	30	博士（法学）	0.10	昭和28年度		
	経済学研究科									
	経済学専攻									
	博士課程前期課程	2	50	-	100	修士（経済学）	0.95	昭和25年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号	
	博士課程後期課程	3	5	-	15	博士（経済学）	2.00	昭和39年度		

既設大学等の状況	経営学研究科								
	企業経営専攻								
	博士課程前期課程	2	60	—	120	修士（経営学）	0.70	昭和41年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	博士課程後期課程	3	15	—	45	博士（経営学）	0.48	昭和41年度	
	社会学研究科								
	応用社会学専攻								
	博士課程前期課程	2	60	—	120	修士（社会学）	0.66	昭和47年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	博士課程後期課程	3	15	—	45	博士（社会学）	0.77	昭和49年度	
	文学研究科								
	人文学専攻								
	博士課程前期課程	2	70	—	140	修士（文学）	0.87	平成18年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	博士課程後期課程	3	20	—	60	博士（文学）	1.00	平成18年度	
	行動文化情報学専攻								
	博士課程前期課程	2	35	—	70	修士（文学）	0.65	平成26年度	
	博士課程後期課程	3	15	—	45	博士（文学）	0.24	平成26年度	
	理工学研究科								
	基礎理工学専攻								
	博士課程前期課程	2	50	—	100	修士（理学） 修士（工学）	1.16	平成18年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号
	博士課程後期課程	3	6	—	18	博士（理学） 博士（工学）	1.05	平成24年度	
	電子システム専攻								
	博士課程前期課程	2	140	—	280	修士（工学）	0.96	平成24年度	
	博士課程後期課程	3	8	—	24	博士（工学）	1.16	平成24年度	
	機械システム専攻								
	博士課程前期課程	2	140	—	280	修士（工学）	1.18	平成24年度	
	博士課程後期課程	3	11	—	33	博士（工学）	0.57	平成24年度	
	環境都市専攻								
	博士課程前期課程	2	120	—	240	修士（工学）	1.07	平成24年度	
	博士課程後期課程	3	15	—	45	博士（工学）	0.53	平成24年度	
	国際関係研究科								
	国際関係学専攻								
	博士課程前期課程	2	60	—	120	修士（国際関係学）	1.15	平成4年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	博士課程後期課程	3	10	—	30	博士（国際関係学）	1.66	平成6年度	
	政策科学研究科								
	政策科学専攻								
	博士課程前期課程	2	40	—	80	修士（政策科学）	1.37	平成9年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	博士課程後期課程	3	15	—	45	博士（政策科学）	0.80	平成11年度	

既設大学等の状況	言語教育情報研究科								
	言語教育情報専攻								
	修士課程	2	60	-	120	修士（言語教育情報学）	0.87	平成15年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	テクノロジー・マネジメント研究科								
	テクノロジー・マネジメント専攻								
	博士課程前期課程	2	70	-	140	修士（技術経営）	0.99	平成17年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	博士課程後期課程	3	5	-	15	博士（技術経営）	2.00	平成18年度	
	スポーツ健康科学研究科								
	スポーツ健康科学専攻								
	博士課程前期課程	2	25	-	50	修士（スポーツ健康科学）	1.22	平成22年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号
	博士課程後期課程	3	8	-	24	博士（スポーツ健康科学）	1.91	平成24年度	
	映像研究科								
	映像専攻								
	修士課程	2	10	-	20	修士（映像）	1.00	平成23年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	情報理工学研究科								
	情報理工学専攻								
	博士課程前期課程	2	200	-	400	修士（工学）	1.13	平成24年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	博士課程後期課程	3	15	-	45	博士（工学）	1.15	平成24年度	
	生命科学研究科								
	生命科学専攻								
	博士課程前期課程	2	150	-	300	修士（理学） 修士（工学）	1.18	平成24年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号
	博士課程後期課程	3	15	-	45	博士（理学） 博士（工学）	0.86	平成24年度	
	先端総合学術研究科								
	先端総合学術専攻								
	一貫制博士課程	5	30	-	150	博士（学術）	1.22	平成15年度	京都府京都市北区等持院北町56番地の1
	薬学研究科								
	薬科学専攻								
	博士課程前期課程	2	20	-	40	修士（薬科学）	1.75	令和2年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号
	博士課程後期課程	3	3	-	9	博士（薬科学）	1.44	令和3年度	
	薬学専攻								
	博士課程	4	3	-	12	博士（薬学）	0.91	平成26年度	
	人間科学研究科								
	人間科学専攻								
	博士課程前期課程	2	65	-	130	修士（人間科学） 修士（心理学）	0.92	平成30年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	博士課程後期課程	3	20	-	60	博士（人間科学） 博士（心理学）	1.70	平成30年度	

既設大学等の状況	食マネジメント研究科								
	食マネジメント専攻								
	博士課程前期課程	2	20	—	40	修士（食マネジメント）	1.07	令和3年度	滋賀県草津市野路東1丁目1番1号
	博士課程後期課程	3	3	—	9	博士（食マネジメント）	1.22	令和3年度	
	法務研究科								
	法曹養成専攻								
	専門職学位課程	3	70	—	210	法務博士（専門職）	0.86	平成16年度	京都府京都市中京区西ノ京東梅尾町8番地
	経営管理研究科								
	経営管理専攻								
	専門職学位課程	2	80	—	160	経営修士（専門職）	0.80	平成18年度	大阪府茨木市岩倉町2番150号
	観光マネジメント専攻								
	専門職学位課程	2	70	—	140	観光経営修士（専門職）	0.69	令和6年度	
	教職研究科								
	実践教育専攻								
	専門職学位課程	2	35	—	70	教職修士（専門職）	1.18	平成29年度	京都府京都市中京区西ノ京東梅尾町8番地
大 学 の 名 称 立命館アジア太平洋大学									
学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所 在 地
アジア太平洋学部		年	人	年次人	人		倍		
アジア太平洋学科		4	510	2年次 5 3年次 5	2,215	学士（アジア太平洋学）	1.08	平成12年度	大分県別府市十文字原1丁目1番
国際経営学部									
国際経営学科		4	610	2年次 5 3年次 5	2,515	学士（経営学）	1.10	平成12年度	大分県別府市十文字原1丁目1番
サステイナビリティ観光学部									
サステイナビリティ観光学科		4	350	—	1,050	学士（サステイナビリティ観光学）	0.91	令和5年度	大分県別府市十文字原1丁目1番
アジア太平洋研究科									
アジア太平洋学専攻									
博士課程前期課程		2	15	—	30	修士（アジア太平洋学）	1.03	平成15年度	大分県別府市十文字原1丁目1番
博士課程後期課程		3	10	—	30	博士（アジア太平洋学）	0.86	平成15年度	
国際協力政策専攻									
博士課程前期課程		2	45	—	90	修士（国際協力政策）	0.85	平成15年度	
経営管理研究科									
経営管理専攻									
修士課程		2	40	—	80	修士（経営管理）	0.88	平成15年度	大分県別府市十文字原1丁目1番

附属施設の概要	名称 : 人文科学研究所 目的 : 人文科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 昭和23年4月	
	名称 : 国際地域研究所 目的 : 社会科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 昭和63年4月	
	名称 : 国際言語文化研究所 目的 : 人文社会科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成元年4月	
	名称 : 人間科学研究所 目的 : 人文社会科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成2年4月	
	名称 : アート・リサーチセンター 目的 : 人文社会科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成10年6月	
	名称 : 歴史都市防災研究所 目的 : 人文科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成15年8月	
	名称 : 白川静記念東洋文字文化研究所 目的 : 東洋文字文化の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成30年4月	
	名称 : 生存学研究所 目的 : 人文社会科学分野の研究 所在地 : 京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月 : 平成31年4月	
	名称 : 社会システム研究所 目的 : 社会科学分野の研究 所在地 : 滋賀県草津市野路東1丁目1番1号 設置年月 : 平成10年4月	
	名称 : 理工学研究所 目的 : 自然科学分野の研究 所在地 : 滋賀県草津市野路東1丁目1番1号 設置年月 : 昭和30年4月	
	名称 : S R センター 目的 : 自然科学分野の研究 所在地 : 滋賀県草津市野路東1丁目1番1号 設置年月 : 平成8年4月	
	名称 : V L S I センター 目的 : 自然科学分野の研究 所在地 : 滋賀県草津市野路東1丁目1番1号 設置年月 : 平成12年4月	
	名称 : 地域情報研究所 目的 : 社会科学分野の研究 所在地 : 大阪府茨木市岩倉町2番150号 設置年月 : 平成11年4月	
	名称 : アジア・日本研究所 目的 : 社会科学分野の研究 所在地 : 大阪府茨木市岩倉町2番150号 設置年月 : 平成27年12月	

附属施設の概要	名称：立命館大学国際平和ミュージアム 目的：国際的視野に立った平和の今日的問題の教育研究と、そのための資料 収集、整理、保存および展示 所在地：京都府京都市北区等持院北町56番地の1 設置年月：平成4年5月	
	名称：スポーツ健康科学総合研究所 目的：スポーツ健康科学分野の研究 所在地：滋賀県草津市野路東1丁目1番1号 設置年月：令和4年4月	
	名称：デザイン科学研究所 目的：高次元の文理融合と総合知・実践知の蓄積及び利活用をグローバルに推進する 所在地：大阪府茨木市岩倉町2番150号 設置年月：令和6年4月	

(注)

- 1 共同学科の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」，「新設学部等の目的」，「新設学部等の概要」，「教育課程」及び「新設分」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 2 「新設分」及び「既設分」の備考の「大学設置基準別表第一イ」については，専門職大学にあっては「専門職大学設置基準別表第一イ」、短期大学にあっては「短期大学設置基準別表第一イ」，専門職短期大学にあっては「専門職短期大学設置基準別表第一イ」にそれぞれ読み替えて作成すること。
- 3 「既設分」については，共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 4 私立の大学の学部又は短期大学の学科の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「教室・教員研究室」，「図書・設備」及び「スポーツ施設等」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 5 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は，「教育課程」，「校地等」，「校舎」，「教室・教員研究室」，「図書・設備」，「スポーツ施設等」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず，斜線を引くこと。
- 6 「教育課程」の欄の「実験・実習」には，実技も含むこと。
- 7 空欄には，「－」又は「該当なし」と記入すること。

教 育 課 程 等 の 概 要																
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 （ 助 手 を 除 く の 教 員	
専 門 科 目	Design in society (DiS) 科目群	デザイン学生成プロジェクト演習1	2前	○	2			○		16	4					共同
		デザイン学生成プロジェクト演習2	2後	○	2			○		12	7		1			共同
		デザイン学総合研究1	3前	○	2			○		7	5					
		デザイン学総合研究2	3後	○	2			○		9	2					
		卒業演習1	4前	○	2			○		16	7					
		卒業演習2	4後	○	2			○		16	7					
		小計 (6科目)	—	—	12	0	0	—		16	7	0	1	0	0	
	Design Studies (DS) 科目群	デザイン学1	1前	○	4			○		5	3					共同
		デザイン学2	1後	○	4			○		4	4					共同
		デザイン学3A	2前	○	2			○		1						メディア
		デザイン学3B	2後	○	2			○			1					メディア
		デザイン学4	2後	○	2			○		16	7					オムニバス、共同 (一部)、メディア
		デザイン学5	3前	○	2			○		5	2		1			オムニバス、共同 (一部)
		デザイン学6	3後	○	2			○		1			1			共同、メディア
		小計 (7科目)	—	—	18	0	0	—		16	7	0	2	0	0	
	D e s i g n L a n g u a g e (D L) 科目群	英語	英語P1	○	2			○							4	
			英語P2	○	2			○							4	
			英語P3	○	2			○							4	
			英語P4	○	2			○							4	
		技能 導入	アート・ドキュメンテーション		2			○		1						
			デザイン・アートのための製図		2			○			1				2	共同
			デザイン・アートのためのプログラ ミング		2			○		1						
			デザインリサーチ		2			○			1					
			デザインリサーチのためのアカデ ミック・ライティング		2			○		1	1					共同
			デジタルビジュアルデザイン基礎		2			○					1			
			Webデザイン基礎		2			○					1			
			デジタルアート表現基礎 (絵画)		2			○		1						
			デジタルアート表現基礎 (立体造 形)		2			○		1					1	
			フィジカルアート表現基礎 (絵画)		2			○			1				1	
			フィジカルアート表現基礎 (身体パ フォーマンス)		2			○			1				1	
			フィジカルアート表現基礎 (立体造 形)		2			○		1					1	
	専 門	アート作品のデジタル分析技術	2・3前・後			2		○		1						

科目 区分				授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
							必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員 (助手を除く)	
専門科目	Design Language (DL) 科目群	技能群	専門	工芸・美術・芸能の社会活用	2・3前・後			2			○		1						
				テキストマイニング	2・3前・後			2			○					1			
				デザイン評価法	2・3前			2			○							1	
				デジタル文化資源の活用	2・3前・後			2			○		1					1	
				データベース構築法	2・3前・後			2			○		1						
				パフォーマンス制作と記録	2・3前・後			2			○							1	
				美術品・工芸品のデジタル化技術	2・3前・後			2			○		1						
				映像・音声アーカイブ	2・3前・後			2			○					1			
				コンピュータグラフィックス	2・3前・後			2			○			1					
				サウンド処理	2・3前・後			2			○		1						
				デザインとAI・人工知能・機械学習	2・3前・後			2			○		1						
				デザインとバーチャルリアリティ	2・3前・後			2			○		1						
				デザインのためのビッグデータ解析	2・3前・後			2			○					1			
				デジタルファブリケーション	2・3前・後			2			○		1						
				Webアーカイブ技術	2・3前・後			2			○							1	
				Webコンテンツ活用システム	2・3前・後			2			○		1						
				コミュニティデザイン	2・3前・後			2			○							1	
				ジオデザイン	2・3前・後			2			○							1	
				地域調査法	2・3前・後			2			○			1					
				データビジュアライゼーション	2・3前・後			2			○		1						
				CAD/CG演習	2・3前・後			2			○			1				2	共同
				アートマネジメント演習	2・3前			2			○		1						
				グラフィックファシリテーション	2・3前・後			2			○							1	
				サービスデザイン	2・3後			2			○		1						
				デザインエスノグラフィー	2・3前			2			○		1						
				ワークショップデザイン	2・3前・後			2			○			1				1	
				デジタルアート表現応用（インスタレーション）	2・3前・後			2			○		1						
				フィジカルアート表現応用（インスタレーション）	2・3前・後			2			○			1					
				デザイン・アート特殊演習	2・3・4前・後			2			○		1			1			
	知識群	導入		インダストリアルデザイン論	1後			2		○			1					1	メディア
				京都・伝統文化論	1前			2		○			1						メディア
				グローバルデザイン論	1前			2		○								1	メディア
				芸術批評論	1後			2		○								1	メディア

科目 区分				授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
							必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手 を除く 教員)	
専 門 科 目	D e s i g n L a n g u a g e (D L) 科 目 群	知 識 群	導 入	地域デザイン論	1前			2		○								1	メディア
				デザイン・アートとコンピュータ基礎	1前			2		○			1						メディア
				デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション	1前			2		○						1			メディア
				デザイン態度論	1後			2		○			1						メディア
				デザイン理論	1前			2		○			1						メディア
				デジタルヒューマニティーズ概論	1後			2		○								1	メディア
				人間中心デザイン論	1前			2		○								1	メディア
			専 門	音楽とデザイン	2・3前			2		○								1	メディア
				芸能・演劇史	2・3後			2		○			1						メディア
				現代アート論	2・3前			2		○			1						メディア
				工芸・産業史	2・3後			2		○			1						メディア
				視覚芸術表現論	2・3後			2		○								1	メディア
				視覚文化・芸術史	2・3前			2		○			1						メディア
				身体表現論	2・3前			2		○			1						メディア
				デザインと人類学	2・3後			2		○								1	メディア
				感性・認知情報処理論	2・3前			2		○				1					メディア
				デザインとコンピュータ応用	2・3後			2		○			1						メディア
				デザインと知覚	2・3後			2		○								1	メディア
				デザインと人間工学	2・3後			2		○			1						メディア
				デザインのための数理	2・3前			2		○			1						メディア
				デザインのためのデータマイニング	2・3後			2		○						1			メディア
				デジタルアーカイブ概論	2・3前			2		○			1						メディア
				デジタルメディアデザイン論	2・3後			2		○				1					メディア
				メディア処理論	2・3前			2		○				1					メディア
				建築意匠論	2・3後			2		○				1					メディア
				建築情報論	2・3前			2		○				1					メディア
				コ・デザイン論	2・3後			2		○			1						メディア
				地理情報科学	2・3前			2		○			1						メディア
				都市デザイン	2・3後			2		○				1				1	オムニバス、 メディア
				ランドスケープ・庭園史	2・3前			2		○				1				1	オムニバス、 メディア
				歴史まちづくり	2・3後			2		○				1					メディア
				アートマネジメント論	2・3前			2		○								1	メディア
				戦略的デザイン論	2・3後			2		○				1					メディア

科目 区分				授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
							必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基幹 教員 以外 の教員 (助手を除く)		
専門科目	Design Language (DL) 科目群	知識群	専門	デザイン・アートと国際社会	2・3後			2		○			1						メディア	
				デザイン・アートと世界史	2・3前			2		○			1						メディア	
				デザイン・アートと歴史・考古学	2・3前			2		○			1						メディア	
				デザインと行政	2・3前			2		○				1					メディア	
				デザインと知的財産権	2・3後			2		○								1	メディア	
				デザインとマーケティング	2・3前			2		○								1	メディア	
				デザインマネジメント論	2・3後			2		○			1						メディア	
				美術教育論	2・3前			2		○			1						メディア	
				ミュゼオロジー	2・3後			2		○			1						メディア	
				デザイン・アート特殊講義	2・3・4前・後			2		○			1			1			メディア	
				小計 (93科目)	—	—	8	178	0	—			15	7	0	2	0	34		
	卒業研究	卒業研究	4後	○	2				○		16	7								
		小計 (1科目)	—	—	2	0	0	—			16	7	0	0	0	0				
	Design Study Abroad	Design Study Abroad	1・2・3・4前・後			2			○		3	1						標準外		
		小計 (1科目)	—	—	0	2	0	—			3	1	0	0	0	0				
	教養科目				日本の近現代と立命館	1・2前			2		○								1	
					ピア・サポート論	1・2前・後			2		○									1
					ジェンダーとダイバーシティ	1・2前・後			2		○									1
メディアと現代文化					1・2前			2		○									1	
市民と政治					1・2前・後			2		○									1	
日本国憲法					1・2前・後			2		○									1	
災害と安全					1・2前			2		○									1	
歴史観の形成					1・2後			2		○									1	
科学・技術と社会					1・2後			2		○									1	
現代平和論					1・2前・後			2		○									1	
戦争の歴史と思想					1・2前・後			2		○									1	
平和人権フィールドスタディ					2・3通			2			○								3	
哲学と人間					1・2後			2		○									1	
人間性と倫理					1・2後			2		○									1	
心理学入門					1・2前・後			2		○									1	
論理と思考					1・2前			2		○									1	
社会思想史					1・2前			2		○									1	
科学技術と倫理					1・2前			2		○									1	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外を除く教員	
教養科目	宗教と社会	1・2前			2		○								1	メディア
	メンタルヘルス	1・2前			2		○								1	
	(留) 日本の文化・地理・歴史	1・2前			2		○								1	
	メディアと図書館	1・2前・後			2		○								1	
	社会学入門	1・2前			2		○								1	
	文化人類学入門	1・2前・後			2		○								1	
	文学と社会	1・2前・後			2		○								1	
	現代の教育	1・2前・後			2		○								1	
	世界の言語と文化	1・2前			2		○								1	
	世界と日本の食文化	1・2前			2		○								1	
	観光学	1・2前・後			2		○								1	
	京都学	1・2前			2		○								1	
	(留) 日本語学	2・3後			2		○								1	
	美と芸術の論理	1・2後			2		○								1	
	音楽原論	1・2前・後			2		○								1	
	映像と表現	1・2前			2		○								1	
	映像メディア実践入門	1・2前・後			2		○								1	
	文芸創作論	1・2前・後			2		○								1	
	国の行政組織	1・2前			2		○								1	
	現代社会と法	1・2前・後			2		○								1	
	経済と社会	1・2後			2		○								1	
	企業と社会	1・2後			2		○								1	
	現代日本の政治	1・2前・後			2		○								1	
	現代の国際関係と日本	1・2前			2		○								1	
	日本経済概説	1・2後			2		○								1	
	現代の世界経済	1・2後			2		○								1	
	現代の経営	1・2前			2		○								1	
	社会と福祉	1・2後			2		○								1	
	ソーシャルデザイン論	1・2前・後			2		○								1	メディア
	(留) 日本の社会・政治	1・2後			2		○								1	
(留) 日本の経済・経営	1・2前			2		○								1		
エリアスタディ入門	1・2後			2		○								1		
新しい日本史像	1・2前			2		○								1		

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外を除く (助手を除く)	
教養科目	中国の国家と社会	1・2後			2		○								1	
	東アジアと朝鮮半島	1・2前			2		○								1	
	ヨーロッパの歴史	1・2前			2		○								1	
	アメリカの社会と文化	1・2前			2		○								1	
	イスラーム世界の多様性	1・2前			2		○								1	
	科学的な見方・考え方	1・2前			2		○								1	
	宇宙科学	1・2後			2		○								1	
	地球科学	1・2前			2		○								1	
	生命科学（分子と生命）	1・2前・後			2		○								1	
	生命科学（生物と生態系）	1・2前・後			2		○								1	
	材料と化学	1・2前			2		○								1	
	現代環境論	1・2後			2		○								1	
	科学と技術の歴史	1・2前			2		○								1	
	生命科学と倫理	1・2前			2		○								1	
	近現代の科学技術	1・2後			2		○								1	
	（留）日本の自然・科学技術	1・2後			2		○								1	
	数理の世界	1・2後			2		○								1	
	情報の数理	1・2後			2		○								1	
	情報科学	1・2前			2		○								1	
	情報技術と社会	1・2前			2		○								1	
	統計学	1・2後			2		○								1	メディア
	データサイエンス・AI基礎	1・2前・後			2		○								1	メディア
	データエンジニアリング基礎	1・2前・後			2		○								1	メディア
	Liberal Arts Seminar	1・2前・後			2			○							1	メディア
	Introduction to Law	1・2前・後			2		○								1	
	Modern World History	1・2前・後			2		○								1	
	Japan and the West	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to Economics	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to Linguistics	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to Anthropology	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to the United Nations	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to Peace Studies	1・2前・後			2		○								1	
	Introduction to Gender Studies	1・2前・後			2		○								1	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員	
教養科目	Introduction to Computational Linguistics	1・2後			2		○								1	メディア
	History of Computing	1・2後			2		○								1	メディア
	Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities	1・2後			2		○							1		
	Understanding Language	1・2後			2		○						1			
	Computers in Education	1・2後			2		○						1			
	Language in Politics	1・2後			2		○						1			
	Introductory Course to Climate Change and Global Warming	1・2前			2		○							1	メディア	
	Introductory Course to International Project Development	1・2前			2		○						1			
	Understanding Visual Culture	1・2前・後			2		○						1			
	Introduction to Food Culture	1・2後			2		○						1			
	Cross Border Policy Issues	1・2後			2			○					1			
	Introduction to Global Justice	1・2前			2		○						1	メディア		
	Foundations of Data Science and AI	1・2前			2		○						1			
	Foundations of Data Engineering	1・2後			2		○						1			
	Cross-cultural Encounters 1	1・2前・後			2			○					1			
	Cross-cultural Encounters 2	1・2前・後			2			○					1			
	Cross-cultural Studies	1・2後			2		○						1	※実習、標準外		
	Cross-cultural Seminar	1・2前			2			○					1			
	Non-verbal Communication	1・2前			2		○						1			
	Academic Skills 1	1・2前・後			2			○					1			
	Academic Skills 2	1・2前・後			2			○					1			
	University of Hawaii Program	2・3後			2		○						1	※実習、標準外		
	グローバル社会の体験と理解	1・2前・後			2		○						4			
	Intensive Language Workshop	1・2前・後			2		○						3			
	Language for Academic Communication	1・2前・後			2		○						3			
	Global Project-Based Learning	1・2前・後			2		○						2			
	Area Study I	1・2前・後			2		○						2	メディア、標準外		
	Area Study II	1・2前・後			4		○						2			
	Global Study	1・2前・後			4		○						2			
	Academic Communication(Online Learning)	1・2前			2		○						1			
Area Study(Online Learning)	1・2前			2		○						1				
学びとキャリア	1・2前			2		○						1	メディア、標準外			
仕事とキャリア	2・3前			2		○						1				

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要 授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 （ 助 手 以 外 の 教 員 ）	
教 養 科 目	コーオブ演習（理論）	2・3通			2		○								1	メディア
	コーオブ演習（実践）	2・3後			2			○							1	
	現代社会とボランティア	1・2前・後			2		○								1	
	シチズンシップ・スタディーズ	2・3後			2			○							1	
	スポーツの歴史と発展	1・2前・後			2		○								1	
	スポーツと現代社会	1・2前・後			2		○								1	
	スポーツのサイエンス	1・2前			2		○								1	
	現代人とヘルスケア	1・2後			2		○								1	
	スポーツ方法実習Ⅰ	1・2前			1				○						1	
	スポーツ方法実習Ⅱ	1・2後			1				○						1	
	教養ゼミナール	1・2前・後			2			○							1	
	異文化間テーマ演習	1・2後			2			○							1	
	超領域リベラルアーツ	3・4前・後			2		○								1	
	小計（130科目）	－	－	0	262	0	－			0	0	0	0	0	103	
学 芸 員 課 程 科 目	生涯学習概論	2・3前				2	○								1	メディア
	博物館概論	2・3後				2	○								1	メディア
	博物館経営論	2・3前				2	○								1	メディア
	博物館資料論	2・3後				2	○								1	メディア
	博物館資料保存論	2・3前				2	○								1	メディア
	博物館展示論	2・3後				2	○								1	メディア
	博物館教育論	2・3前				2	○								1	メディア
	博物館情報・メディア論	2・3後				2	○								1	メディア
	博物館・学内実習	3前・後				2			○						1	標準外
	博物館・館園実習	4通				1			○	1						
	小計（10科目）	－	－	0	0	19	－			1	0	0	0	0	9	
	合計（248科目）		－	－	40	442	19	－			16	7	0	2	0	145
学位又は称号		学士（デザイン・アート）			学位又は学科の分野				美術関係							
卒業要件及び履修方法								授業期間等								
必修科目40単位（Design in Society科目群を12単位、Design Studies科目群を18単位、Design Language科目群の英語を8単位、卒業研究を2単位）、かつDesign Language科目群の技能群、知識群から56単位以上および教養科目から20単位以上を修得し、合計124単位以上修得すること。 （履修科目の登録の上限：20単位（1セメスター）） メディア授業として修得する単位数：60単位を上限として卒業要件として修得すべき単位に含める。								1 学年の学期区分				2 学期				
								1 学期の授業期間				14週				
								1 時限の授業の標準時間				95分 （95分×14週＋20分のビデオ・オン・デマンド授業等）				

—基本計画書—25—

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員(助手を除く)以外の教員		
専 門 科 目	講 義 科 目	世界映画史Ⅰ	○		2		○					1					
		世界映画史Ⅱ	○		2		○					1					
		映画シナリオ制作論	○		2		○					1					
		アニメーション映画史	○		2		○									1	
		ゲームデザイン論	○		2		○				2						メディア
		ゲーム作品研究	○		2		○				2						メディア
		エンターテインメントと音楽	○		2		○					1					メディア
		映像理論	○		2		○									1	
		クリエイティブメディア機器	○		2		○				1						
		バーチャルリアリティ	○		2		○				1						
		映像作品研究	○		2		○				1					1	
		ヒューマンインタフェース	○		2		○				1						
		クリエイティブブランドマーケティング	○		2		○				1						メディア
		クリエイティブ産業論	○		2		○				1						メディア
		グローバルトランスメディアマネジメント	○		2		○					1					メディア
		クリエイティブファイナンス	○		2		○				1						メディア
		デジタルアーカイブ論	○		2		○									1	
		ドキュメンタリー映像史	○		2		○					1					
		映像人類学	○		2		○				1						
		グローバル映像社会論	○		2		○				1						
	放送メディア論	○		2		○				1							
	京都文化創造産業論	○		2		○				1							
	クリティカルアナリシス	○		2		○					1						
	映像文化資源デザイン	○		2		○					1						
	映像文化資源マネジメントアドバンス	○		2		○											
	ファンダメンタルズ・オブ・ジャパニーズポップカルチャー	○		2		○				2							
		小計(26科目)		—	0	52	0	—				12	6	0	0	0	4
キ ャ リ ア 形 成 科 目	クリエイティブリーダーシップセミナー	2後	○		2		○				1						
	論文作成の技法	1前	○		2		○			1	1					1	
	学外映像研修	2前	○		2					2	1						
	学外映像研修	2前	○		4					1							
	特殊講義	1・2・3・4前・後			1		○			1						※実習	
	特殊講義	1・2・3・4前・後			2		○			1						※実習	
	特殊講義	1・2・3・4前・後			3		○			1						※実習	
	特殊講義	1・2・3・4前・後			4		○			1						※実習	
	特殊講義(専門Ⅰ)	2・3・4前・後			2		○			1							
	特殊講義(専門Ⅱ)	2・3															

(映像学部映像学科)

—基本計画書—27—

教 育 課 程 等 の 概 要

(映像学部映像学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実験・実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基幹 (助手 以外の 教員)	
共通選 択科目	外国 留学 特修 科目	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		1	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		2	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		3	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		4	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		5	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		6	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		7	○			1						
		外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		8	○			1						
		小計 (8科目)		—	0	36	0	—		1	0	0	0	0	0	
共通選 択科目	A P U 交 流 科 目	APU交流科目	2・3・4前・後	○		1	○			1						
		APU交流科目	2・3・4前・後	○		2	○			1						
		APU交流科目	2・3・4前・後	○		4	○			1						
		APU交流科目 (演習)	2・3・4前・後	○		2		○		1						
		APU交流科目 (演習)	2・3・4前・後	○		4		○		1						
		小計 (5科目)		—	0	13	0	—		1	0	0	0	0	0	
	特 殊 講 義	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		1	○								1	※実習
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	※実習
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○		3	○								1	※実習
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○		4	○								1	※実習
		小計 (4科目)		—	0	10	0	—		0	0	0	0	0	4	
教 養 科 目		日本の近現代と立命館	1・2前・後	○		2	○								1	
		ピア・サポート論	1・2前・後	○		2	○								1	
		ジェンダーとダイバーシ ティ	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		メディアと現代文化	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		市民と政治	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		日本国憲法	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		歴史観の形成	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		科学・技術と社会	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		実践データ科学	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		現代平和論	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		戦争の歴史と思想	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		平和と人権フィールドスタ ディ	2・3・4通	○		2		○							1	
		哲学と人間	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		人間性と倫理	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		心理学入門	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		論理と思考	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		科学技術と倫理	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		宗教と社会	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		(留) 日本の文化・地 理・歴史	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		メディアと図書館	1・2前・後	○		2	○								1	メディア
		社会学入門	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		文化人類学入門	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		文学と社会	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		現代の教育	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		世界と日本の食文化	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		観光学	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		京都学	1・2・3・4前・後	○		2	○								1	
		(留) 日本語学	2・3・4前・後	○		2	○								1	

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助手 以外 の 教 員		
教 養 科 目	美と芸術の論理	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	音楽原論	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	文芸創作論	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	国の行政組織	1・2前・後	○		2		○									1	
	現代社会と法	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代日本の政治	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代の国際関係と日本	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	日本経済概説	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代の世界経済	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代の経営	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	社会と福祉	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	ソーシャルデザイン論	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	(留) 日本の社会・政治	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	(留) 日本の経済・経営	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	エリアスタディ入門	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	新しい日本史像	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	中国の国家と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	東アジアと朝鮮半島	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	ヨーロッパの歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	アメリカの社会と文化	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	イスラーム世界の多様性	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	科学的な見方・考え方	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	宇宙科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	地球科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学 (分子と生命)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学 (生物と生態系)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代環境論	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	科学と技術の歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学と倫理	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	近現代の科学技術	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	(留) 日本の自然・科学技術	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	数理の世界	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	情報の数理	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	情報科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	情報技術と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	統計学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
データサイエンス・AI 基礎	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
データエンジニアリング基礎	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Liberal Arts Seminar	1・2・3・4前・後	○		2			○								1		
Introduction to Law	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Modern World History	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Japan and the West	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Introduction to Economics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Kyoto and the Japanese Arts	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Special Lecture	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 （助 手 を 除 く） 教員 以外の 教員		
教 養 科 目	Introduction to Linguistics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	Introduction to Anthropology	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Natural Science	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Humanities	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to the United Nations	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Peace Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Gender Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Computational Linguistics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	History of Computing	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Understanding Language	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Computers in Education	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Language in Politics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introductory Course to Climate Change and Global Warming	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introductory Course to International Project Development	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Understanding Visual Culture	1・2・3・4前・後	○		2		○			2							
	Introduction to Food Culture	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross Border Policy Issues	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Playing with Playfulness	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Global Justice	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Sustainable Development Goals (SDGs) in a Nutshell	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Foundations of Data Science and AI	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Foundations of Data Engineering	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross-cultural Encounters 1	1・2前・後	○		2			○								1	
	Cross-cultural Encounters 2	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Cross-cultural Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross-cultural Seminar	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 （助 手 を 除 く） 教員 以外 の 教員		
教 養 科 目	Non-verbal Communication	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	※実習、 標準外
	Academic Skills 1	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Academic Skills 2	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Global Engineer Program	1・2・3前・後	○		2		○									1	
	University of Hawaii Program	2・3前・後	○		2		○									1	
	グローバル社会の体験と理解	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Intensive Language Workshop	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Language for Academic Communication	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Global Project-Based Learning	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Area Study I	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	※実習、 標準外
	Area StudyⅡ	1・2・3・4前・後	○		4		○									1	
	Global Study	1・2・3・4前・後	○		4		○									1	
	Academic Communication (Online Learning)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Area Study (Online Learning)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		1		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		3		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		4		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		5		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		6		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		7		○									1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		8		○									1	
	社会と学ぶ課題解決	1前・後	○		2			○									1
	学びとキャリア	1・2前・後	○		2		○										1
	仕事とキャリア	2・3・4前・後	○		2		○										1
	コーオブ演習（理論）	2・3・4通	○		2		○										1
	コーオブ演習（実践）	2・3・4前・後	○		2			○									1
	地域参加学習入門	1・2前・後	○		2		○										1
	現代社会とボランティア	1・2前・後	○		2		○										1
	現代社会のフィールドワーク	1・2・3・4前・後	○		2		○										1
	シチズンシップ・スタ ディーズ	2・3・4前・後	○		2			○									1
	スポーツの歴史と発展	1・2・3・4前・後	○		2		○										1
	スポーツと現代社会	1・2・3・4前・後	○		2		○										1
スポーツのサイエンス	1・2・3・4前・後	○		2		○										1	
現代人とヘルスケア	1・2・3・4前・後	○		2		○										1	
スポーツ方法実習Ⅰ	1・2・3・4前・後	○		1				○								1	
スポーツ方法実習Ⅱ	1・2・3・4前・後	○		1				○								1	
教養ゼミナール	1・2・3・4前・後	○		2			○									1	
異文化間テーマ演習	1・2・3・4前・後	○		2			○									1	
超領域リベラルアーツ	3・4前・後	○		2		○										1	メディア

教 育 課 程 等 の 概 要

(映像学部映像学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助手 以外 の 教 員	
教 養 科 目	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		1		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		3		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		4		○								1	※実習
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		1		○			1						
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		2		○			1						
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		4		○			1						
	単位互換科目 (遠隔授業)	1・2・3・4前・後	○		1		○			1						メディア
	単位互換科目 (遠隔授業)	1・2・3・4前・後	○		2		○			1						メディア
	単位互換科目 (遠隔授業)	1・2・3・4前・後	○		4		○			1						メディア
	小計 (150科目)			—	0	326	0	—		3	0	0	0	0	89	
外 国 語 科 目 (英 語)	Oral Communication I	1前	○		1			○		1					15	メディア
	Oral Communication II	1後	○		1			○		1					15	メディア
	Basic English I	1前	○		1			○		1					7	
	Basic English II	1後	○		1			○		1					7	
	Discussion I	2前	○		1			○		1					15	メディア
	Discussion II	2後	○		1			○		1					15	メディア
	Media English I	2前	○		1			○		1					7	
	Media English II	2後	○		1			○		1					7	
	小計 (8科目)			—	0	8	0	—		2	0	0	0	0	22	
外 国 語 科 目 (日 本 語)	日本語Ⅶ (文章表現a)	1・2・3・4前	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (文章表現b)	1・2・3・4後	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (読解a)	1・2・3・4前	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (読解b)	1・2・3・4後	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (聴解口頭a)	1・2・3・4前	○		1			○							6	
	日本語Ⅶ (聴解口頭b)	1・2・3・4後	○		1			○							6	
	日本語Ⅷ (アカデミック 日本語a)	2・3・4前	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (アカデミック 日本語b)	2・3・4後	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (キャリア日本 語a)	2・3・4前	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (キャリア日本 語b)	2・3・4後	○		1			○							2	
	小計 (10科目)			—	0	10	0	—		0	0	0	0	0	20	
学 芸 員 課 程 の 授 業 科 目	博物館概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館経営論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後	○			2	○			1						メディア
	博物館資料論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館資料保存論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館展示論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館教育論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	生涯学習概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館・学内実習Ⅰ	3前・後	○			1			○	1						
	博物館・学内実習Ⅱ	3前・後	○			1			○						3	
	博物館・学内実習Ⅲ	3前・後	○			1			○						1	
	博物館・学内実習Ⅳ	3前・後	○			1			○						2	
	博物館・館園実習	4通	○			1			○	1						
	小計 (13科目)			—	0	0	21	—		1	0	0	0	0	13	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助手 以外 の教 員)	
図 書 館 司 書 課 程 の 授 業 科 目	生涯学習概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	図書館概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	図書館制度・経営論	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	図書館情報技術論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書館サービス概論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	情報サービス論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	子どもの発達と読書・図書館	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	情報サービス演習Ⅰ	3・4前・後	○			1		○							2	
	情報サービス演習Ⅱ	3・4前・後	○			1		○							2	
	図書館情報資源概論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	情報資源組織論	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	情報資源組織演習Ⅰ	3・4前・後	○			1		○							1	
	情報資源組織演習Ⅱ	3・4前・後	○			1		○							2	
	図書館情報資源特論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書・図書館史	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書館施設論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
小計 (16科目)			—	0	0	28	—			0	0	0	0	0	7	
合計 (317科目)			—	4	651	49	—			24	10	0	0	0	163	
学位又は称号	学士 (映像学)			学位又は学科の分野				美術関係、経済学関係、工学関係								
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法									授業期間等							
卒業に必要な単位数は、必修とする授業科目を含み、かつ、以下(1)から(3)に定める単位を含み124単位以上を修得しなければならない。共通選択科目は、合計20単位を上限に卒業に必要な単位に算入することができる。 (1) 基礎科目 次に掲げる単位を含む28単位以上修得しなければならない。 ・教養教育科目 20単位以上 ・外国語科目 (英語) 8単位 ただし、外国人留学生は、外国語科目 (英語) に代えて外国語科目 (日本語) から8単位を修得しなければならない。 (2) 専門基礎科目 22単位以上修得しなければならない。 (3) 専門科目 次に掲げる単位を含む54単位以上修得しなければならない。 ・「卒業研究」を含む演習・実習科目 16単位以上									1学年の学期区分				2学期			
									1学期の授業期間				14週			
									1時限の授業の標準時間				95分 (95分×14週+20分の ビデオ・オン・デマン ド授業等)			

(用紙 日本産業規格A4縦型)

教 育 課 程 等 の 概 要

(映像学部映像学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助 手 以 外 の 教 員)	
専門基礎科目	クリエイティブビジネス概論	1前	○		2		○			1	1					メディア
	シナリオ基礎	1前	○		2		○				1					
	CG概論	1後	○		2		○			1						
	映画研究	1後	○		2		○				1					
	物語理論	2前	○		2		○									
	映像学基礎	1前	○		2		○			1						
	クリエイティブ数学	1後	○		2		○			1						
	メディアアート	1前	○		2		○			1						
	映像と心理	1後	○		2		○									
	映像産業論	1後	○		2		○			1						
	プロジェクトマネジメント概論	1後	○		2		○				1					
	知的財産論	1後	○		2		○									
	社会映像リテラシー	1後	○		2		○			1						
	映像社会論	1後	○		2		○			1						
	デジタルメディア論	2前	○		2		○				1					
	映像デザイン論	2前	○		2		○			1						
	小計（16科目）	—	—	0	32	0	—	—	—	8	4	0	0	0	3	
	演習・実習科目	プログラミング演習Ⅰ	1前	○	2			○		2	2				1	オムニバス オムニバス メディア、 オムニバス
		プログラミング演習Ⅱ	1後	○	2			○		2	1					
		映像デザイン演習	1前	○	2			○		1						
		フィールドワーク演習	1後	○	2			○		1						
		デジタルメディア演習	2後	○	2			○			1					
		映像制作実習Ⅰ	1前	○	2				○	5	2					
		映像制作実習Ⅱ	1後	○	2				○	5	2					
		ゲーム制作実習Ⅰ	1後	○	2				○	4	1					
	小計（8科目）	—	—	0	16	0	—	—	—	13	5	0	0	0	3	
	基礎演習	映像基礎演習Ⅰ	1前	○	2			○		3	4				1	メディア
		映像基礎演習Ⅱ	1後	○	2			○		3	4				1	
		映像学入門演習	2前	○	2			○		5	3				1	
	小計（3科目）	—	—	0	6	0	—	—	—	6	5	0	0	0	0	
	特殊講義	特殊講義	1・2・3・4前・後	○	1		○			1						※実習 ※実習 ※実習 ※実習
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○	2		○			1						
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○	3		○			1						
		特殊講義	1・2・3・4前・後	○	4		○			1						
	小計（4科目）	—	—	0	10	0	—	—	—	4	0	0	0	0	0	
専門科目	講義科目	世界映画史Ⅰ	1前	○	2		○				1					メディア メディア メディア
		世界映画史Ⅱ	1後	○	2		○				1					
		映画シナリオ制作論	2前	○	2		○				1					
		アニメーション映画史	2前	○	2		○									
		ゲームデザイン論	1後	○	2		○			2						
		ゲーム作品研究	2前	○	2		○			2						
		エンターテインメントと音楽	2後	○	2		○				1					
		映像理論	2前	○	2		○									
		クリエイティブメディア機器	2後	○	2		○			1						

教 育 課 程 等 の 概 要																		
(映像学部映像学科)																		
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の 教員			
専 門 科 目	講 義 科 目	バーチャルリアリティ	2前	○		2		○			1					メディア メディア メディア メディア		
		映像作品研究	3後	○		2		○			1						1	
		ヒューマンインタフェース	3後	○		2		○			1							
		クリエイティブブランドマーケティング	2前	○		2		○			1							
		クリエイティブ産業論	2後	○		2		○			1							
		グローバルトランスメディアマネジメント	3前	○		2		○				1						
		クリエイティブファイナンス	3後	○		2		○			1							
		デジタルアーカイブ論	2前	○		2		○									1	
		ドキュメンタリー映像史	2後	○		2		○				1						
		映像人類学	2後	○		2		○			1							
		グローバル映像社会論	3前	○		2		○			1							
		放送メディア論	3後	○		2		○			1							
	小計 (21科目)			—	0	42	0	—			11	5	0	0	0		4	
	キ ャ リ ア 形 成 科 目	クリエイティブリーダーシップセミナー	2後	○		2		○					1				※実習 ※実習 ※実習 ※実習	
		論文作成の技法	1前	○		2		○				1	1					1
		学外映像研修	2前	○		2				○		2	1					
		学外映像研修	2前	○		4				○		1						
		特殊講義	1・2・3・4前・後		1		○				1							
		特殊講義	1・2・3・4前・後		2		○				1							
		特殊講義	1・2・3・4前・後		3		○				1							
		特殊講義	1・2・3・4前・後		4		○				1							
		特殊講義 (専門Ⅰ)	2・3・4前・後		2		○				1							
		特殊講義 (専門Ⅱ)	2・3・4前・後		2		○									1		
		特殊講義 (専門Ⅲ)	2・3・4前・後		2		○					1						
		特殊講義 (専門Ⅳ)	2・3・4前・後		2		○				2	1				1		
		特殊講義 (専門Ⅵ)	2・3・4前・後		2		○					1						
		特殊講義 (専門Ⅸ)	1・2・3・4前・後		2		○									1		
		特殊講義 (専門Ⅹ)	1前・後		2		○					1				1		
		特殊講義 (専門ⅩⅠ)	1・2・3・4前・後		2		○					1						
		特殊講義 (専門ⅩⅢ)	2・3・4前・後		2		○				1							
		特殊講義 (専門ⅩⅣ)	3・4前・後		2		○									1		
		社会連携プログラム	2前	○		2			○		3	2						1
	小計 (19科目)			—	0	42	0	—			14	9	0	0	0	7		
	外 国 語 専 門 科 目	Reading SkillsⅠ	2前	○		2			○		1							
		Reading SkillsⅡ	2後	○		2			○		1							
		Subtitle TranslationⅠ	3前	○		2			○		1							
Subtitle TranslationⅡ		3後	○		2			○		1								
Oral InterpretationⅠ		3前	○		2			○		1								
Oral InterpretationⅡ		3後	○		2			○		1								
小計 (6科目)			—	0	12	0	—			1	0	0	0	0	0			

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助 手 以 外 の 教 員)	
専門科目	映画上映演習	2前	○		2			○		1						メディア
	DAW制作演習	2前	○		2			○			1					
	クリエイティブメディア 処理	2前	○		2			○		1						
	映像論文献講読Ⅰ	3前	○		2			○		1						
	映像論文献講読Ⅱ	3後	○		2			○		1						オムニバス
	映像メディア分析演習	2前	○		2			○			1					
	先端メディア創作演習	3前	○		2			○			1					
	放送メディア演習	3前	○		2			○			1					
	映像制作実習Ⅲ	2前	○		2				○	5	2				1	
	CG実習Ⅰ	2前	○		2				○	1	1					
	CG実習Ⅱ	2後	○		2				○	1	1					
	CG実習Ⅲ	3前	○		2				○	1	1					
	映像撮影照明実習	2後	○		2				○	2						
	映像演出実習	2後	○		2				○	1					1	
	映像編集実習	2後	○		2				○		1					
	広告映像実習	3前	○		2				○	1						
	映像音響実習	3前	○		2				○	1					1	
	クリエイティブテクノ ロジー実習Ⅰ	2前	○		2				○	1						
	クリエイティブテクノ ロジー実習Ⅱ	2後	○		2				○	1						
	映像人類学実習	2前	○		2				○	1						
	デジタルアーカイブ実習	2後	○		2				○	1						
	映像文化演習Ⅰ	3前	○		2			○		14	4				1	
	映像文化演習Ⅱ	3後	○		2			○		14	4				1	
	映像文化演習Ⅲ	4前	○		2			○		14	4				1	
	映像文化演習Ⅳ	4後	○		2			○		14	4				1	
	小計 (25科目)		—	0	50	0		—		14	7	0	0	0	3	
	卒業研究	4通	○	4				○		14	4	0			1	
	小計 (1科目)	—	○	4	0	0		—		14	4	0			1	
共通選択科目	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		1		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		2		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		3		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		4		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		5		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		6		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		7		○			1						
	外国留学特修科目	1・2・3・4前・後	○		8		○			1						
	小計 (8科目)		—	0	36	0		—		1	0	0	0	0	0	
共通選択科目	APU交流科目	2・3・4前・後	○		1		○			1						
	APU交流科目	2・3・4前・後	○		2		○			1						
	APU交流科目	2・3・4前・後	○		4		○			1						
	APU交流科目 (演習)	2・3・4前・後	○		2			○		1						
	APU交流科目 (演習)	2・3・4前・後	○		4			○		1						
	小計 (5科目)		—	0	13	0		—		1	0	0	0	0	0	
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		1		○								1	
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		3		○								1	
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		4		○								1	
	小計 (4科目)		—	0	10	0		—		0	0	0	0	0	4	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の 教員	
教 養 科 目	日本の近現代と立命館	1・2前・後	○		2		○								1	メディア
	ピア・サポート論	1・2前・後	○		2		○								1	
	ジェンダーとダイバーシ ティ	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	メディアと現代文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	市民と政治	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	日本国憲法	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	歴史観の形成	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	科学・技術と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	実践データ科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代平和論	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	戦争の歴史と思想	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	平和人権フィールドスタ ディ	2・3・4通	○		2			○							1	
	哲学と人間	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	人間性と倫理	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	心理学入門	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	論理と思考	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	科学技術と倫理	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	宗教と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	(留) 日本の文化・地 理・歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	メディアと図書館	1・2前・後	○		2		○								1	
	社会学入門	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	文化人類学入門	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	文学と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代の教育	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	世界と日本の食文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	観光学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	京都学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	(留) 日本語学	2・3・4前・後	○		2		○								1	
	美と芸術の論理	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	音楽原論	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	文芸創作論	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	国の行政組織	1・2前・後	○		2		○								1	
	現代社会と法	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代日本の政治	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代の国際関係と日本	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	日本経済概説	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代の世界経済	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代の経営	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	社会と福祉	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	ソーシャルデザイン論	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	(留) 日本の社会・政治	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	(留) 日本の経済・経営	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	エリアスタディ入門	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	新しい日本史像	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	中国の国家と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	東アジアと朝鮮半島	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	ヨーロッパの歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	アメリカの社会と文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	イスラーム世界の多様性	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の 教員		
教 養 科 目	科学的な見方・考え方	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	宇宙科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	地球科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学（分子と生命）	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学（生物と生態系）	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	現代環境論	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	科学と技術の歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	生命科学と倫理	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	近現代の科学技術	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	（留）日本の自然・科学技術	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	数理の世界	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	情報の数理	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	情報科学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	情報技術と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	統計学	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	データサイエンス・AI 基礎	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	データエンジニアリング基礎	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	Liberal Arts Seminar	1・2・3・4前・後	○		2				○							1	メディア
	Introduction to Law	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Modern World History	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Japan and the West	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Economics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Kyoto and the Japanese Arts	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Special Lecture	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Linguistics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Anthropology	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Natural Science	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Humanities	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to the United Nations	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Peace Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Gender Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Computational Linguistics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	History of Computing	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Understanding Language	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Computers in Education	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員(助手を除く)以外の教員		
教養科目	Language in Politics	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	メディア
	Introductory Course to Climate Change and Global Warming	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introductory Course to International Project Development	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Understanding Visual Culture	1・2・3・4前・後	○		2		○			2							
	Introduction to Food Culture	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross Border Policy Issues	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Playing with Playfulness	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Introduction to Global Justice	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Sustainable Development Goals (SDGs) in a Nutshell	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Foundations of Data Science and AI	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Foundations of Data Engineering	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross-cultural Encounters 1	1・2前・後	○		2			○								1	
	Cross-cultural Encounters 2	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Cross-cultural Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Cross-cultural Seminar	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Non-verbal Communication	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Academic Skills 1	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Academic Skills 2	1・2・3・4前・後	○		2			○								1	
	Global Engineer Program	1・2・3前・後	○		2		○									1	
	University of Hawaii Program	2・3前・後	○		2		○									1	
	グローバル社会の体験と理解	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Intensive Language Workshop	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Language for Academic Communication	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Global Project-Based Learning	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Area Study I	1・2・3・4前・後	○		2		○									1	
	Area StudyⅡ	1・2・3・4前・後	○		4		○									1	
Global Study	1・2・3・4前・後	○		4		○									1		
Academic Communication (Online Learning)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
Area Study (Online Learning)	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助 手 以 外 の 教 員)	
教 養 科 目	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		1		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		3		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		4		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		5		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		6		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		7		○								1	
	外国留学科目	1・2・3・4前・後	○		8		○								1	
	社会と学ぶ課題解決	1前・後	○		2			○							1	
	学びとキャリア	1・2前・後	○		2		○								1	
	仕事とキャリア	2・3・4前・後	○		2		○								1	
	コーオブ演習（理論）	2・3・4通	○		2		○								1	
	コーオブ演習（実践）	2・3・4前・後	○		2			○							1	
	地域参加学習入門	1・2前・後	○		2		○								1	
	現代社会とボランティア	1・2前・後	○		2		○								1	
	現代社会のフィールドワーク	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	シチズンシップ・スタ ディーズ	2・3・4前・後	○		2			○							1	
	スポーツの歴史と発展	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	スポーツと現代社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	スポーツのサイエンス	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代人とヘルスケア	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	スポーツ方法実習Ⅰ	1・2・3・4前・後	○		1				○						1	
	スポーツ方法実習Ⅱ	1・2・3・4前・後	○		1				○						1	
	教養ゼミナール	1・2・3・4前・後	○		2			○							1	
	異文化間テーマ演習	1・2・3・4前・後	○		2			○							1	
	超領域リベラルアーツ	3・4前・後	○		2		○								1	メディア
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		1		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		3		○								1	※実習
	特殊講義	1・2・3・4前・後	○		4		○								1	※実習
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		1		○			1						
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		2		○			1						
	単位互換科目	1・2・3・4前・後	○		4		○			1						
	単位互換科目（遠隔授 業）	1・2・3・4前・後	○		1		○			1						メディア
	単位互換科目（遠隔授 業）	1・2・3・4前・後	○		2		○			1						メディア
	単位互換科目（遠隔授 業）	1・2・3・4前・後	○		4		○			1						メディア
	小計（150科目）		—	0	326	0	—			3	0	0	0	0	89	
外 国 語 科 目 （英 語）	Oral CommunicationⅠ	1前	○		1			○		1					15	メディア
	Oral CommunicationⅡ	1後	○		1			○		1					15	メディア
	Basic EnglishⅠ	1前	○		1			○		1					7	
	Basic EnglishⅡ	1後	○		1			○		1					7	
	DiscussionⅠ	2前	○		1			○		1					15	メディア
	DiscussionⅡ	2後	○		1			○		1					15	メディア
	Media EnglishⅠ	2前	○		1			○		1					7	
	Media EnglishⅡ	2後	○		1			○		1					7	
	小計（8科目）		—	0	8	0	—			2	0	0	0	0	22	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助 手 を 除 く) 教 員	
外国語科目 (日本語)	日本語Ⅶ (文章表現a)	1・2・3・4前	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (文章表現b)	1・2・3・4後	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (読解a)	1・2・3・4前	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (読解b)	1・2・3・4後	○		1			○							5	
	日本語Ⅶ (聴解口頭a)	1・2・3・4前	○		1			○							6	
	日本語Ⅶ (聴解口頭b)	1・2・3・4後	○		1			○							6	
	日本語Ⅷ (アカデミック 日本語a)	2・3・4前	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (アカデミック 日本語b)	2・3・4後	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (キャリア日本語a)	2・3・4前	○		1			○							2	
	日本語Ⅷ (キャリア日本語b)	2・3・4後	○		1			○							2	
	小計 (10科目)		—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	20	
学芸員課程 の授業科目	博物館概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館経営論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後	○			2	○			1					1	メディア
	博物館資料論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館資料保存論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館展示論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館教育論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	生涯学習概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	博物館・学内実習Ⅰ	3前・後	○			1			○	1						
	博物館・学内実習Ⅱ	3前・後	○			1			○						3	
	博物館・学内実習Ⅲ	3前・後	○			1			○						1	
	博物館・学内実習Ⅳ	3前・後	○			1			○						2	
	博物館・館園実習	4通	○			1			○	1						
	小計 (13科目)		—	0	0	21	—			1	0	0	0	0	13	
図書館司書課程 の授業科目	生涯学習概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	図書館概論	2・3・4前・後	○			2	○								1	メディア
	図書館制度・経営論	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	図書館情報技術論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書館サービス概論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	情報サービス論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	子どもの発達と読書・図書館	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	情報サービス演習Ⅰ	3・4前・後	○			1		○							2	
	情報サービス演習Ⅱ	3・4前・後	○			1		○							2	
	図書館情報資源概論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	情報資源組織論	2・3・4前	○			2	○								1	メディア
	情報資源組織演習Ⅰ	3・4前・後	○			1		○							1	
	情報資源組織演習Ⅱ	3・4前・後	○			1		○							2	
	図書館情報資源特論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書・図書館史	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	図書館施設論	2・3・4後	○			2	○								1	メディア
	小計 (16科目)		—	0	0	28	—			0	0	0	0	0	7	
合計 (317科目)			—	4	613	49	—			22	12	0	0	0	163	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(映像学部映像学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教 員 (助 手 以 外 の 教 員)	
学位又は称号	学士（映像学）			学位又は学科の分野			美術関係、経済学関係、工学関係									
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法							授業期間等									
卒業に必要な単位数は、必修とする授業科目を含み、かつ、以下(1)から(3)に定める単位を含み124単位以上を修得しなければならない。共通選択科目は、合計20単位を上限に卒業に必要な単位に算入することができる。 (1) 基礎科目 次に掲げる単位を含む28単位以上修得しなければならない。 ・教養教育科目 20単位以上 ・外国語科目（英語） 8単位 ただし、外国人留学生は、外国語科目（英語）に代えて外国語科目（日本語）から8単位を修得しなければならない。 (2) 専門基礎科目 22単位以上修得しなければならない。 (3) 専門科目 次に掲げる単位を含む54単位以上修得しなければならない。 ・「卒業研究」を含む演習・実習科目 16単位以上							1学年の学期区分				2学期					
							1学期の授業期間				14週					
							1時限の授業の標準時間				95分 (95分×14週+20分の ビデオ・オン・デマン ド授業等)					

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(映像学部映像学科)																	
科目 区分		授業科目の名称	配当年次	主要授業 科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
					必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の教員	
専門基礎科目	講義科目	メディアナラティブ創作論	1後	○		2		○			1	1					
		遊戯史概論	1前	○		2		○			1						
		リサーチベーシックス	2前	○		2		○				1					
		リサーチアドバンス	2後	○		2		○				1					
		映像文化資源マネジメント概論	1後	○		2		○					1			0	
	小計 (5科目)		—			0	10	0	—			1	2	1	0	0	0
実習科目	デッサン基礎演習	1前	○		2			○		1							
	プロデュース実習	2後	○		2				○	1	0						
	小計 (2科目)		—	—	0	4	0	—			2	0	0	0	0	0	
専門科目	講義科目	京都文化創造産業論	2前	○		2		○			1						
		クリティカルアナリシス	2前	○		2		○				1					
		映像文化資源デザイン	2後	○		2		○				1					
		映像文化資源マネジメントアドバンス	3後	○		2		○									
		ファンダメンタルズ・オブ・ジャパニーズポップカルチャー	3前	○		2		○			2						
		小計 (5科目)		—	—	0	10	0	—			3	2	0	0	0	0
	演習・実習科目	ゲーム制作演習	2後	○		2			○		1						
		インタラクティブ空間デザイン演習	3前	○		2			○		2						
		クリエイティブマネジメント文献講読	2後	○		2			○			1					
		映像文化資源アーカイブ文献講読	3後	○		2			○			1					
		ゲーム制作実習Ⅱ	2前	○		2				○	1						
		ゲームクラフト実習	3前	○		2				○	2	1					1
		3Dインフォグラフィックス実習	3前	○		2				○		1					
		映像文化演習Ⅰ	3前	○		2			○		6	4					
		映像文化演習Ⅱ	3後	○		2			○		6	4					
		映像文化演習Ⅲ	4前	○		2			○		6	4					
		映像文化演習Ⅳ	4後	○		2			○		6	4					
		小計 (11科目)		—	—	0	22	0	—			6	4	0	0	0	1
		卒業研究	4通	○		4				○		6	4				
	小計 (1科目)		—	—	4	0	0	—			6	4					
合計 (24科目)				—	4	46	0	—			6	4	0	0	0	0	
学位又は称号	学士 (映像学)				学位又は学科の分野				美術関係、経済学関係、工学関係								
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法									授業期間等								
卒業に必要な単位数は、必修とする授業科目を含み、かつ、以下(1)から(3)に定める単位を含み124単位以上を修得しなければならない。共通選択科目は、合計20単位を上限に卒業に必要な単位に算入することができる。 (1) 基礎科目 次に掲げる単位を含む28単位以上修得しなければならない。 ・教養教育科目 20単位以上 ・外国語科目 (英語) 8単位 ただし、外国人留学生は、外国語科目 (英語) に代えて外国語科目 (日本語) から8単位を修得しなければならない。 (2) 専門基礎科目 22単位以上修得しなければならない。 (3) 専門科目 次に掲げる単位を含む54単位以上修得しなければならない。 ・「卒業研究」を含む演習・実習科目 16単位以上									1学年の学期区分				2学期				
									1学期の授業期間				14週				
									1時限の授業の標準時間				95分 (95分×14週+20分の ビデオ・オン・デマ ンド授業等)				

授 業 科 目 の 概 要				
（デザイン・アート学部デザイン・アート学科）				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	Design in society (DiS) 科目群	デザイン学生生成プロジェクト演習1	○ 本学部での学びは、常に学内外の他者との協働において生成するプロセスのなかにある。「デザイン学生生成プロジェクト演習1」では、この協働的な生成プロセスに主体的に参画しながら、デザイン・アートにおける実践知を修得することを目指す。専門領域の異なる複数の教員が考案する、デザイン・アートの最前線に位置するテーマやトピックに基づくプロジェクトへ参加することで、学生は異なる視点や方法論を統合し、新たな価値を創出する力を養う機会を得る。	共同
		デザイン学生生成プロジェクト演習2	○ 「デザイン学生生成プロジェクト演習2」では、「デザイン学生生成プロジェクト演習1」とは異なる専門領域から複数の教員が提案する最先端のデザイン・アートに関するテーマやトピックを基盤にしたプロジェクトに参画する。この演習では、「デザイン学生生成プロジェクト演習1」での実践経験を基に、異なる専門領域の視点を融合し、より広範な知識とスキルを実践的に活用する機会を提供する。学生は、多様で創造的なアプローチを用いて現代社会の課題を発見し、その解決能力を高めるとともに、未来社会のビジョンを構築する方法を修得することを目的とする。	共同
		デザイン学総合研究1	○ 「デザイン学総合研究1」では、専任教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトに取り組む。最新の研究知見を学び、実践的なデザイン手法やアート表現技術を習得するとともに、専任教員が研究を実践するコミュニティや社会的ネットワークに参画することで、多様な専門家や関係者との接点を持ち、実社会での応用力を高める機会を得る。このような研究プロジェクトへの参加によって、実社会において美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を発揮するための基盤を築くことを目指す。	
		デザイン学総合研究2	○ 「デザイン学総合研究2」では、「デザイン学総合研究1」で培った知識や経験を基に、異なる専任教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトに取り組む。複数のプロジェクトを通じて、異なる視点や手法に触れ、専門領域ごとのアプローチの違いを理解することで、デザインやアート領域を広い視野で捉える力を養う。特に、学際的な知識を統合し、実践に活かすための基礎的な能力を育成することを目指す。プロジェクトを進める過程で、学生は多角的な視点を問題を見直し解決する力を培い、デザインやアートにおける創造的なアプローチを身につける。また、異なる教員の研究テーマに取り組むことで、学生はさまざまな学術的・実践的手法に触れ、学際的な知識とスキルをさらに深化させる。これにより、デザイン学全体を俯瞰し、複雑な課題に対処できる力を養うことを目指す。	
		卒業演習1	○ 本演習では、自身が興味を持つデザイン・アート領域に関わる新たな研究テーマを定め、それに基づいた卒業研究プロジェクトを構想し、研究計画を策定する。計画にあたっては、以下の6点について検討する。①プロジェクトの目的やビジョンを明確にする、②関連する文献や先行研究・事例を調査する、③研究テーマに関する理論的なフレームワークを構築する、④目的を達成する方法・アプローチと手順を明確にする、⑤研究成果発表の形態（展示計画）を明確にする、⑥成果の社会的貢献について明確にする。	
		卒業演習2	○ 「卒業演習1」で策定した計画に基づき、研究プロジェクトを実行しその目的を見現化する。プロジェクトの進捗を適切に管理しながら、実行にあたってはこれまでに学修した内容（デザイン・アートに関わる最新の理論、デザイン・アートに取り組む姿勢・思考・態度、デジタルツールやテクノロジーを駆使した制作手法、他者とのコミュニケーション、組織・集団のファシリテーション、諸理論に基づく評価手法など）を活かし、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を十分に発揮する。	
	Design Studies (DS) 科目群	デザイン学1	○ （概要） 本学部での学びは、常に学内外の他者との協働において生成するプロセスのなかにある。この「デザイン学1」では、「デザイン学1-6」全体のスコープ（視野）とパースペクティブ（視角）を理解することに重点を置く。そのために、本学部でのデザイン・アートの学びを「デザイン」「アート」「サイエンス」「ヒューマニティーズ」の4つの研究視角から多角的に捉え、それぞれがどのようにデザイン・アートの学びや研究に貢献し得るのか、理論的・社会実践的な観点から検討する。この過程を通じて、今後の学びに対する明確な指針を形成することを目指す。 4領域の各演習は学生を4グループに分けて教員2名の共同で行い、各演習のリフレクション、全体のオリエンテーション及びまとめの回は学生を8グループに分けて教員1名で行う。 (3 井登 友一・18 小田 裕和) デザインに関わる研究の視角から、本学部のデザイン・アートの学びや研究の発展可能性がどのように捉えられるかについて、理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (14 迎山 和司・17 飯沼 洋子) アートに関わる研究の視角から、本学部のデザイン・アートの学びや研究の発展可能性がどのように捉えられるかについて、理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (11 堀井 隆斗・20 木村 智) サイエンスに関わる研究の視角から、本学部のデザイン・アートの学びや研究の発展可能性がどのように捉えられるかについて、理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (13 松葉 涼子・7 上平 崇仁) ヒューマニティーズに関わる研究の視角から、本学部のデザイン・アートの学びや研究の発展可能性がどのように捉えられるかについて、理論的・社会実践的な観点から検討を行う。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	Design Studies (DS) 科目群	デザイン学2	(概要) 「デザイン学2」では、デザイン学1-6全体のスコープ(視野)とパースペクティブ(視角)をより深く掘り下げるために、「デザイン学1」とは異なるパースペクティブを提示する。そこで本科目では、「意味」「情報」「環境」「社会」という本学部でのデザイン・アートの学びを構成する4つの基本領域において、それぞれのようにデザイン・アートの学びや研究を推進できるかについて理論的・実践的な探究を行う。この探究を通じて、学生個人の今後の具体的な学びや活動指針を得ることを目指す。 4領域の各演習は学生を4グループに分けて教員2名の共同で行い、各演習のリフレクション、全体のオリエンテーション及びまとめの回は学生を8グループに分けて教員1名で行う。 ○ (6 岡田 万里子・12 前崎 信也) 意味領域において、どのようにデザイン・アートの学びや研究を推進できるかについて理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (10 中山 雅人・23 橋口 哲志) 情報領域において、どのようにデザイン・アートの学びや研究を推進できるかについて理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (19 北本 英里子・21 佐藤 弘隆) 環境領域において、どのようにデザイン・アートの学びや研究を推進できるかについて理論的・社会実践的な観点から検討を行う。 (2 有田 洋子・22 中山 郁英) 社会領域において、どのようにデザイン・アートの学びや研究を推進できるかについて理論的・社会実践的な観点から検討を行う。	共同
		デザイン学3A	「デザイン学3A」は、プロジェクト実践に従事する「デザイン学生成プロジェクト演習1」と連動し、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法についての基礎を学ぶ。本科目では、デザイン・アートに関わるさまざまな社会実践者の取り組みのケーススタディから、自身の経験との比較対照を行い、自身のこれまでの学びや活動にどのような社会的意味が付与できるのかについて探究する。	
		デザイン学3B	「デザイン学3B」は、「デザイン学生成プロジェクト演習2」と連動し、当該演習におけるプロジェクト実践を通じた自身の経験に対して、どのように社会的意味を付与していくかについて、学術的な視点からその方法論を学ぶ。本科目では、デザイン・アートに関わるさまざまな社会実践や研究のケーススタディから、自身のこれまでのプロジェクト実践および意味づけの経験との比較対照を行い、自身の活動に社会的意味を付与するプロセスの理論的枠組みを探究する。	
		デザイン学4	(概要) 「デザイン学4」は、それまでに「デザイン学1-3」で学んだ内容の応用実践フェーズである。本科目では、本学部の専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学び、3回生以降の自分の研究テーマと活動計画を構想する。 (オムニバス方式／全14回) (9 中村 大／2回) 本科目のコンセプトと学び方のオリエンテーションおよび、各回での学びのリフレクションから3回生以降の自分の研究テーマと活動計画を構想する。 (3 井登 友一・5 大島 陽・7 上平 崇仁・9 中村 大・15 八重樫 文・18 小田 裕和・22 中山 郁英／2回) (共同) デザイン学に関する研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。 (9 中村 大・14 迎山 和司・17 飯沼 洋子／2回) (共同) アート学に関する研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。 (1 赤間 亮・6 岡田 万里子・9 中村 大・12 前崎 信也・13 松葉 涼子／2回) (共同) 意味領域において研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。 (9 中村 大・10 中山 雅人・11 堀井 隆人・23 橋口 哲志／2回) (共同) 情報領域において研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。 (8 桐村 喬・9 中村 大・19 北本 英里子・20 木村 智・21佐藤 弘隆／2回) (共同) 環境領域において研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。 (2 有田 洋子・4 植田 彩芳子・9 中村 大・16 山下 範久／2回) (共同) 社会領域において研究を行う専任教員の研究内容と社会実践およびビジョン、さらに社会的意味生成・付与のプロセスから、デザイン・アートに関わる実践研究を進めるための、理論的なフレームワークと研究手法・アプローチを学ぶ。	オムニバス方式 共同 (一部)

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目 区分		授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	Design Studies (DS) 科目群	デザイン学5	○	(概要) 「デザイン学5」では、本学部でのデザイン・アートの学びを構成する4つの領 野である「意味」「情報」「環境」「社会」および「デザイン学」「アート学」 研究において展開されている、デザイン・アートに関わる国内外での最新の社会 実践事例のケーススタディから、「デザイン学4」において構想した自身の研究活 動にどのような新たな「意味」が付与できるのかについて探究する。 (オムニバス方式／全14回) (8 桐村 喬・24 磯邊 美香／1回) (共同) 授業のスコープ、進め方、学びのゴール (最終課題) を共有する。 (8 桐村 喬・22 中山 郁英・24 磯邊 美香／2回) (共同) デザイン学研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新の社会 実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」が付与 できるのかについて探究する。 (8 桐村 喬・13 松葉 涼子・24 磯邊 美香／2回) (共同) 意味領域に関わる研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新 の社会実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」 が付与できるのかについて探究する。 (8 桐村 喬・10 中山 雅人・24 磯邊 美香／2回) (共同) 情報領域に関わる研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新 の社会実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」 が付与できるのかについて検討する。 (8 桐村 喬・20 木村 智・24 磯邊 美香／2回) (共同) 環境領域に関わる研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新 の社会実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」 が付与できるのかについて検討する。 (4 植田 彩芳子・8 桐村 喬・24 磯邊 美香／2回) (共同) 社会領域に関わる研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新 の社会実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」 が付与できるのかについて検討する。 (8 桐村 喬・14 迎山 和司・24 磯邊 美香／2回) (共同) 芸術学・美術学研究の視座から、デザイン・アートに関わる国内外での最新の 社会実践事例を分析することで、自身の研究活動にどのような新たな「意味」が 付与できるのかについて検討する。 (8 桐村 喬・24 磯邊 美香／1回) (共同) 仕上げられた最終課題についてのプレゼンテーション・ディスカッションを行 い、フィードバックを共有することで、本授業で得た知見をどのように自身の研 究活動に活かしていくかを総括する。 (最終課題) 授業各回での学びをデジタルアーカイブし、デザイン・アートに関する自身の 研究活動にどのように活用するかを示すデジタルポートフォリオを作成する。こ れにより、学習のプロセスを振り返り、成果を整理し、視覚的に表現する力を養 う。	オムニバス方式 共同	
		デザイン学6	○	「デザイン学6」では、デザイン・アートに関わる社会実践における国際的な視 野を拡大するため、国外の著名な社会実践者たちの取り組みをケーススタディと して取り上げる。これらの事例を通じて、自身の研究活動にいかに新たな「意 味」を付与し得るかを深く探究し、グローバルな文脈の中で自らの研究実践のあ り方を再定義する機会とする。異なる文化圏におけるデザイン・アートの実践が 持つ多様な価値観や、社会的インパクトについての理解を深めることで、より広 範な視座から自己の研究実践の意味を見直すことが求められる。	共同	
	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	英 語	英語P1	○	本科目では、デザイン・アートに関連する学生個人の関心に基づくテーマを設 定しリサーチを行い、そのプロセスと成果を英語によるプレゼン資料にまとめ発 表することで、英語で表現する力を養う。英語による基礎的なリサーチスキル (文献収集とその要約、インタビュー、アンケート、マルチメディアテクノロ ジーの活用法など)と、マルチメディアテクノロジーを駆使した英語によるプレ ゼンテーションの基礎的なスキルを身につけ、英語での自己表現力を向上させ る。	
			英語P2	○	本科目では、英語P1に引き続き、デザイン・アートに関連する学生個人の関心 に基づくテーマを設定しリサーチを行う。ここでは、そのプロセスと成果を英語 のライティングによるレポートにまとめ発表することで、英語で表現する力をさ らに向上させる。英語P1で身につけた、英語によるリサーチとプレゼンテーシ ョンのスキルをさらに磨き上げることに加え、英語によるアカデミック・ライテ ィングの基礎的なスキルと、その向上に資するマルチメディアテクノロジーの活用 法を学ぶことで、ライティングの側面からさらに英語での自己表現力を養う。	
			英語P3	○	本科目では、英語P2までに身につけた個人の英語表現力をグループワークで発 揮させることで、英語によるリサーチ・コラボレーション能力を養う。デザイ ン・アートに関連する関心に基づくテーマをグループで設定し、協力してリサ ーチを行い、その成果を英語によるパネル・ディスカッションやディベート形式等 で発表する。英語によるアカデミック・リサーチとマルチメディアテクノロジー の活用スキルをさらに向上させ、グループでのリサーチやディスカッションに基 づく自分たちの主張を多様なチャンネルのメディアにおいて英語で発信する。	

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目区分			授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門科目	Design Language (DL) 科目群	技能群	英語	英語P4	○ 本科目では、英語P3までに身につけた個人の英語表現力と英語によるリサーチ・コラボレーション能力をさらに向上させ、3回生以降のリサーチプロジェクトへの応用が可能なように、英語によるアカデミック・ライティングとプレゼンテーションスキルをさらに磨き上げる。教員のカウンセリングやグループでのディスカッションを通して、これまでの一連のプロジェクトの成果を英語によるエッセイとマルチメディアテクノロジーを駆使したプレゼンテーションにまとめ、最終成果報告会にて発表する。	
				アート・ドキュメンテーション	本講義では、アートの意味を問う基礎的な考え方を身につけることができる。広くアートを対象に、それが持つ様々な要素や意味を理解し、どのようにその情報を記録・ドキュメンテーションするのかを学ぶ。アート・ドキュメンテーションの目的と歴史を理解する。前デジタル時代と現代とで、さまざまな環境の変化によりアートを対象とする享受者や享受方法が大きく変化し、かつ急速に変貌している。アートを記録するという営みは、まさにアートの本質を追究する活動でもあるが、それが何をもちたらし、何に貢献できるのか、アート・ドキュメンテーションが応用的に何を生むのかについても考察する。	
			導入	デザイン・アートのための製図	この科目では、デザイン・アートを学ぶための基礎的な素養を身につけることを目的に、製図の基礎や図面の読み取り、図学、模型制作、スケッチ、デザイン思考に役立つ構成原理など、幅広い学習と演習を行う。製図の基礎知識を習得し、正確に図面を読み取る能力を磨くとともに、図面の模写（トレース）、模型制作、透視図の作図を通じて、空間やデザインを表現するためのプレゼンテーション技術を習得する。これらの学習を通じて、デザインに対する理解を深め、実践的な表現力を養うことを目指す。 製図や図面の読み取りといった技術を実践的に体得するため複数の教員を配置し各教員は以下の役割を担う。 20 木村智は講義に加え、演習の全体管理と学生に対して個別に指導を行う。基幹教員以外の教員（担当者未定）2名は学生に対して個別に演習の指導を行う。	共同
				デザイン・アートのためのプログラミング	本科目では、デザイン・アート制作にとって欠かせないコンピュータプログラミングについて学ぶ。入門的なプログラミング言語としてビジュアライズされたコマンドインタプリタ言語（例えばProcessingなど）を取り上げ、プログラミングの構造やデータ構造及びアルゴリズムを学ぶ。特に静止画や動画の生成に加えて、簡易ゲーム制作の要素も取り入れ、視覚的にプログラムを捉えることで、デザイン・アート制作に役立つプログラミングを学ぶ。	
				デザインリサーチ	デザインリサーチには、①プロダクトやサービスをデザインするためのリサーチ手法、②デザインに特有な知や技法を用いたリサーチ手法、という2つの捉え方がある。本科目では、その両方を扱い、①では、まだ世の中に存在しないプロダクトやサービスを組織的に生み出すためにはどのようなリサーチが必要か、②では、仮説の正しさを客観的なデータを分析して検証するマーケットリサーチとの根本的な視座・手法の違い、が主な論点となる。ここでは、この2つのプロセスをワークショップ形式で実践的に学ぶことで、その特性と理論的構成要素、およびその実践に必要な知識と技能を理解する。	
			導 入	デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング	本演習では、デザインリサーチプロジェクトに基づく研究の成果を、学術論文や報告書のかたちにまとめるためのアカデミック・ライティングに関する基礎的なスキルについて、演習課題とフィードバックセッションにおける議論を通して実践的に身につける。アカデミックな文書の基本構造（先行研究の批判的検討、課題導出、調査計画の作成、調査実施、データ分析、結論の導出）や基本原則（存在論・認識論に基づいた方法論の選択、パラグラフ・ライティング、図・表の表現、適切な引用方法など）について理解したうえで、アカデミックな文書にまとめる際のデザインリサーチに特有の課題や障壁について議論する。	共同
				デジタルビジュアルデザイン基礎	本科目では、「デジタルツールを用いたビジュアルデザイン実践」ではなく、「デジタルネイティブにおけるビジュアルデザイン理論の構築」をコンセプトに掲げ、既存のビジュアルデザインに関わる基礎理論（色彩論、視覚言語、タイポグラフィ、コンポジション、レイアウトシステムなど）を踏まえ、デジタルに特化し発展した新たなビジュアルデザイン理論を実践的な演習課題の制作、およびフィードバックセッション（クリティーク）における議論とリフレクションを通して検証しながら理解する。	
				Webデザイン基礎	Webデザインの対象は、既にPCやモバイルブラウザ上でのエレメントのレイアウト表示技術を超え、XR、ソーシャルメディア、モバイルテクノロジー、デジタルマーケティング、デジタルアーカイブ、フィンテックなどWebを介した多様なメディア上での表現と円滑なコミュニケーションをサポートする領域へと拡張している。また、そのデザインプロセスは複数の専門性や個性によるコラボレーションを基盤としたものとなっており、特に協調的なコミュニケーション能力が要求される。本科目では、これらの多様なWebメディア上でクリエイティブなビジョンを表現するために必要な、最新の拡張した領域でのWebデザインを構成する基礎的な概念と制作技術について、プロジェクトベースの協調的な課題制作を通して実践的に理解することを目的とする。	
				デジタルアート表現基礎（絵画）	本科目では、デジタルツールを用いた絵画制作実践において、物理的な対象の認識を自己という変換装置を通して、どのようにデジタル化し表現できるかを問い、その基礎的なプロセスを体感的に理解する。ここでの目的は、デジタルツールを用いた絵画制作技法の修得ではなく、対象（モチーフ）の在り様と自己との関係性を五感を駆使して感じとり、デジタルにおける自在な表現空間への変換によって、既成概念を問い直すプロセスを通じた自己変容であり、本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢の獲得である。	

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目区分				授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	科目群	導入	デジタルアート表現基礎 (立体造形)		本科目では、デジタル空間上での立体(3D)表現方法について、その基本的な原則と主要なデジタルツールを用いた制作プロセスを体感的に理解する。ただし、ここでの目的は、デジタルツールを用いた3D表現技法の修得ではなく、デジタルにおける自在な表現空間における立体概念の再検討と再構築であり、空間のあり方の既成概念を問い直すプロセスで生じる自己変容を通して、本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢の獲得である。
				フィジカルアート表現基礎 (絵画)		本科目では、物理的な素材を使用した絵画制作実践において、物理的な対象の認識を自己という変換装置を通して、どのように表現できるかを問い、その基礎的なプロセスを体感的に理解する。ここでの目的は、絵画制作技法(描画のテクニク)の修得ではなく、対象(モチーフ)の在り様と自己との関係性を五感を駆使して感じとり、既成概念を問い直す表現プロセスを通じた自己変容であり、本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢の獲得である。
				フィジカルアート表現基礎 (身体パフォーマンス)		本科目では、物理的な対象の認識を自己の身体という変換装置を通してどのように表現できるかを問い、身体を媒体とした表現の基礎的なプロセスを体感的に理解する。ここでの目的は、対象(モチーフ)の在り様と自己との関係性を五感を駆使して感じとり、身体が空間とどのように対話するかを問うことによって、身体表現が持つ文化的な意味や社会的なコンテキストといった既成概念を問い直すプロセスを通じた自己変容であり、本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢の獲得である。
				フィジカルアート表現基礎 (立体造形)		本科目では、物理的な素材を使用した立体造形物の制作において、物理的な対象の認識を自己という変換装置を通して、どのように表現できるかを問い、その基礎的なプロセスを体感的に理解する。ここでの目的は、制作技法(テクニク)の修得ではなく、対象(モチーフ)の在り様と自己との関係性を五感を駆使して感じとり、既成概念を問い直す表現プロセスを通じた自己変容であり、本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢の獲得である。
			専門	アート作品のデジタル分析 技術		現在、文化財やデジタルコンテンツを対象とした様々な分析技術があり、赤外線カメラを使った絵具層の下に書かれた下絵や、よこれて判別が出来なくなった文字の撮影、画像マッチングシステムによるバージョン検査などの他、蛍光X線やラマン分光を使った材料の分析や、反射光分析による作品の特性分析などにより、従来にはない客観的な作品評価が可能となってきた。本科目では、デジタル技術を活用することで、正確に作品を理解、評価する技術を学ぶ。専門性の高い機材を使った分析については、他機関との連携により実施することもある。なお、本科目では、文化財修復にかかわる技術取得にも繋げることができる。
				工芸・美術・芸能の社会 活用		本科目では、教員がこれまで実践してきたアート分野の社会活用プロジェクトに参加し、具体的なプロジェクトの理解を深め、技術的な演習・実践を行う。京都の工芸・美術・芸能の現場にインターンシップ型で参加し、社会実践の現場での体験型学習も行う。現場での体験を通じて、アートが社会にどのように活用されているかを学び、具体的な知識やスキルを身につける。最終講義では、各自がその体験と成果を報告し、社会活用のための新たな手法を提案する。これにより、アートの社会的価値や実践の可能性について理解を深め、アートを通じた社会貢献の方法を探索する力を育成することを目指す。
				テキストマイニング		本科目は、テキストマイニングと総称されるような、コンピュータを用いた大量の文書情報に対する情報処理がテーマである。特に、テキスト情報を取り扱い、テキスト・エディタとKH Coderを主に使用し、その処理方法・分析手法・解釈の方法を、実際にコンピュータを扱いつつ、実践的に学ぶ。文字コードなどのテキスト・データに対する基本的な知識、テキスト・エディタを用いたテキスト処理、テキストマイニングを理解し、分析ツールなどの活用を教授する。
				デザイン評価法		デザインの評価基準の明確な設定は、デザインプロジェクトにおける目標の達成に向けた第一歩である。本科目では、デザインの目的やコンセプトに対して成果物がどのように対応しているのかについて、主観的な意見を採用するデザインレビューやクリティークの実践に加え、量的なデータや統計的手法を用いてデザインを客観的に評価する方法論を実践的に身につける。ユーザーインタビューやアンケート、アイ・トラッキング、脳血流計測などの手法を通じて、デザインがユーザーに与える影響や課題を把握し、改善点を見つけ出すプロセスを学ぶことで、デザインの評価実践がネガティブな批判実践の場ではなく、さらなる進化のための貴重なツールであることを理解する。
				デジタル文化資源の活用		デジタル化された文化資源は、アーカイブされることでさまざまな活用が可能となる。デジタル文化資源は、産業創出に活用できるだけでなく、新たなアートを創出できる。本科目では、2D・3D複製技術や映像・VRなど新しいデジタル技術を応用し、プロジェクトマッピングやメタバースなどの新しい活用プラットフォームの活用挑戦する。この授業では、さまざまな技法を駆使することになるが、受講者相互の技術情報の交換、助言による高度化を行っていく。
				データベース構築法		本科目では、データベース設計、及びマルチメディア・データベース(画像、音楽、文書、映像データベース)構築のための方法を演習を通して習得する。まず、マルチメディア・データベースの構築の方法として、メディア・データ(画像データ、動画データ、音楽データ、ドキュメント・データ)を対象とした検索、編集、統合、データマイニングの実現方法を習得する。メディア・データ、特に、画像データ、音楽データ、ドキュメント・データを対象とし、それらのメディア・データをデータベースに蓄積し、検索、統合するデータベース構築方法を習得する。実際のデータベースシステムを用い、マルチメディアデータによって構成されるデータベースの構築と公開方法を身につける。

授 業 科 目 の 概 要					
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)					
科目区分		授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	技能群	専門	パフォーマンス制作と記録	主としてフィジカルなパフォーマンス（演劇・ダンスなど）を制作する過程を学ぶ。制作活動には、従来のアナログ型とデジタル型の組み合わせを積極的に活用するとともに、アート・リサーチセンターにデジタルアーカイブされているパフォーマンス・アーカイブとの連動による、エコシステム型プロダクトを実践する。また、フィジカルに演じられる作品のデジタル記録を作品の性質にあわせた方法で行い、デジタルアーカイブすることで、作品分析と同時に、次の制作活動に活用できるようにする。
				美術品・工芸品のデジタル化技術	フィジカル存在、あるいは製作されている美術品・工芸品を対象とし、その対象の本質（意味）を理解した上で、何をデジタル化するかを問いながら、技術的・経済的に最適と考えられるデジタル化技術を応用することで、対象のデジタル化とアーカイブを実践的に行う。デジタル化にあたっては共同作業となり、タスクフォーメーションのマネージメントを体験する。加えて、デジタル化する過程で必要となる著作権、著作隣接権、活用にあたっての知的財産権に関わる契約についても実践的に学ぶことができる。
				映像・音声アーカイブ	映像・音声は、それをコンテンツとして位置づけると、非常に大きな情報量を持つものである。デザイン・アート領域での映像・音声の活用はそれだけに魅力的であり、それらをデジタルアーカイブし、さまざまなデザイン実践の場で活用していく能力が必要である。この授業では、映像・音声のアーカイブにかかわる基礎的な技術を学び、効果的なデジタルアーカイブを構築する能力を身につける。なお、映像・音声は、YouTubeを代表とする視聴覚コンテンツプラットフォームが独占的に存在しており、それらのプラットフォームの活用方法や注意点についても学ぶが、コンテンツの性質上、著作権・著作隣接権についても十分に理解した上で、独自プラットフォームの運用についても挑戦的に学ぶ。
				コンピュータグラフィックス	本科目では、コンピュータを使って画像を生成する技術であるコンピュータグラフィックスの基礎から3次元コンピュータグラフィックス(3次元CG)まで幅広く学ぶ。コンピュータグラフィックスは様々な映像制作や表現支援のための重要な基盤技術であり、特に本科目では3次元CG技術の基礎の修得を目的とする。授業はコンピュータグラフィックスの基礎を学んだ後、モデリング(3次元形状の表現法)を学び、さらにレンダリング(3次元形状の描き方)も学ぶことで、映像デザイン・アート制作に役立てる。また簡易のCG制作を通じて問題点や課題も学び、包括的な力を身に付ける。
				サウンド処理	本科目では、コンピュータを使って音を扱う技術であるサウンド処理の基礎を学ぶ。サウンド処理は動画制作や表現支援のための重要な基盤技術であり、特に本科目では音の生成、伝達、放射などのコンピュータ上での音処理の基礎の習得を目的とする。授業はデジタルサウンドの基礎を学んだ上で、音の生成技術、加工技術、認識さらには放射技術も学ぶことでサウンドデザイン・アート制作に役立てる。また簡易の音制作を通じて、問題点や課題も学び、包括的な力を身に着ける。
				デザインとAI・人工知能・機械学習	本科目では、人工知能の基礎から最新の機械学習までを包括的に学ぶ。ChatGPTをはじめとする生成系AIが急速に普及する現代において、人工知能およびAIの仕組みや構造を正しく理解することを目的とする。さらに、最新の機械学習技術を用いて、実際に簡易なAIを構築・使用する実践的なスキルも養う。これにより、AIの応用力を高めるとともに、現在のAI技術が抱える問題点や課題についても深く考察する力を身につけることを目指す。
				デザインとバーチャルリアリティ	本科目では、急速に発展するバーチャルリアリティ（VR）とデザインの関係について学ぶ。コンピュータによって作り出された世界であるバーチャル空間を現実（フィジカル空間）として知覚させる技術であるバーチャルリアリティは、時空を超える環境技術であり、人類の認知を拡張する可能性を秘めている。このバーチャルリアリティ技術の基礎から簡易実践までを学ぶことで、デザイン制作空間の幅を広げ、より大きな世界観を持つデザイン・アート制作につなげる。
				デザインのためのビッグデータ解析	本講義では、地域の空間デザインを行うために、多種多様なビッグデータの利活用法に基づき、知識を抽出するデータ処理技術と可視化手法について概説する。ビッグデータが社会でどのように活用されているかを説明できるようになること、データマイニングの基礎を説明できるようになることを目的とし、大規模なデータも処理可能であり多くのデータサイエンティストにも利用されている統計解析用のプログラミング言語「R」を主に利用し、また機械学習・AIに有用なプログラミング言語「Python」も副次的に用いることで、社会のニーズに応えられる技術力を身につける。
				デジタルファブリケーション	本演習では、CAD（Computer-Aided Design）ソフトウェアを使用した3Dモデルの作成と、3Dプリンティング、レーザーカッティング、CNC加工などのデジタルファブリケーション技術を活用して自身のビジョンとアイデアを物理的なプロトタイプとして具現化する方法について、演習課題における実制作を通して身につける。また、デジタルファブリケーション技術の発展に伴う、オープンソースや共同制作文化の浸透によるデザインプロセスのイノベーション、分散型製造が地域社会に与える影響、製品カスタマイズの可能性が個人のアイデンティティに及ぼす影響など、社会にもたらす変革について先進的な具体例のケーススタディを行う。
				Webアーカイブ技術	本科目では、文化芸術作品・活動を対象に、デジタル化されたコンテンツを収集・蓄積し、構造化・組織化（データベース構築）する技術を学ぶ。自身でデジタル化したコンテンツの管理技術、WEB上のコンテンツの収集手法、データベース化するためのデータ処理、WEBアクセスのためのソフトウェアの利用方法、さらにはデータベース構築のプログラミングについても学び、総合的なWEBアーカイブ能力を身につけることができる。

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目 区分		授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容		備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	技能群	専門	Webコンテンツ活用システム	デジタルアーカイブされた文化芸術コンテンツの、オンライン型活用方法を主としつつ、さまざまな手法を習得する。外部のツールを活用した実践だけでなく、コンテンツマネージメントシステム等を使った自身が設計したオンライン展示、生成AIとの連携システムの導入など、実施時における可能な技術を駆使した活用実践を行う。最終制作物の提出を目的とするが、制作物の企画案、中間報告、成果発表によって、受講者相互の技術情報の交換、助言による高度化を行っている。	
				コミュニティデザイン	フィールドワークを通した演習を通し、都市・地域、建築、公園などのデザインの一連のプロセスと方法を身につけることを目的とする。本演習では、グループ作業による現地でのフィールドワーク及びGISなどのデジタルツールを駆使しながら地域資源調査を行い、行政や地域コミュニティの声に耳を傾け、提案をまとめ、プレゼンボードや動画などを活用して、関係者へのプレゼンテーションを行い、地域コミュニティへ成果を還元する。	
				ジオデザイン	ジオデザインとは、現実の地理空間を対象として行われるデザインの過程に地理的な思考・分析を取り入れたフレームワークであり、地理空間情報やGISと組み合わせることで、より効率的にプロセスを進めていくことができる。本講義では、2次元・3次元の多様な地理空間情報とGISを活用して、ジオデザインのフレームワークを用いて、持続可能な地域づくりに向けた、人口増減、気候変動、資源需要の増大、カーボンニュートラルなどの重要な課題の解決策を見出す手法を学ぶ。	
				地域調査法	本講義では、地域社会における人々の活動を対象にした調査・研究を的確かつ効果的に進めるために必要な社会調査法として、地域資料・地域情報を検索・入手・活用するための手法を教授する。地域資料・地域情報を調査する際に有用な、地域の図書館・博物館等の利用方法や対象地域におけるフィールドワークの方法を指導する。文書資料や視聴覚資料、デジタル情報などの多様な地域資料・地域情報の入手・活用に関して、国及び地方自治体等が発信するオープンデータや地域で眠ったままの資料を取り上げながら、GISやデジタル・アーカイブ技術を用いた具体的な方法を実践していく。また、個人情報の取り扱いと知的財産権（著作権）の尊重に関しても解説する。	
				データビジュアライゼーション	データのビジュアライゼーション（データ可視化）とは、情報やデータを視覚的にわかりやすく表現し、膨大なデータに潜むパターンや傾向を把握し、そこから新たな発見を促す方法である。本講義では、多種多様なデータを対象に、様々なチャートタイプ（グラフ形式）や視覚的な要素を用いて、傾向や異常、規則性などを直感的に理解することを促す方法や、ビジュアライゼーションのために必要となるビッグデータの処理・分析方法を、ExcelやPython、GIS、Illustratorなどを用いながら教授する。	
				CAD/CG演習	デジタルツールを活用した建築及び都市のデザイン・スタディ・プレゼンテーションの考え方や技術を学ぶことで、思考の自由度・拡張性を高めることを意図した授業である。課題を通して、アルゴリズムデザイン、リアルタイムレンダリング、デジタルファブリケーション、オンラインデザインコミュニケーション/プレゼンスキル（映像、3次元モデルプラットフォーム、YouTube、360度画像（動画）を使ってプレゼン）を体得する。 建築及び都市のデザイン・スタディ・プレゼンテーションに必要なデジタルツールを体得するため複数の教員を配置し各教員は以下の役割を担う。 19 北本英里子は講義に加え、演習の全体管理と学生に対して個別に指導を行う。基幹教員以外の教員（担当者未定）2名は学生に対して個別に演習の指導を行う。	共同
				アートマネジメント演習	本演習では、アートに関わるイベントやプロジェクトの企画、組織、および実施についてプロジェクトベースの実践を通して学ぶことで、アートマネージャーやキュレーターとして必要な態度とスキルの基礎を身につけることを目的とする。履修者はチームでの協調的なプロジェクト実践を通して、アート分野におけるマネジメントの基本原則、予算管理、イベントプロモーション、プロジェクトスケジュールの策定、アーティストとのコミュニケーション、ステイクホルダーとのネットワーキング、法的管理、マーケティングや広報戦略についての知識を深め、アート・社会・ビジネスの境界を横断した課題に対処する能力を養う。	
				グラフィックファシリテーション	本科目では、情報を視覚的に整理し共有することによってグループワークや会議を効果的にサポートするグラフィックファシリテーションのスキルを実践的に身につけることを目的とする。履修者は、アイデアの可視化やコンセプトの共有に関わるさまざまなグラフィック表現手法、デジタルツールとアナログツールの使用法とその効果的な使い分け、それらを用いたコラボレーションおよびファシリテーションの手法を学ぶことで、ビジュアルコミュニケーションスキルとファシリテーション能力を組み合わせ、クリエイティブな問題解決や意思決定の場面でグラフィックファシリテーションを使いこなすリーダーシップスキルを習得する。	
				サービスデザイン	サービスデザインとは、デザインの対象をモノの外観や機能からモノが生み出す経験として捉え直し、顧客をはじめとする多様な関係者をパートナーとして捉えたうえで、ビジネスをサイクルとしてトータルに再構築する手法であり、世界各国のさまざまな企業や公共サービスで導入されているデザイン実践である。本科目では、サービスデザイン実践を支える概念（参加型デザイン、共創、人間性中心、経験価値、サステナビリティ、プロダクト・サービス・システム）と、サービスデザイン実践に関わるさまざまな手法（ペルソナ、カスタマージャーニーマップ、サービスブループリント、ストーリーボード、プロトタイピング、ユーザーテストなど）を実践的に学ぶことで、デザインとビジネスの方法論の融合が社会にどのように新しい価値を生み出すかについて理解する。	

授 業 科 目 の 概 要							
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)							
科目 区分				授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	技能群	専門	デザインエスノグラフィー		デザインエスノグラフィーは、デザインの実践において実際の社会的場面に飛び込み、生活者の実際の日常を観察することから洞察を得るための手法であり、文化人類学の手法の一つであるエスノグラフィーをデザインのためのリサーチに適用したものである。本科目では、実際にデザインエスノグラフィーを実施するリサーチプロジェクトへの参加を通じて、この手法の実施のために理解すべき姿勢、文化人類学手法との差異、方法、ツール、理論化のプロセスに関する知識と経験を得ることで、学修者自身のデザイン実践においてこの手法を適用し実践できるようになることを目的とする。	
				ワークショップデザイン		本演習では、多様な参加者による創造的なコラボレーションを実現するワークショップのデザインについて、企画・設計・評価を担うデザイナーの立場、プロジェクトのアサイン・資金調達・関係者との事前事後調整やネットワーキングを行うプロデューサーの立場、参加者の体験や感情および対話の設計・実施時のファシリテーション・インタラクティブなコミュニケーションを担うファシリテーターの立場から捉え、各立場の活動を支える理論を学びながら、プロジェクトの実践を通して効果的なワークショップを計画・実施するための手法を身につける。	
				デジタルアート表現応用 (インストールーション)		コンピュータプログラミング、センサー技術、プロジェクションマッピングなどのデジタルテクノロジーを活用して、ヴァーチャル/デジタルツイン空間および場における環境—ヒト、ヒト—ヒトのインタラクションやコミュニケーションの新たな関係性を問うテーマを課し、インストールーションによる作品・展示物の制作を行う。また、その企画・考案から作品展示に至る思考と制作プロセスをドキュメンテーション・アーカイブ化することを課す。この制作実践とリフレクションによって、学修者の思考・表現技術の拡大と社会的な意味づけを可能にし、本学部のデザイン・アートの学びをさまざまな社会実践に応用展開するための知識・技能・思考・判断・表現力を身につけることができる。	
				フィジカルアート表現応用 (インストールーション)		物理的現実空間および場における環境—ヒト、ヒト—ヒトのインタラクションやコミュニケーションの新たな関係性を問うテーマを課し、インストールーションによる作品・展示物の制作を行う。また、その企画・考案から作品展示に至る思考と制作プロセスをドキュメンテーション・アーカイブ化することを課す。この制作実践とリフレクションによって、学修者の思考・表現技術の拡大と社会的な意味づけを可能にし、本学部のデザイン・アートの学びをさまざまな社会実践に応用展開するための知識・技能・思考・判断・表現力を身につけることができる。	
				デザイン・アート特殊演習		デザイン・アートが関わる状況は常に進化しており、今後も新たな社会実践領域が続々と現れていく。本演習では、デザイン・アートの新たな領域に対応するスキルや能力を実践的な演習を通して身につけることを目的とする。テクノロジーの進化、社会的な変化、文化や国際情勢の変容、地球環境の変化などに応じた新たなデザイン・アート領域における最新のトピックとそこに新たに隆起する方法論・技法を学び、今後の自身の研究や制作活動に役立てることを目指す。原則として年ごとに担当教員は変わり、またデザイン・アートの最新実践に関わる多様なエキスパートやプロフェッショナルがゲスト講師として参加するため、幅広い授業内容が展開される。	
	科目群	知識群	導入	インダストリアルデザイン論		インダストリアルデザインは、「機能的で美しい製品とは何か」を問い、その理想を社会性・文化性・経済性のバランスのもとに組織的にどのように生み出すのかという営みである。またその歴史は常に各時代の社会背景とデザインの理念との葛藤を孕んできた。本科目では、産業製品の組織的なデザインプロセス、および産業製品のデザインが有する社会的な役割や歴史的な意義、文化的な要素について理解し、産業におけるデザインがこれまで社会に与えてきた影響とともに、これからの社会に資する産業デザインのビジョンについて考察する。	
				京都・伝統文化論		歴史都市京都に生まれ育まれてきた、さまざまな芸術・文化について学ぶ。対象となるのは、雅楽・能楽・歌舞伎・いけばな・茶の湯・香・食・礼法・祭礼・美術・音楽・工芸・繊維などの分野から、演劇・映画・ゲームなどのエンターテインメント産業に至るまで、京都の芸術文化を広く対象とするが、本講義では、とくに現代においてそれらがどのように伝承され、現代の生活にどのように生かされているのかについて学び、ブランディングによる産業創出、新たな創作作品・分野の創出についても考えていく。伝承者や実演家をゲストに迎える回は、対面で実施する。	
				グローバルデザイン論		本科目は、グローバルな視点からデザインに取り組むために、異なる文化や地域でのデザインのあり方について、各国・地域のデザインに関する市場動向、デザイン政策、デザイン教育の理念、デザインの文化的影響、デザインと地球環境持続可能性との関係についての現状と課題の理解から学ぶことを目的とする。国際的な状況の把握のために、担当教員のコーディネートのもとで、本学部の海外プログラム連携先大学の教員・研究者等から、その大学のデザイン教育理念やその国のデザイン事情などをヒアリングしながら、議論と考察を行う。	
				芸術批評論		本科目は、さまざまな芸術表現を深く理解し、芸術の社会的な意義と価値を多角的な観点から評価するために、芸術に関する批評的な視点と態度を養うことを目的とする。造形芸術、舞台芸術、文学、写真、映画、パフォーマンスアート、サブカルチャー、デジタルメディアやテクノロジーに関わるアートなど芸術のさまざまな形式における、コンセプト、表現手法、文化的・歴史的背景、社会的影響、現代的な潮流などの分析視点から、批評に関する理論的な枠組みを通じて、芸術表現の背後にある社会的・政治的文脈と洞察を解釈し、その意味や人々への影響を評価する力を身につける。	
				地域デザイン論		地域社会の課題は多様化し、その解決に向けた道筋も複雑化している。本講義では、課題解決のための手法として地域デザインの具体的な手法を理解するとともに、これからの地域社会のあり方を構想する力を身に付ける。特に、地域が抱える様々な問題にそこに住む人自身が「コミュニティ」をつくり、向き合うことで問題を解決していく「持続性のあるしくみ」を考案する。具体的にはいくつかの政策課題について、地域の将来ビジョンを描きながら、現場の課題を解決に結びつけるソリューションを発見し、それを社会のシステムとして発信する。	

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目区分				授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	科目群	導入	デザイン・アートとコンピュータ基礎		本科目では、デザイン・アート制作に欠かせないコンピュータの基礎知識と操作方法に加え、コンピューティング思考について学ぶ。コンピュータは現代のデザイン・アート制作において必須のツールであり、その構成や機能、役割、特徴を包括的に理解することが重要である。これにより、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚など、五感に訴えるデジタルに特化した魅力的なデザイン・アートを制作するための基盤を構築する。コンピュータの可能性を最大限に活用し、デジタル技術を駆使した新たな表現手法を探索することで、創造力を高め、より豊かなデザイン・アートの実践を目指す。
				デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション		本科目では、ビジュアルコミュニケーションに関わるデザイン・アートの特性について、表現者の視点、解釈者の視点、およびその相互作用としての社会文化的な視点から捉え、その理論的な枠組みの理解を目的とする。表現者の視点としてビジュアルデザイン・アートの表現技法に関わるコンポジションや色彩の基礎理論、解釈者の視点として視覚心理やメディアリテラシーに関わる基礎理論、社会文化的な視点として記号論や視覚文化論のアプローチを学ぶ。
				デザイン態度論		デザイン態度とは、デザイナーやアーティストに特有な、問題の理解のしかた自体を再形成し、状況を自ら変化させ、社会に望ましい選択肢を作り出していく態度である。方法論としてのデザイン思考をさまざまな場に適用し実践するためには、デザイン思考を用いる個人や組織がデザイン態度を持ち、その特性を受け入れることが重要となる。本科目では、学修者自身がデザイン態度の特性を学び、適切な場面で発揮できるようになること、また同時にデザイン態度を組織や社会に敷衍させるリーダーシップを身につけるために、その特性を理論的な側面から理解することを目的とする。
				デザイン理論		本科目では、デザインの社会化が進み、多様な分野で独自のデザイン実践が行われている状況において、拡散したデザインの知を総合・統合的に把握するためのデザイン理論について、近年のデザイン研究の成果から得られた5つの観点：①問題解決行動としてのデザイン、②省察の実践としてのデザイン、③分野を横断する共通言語としてのデザイン、④思考方法としてのデザイン、⑤意味の創造としてのデザイン、から理解する。この5つの観点の理解を通して、現代社会の諸問題を捉え直し、学修者自身のデザイン実践の礎を構築することを目的とする。
				デジタルヒューマニティーズ概論		2000年代以降、人文学にも研究方法としてデジタル技術が積極的に取り入れられるようになった。この潮流をデジタルヒューマニティーズと呼ぶようになった。現在、デジタル技術が日進月歩で進展し、新たな技法が次々と生まれることで、それを応用する方法の学問として人文学分野での重要な領域となっている。アートを対象とした研究にも、こうした研究方法は必須となっており、本講義では、デジタル技術活用の方え方やアート研究にかかわる具体的な実践的手法を事例を取り交えつつ学ぶ。
				人間中心デザイン論		人間中心デザインとは、技術合理性に基づくものづくりの発想を批判し、社会における生活者としての個人への共感に基づく発想に転回したデザイン理念である。本科目では、人間中心デザイン理念の成立過程を、①エルゴノミクス、②ユーザビリティ、③インタラクションデザイン、④UCD(User-Centered Design)、⑤HCD(Human-Centered Design)、⑥UX(User-eXperience)デザイン、⑦デザイン思考、⑧意味論的転回、⑨人間性中心デザイン、という9つの文脈から検討する。また、近年のサステイナビリティに関する議論から批判される「人間中心主義」との差異についても議論し、人類学的なパースペクティブに向かうデザインの認識論の潮流について考察する。
			専門	音楽とデザイン		この科目では、人々の歴史と生活を彩ってきた音楽（民族音楽や大衆音楽を含む）を、地域、民族、時代との関わりを通じて考察する。音楽の社会的側面や文化的側面に加え、他の関連領域との関わりについても、具体的な事例を用いながら学習する。また、音響や音楽が社会や生活をどのようにデザインでどのようにについても探究する。さらに、ARC（アーカイブ）の音声・映像資料を活用し、具体的なテーマを設定して進めることで、音楽が持つ多様な影響力や役割について深く考察することを目的とする。
				芸能・演劇史		人類は、その最初期から身体表現によってコミュニケーションをとり、表現能力を発達させてきた。言語や音楽も取り入れ、総合的な表現技法として芸能が生まれ祭祀が行われるようになった。本講義では、表現の根源に位置する身体表現芸術の歴史を、日本を中心にして諸外国との比較を取入れながら学ぶ。とくに、さまざまなメディアが発達した現代において、メディアミックス型の展開に注目しつつ、歴史的な知識を身につけるだけでなく、メタパースなどの新しい技術がどのように芸能・演劇の世界を変えていくのかにも注目し、未来指向型の芸能・演劇史を提示していく。
				現代アート論		本科目では、現代アートを解釈するための理論的枠組みを検討し理解することを目的とする。美学・美術理論、ポストコロニアリズム、ジェンダー論、環境美学など、現代アートに関連する様々な理論的な視角から、現代アートに関わる作品や活動を取り上げ分析し、その背後にあるコンセプトやビジョン、歴史・社会的な文脈を探究する。また、現代アートの実践者（アーティストやキュレーター、プロジェクトマネージャーなど）をゲストに招聘し、最新の実践事例および潮流を理解することから、理論的枠組みの学修成果を社会的実践に結合し、学修者自身の表現活動に活かす視点を創出する。
				工芸・産業史		服飾・工芸分野においては、それ自体が産業として成立しているが、つねに視覚的デザインが作品の成功に強く関わっている。日本の工芸史を、漆器・陶磁器・ガラス・竹工芸や繊維などを対象に、また茶・食などの文化とも関連させながら考察する。これらは、現代においても魅力的な分野であるが、それをどのようにマネージメントし、産業としても活性化させていくかについても、実践事例を取り上げながら具体的に考えていく。なお、工芸分野の製作者・経営者などをゲストに迎える回も加えていく。

授 業 科 目 の 概 要					
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)					
科目 区分		授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D.L.)	知識群	専門	視覚芸術表現論	視覚型芸術がどのように表現されてきたかを、前デジタル時代から現代に至るまで、表現方法・技法に注目して歴史とたどり、デジタル時代にも変わらない表現技法とは何か、デジタル時代に獲得しなければならない表現にかかわる思考方法について、具体的な事例を取り上げながら考察する。講義期間中には美術館・博物館での作品鑑賞や芸術祭等の見学などを取り入れ、受講者間での討論によって、実践的に表現法を学ぶ。
				視覚文化・芸術史	本講義では、諸外国を視野にいれつつ日本を中心とした芸術史を踏まえながら、とくに視覚文化について学ぶ。視覚文化を絵画などの分野に限定することなく、写真、映像などのメディアにも対象を広げ、また広告、マンガ、ファッション等、従来美術史では取り上げてこなかった広いジャンルを対象にすることになる。現代、我々を取り巻く視覚的イメージを、どのようにして理解しているのか、またその理解を深めるにはどのような方法や実践があるのか、とくにジャンルを超えたイメージの往還に注目し、具体的な事例も使いながら考察していく。
				身体表現論	身体表現型芸術にはどのようなものがあり、それがどのように実演されてきたかを、表現方法・技法に注目して歴史とたどる。また、デジタル時代において、フィジカルとデジタルがどのように融合して新たな表現方法が生まれているのか。あるいは生んで行けるのかを考察する。デジタルアーカイブされた映像を活用し、具体的な事例を取り上げながら分析・評価するが、講義期間中には劇場・イベントなどの観賞を取り入れ、受講者間での討論によって、実践的に身体表現の表現法を通じた批評方法を身につける。
				デザインと人類学	本科目では、デザインと文化の相互関係を理解するために、あるデザインの規範が埋め込まれた社会集団やグループの習慣、信念、価値観、倫理を明らかにするためのアプローチとして人類学の視角を取り入れ、その理論的枠組みを理解することを目的とする。国内外の人類学的手法を活用したデザインリサーチプロジェクトの事例分析を通じて、その意義と成果および課題を検証し、文化的な理解を基にした戦略的デザインプロセスの検討、異なる背景を持つ人々に対してより意味のあるプロダクトやサービスを提供する方法、人類学的なアプローチが現代デザインのあり方の革新にどのように寄与するかについて議論する。
				感性・認知情報処理論	本科目では、人間の感性情報をさまざまな形で数値化し、それらを解析・分析することで有用な知識や規則、さらには新しいものを生成することを目的とした感性情報処理、さらには感性に基づく知識や規則および生成物を把握・理解することを目的とした認知情報処理について学ぶ。特に人間の感性や認知処理を理解することはデザイン・アート制作にとって非常に重要な観点となる。本科目を履修することで、人間の感性や認知メカニズムを踏まえたデザイン・アート制作につなげる。
				デザインとコンピュータ応用	本科目では、コンピュータ応用技術を活用し、視覚、聴覚、触覚などの感覚をテーマに、コンピュータを中心とした各種デバイスの制御に関する留意点や特徴を解説する。学んだ技術や知識を基に、魅力的なデザイン・アート制作を実践することを目的とする。特に、視覚と聴覚など複数のモダリティを取り上げ、これらを同時に制御する技術を学習し、複合的な表現手法を探索する。また、こうしたスキルを卒業論文や卒業制作に応用し、複数の感覚に訴える作品制作や研究を行うための基礎力を身につける。授業を通じて、デジタル技術を活かした新しい表現の可能性を広げ、創造的なデザインやアートの分野での実践力を養成する。
				デザインと知覚	本科目では、デザインされたモノの知覚に影響を与える、人間の視覚、聴覚、触覚を通した認知および情報処理のメカニズムについての基礎的な理論について理解することを目的とする。視覚については色彩、形状、配置およびその総合的な構成、聴覚については音楽や身のまわりの音の構成要素、触覚については素材やテクスチャの選択がそれぞれにもたらす人間への心理的・生理的影響とその知覚情報処理プロセスに関わる諸理論、およびそれらの評価方法論について学ぶ。
				デザインと人間工学	本科目では、デザイン制作にとって欠かせない人間工学とデザインの関係を学ぶ。特に様々なデザイン活動において道具や機器が使用されるが、これらを設計したり扱ったりする際には、使用するヒトの快適、安全、能率、経済性等を考慮する必要がある。履修によりヒトの持つ様々な特性（形態、生理、心理）を理解し、その特性を用具や機器の設計、作業効率、安全性の確保等への活かし方を身につけることを目標にする。特にヒューマンコンピュータインターフェースやヒューマンコンピュータインタラクションを踏まえたデザインと人間工学の関係を深く学ぶ。
				デザインのための数理	本科目では、情報や環境デザイン・アート分野において不可欠な数理モデルを学修する。コンピュータはあらゆるデータを2進数で表現できるため、数理表現を習得することで、入力された多様な数値情報から意味のあるデータを抽出し、解析することが可能となる。その解析に基づいた意思決定やデザインプロセスの最適化に有効な理論と方法を学ぶことを目的とする。講義では、簡単な数理モデルの構築を通じて、データ解析の基礎を理解し、それをデザイン・アート制作にどのように応用するかを包括的に学習する。これにより、数理的な思考をもとにした効果的なデザインやアート表現を追求するための基礎的なスキルを身につける。
				デザインのためのデータマイニング	本科目では、統計学、パターン認識、人工知能などのデータ解析技法を大量のデータに適用し、知識を抽出する技術であるデータマイニングとデザインとの関係について学ぶ。特に、データマイニングを用いて特徴を見出し、その特徴に基づいたデザインやアート制作を行うことで、より多くの人々に受け入れられる制作物の創出を目指す。データ解析によって得られたインサイトをデザインに反映させることで、客観的なデータと創造的なプロセスを結びつけ、デザインの効果や影響を向上させる技術と方法論を習得する。また、制作を通じてデータとデザインの相互作用を体験し、データ駆動型デザインの可能性を探索する。

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目区分				授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	知識群	専門	デジタルアーカイブ概論		アーカイブの歴史や現代のデジタルアーカイブの現状を、環境、技術、制度面において多角的に考察し、アートやデザインの学術的な動向にデジタルアーカイブがどのように影響を及ぼしているかについて概観する。デジタルアーカイブの特性として、サステイナビリティやコピーライトの問題が常に問われてきたが、そうした時代とともに変化していくデジタルアーカイブ上での課題についても、具体的事例を使いながら考察し、次世代のデジタルアーカイブについても言及する。
				デジタルメディアデザイン論		本科目では、まずデジタルコミュニケーションの発展が、情報流通や社会構造にどのような影響を与えてきたか、デジタルメディアの歴史と進化に関わる社会的な課題について学ぶ。次に、情報のデジタル化、ネットワークの構築、デジタルインタラクションなどの観点からデジタルメディアの技術的発展史を理解する。さらに、Webサイト、モバイルアプリケーション、ソーシャルメディア、デジタル広告など、さまざまなデジタルメディアにおけるデザイン戦略について、デジタルメディアが持つ独自のデザイン要素やユーザーエクスペリエンスの観点から分析する。
				メディア処理論		本科目では、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などの五感に関するメディア情報をコンピュータで処理する際の手法や応用について深く学ぶ。特にCG、VR、サウンド、AIなどの各種メディア処理技術を学んだ上で、社会実装を行う際の課題や問題点を抽出し、その解決策を議論することで未来社会に構築につなげる。特にデザイン・アート制作の観点からメディア処理技術を捉え、未来社会創造につなげることが本科目の目的となる。
				建築意匠論		建築意匠論は、建築物の外観やインテリアデザインに関する理論と実践を探究する学問である。本講義では、建築デザインの歴史をたどり、現代のデザイン理論における基本的なルールや建築家の思想を学ぶ。また、建物の内部と外部に現れるかたちの仕組みについても考察し、具体的な建築作品を通じてデザインプロセスやコンセプトの構築方法を理解する。さらに、素材や技術の選択が建築デザインにどのように影響を与えるかについても深く掘り下げ、建築意匠の理論と実践を幅広く学習する。
				建築情報論		この科目では、情報技術を活用した建築および空間デザインに関する基礎的な知識と方法について学ぶ。具体的には、外観や内装、展示、照明、人間行動などに焦点を当て、空間の形態や人間の寸法、行動法則を理解し、空間を計画する意義とその手法を探究する。また、センシング技術やメタバース空間、コンピュータシミュレーションといった最先端の情報技術を活用した次世代の空間デザインの意義とその具体的な手法についても学習する。これにより、現代および未来の空間デザインにおける技術的革新とその応用方法を総合的に理解することを目指す。
				コ・デザイン論		コ・デザインとは、デザイナーや専門家などの限られた人々によってだけでなく、実際の利用者や利害関係者たちと積極的にかかわりあいながらデザインを進めていく取り組みのことであり、ビジネス、地域社会、教育、異文化コミュニケーションなどさまざまな社会実践分野への応用が期待されている。本科目では、コ・デザインの概念とその実践方法の理解を目的とし、コラボレーションと共創の概念を通じてデザインを理解し、異なるバックグラウンドからの多様な視点や知識を組み合わせて新しいビジョンやソリューションを生み出す手法を実践的に学ぶ。
				地理情報科学		本科目では、地理情報システム（GIS）と地理情報科学の内容を、具体的な事例を交えながら紹介する。GISとは地理的位置を手がかりに、地理空間情報を総合的に管理・加工し、視覚的に表示し、高度な分析や迅速な判断を可能にする技術であり、地理情報科学は、GISに関わる様々な方法論に関する学問分野である。本講義では、地理情報科学の展開や、地理空間情報の作成、管理、処理・分析方法、表現・可視化方法、WebGISの活用方法だけでなく、空間ビッグデータや3D都市モデル、デジタル人文学など、近年の地理情報科学に関わる重要なトピックについても事例を交えながら紹介する。
				都市デザイン		地域・地区から、街区・街路・オープンスペース、建築などのヒューマンスケールに至るまで、様々なスケールを横断できる能力が都市デザインには必要である。また、空間像にとどまらず、生活像（＝ライフスタイル）や社会像（＝事業の仕組みやファイナンス）をセットで提案することが求められている。本科目では、都市デザインの事例を通じて、国内外の都市デザインの思潮、都市デザインの専門基礎用語と手法、都市デザインに関わる技術者の倫理を理解することを目的とする。 (オムニバス方式／全14回) (20 木村智／10回) 前半では当該科目に関する基礎的な内容を、後半では応用の方法論について教授する。 (154 早川小百合／4回) 当該科目に関連する実践の実例を紹介する。

授 業 科 目 の 概 要						
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)						
科目区分			授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L)	知識群	専門	ランドスケープ・庭園史	日本の庭園文化や国内外のランドスケープ作品等を通じて、風景や景観の美的価値や文化的意味を探究する学問である。本講義では、日本庭園や国内外の公園や広場などのランドスケープ作品が造営される歴史的背景、主要な庭園の様式、空間構成、デザインの原則、植物や石材などの材料などを学びつつ、景観設計の理論と実践、そして現代の景観保全や修景の課題に風景論との比較を行う。また、各時代を象徴する事例に取り上げ、それぞれの美的な特徴と文化的意義を深く考えていく。 (オムニバス方式／全14回) (20木村智／10回) 前半では当該科目に関する基礎的な内容を、後半では応用の方法論について教授する。 (124 今村友里子／4回) 当該科目に関連する実践の実例を紹介する。	オムニバス方式
				歴史まちづくり	この科目では、建造物・史跡・祭礼などの歴史文化資源の価値を理解し、それらを保存・再生するための仕組みやデザイン手法を学ぶ。また、歴史的都市の町並みや暮らしを構成する歴史文化資源がどのように創造され、継承されてきたのかを考察する。さらに、歴史文化資源を活用した「歴史まちづくり」に関する事例や方法、関連する法制度についても学びながら、それらを活かし続けるための地域の課題や将来の展望についても議論していく。歴史文化資源の保存と再生に対する理解を深めることで、地域の持続可能な発展に寄与するための知識と視点を身につけることを目指す。	
				アートマネジメント論	本科目では、持続的な社会と文化の構築に資するアートの意味と価値に関わる議論に焦点を当て、アート領域における組織、リーダーシップ、戦略、マーケティング、ファイナンス、法整備、倫理、社会およびビジネス環境の動向についての理解を深めるために、理論的な側面から探究する。アートに関わるイベントやプロジェクトを遂行するための戦略的アプローチについて国内外の事例のケーススタディや関係者へのインタビューなどをもとに、アートに関わる市場の動向や組織運営に関する諸問題について学ぶことで、アート領域において持続可能で有益な組織運営を行うための戦略的な思考を身につける。	
				戦略的デザイン論	戦略的デザイン (Strategic Design) とは、企業組織におけるデザイン実践に関わる新しいステークホルダーのネットワークを構成することや、製品・サービス、コミュニケーションの接続されたシステムをデザインすることを通して、中長期のプランを含む包括的なデザイン行為である。特に、社会的・倫理的で公共的な側面から新たな価値を創造するために、技術や生産のイノベーションだけでなく、人々の生活や行動のイノベーションを目的とし、ユーザー中心デザイン (UCD: User-Centered Design) からコミュニティ中心デザイン (CCD: Community-Centered Design) への転換によって、社会システムの進化というかたちでブレークスルーをもたらす。本科目では、国際的な戦略的デザインの実践事例を分析することから、実践者や実践組織に特徴的な思考・態度・行動規範・スキル等を多角的に検討し、学修者自身のデザイン実践へ応用できる知識を獲得する。	
				デザイン・アートと国際社会	デザイン・アートは、人間とそれを取り巻くさまざまなモノによって構成された環境のあいだの生態学的な関係の網の目の上にかたちをとるものであり、その意味で現代の国際社会の基層にある文明的多元性と密接にかかわっている。本科目では、現代の国際社会における競争と共生の両面から、パワーの源泉としてのデザイン・アート、および相互理解・相互変容の過程・媒介としてのデザイン・アートについて概観し、グローバルな諸関係のなかで、デザイン・アートを通じて実現される、政治的、経済的、社会的な価値について、実例に即しつつ概念的な理解を獲得する。	
				デザイン・アートと世界史	歴史という実践は、過去との対話と現在との対話という二つの対話を同時に行うことである。本科目では、特に「世界史」という主題において、デザイン・アートの視点と技法を介して、一方で過去との対話において、歴史をつくるエージェンシーを人間以外のさまざまな有形・無形の存在に開き、他方で現在との対話において、歴史を内在的かつマルチモーダルに語る方法論的・概念的枠組みを提供し、より開かれた歴史記述に根差した創造的な歴史コミュニケーションのあり方を多面的に考察する。	
				デザイン・アートと歴史・考古学	本科目では、考古学の理論や手法を用いて過去の時代や文化のアーティファクト (人工物) から得られる情報を分析することで、その背後にある歴史的文脈を理解し、それらが当時の社会や文化にどのように影響を与えたか、歴史の中でどのように変容し新たな表現形式が生まれたのかについて探究する。この知の探究によって、デザイン・アートと社会との相互作用の変遷を理解することで、現代のデザイン・アートの生成プロセスやさらに先の未来洞察に応用する視座を獲得する。	
				デザインと行政	近年、公共サービスや政府機関において、デザインの知を行政分野に応用することで、市民との関係構築、効果的な政策立案と施行、公共施設の改善などに貢献する成果が見られ始めている。本科目では、デザインの持つどのような特徴と特性が、行政に対してどのような価値を提供できるかについて、国内外の行政分野におけるデザイン知の介入事例研究と関係者へのインタビューなどを通して検討することで、現代社会における複雑な問題に対処するために、デザインがどのように政策やプロセスを変革するかについて理解する。	

授 業 科 目 の 概 要							
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)							
科目 区分				授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
専門科目	D e s i g n L a n g u a g e (D L) 科目群	知識群	専門	デザインと知的財産権		本科目では、学修者自身の将来的なデザイン活動において、知的財産権の戦略的な運用や法的な問題に対処する能力を養うために、著作権、意匠権、商標法、特許などの法的な枠組みを通じて、デザインに関する権利と法的な保護の仕組みについて学ぶことを目的とする。また、デザインを用いた競合他社との差別化や競争優位性の確立において、知的財産権の活用がどのように役立つか、具体的な実務事例を通じて検証する。さらに、近年のオープンイノベーションやクリエイティブコモンズ概念の概念を取り上げ、デザイン産業界における共有と保護のバランスについて検討する。	
				デザインとマーケティング		本科目では、企業の効果的なコミュニケーション戦略を構築するために、ブランディング、市場調査、消費者行動分析、競合分析などの伝統的なマーケティング手法を、商品やサービスの価値を高め顧客の感情や意識に影響を与え社会に新たなビジョンを提起するデザインプロセスに統合し、デザインとマーケティングをシームレスに結びつける方法論を検討する。特に、デジタルマーケティングやソーシャルメディアの影響など、現代のマーケティング環境の変化に対応するデザインのアプローチに焦点を当て、デザインの知や思考特性が企業のマーケティング戦略にどのように組み込まれ、顧客とのエンゲージメントを高め、企業の社会的価値の向上に貢献するかについて、具体的なケーススタディを通して明らかにする。	
				デザインマネジメント論		本科目では、デザインがビジネスにおいてどのように価値を生み出し、組織の成功に寄与するかについて、デザインを戦略的かつ効果的に組織内外で管理・展開するための理論と実践方法について学ぶ。デザインプロセスやクリエイティブなアプローチを効果的に組織に統合し戦略的な目標達成に資する方法、デザイン思考を組織文化に編み込む手法、デザインマネジメントがもたらすイノベーション、デザインを外部に委託する際の適切なパートナーシップの構築、組織内外のデザインリソースを最大限に活用する方法について、具体的な実践のケーススタディと担当者へのインタビューを通して検討する。	
				美術教育論		本科目では、美術教育が社会に与える影響や美術が抱える社会的課題について学び、美術教育における文化的多様性や社会的包摂の重要性を理解する。まず、芸術の理解、表現力の発展、美的感覚の涵養など、美術教育が目指す理念と目的について整理する。次に、美術教育の歴史的な背景を通じて、美術教育が社会変革や文化的な発展に果たしてきた役割を検討することから、異なる文化や社会における美術教育の違いを理解し、それが教育制度や社会制度に与える影響を考察する。さらに、美術教育が人々の文化的アイデンティティや文化的創造力をどのように形成し、社会的な共感や批判的思考、および多様性と包摂を促進できるかについて議論する。	
				ミュージオロジー		本科目では、博物館や美術館等における持続可能な運営と社会的価値の創出に資するミュージオロジー（博物館学）の意義と役割に焦点を当てる。近年の博物館・美術館の多様化と概念の広がりに対応し、組織運営、展示企画、コレクション管理、教育普及活動、マーケティング、ファイナンス、法規制、倫理、および社会・ビジネス環境の動向について、理論的な視点から深く探究する。国内外の博物館・美術館およびその多様化と広がりについて事例研究や関係者へのインタビューを通じて、社会的な存在意義、展示企画やコレクション管理、来館者の多様なニーズに応えるための戦略的アプローチについて学び、今後のあるべき博物館・美術館等における持続可能で有益な運営を実現するための実践的な知識を身につけることを目的とする。	
				デザイン・アート特殊講義		デザイン・アートが関わる状況は常に進化しており、今後も新たな社会実践領域が続々と現れていく。本講義では、デザイン・アートの新たな領域に対応する知識を身につけることを目的とする。テクノロジーの進化、社会的な変化、文化や国際情勢の変容、地球環境の変化などに応じた新たなデザイン・アート領域における最新のトピックや社会実践動向についてケーススタディを通じて学び、今後の自身の研究や制作活動に役立てることを目指す。原則として年ごとに担当教員は変わり、またデザイン・アートの最新実践に関わる多様なエキスパートやプロフェッショナルがゲスト講師として参加するため、幅広い授業内容が展開される。	
	卒業研究		卒業研究	○	「卒業演習1」「卒業演習2」にて計画・実施した卒業研究プロジェクトの成果について、①卒業研究・制作展における展示とプレゼンテーション、②論文または実践報告書（「卒業演習1」で策定した研究の骨子をもとに、プロジェクトの成果と全体を通じて得られた経験や洞察をまとめる）、の2つのかたちをまとめ、プロジェクトの実践と成果物において、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」が十全に発揮されているかどうかを評価する。		
	Design Study Abroad		Design Study Abroad		本科目は、短期間の海外研修により国際的に視野を広げ、異文化におけるデザイン・アートのアプローチや実践を学ぶことから、学生自身の取り組むべき研究課題を広い視野から再認識することを目的とする。学生は海外のデザイン・アートに関連する研究教育機関、組織、企業、公共施設、スタジオ、ワークショップ等での研修を通じて、グローバルなデザイン・アートの潮流、および地域文化に根ざした独自の美的感性や表現のあり方を直接体験する。さらに、異文化交流を通じて多様な価値観を理解し、将来のキャリアに役立つ国際的なネットワークを築く機会を得ることを目指す。		
	教養科目		日本の近現代と立命館		本学で学ぶ学生にとって最も身近な「場」である大学の歴史を切り口として、日本の近現代史を深く学び直すことを目的とする。特に、大学という教育機関がいかにして日本の近代化や社会変革に影響を与えてきたかを探索する。本講義では、近代化がもたらした社会的・経済的なひずみ、さらには教育そのものが直面している現代の危機的状況を歴史的視座から再考する。学生は、大学の変遷を辿る中で、今日の教育制度や社会的問題の根底にある課題に対し、身近な視点から深い洞察を得ることを目指す。これにより、未来を担う者として、現在の社会における自己の位置や役割を自覚し、より広い視野で現代社会の問題を理解し解決策を模索する力を養う。		

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	ピア・サポート論		本学では、学生同士による学生支援のシステムが様々な分野で展開され、双方の成長を図っていく視点から、ピア・サポートの取り組みが蓄積されてきた。特に、初年次における学生支援の一環として、高校から大学へと学びの転換を図っていくうえで、ピア・サポーターの果たす役割は大きい。ここで活躍するピア・サポーターを育成するに留まらず、相互支援による学びのコミュニティの裾野を広げていくために、ピア・サポートの理念・目的をはじめ、コミュニケーション能力や課題解決能力の習得、自大学の歴史や基本的な青年期発達理論への理解が必要となる。本授業は、グループワークの手法を活用した演習と講義を組み合わせで行うことで、ピア・サポートに求められる知識、技能、実践力の獲得を目指す。	
	ジェンダーとダイバーシティ		多様性（ダイバーシティ）は本来社会を豊かにする。しかし現実には、人間が人間らしく生きることにかかわる様々な差別、偏見、格差などの社会問題がある。それらを理解するために平等、人権、正義という考え方が重要となる。開かれた関係づくりをめざすジェンダーの視点など、他者を尊重する考え方を身につけ、多様な個人々の相互理解の実現を妨げている社会の現状とそれを解決する道筋（思想、制度、行動）について具体的に学ぶ。社会における自分の立場をも重ねて思考し、自由に公正な社会を構想する。	
	メディアと現代文化		通信技術の飛躍的発展により、現代の社会と文化を取り巻く環境は大きく変貌している。この科目では、文字、音声、映像といったメディアが、本、新聞、雑誌、映画、テレビ、ラジオ、電話、インターネットなどの形を通じて、社会・文化の形成や発展にどのように関わってきたかを学ぶ。また、メディアと現代文化との間に存在する問題や課題についても考察する。さらに、デジタル化やグローバル化が進む現代において、新たに生じているメディア関連の諸問題や、メディアアリテラシーの重要性についても取り上げる。これにより、メディアと社会・文化の関係性を深く理解し、現代社会におけるメディアのあり方について考える力を養う。	
	市民と政治		政治や国家は私たち市民から遠い存在のようにも見えるが、政治は市民の日常生活に影響し、逆に市民が政治に参加する制度や機会も増えてきている。この科目は、政治と市民の関係とくに民主主義について考え、政治学の基礎に接近する。身近な素材を用い、具体的な政治問題から出発しながら、政府の機能、民主主義の理念、民主主義の制度としての選挙や政治参加について、現状の理解と問題点の検討をうながす。内容と関連づけて、諸外国の政治状況、近現代の政治史や政治理論について扱うことがある。	
	日本国憲法		本講義では、現代日本における憲法問題をフレッシュな事例を交えながら概説する。特に、外国人の選挙権付与問題や検定教科書問題といった、今日の社会が抱える複雑な課題に焦点を当て、憲法がそれらにどのように対応しているか、あるいは対応できていないかを検討する。憲法の基本原理や解釈が、これらの具体的な問題にどのように作用しているのか、また、法的観点からどのような解決策が提示され得るのかを深く考察することを目的とする。講義では、最新の事例を取り上げることで、学生が現代社会の問題をより身近に感じるとともに、法的思考を養い、現実的な視点から憲法と社会の関係を理解する機会を提供する。これにより、学生は憲法に基づく法的解決策を自ら考え、社会問題への理解を深める力を培う。	
	災害と安全		この科目では、災害が人間生活や国土に及ぼす影響を、自然災害や都市災害などの具体的な事例を通じて論じる。災害の発生原因やメカニズム、被害の構造、補償制度について、自然科学的および社会科学的視点から総合的に理解することを目指す。また、地域レベル、政府レベル、地球レベルでの防災システムのあり方を、国連、政府、自治体、民間の活動を通じて学ぶ。これにより、災害対策の現状と課題を把握し、効果的な防災・減災の方法を考察する力を養う。さらに、災害に対する社会の対応や持続可能な防災システムの構築について理解を深め、災害と人間社会の関係を多角的に捉え、災害に強い社会づくりに貢献できる知識と能力を身につける。	
	歴史観の形成		この科目は、主に日本史研究の分野において、世界史や東アジア史を視野に入れた歴史理論や歴史観がどのように構築されてきたかを論じる。最新の世界における歴史理論に触れながら、これらの理論が世界史や東アジア史の動向をどのように捉えてきたのかに注目する。また、そうした歴史観が史学史的にどのような意味を持っていたのかを探究する。これにより、日本史研究における歴史理論の発展過程を理解し、現代の歴史研究における理論的視座を養うことを目指す。	
	科学・技術と社会		本講義では、文系・社系の学生が積極的に関心を持てるようなトピックスを取り上げながら、科学技術が現代社会において果たしている役割や影響、さらにその問題点を探る。特に、科学技術と産業経済の密接な関係や、それが日本社会特有の文脈でどのように発展してきたかを検討する。これにより、科学技術が経済や社会構造に与える多面的な影響を理解し、技術の進展が引き起こす社会的な課題に対する批判的思考を養うことを目指す。文系・社系の視点から、科学技術と社会の複雑な相互作用を深く理解し、未来の社会における科学技術のあり方について考察する基盤を形成する。	
	現代平和論		平和あるいは安全保障とは、世界の人々の命、生活、尊厳が守られることを意味する。この科目では、それらを脅かす要因が何であるか、それを実現するために必要な制度や政策がどのようなものかを考察する。また、大学における研究教育が軍事や戦争に荷担し、人々の命、生活、尊厳を侵害した歴史を振り返り、大学の研究教育の平和化にも留意する。これにより、平和と安全保障について深く理解し、現代社会における課題と向き合う力を養う。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	戦争の歴史と思想		20世紀の戦争は、国家資源を総動員した総力戦として戦われ、かつてない大量殺戮の世紀となった。そして21世紀も、テロと報復戦争の応酬や悲惨な内戦、あるいは権力を背景とした人権蹂躪に示されるように、暴力と戦争の影をひきずって開幕、悲惨な状況を我々の眼前に提示している。こうした戦争という病的な状況は、なにゆえ生まれるのだろうか。ここから、どのような教訓をひきだしたらいいのかについて、この講義では現実を展開する客観化すら困難な状況から一歩離れて、歴史の実態あるいは哲学的意味付けなどの在り方を学問的に振り返る作業を通じて、戦争という現象を思索する機会を提供する。	
	平和人権フィールドスタ ディ		この科目は、平和・人権の問題、すなわち人々の命・生活・尊厳を脅かす事象と、それを克服しようとする人々の努力を理解するために、実際の現場を訪ねて当事者と出会う学びを行う。フィールドワークを通じて、当事者や同時代を生きた他者との対話・交流を深め、平和・人権に関する理解を深めることを図る。これにより、学生は平和・人権を実現する主体としての意識と行動力を育成する。さらに、現場での体験を教室での学びと結びつけ、理論と実践を統合した深い洞察を得る。	
	哲学と人間		本講義は、哲学に初めて触れる学生を対象とした入門講座である。哲学は2600年以上にわたり、人類の知的営為として発展してきたが、その歴史を通じて、人間は存在、世界、自己、社会についてどのように考え、問い続けてきたのかを平易に解説する。存在論、認識論、倫理学、政治哲学などの基本概念を学ぶことで、学生は哲学が我々の世界観や価値観にどのような影響を与えてきたかを理解することができる。本講義は、哲学の奥深い思索の世界に触れるための第一歩を提供し、日常の中にある普遍的な疑問に対して、より深い洞察を得る機会を提供する。	
	人間性と倫理		本講義では、「人間とはいかなる存在か」「われわれはいかに行為すべきか」「われわれを導く規範はいかなるものであるべきか」「その根拠は何か」といった基本的な倫理的問いに対して、古今の倫理思想と現代社会の諸問題を手がかりに探求する。学生は、普遍的な倫理の原則が時代や状況に応じてどのように変容し、また適用されてきたかを学び、自身の価値観や行動基準について深く考える力を養う。講義を通じて、倫理とは単なる理論ではなく、現実社会における行動指針として機能するものであることを理解し、自らの倫理観を再構築する機会を提供する。	
	心理学入門		心の働きを実感することはできても、心とは何かを正確にとらえるのは容易ではない。これまで多くの学問領域がこの難問に挑んできたが、心理学はその中でも近接領域の影響を受けつつ、心の機能を科学的に解明するために、多様で独自のアプローチと研究手法を発展させてきた。本講義では、このような心理学の概要を学び、心の重層的な機能について総合的に理解することを目指す。また、心理学が現代社会において果たす役割や、他の学問分野との関連性についても考察する。これにより、心の働きや人間の行動を多角的に理解し、自己理解や他者理解の深化につなげることを目指す。	
	論理と思考		本講義では、論理がどのようにことばや記号を媒介とした思考の根底にある構造を形成しているかを明らかにし、その構造が推理や論証という知的活動を支えていることを探求する。論理とは単なる抽象的な理論ではなく、思考の道具として実際の問題解決や論証の基盤を提供するものである。ことばや記号を用いた表現の形式とその意味を慎重に検討し、論理の基本的なしくみを客観的に考察することで、明確な思考と批判的な分析能力を養い、実践的な問題解決にも応用可能な論理的枠組みを構築する力を育成する。	
	社会思想史		本講義では、人間社会の歴史において、制度や秩序を生み出し、それを支えてきた思想や社会的条件がどのように形成されてきたのかを探求する。特に、時代ごとの政治や政策の正当性を支える根拠を明らかにし、それがどのようにして社会システムの中で機能してきたかを検討する。また、正義や公共性といった普遍的な概念が、特定の歴史的文脈の中でどのように結実し、社会的な正当性を持つに至ったかを考察する。講義を通じて、歴史的視点と現代的視点を融合させながら、社会の根本にある理念や規範の形成過程を学ぶ。	
	科学技術と倫理		本講義では、現代社会における科学技術の急速な発達とその利用が引き起こす倫理的問題について探求する。具体的には、生命倫理、環境倫理、情報倫理、工学倫理など、多岐にわたる領域での課題を取り上げ、科学技術がもたらす影響と責任について検討する。講義を通じて、学生は科学技術が人類や地球に与える影響を総合的に理解し、技術の進展に対する責任と倫理的な判断力を養うことを目指す。現代社会において技術の正しい利用と発展を考える力を培うことが重要なテーマとなる。	
	宗教と社会		本講義では、「宗教」を単なる抽象的な信念体系として扱うのではなく、社会システムとの関係性において具体的に検討することを目的とする。宗教がどのように歴史的に形成され、現代社会においてどのような文化的意味を持つのかを考察するため、社会学や文化人類学の最新の成果を活用しながら分析を行う。講義では、宗教が個々の社会や文化に与える影響を理解するために、いくつかの具体的な地域や社会に焦点を当て、実際の事例を通じてその影響力と役割を深く掘り下げる。これにより、宗教が社会システムとどのように相互作用し、どのような文化的価値や社会的機能を持つのかを具体的に把握し、宗教が現代社会に与える影響についての理解を深めることができる。	
	メンタルヘルス		本講義では、メンタルヘルスについて多角的に取り上げ、理論と実践の両面からアプローチする。まず、ストレスやその他のメンタルヘルスに関連する基本的な知識を身につけることを目指すが、それだけに留まらず、受講者自身の心理的特性や自分が抱える問題への心理的なアプローチを深く理解することも重要なテーマとなる。具体的には、自己理解を深めるために、自分の心理的特性やストレスに対する反応、心理的構えを把握し、自己認識を高めることを重視する。さらに、ストレスへの対処法についても実習的に学び、実際の場面で役立つスキルやテクニックを習得する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	(留) 日本の文化・地理・歴史		本講義では、人文科学的視点から日本についての理解を深めることを目指す。具体的には、日本の文物や思想を通じて、日本文化に関する多角的な知識を習得することに重点を置く。例えば、古代から現代に至るまでの日本の文化遺産や思想体系を掘り下げ、その形成過程と社会的影響を探る。また、世界における日本という視点から、日本の地理やその地理的特性が日本文化や社会に与える影響について学ぶ。地理的背景がどのように日本の文化や社会構造に反映されているのかを理解し、日本の位置づけを国際的に考察する。	
	メディアと図書館		図書館は紀元前から現代に至るまでの長い歴史の中で、常に「知の宝庫」として、人々が歴史をたどり、新たなものを生み出すために必要な情報を提供してきた。この長い歴史の中で、図書館が収蔵する資料にも変化が見られ、図書・雑誌といった印刷資料だけでなく、レコード、CD、フィルムから電子書籍などに広がってきている。さらに図書館が収蔵資料を電子化し、Webで公開する取組も進められている。知の宝庫としての役割を果たすべく、時代に応じてその内容を充実させているのである。このような図書館の変化により、海外の一次資料を容易に閲覧することができるなど、私たちの学びの環境も大きく変わってきている。この講義では、図書館の歴史をたどりながら、その役割、機能、重要性について学び、大学の学びにおける図書館の活用について考えることを通して、アカデミックリテラシーを身に付けることを目指す。	
	社会学入門		社会学は、知識の形態や手法としては抽象的な理論から社会調査まで、研究分野としては世界社会論から生活世界論そしてアイデンティティ論まで、社会科学の中でも特に多様かつ広範な批判的社会分析に取り組む学問である。しかし、多様な手法や分野はみなく社会学的想像力>という根本的な発想を共有し、源泉としている。本科目では、いくつかの具体的テーマや理論に即して、<社会学的想像力>の意義と面白さを知る機会とする。	
	文化人類学入門		文化人類学は、フィールドワークを通じて世界各地の多様な人間集団の文化を詳細に研究し、その多様性と共通性を理解することで、人間のあり方や社会の仕組みを深く考察する学問である。本科目では、文化人類学の基礎知識として代表的な研究事例や理論を学ぶとともに、フィールドワークの手法や倫理についても理解を深める。また、身近な事例に関連するカルチャーギャップの事例を通じて、自らの文化を相対化し、多様な視点から物事を捉える力を養う。一つの見方に拘泥せず、異なる文化や価値観を理解し、柔軟に対応する能力を身につけることを目指す。	
	文学と社会		本講義では、文学作品がどのように人間の内面の葛藤を社会のさまざまな断面や現象を踏まえて描き出しているのかを探究することを目的とする。授業の中心は、実際の文学作品の鑑賞にあり、作品を深く読み解くことによって、作者が生きた時代社会の影響を分析し、作品とその背景との有機的関係を解明する。具体的には、作者の生涯や社会的背景、歴史的文脈がどのように作品に反映されているのか、また作品がどのようにその時代の社会現象や文化的な価値観を映し出しているのかを考察する。学生は、文学作品を通じて人間の内面的な葛藤や社会的な問題を理解し、作品とその時代、作者との関係性を明らかにすることで、文学が持つ多層的な意味を深く把握する力を養うことができる。	
	現代の教育		本講義では、時間軸および空間軸における教育比較や人間観の比較を通じて、現代教育や現代人の生き方に含まれる問題点を分析することを目的とする。具体的には、歴史的な教育制度や異なる地域における教育の在り方を比較し、それがどのように人間観や教育理念に影響を与えてきたかを考察する。また、現代の教育や人間の生き方における課題を掘り下げ、教育や人間像の望ましい方向性についても検討する。講義では、現代の教育的動向や社会的変化を視野に入れながら、教育が直面する問題点を俯瞰し、それに対する解決策や新たな教育モデルを考える。	
	世界の言語と文化		本講義では、初修外国語を学びながら、その言語圏の特徴、歴史、文化、社会についても深く理解することを目的とする。講義を通じて、現代のグローバル社会において必要とされる異文化理解力や多文化共生のための視点を養うことに重点を置く。また、言語が人間社会において果たす役割についても考察を深め、言語と文化、社会との相互作用を探究する。さらに、多文化共生に向けた視点を育むために、異なる文化との接触や比較を通じて、グローバルな視点での理解を促進する。	
	世界と日本の食文化		本講義では、中国、東南アジア、インド、ヨーロッパ、北米、アフリカ、中東、そして日本を中心に、世界各国および各地域の食文化を広範に取り上げる。具体的には、食の特徴や食事情、食の変遷、食文化の歴史的背景、そして食関連産業の事例を紹介しながら、食文化の多様性を具体的に理解することを目指す。各地域の伝統的な食習慣から現代の食文化の変化までを考察し、地域ごとの食材や調理法、食事の習慣や文化的意義について深く掘り下げる。また、食関連産業の発展や国際的な食の交流も取り上げ、食がどのようにグローバル化や地域化の影響を受けているのかを探る。	
	観光学		現在のグローバル社会にあって世界中で10億人を超える人々が観光に出かけ、様々な場所に「移動」している。その意味で、我々が生きる社会は、まさに「ツーリストティックな社会」と言える。それゆえ観光は、現代において社会・文化のあり方に大きなインパクトを与えるようになっている。以上のことを理解するには、地理学、社会学、文化人類学、経済学、経営学、政治学、心理学等、多様な学問分野をふまえて洞察を加えていく必要がある。そこで本科目では、多様な学術的視点を横断し観光を考察しながら、観光が現代社会に対して有する意味・意義・問題点を自らの力で思考できるようになることを目指す。	
	京都学		本講義では、歴史と文化の中心である「京都」についての基礎的知識を習得しながら、歴史、地理、文学の各側面から学際的にアプローチすることを旨とする。京都の歴史的背景、地理的特徴、文学作品における描写などを総合的に考察し、その個性や地域性を深く理解する。各講師の専門分野の立場から講義を行い、京都の多面的な魅力や独自性を浮き彫りにすることで、学生は京都に対する深い理解を得ることができる。講義を通じて、京都が持つ歴史的、地理的、文化的な価値を総合的に学び、その地域性と個性を多角的に把握する力を養う。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	(留) 日本語学		本講義では、現代日本語を理解するために必要な言語学の知識を体系的に身につけることを目指す。言語学の基本的な考え方や分析方法を学び、言語の構造や機能について深く理解する。講義では、日本語の音韻、形態、文法、意味論などの基本的な側面を取り上げ、その特徴を詳細に分析する。また、他言語との比較を行うことで、日本語の特質をより明確に把握する。学生は、現代日本語の構造や使われ方についての知識を深めるとともに、言語学的な視点から日本語を捉える力を養うことができる。	
	美と芸術の論理		現代において、美や芸術はまず感性的なものとして捉えられるが、それらを学問的に論理的に考察・議論するためには、どのようなアプローチが可能であろうか。この科目では、美学や美術史学の方法論を習得することを出発点とし、様々な芸術作品を取り上げる。作品の分析方法や、芸術をめぐる社会的な問題などを探求し、視野を拡大しながら、美と芸術への理解を深めることを目指す。これにより、芸術を感性的な側面だけでなく、理論的・批判的な視点からも捉える力を養い、現代社会における芸術の意義や役割について深く考察する機会を提供する。	
	音楽原論		本科目は、西洋古典音楽やポピュラー音楽に限らず、古今東西の様々な音楽を考察対象とする。まず、様々な音や音楽に触れつつ、その芸術としての枠組みや意義の理論づけられた過程、およびその背景について概説した上で、幾つかの音楽作品に焦点をあて、その意義や魅力を分析するための学術的理論について、ICTも活用し、受講生自身による鑑賞と分析実践を交えつつ講義する。また、他の芸術との関連性や、現代社会における音楽のあり方についても触れることで、俯瞰的もしくは冷静に批判できる立場の獲得も目指す。	
	映像と表現		本講義では、映像文化の諸相を探索するために、以下の三つの軸を中心に進める。第一に、映像の原点を考察し、映像表現の起源とその歴史的背景を探索。第二に、映像と表現の方法について、どのように映像が表現手段として用いられてきたのか、さまざまな技術やスタイルを検討する。第三に、映像と社会の関係を掘り下げ、映像がどのように社会的・文化的な影響を与え、また受けてきたのかを考察する。また、映像に関する知識とその思考法は、専門を問わず様々な学問分野においても基礎となるものであるため、その重要性を強調し、学生に映像に関連する基本的な知識と分析的なアプローチを提示する。	
	映像メディア実践入門		この講義は、基本的な映像制作へと向けた実践的な作業をつうじて、グループごとに問題の設定と解決、そのプロセスの発表へといったプロジェクト型の授業である。 そのために全15回の授業は、基本的な事例から始まる前半部分と、実践的な作業を中心とした後半部分に分かれる。まず授業の前半部分では、映像の基本的な特性を学習し、関連する特定の課題のもとに、グループごとの問題設定や解決方法を明確化する。後半では、実際にグループごとに企画立案から映像制作（ストップモーションなど）を行ない、その成果の中間報告や最終発表を各自が役割分担しながら進めていく。 これらの作業をつうじて、身の回りの映像メディアが私たちにどのような効果をもたらしているのかを体感すること、さらにグループ内で適切な役割分担をしながら、特定の課題に対する解決までのプロセスを各自が能動的に実行することを目指す。	
	文芸創作論		文芸作品は、様々なジャンル(小説、随筆、評論、詩、短歌、俳句など)が存在し、それぞれ多様な表現形式を有している。こうした言語表現や方法に着目し、文芸に於けるジャンルの意味、表現(style)と内容(idea)の関係性について分析・考察する。また、文芸作品は作者と読者の三者の関係で成り立っている。この三者の有機的な関係性に着目し、作品の主題、作者の意図、読者の感動、それぞれの意味や特質、有機的な関係性を解き明かしたい。 その際作品の読者という立場だけでなく、実際に小説(ショートショート)を書いたり、詩、短歌や俳句を詠んで、創作者の側に立つことを視野に入れて考察する。	
	国の行政組織		人事院のコーディネートにより、中央省庁から実務に携わる中堅幹部行政官をゲストに招き、今日の行政課題やそれに対応するための政策、各府省庁が果たしている役割について講義いただく。継続して受講することにより、中央省庁のしくみや仕事、自治体や国際社会との関係を総合的に理解し、将来、そうした諸問題や公共政策に直接間接に携わり得ることを展望しつつ、大学で何をどのような問題意識から学ぶことが重要であるかを学生自身が考えるための見識を涵養する。	
	現代社会と法		この科目は、現代社会における法的問題および国際的な権利・義務の問題を深く理解することを目的とする。日々発生する多様な法的問題や、国際情勢の変化により増加する国際的な個人の権利・義務に関する問題を考察する。身近に接する法的問題を理解し、自らの見解を形成する力を身につけることを目指す。その過程で、法的問題を分析し、解決策を検討する能力を養う。さらに、国内外の法的問題に対する理解を深め、グローバルな視点での法的思考を培う。本科目を通じて、現代社会の複雑な法的課題に対応できる知識と技能を獲得し、将来の社会に貢献できる法的素養を身につける。	
	経済と社会		本講義は、現代社会を構成する経済活動の基礎を理解し、その分析に必要な視点とスキルを養うことを目的としている。初めに、経済学の基礎理論を学び、経済活動を評価するための基礎的な枠組みを理解する。この理論的基盤の上に、経済社会を歴史的に発展し変化するシステムとして捉える方法を身につける。その後、現代経済における国内経済問題や国際経済問題について具体的に整理し、これらの問題に対する理解を深める。講義を通じて、経済理論を実践的に応用し、現実の経済問題を分析する能力を育むことを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	企業と社会		資本主義社会において、企業は自由な経済活動を介して利潤を得ようとする。その行為自体は非難されるべきことではない。むしろ、それによって、経済活動の質が高められ、今まで以上の付加価値が生み出され、社会生活の豊かさが享受されることにつながる。しかしながら、自由のみを前面に押し出して企業活動を展開していくことで、社会的な公正、正義が損なわれることも少なくはない。昨今、多国籍化しない企業はないといえるほど、企業活動はグローバル化している。と同時に、企業の側にも、経済活動がもたらす負の側面を是正しようとする動きがある。加えて、これらの動きに呼応するかのように、社会的にも「企業の倫理観」や「企業の社会的責任」という用語に関心が集まりつつある。 以上のことより、本講義では、企業という閉じた領域の中での経済活動が、その領域を超えてわれわれの社会に及ぼす影響を、『企業と社会』という枠組みの中で、正の側面のみならず負の側面をも交えて、俯瞰的に、かつ、歴史的に考察していくこととする。	
	現代日本の政治		この科目は、現代日本政治の構造と問題を理解し、その日本の特徴を探ることを目的としている。日本の政治について基礎的な知識と分析視点を養うため、講義では以下のテーマを取り上げる。まず、日本政治の全体的な構造を概観し、次に選挙制度、政党システム、行政官僚制、利益集団、地方自治、市民参加などの制度や活動の実態を詳しく検討する。また、関連する政治学の諸理論、政治文化、国際比較、そして日本の近現代政治史についても扱うことがある。	
	現代の国際関係と日本		本講義は、世界における紛争や戦争の原因を探り、グローバリゼーションが進展する中で深刻化する飢餓、貧困、環境破壊といった諸問題を理解することを目的としている。まず、現代の国際関係の構造とその動態について分析し、国際的な問題の背景や展開を詳しく考察する。次に、これらの理解を基に、現代の国際関係が抱える問題に対して主体的に関わるために必要な想像力、発想力、構想力を養成する。具体的には、国際問題の解決に向けた戦略やアプローチを模索し、複雑な問題に対処するための能力を育むことを目指す。	
	日本経済概説		この科目は、第2次世界大戦後の日本経済を中心に、その歴史的な発展プロセスを詳細に整理し、日本経済の変化に関する重要な問題に解説を加えることを目的とする。戦後の経済成長、バブル経済の崩壊、デフレーションの時代など、日本経済の主要な歴史的変遷とその背景に関する知識を提供する。また、現代の日本経済が直面している主要な課題、例えば、少子高齢化、労働市場の変化、経済政策の影響などについても考察し、これらの問題に対する見通しを示すことを目指す。講義においては、経済学の基本的な入門部分も説明し、その後、具体的な経済問題については、開講学部特性に応じて取捨選択し、重点的に扱う。このようにして、日本経済の全体像とその未来に関する理解を深めることを目指す。	
	現代の世界経済		国際分業の理論として、リカードの比較生産費説は、絶対的に生産性水準の低い国でも比較優位部門が存在し輸出可能であると解いた。この、基本的理論ベースの上に、IMF-GATT体制およびその崩壊後のWTOによる戦後の自由貿易推進過程が存在する。しかしながら、この過程は同時に不均衡拡大過程でもあった。それは、貿易摩擦問題、オイル・ショックと債務危機問題、多国籍企業の直接投資と新興工業国の台頭、アメリカの双子の赤字問題と基軸通貨問題、通貨危機の発生、そして国際環境問題などの形態をとって現れている。このように、現在の世界経済を概観するとともに、経済統計や制度・政策等を参照・比較しつつ世界経済の現状を理解する基本的な視点を学ぶ。	
	現代の経営		本講義は、企業における「現代の経営の仕組み」とそれを取りまく「社会・経済」についての基礎的な知識を獲得すること、それを通じて今日、「現代の経営」に社会的・経済的に何が求められているのか学ぶことを主たる目的とする。このため、講義では基礎的な知識の理解に加え、企業のマネジメントのあるべき姿を考察することが求められる。この講義では、知識をつみあげるだけでなく、実際の「現代の経営」について具体的なイメージをもてるように企業の実践事例を取り入れつつ、経営学の理論学習にはいるように工夫されている。	
	社会と福祉		本講義では、社会福祉の歴史的展開をたどりながら、人間らしく生活するための基本的な理解を深めることを目的とする。まず、社会福祉の起源や発展過程を歴史的に検証し、社会福祉制度の成り立ちや変遷を理解する。また、現代における社会福祉の意義や直面している問題について考察し、その実態や課題を掘り下げる。加えて、国際比較の視点から福祉制度の先進的な取り組みを認識し、世界のさまざまな福祉制度とその成果、または課題を比較することにより、より広い視野で社会福祉の可能性を探る。講義を通じて、学生は社会福祉の歴史的背景と現代的課題を理解し、今後の福祉社会における展望や可能性を考察する能力を養う。	
	ソーシャルデザイン論		日本の地域社会は多くの課題を抱えている。そこでの解決策（ロールモデル）を提示することは、これからの日本の目指すべき道を示す事にも繋がる。これまで様々な主体によって数多くの対策が講じられてきた。彼らはどのように課題を乗り越えてきたのか、そこには多くの視座・視点がかくされている。 そこで、本授業はインプットとアウトプットの2つの特徴を持つ。まずインプットとして、困難かつ複雑な地域社会の課題に対する解決策の事例を理解する。次にアウトプットとして、これまで学習してきた内容を踏まえてワークショップ（グループワーク）を実施する。最終的には、地域社会の課題解決に関するソーシャルデザイナーのコンビテンシーを理解する。	
	(留) 日本の社会・政治		この科目は、日本に対する理解を深めることを目的とし、日本の社会と政治の現状を多角的に学ぶものである。まず、日本社会と日本人・日本文化の歴史的形成や背景、特質について学び、その基盤となる要素を探索する。次に、日本の政治制度や政治意識、政治行動を広い視野で考察し、現代日本の政治のダイナミクスを理解する。これにより、日本の社会と政治の基本的な事項を把握し、現代の日本社会と政治が直面する諸問題を国際比較およびグローバルな視点から考察する力を養うことを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	(留) 日本の経済・経営		本講義では、日本の現状について経済学的視点から深く学ぶことを目的とする。日本経済の歴史的展開を踏まえ、現在の日本経済が直面する諸問題について考察する。日本の経済成長の過程やバブル経済の崩壊、景気回復の取り組みなどを歴史的に学び、少子高齢化、労働市場の変化、国際競争力の低下といった現代の経済課題をどう捉え、対処しているのかを探る。また、日本企業経営の歴史的な展開と日本的経営の特徴を学ぶことで、現代の企業経営についても考察する。戦後の急成長期からバブル経済期、そしてグローバル化やデジタル化の進展に至るまで、日本企業がどのように経営戦略や組織文化を適応させてきたのかを分析し、現代の企業経営における課題や展望についても議論する。	
	エアースタディ入門		この科目は、エアースタディ（地域研究）の手法を用いて特定の地域を学際的に解析することを目的としている。学生は、地域の自然環境、歴史的背景、社会文化、政治経済などの複数の側面からその地域を総合的に理解することが求められる。具体的には、地域の地理的特性や歴史的経緯、社会的な構造や文化的な習慣、そして政治的・経済的な状況を幅広く学び、地域の特性や問題点を深く掘り下げる。このプロセスを通じて、地域に関する総合的な知識を得るとともに、グローバルな視点での理解を深めることを目指す。	
	新しい日本史像		一国史としての日本史は現在大きな転換点を迎えている。自国のための閉じた歴史叙述ではなく、広く世界・アジアの人びとと対話できる日本史像が求められている。授業では、そのような日本史像の一端を紹介し、広く人文科学・社会科学などを歴史的観点から捉える力を養っていく。また、日常生活には、これまでの歴史が集積している。それらを解きほぐし、自らの歴史的位相を確認して、現代社会の問題点について考えていきたい。このほか、最近の日本史に関する新研究についても紹介する。	
	中国の国家と社会		1912年までの中国は、Imperial China（中華帝国）と呼ばれた。「帝国」には、皇帝・官僚による専制支配及び多民族国家という属性があるが、これは全く過去の遺物の話ではなく、現在にも通じる構造である。また、俗に「帝国」と称される国家も中国一国ではない。しかし、中国は、過去との連続性において際違った「国」「地域」である。受講生はこうしたユニークな隣国を、「帝国」の発生に遡って理解することを目的とする。	
	東アジアと朝鮮半島		日本海(朝鮮語では東海)を囲む東アジア地域(朝鮮半島、台湾をふくむ中国、日本、ロシア極東)は、旧時代の遺物ともいえる冷戦的思考様式や政策がいまなお息づく世界である。朝鮮半島には、なぜ、韓国(大韓民国)と北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)という二つの国家が存在するのか。北朝鮮と日本は、なぜ、いまだに国交すらないのか。韓国や中国は、なぜ、ことあるごとに日本の歴史認識を問うのか。東アジアの地域協力や地域統合はなぜすすまないのか。東アジア世界をとりまくこうした問題群は、単にこの地域の“現在”についての平面的な解説ではすまされない論点を含んでいる。それらの点をふまえ、この講義では朝鮮半島を中心に、今日の東アジア世界がかかえる問題をその起原(日本の植民地支配やアジア侵略、さらには第二次大戦後の朝鮮半島に対する米ソの分割占領)にまでさかのぼって解説し、受講生の皆さんが今後の東アジア世界の平和と繁栄を考え、議論するうえでの素材としたい。	
	ヨーロッパの歴史		今日、EU統合を成し遂げたヨーロッパはグローバリゼーションの中で新たな歴史的局面を迎えている。古代ローマ帝国の解体後、ユーラシア大陸の西の片隅に徐々に形成されたヨーロッパは際立った特徴を持った圏域を形成した。きわめて多様な過去と伝統を持つ諸民族集団が交渉と融合を繰り返しながらいかにして共通の文明を形成したのか。また、世界史上稀に見る拡大のダイナミズムの秘密はどこにあるのか。こうした問いをめぐって主体的に歴史を考えたい。	
	アメリカの社会と文化		アメリカ合衆国は幕末から現代まで日本にとって最も重要な国であり続けた。日米は高度に発達した資本主義社会として多くの共通点を持つが、異質な点も多い。本科目は、多様な人種・民族の共存と摩擦、民主主義の理念と帝国主義、連邦政府と地方自治など、アメリカの社会と文化に関わるさまざまなトピックを取り上げる。それらに触れながら受講生がアメリカ合衆国の現実を理解し、自分の頭でアメリカや日本を考えていくことができるようになること目的とする。	
	イスラーム世界の多様性		「イスラーム」が「悪者」の代名詞のように語られている今日、誤った認識と偏った報道の真相を明らかにする。本講義では、イスラームの本来の教え、歴史、思想について深く理解し、今日のイスラーム世界の広がりや多様性についても考察する。具体的には、イスラームがどのような信仰体系を持ち、信徒がどのような価値観や生活を送っているのかを探求し、世界人口の五分の一を占め、信徒が増加し続けるイスラームの実態を把握する。さらに、欧米中心の「近代社会」における問題点を明らかにし、イスラームが現代社会にどのように影響を与えているのかを考える。	
	科学的な見方・考え方		本講義では、科学的な観方・考え方を担当者独自の切り口で講義し、学生が将来、どのような自然科学や技術のバリエーションに遭遇しても自信を持って対処できるようにすることを目指す。科学の理解を深めるためには、単なる知識の習得にとどまらず、問題解決のための基礎的な力を育むことが重要である。講義では、科学的な思考法や分析方法を具体的な事例を通じて学び、実践的なスキルを身につける。学生が直面する可能性のある複雑な自然現象や技術的な課題に対して、単なる直感や曖昧な判断に頼ることなく、自分で考え、理解し、解決するための能力を養うことを重視する。	

授業科目の概要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
教養科目	宇宙科学		本講義では、宇宙の広がりや歴史、そして天文学的な数の星々を通じて、宇宙がどのように理解されてきたかを探求する。宇宙のスケールは、百数十億光年にわたり、百数十億年の歴史を持ち、数千億個の銀河とその中の数千億個の恒星が存在する。この膨大な規模の中で、宇宙の構造や進化がどのように認識されてきたかを学ぶことが本講義の主旨である。また、地球がこの広大な宇宙の中でどのように位置づけられるかを、ミクロとマクロの現代科学的視点から考察する。地球は大気や水、生命を持つ特異な天体であり、これらの要素が宇宙全体とどのように関わっているのかを探索。地球の存在が宇宙のスケールと歴史の中でどのような意味を持つのか、また、私たちの理解がどのように進化してきたのかを、現代の科学的知見に基づいて深く考える。	
	地球科学		本講義では、生命、水、大気、大地が相互に影響し合いながら、46億年という長い時間をかけて地球がどのように変化してきたのかを探索。これらの要素のダイナミクスと相互作用を現代科学的視点から考察し、地球環境の形成と変化の過程を理解する。特に、水、大気、大地がどのように地球の環境を変えてきたのかを学ぶことで、日常的に経験する複雑な自然現象が実は単純な自然法則に基づいていることが明らかになる。これにより、自然現象の根本的な原理を把握し、地球科学の基本的なメカニズムに対する理解を深めることができる。	
	生命科学（分子と生命）		生物個体から生物を構成する中身（分子）に関する項目を学習する。「そもそも生物とは？」という問から始まり、生物のからだのつくりを考える。具体的には、生物個体（動物や植物自身）から出発して、その内部構造（細胞や遺伝子）へと展開する生命科学の基盤となる内容である。引き続き、生物・生命のもう一つの特性である「増殖と遺伝」や「代謝」について解説を進める。そして、応用編として「人間と医療」に関わる諸課題について考察していく。	
	生命科学（生物と生態系）		本講義では、生物個体から視野を広げて生態系全体に関する学習を行う。初めに、生物個体の基本的な理解から始め、生命の誕生と進化の過程を追い、次に生物集団の構造や相互作用を探索する。その後、生態系のダイナミクスや地球上の生物多様性について詳しく展開し、各生物がどのように環境と相互作用しているのかを学ぶ。最終的には、応用編として地球環境と生物の関わりについて、さまざまな角度から考察し、現代の環境問題や持続可能な生態系の維持に向けた理解を深める。講義を通じて、生物学的な視点から地球環境への洞察を得ることができる。	
	材料と化学		現代生活を支えるさまざまな材料について、「化学」の視点からその構造と機能を学ぶ。この講義では、我々の身の回りに存在する天然物質や人工的に創り出された物質が、どのように材料として利用されているかを探索する。具体的には、代表的な材料がどのような原子や分子から構成され、なぜその材料として特定の機能や特徴を持つのかを解説する。原子・分子のレベルからの詳細な分析を通じて、これらの材料がどのようにして我々の生活を支えているのか、その化学的なメカニズムを理解することが目的である。	
	現代環境論		本講義では、現代の公害や環境問題に関する主要なテーマを取り上げ、汚染と被害の実態を概説する。具体的には、自然科学と社会科学の両面から、環境問題の原因や発生メカニズム、影響を深く考察する。現代社会や人間活動と関連づけて、どのようにしてこれらの問題が発生し、どのような影響を及ぼしているのかを理解することが目的である。さらに、市民、企業、行政それぞれの役割と、環境問題克服に向けた課題について具体的な対策や協力の方法を検討する。	
	科学と技術の歴史		本講義では、自然科学の成立と発展、そして技術の発達をそれぞれ区分して学び、それらの系統的な進展を通史的に探求する。自然科学と技術のそれぞれの歴史的背景と発展を明確にし、特に産業革命以降における科学と技術の相互作用について詳しく考察する。産業革命の進展により、科学的発見が技術革新を促進し、その技術の進歩がさらに科学の発展を支えるという相互作用がどのように進んできたかを追い、その現代的、社会的な展開についても明らかにする。	
	生命科学と倫理		20世紀後半における生命科学の飛躍的発展と先端医療技術の普及は、従来の人間観や倫理観、そして社会的慣習に大きな影響を及ぼしてきた。これにより、生命技術が環境との関係に新たな問題を提起し、文化的、社会的、法的な軋轢を引き起こす中で、生命倫理という新たな問題領域が生まれ、さまざまな議論や実践が行われてきた。本講義では、これらの蓄積された知見を学び、生命倫理の基本的な問題を理解することを目的とする。特に、「生・老・病・死」の変容と、それに伴う生命技術と社会の関係についての考察を深めることで、生命科学の進展がもたらす倫理的な課題や社会的影響を広く理解する力を養う。	
	近現代の科学技術		本講義では、数学、自然科学、および工学の発展の歴史を、世界史および日本史と対比しながら講義する。科学技術がどのように発見され、確立されてきたのかを多角的に解説し、その過程を追うことで、学生にその背景を深く理解させることを目指す。さらに、歴史的な進展を踏まえ、現在の科学技術の現状と今後の展望について考えるための基礎的知識を提供する。講義を通じて、科学技術の歴史的な文脈を理解し、現在の技術がどのように形成され、未来に向けてどのように進展していくのかを学ぶ。	
	(留) 日本の自然・科学技術		本講義では、自然科学のトピックを通じて日本に対する理解を深めることを目的とする。具体的には、日本の自然環境に関する科学的アプローチを採用し、地形、気候、生態系など、日本の自然がどのように形成され、またそれがどのように変化してきたのかを詳しく探求する。加えて、日本で展開される自然科学の研究や科学技術の研究に関する最新の知見を紹介し、これらの研究が日本の自然環境や社会に与える影響についても考察する。日本の自然環境の特徴やそれに対する科学的理解を深めるとともに、日本における科学技術の進展とその成果が社会にどのように貢献しているかを把握することで、より広い視点から日本の自然と科学技術を理解することができる。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	数理の世界		この講義では、数、図形、確率など多様な数学的対象を通じて、数学的な考え方や見方を学ぶことを目的とする。歴史的発展を追いながら、数学の基本概念である「定義」と「証明」の考え方に焦点を当て、これらの概念がどのようにさまざまな数学的対象に応用されてきたのかを探究する。特に、数学がどのようにして理論を構築し、証明を通じて真理を追求してきたのかを学ぶことで、数学という学問の力とそのディシプリン（規律）を理解する。また、数学の学習を通じて抽象化の能力や論理的思考力を高めることも重要な目的である。数学的な問題を解決する過程で、抽象的な概念を扱う能力や論理的な推論のスキルが養われるため、これらの能力の訓練の場としても位置づけられる。	
	情報の数理		コンピュータやインターネットが社会の中心で重要な役割を果たすようになった現代において、「情報」を科学的、数学的に捉え、その理論を研究し、応用を考えることの重要性が増している。この科目では、専門的になり過ぎることなく、「情報」をいかに定量的に捉え、理論的に定義するか、それを用いてどのような性質が導かれ、現実世界への応用がされるかを解説する。特に、シャノンの情報理論、通信、計算量、暗号、など、いくつかのテーマを選んで講義する。	
	情報科学		本講義では、情報処理の機械化に関する基本的な知識を提供し、情報の表現方法や処理手法を通じてコンピュータのメカニズムを理解することを目指す。コンピュータがどのように情報を処理し、データを操作するかを学ぶことで、計算機が持つ情報処理能力についての理解を深める。また、コンピュータの情報処理能力と人間の情報処理能力を比較し、人間の限界についても考察する。加えて、情報の曖昧さを尺度として捉えるエントロピーの概念や、データサイエンスの基礎となる統計分析および機械学習の基本的な手法についても学習する。これにより、情報を科学的に扱い、理解するための方法論を習得し、現代のデータ駆動型社会における情報処理の重要性とその応用についての視点を得ることができる。	
	情報技術と社会		社会は急速に情報化社会へと移行しており、これまでの大量生産による効率向上を追求する社会から、個性化と情報化を重視する社会へと変わりつつある。この講義では、情報化社会を支える情報技術の基礎について学ぶとともに、これらの技術がどのように人々の社会生活を変えているのかを具体的な例を交えて考察する。情報技術が日常生活やビジネス、コミュニケーションのあり方をどのように革新しているのか、またその影響が社会構造や個人のライフスタイルにどのような変化をもたらしているのかを探索することで、情報化社会の現状と将来の展望について理解を深める。	
	統計学		統計学は、集団現象に関するデータを収集し、その集団の特質をデータに基づいて記述・推測する方法を基本として発展してきた科学であり、自然科学から人文科学、社会科学に至るまで、広範な数量的分析に利用されている。この講義では、初めて統計学を学ぶ学生を対象に、統計学の基礎的な手法を中心に学ぶことを目的としている。具体的には、データ収集や記述統計、推測統計などの基本的な考え方と計算方法を習得し、それを実際のデータに応用する力を養う。講義を通じて、統計学の基本的な手法を理解し、計算力を身につけることで、人文・社会科学分野におけるデータ解析能力を高めることを目指す。また、統計学の基礎を理解することで、データに基づくより良い意思決定や問題解決が可能になることを目指している。	
	データサイエンス・AI基礎		データサイエンスは、数学、統計学、情報学を基礎とし、これらの専門知識を融合させてデータから新しい価値を創出する学問である。本講義では、データサイエンスにおける基盤技術であるAI（人工知能）や機械学習についての基礎知識を習得する。これらの技術がどのようにデータ分析に役立ち、社会の様々な課題を解決するための有用なツールとなるかを学ぶことで、学生はデータサイエンスの実践的な側面とその社会的意義について理解を深めることができる。特に、AIと機械学習の基本的な原理や応用方法を学び、これらの技術がどのようにデータ解析や問題解決に寄与するかを具体的な例を通じて考察する。	
	データエンジニアリング基礎		データを活用して新たな知見を発見するためには、データを適切に扱い、運用するスキルが不可欠である。本講義では、プログラミングと数学の基礎的な概念を学びながら、演習を通じて実践的なスキルを身につける。データの取り扱いや分析手法の適用方法について学び、データサイエンスのプロセスを実際に体験することで、理論だけでなく実践的な知識を得ることを目指す。演習部分では、データの収集、前処理、分析、可視化といった各ステップにおいて必要な技術や手法を習得し、実際のデータを用いて問題解決に取り組む。	
	Liberal Arts Seminar		本科目は、それぞれの担当教員が持つ専門分野を引き金として、履修者の関心や専攻に応じたりサーチ、ディスカッション、プレゼンテーションを行う小集団授業である。授業は日本語以外のターゲット言語で実施され、単に知識を深めるだけでなく、多様な背景を持つ学生同士の交流を通じて学びを深めることができる。異なる視点や文化的背景を持つ他の受講者との対話を通じて、視野を広げ、柔軟な思考を養うとともに、実践的な言語運用能力も向上させる。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Introduction to Law		This course is designed as an introduction to the essentials of law and legal systems. It aims to provide insight into the nature and function of law and familiarize students with key concepts, institutions and processes in various fields of law, such as constitutional law, criminal law, procedural law, property law, contracts and torts. The course seeks to place law in its social, economic, political, historical and philosophical context and thus not only to provide students with a knowledge of legal institutions but also to help them to develop a critical understanding of the operation of those institutions in society. The teaching of the course will take the form of formal lecturing and class discussions. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースは、法と法体系のエッセンスを学ぶ入門コースである。法の本質と機能について洞察し、憲法、刑法、手続法、財産法、契約、不法行為など、法の様々な分野における重要な概念、制度、プロセスに慣れ親しむことを目的としている。このコースでは、法律を社会的、経済的、政治的、歴史的、哲学的な文脈の中に位置づけ、学生に法制度の知識を提供するだけでなく、社会におけるこれらの制度の運用について批判的な理解を深めることを目指す。授業は、正式な講義とクラスでのディスカッションの形で行われる。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方またはいずれか一方を行う。	
	Modern World History		This course aims to provide essential historical knowledge of the world for the last 200 years. The period is usually called modern era. The modern era was more or less established by the end of Napoleonic wars in Europe and later spread to the rest of the world. Major characteristics of the modern era will be explained especially in comparison to the medieval era. The course will also trace the evolution and challenges of the modern era. Major ideologies of the modern era such as nationalism, capitalism, democracy, Marxism, and fascism will be described. The causes and effects of major wars and economic depressions will also be discussed. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースは、過去200年間の世界に関する本質的な歴史的知識を習得することを目的としている。この期間は通常、近代と呼ばれる。近代は、ヨーロッパにおけるナポレオン戦争の終結によって多かれ少なかれ確立され、その後、世界中に広まった。特に中世との比較において、近代の主な特徴を説明する。また、近代の進化と課題を追跡する。ナショナリズム、資本主義、民主主義、マルクス主義、ファシズムなど、近代の主要なイデオロギーについて説明する。主要な戦争や経済恐慌の原因と影響についても議論する。本講義では、形成的評価と総括的評価の両方またはどちらかを用いる。	
	Japan and the West		The aim of the course is to introduce students to some of the most significant historical and cultural issues and concepts in the complex relationship between Japan and 'the West'. This course aims to challenge students to question taken for granted essentialized binary opposition between Japan and The West and to understand the nature of complex and mutually constitutive relationship between the two. This course uses academic texts, case studies, and visual aids to facilitate students understanding and engagement. This course enables students to engage in theoretically and historical debate about the relationship between Japan and the West. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースの目的は、日本と「西洋」の複雑な関係における最も重要な歴史的・文化的問題や概念を学生に紹介することである。このコースの目的は、日本と西洋の間の本質的な二項対立に疑問を投げかけ、両者の複雑で相互に構成的な関係の本質を理解することにある。このコースでは、学術的なテキスト、ケーススタディ、視覚的な教材を使用し、学生の理解を促進する。このコースでは、日本と西洋の関係について、理論的、歴史的な議論に参加することができる。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方を行う。	
	Introduction to Economics		本科目は、グローバル化時代における経済学の基礎を学ぶ授業である。学生は経済学の基本的な概念を理解し、経済理論や実務の基礎を習得することを目指す。授業では、経済学の主要な理論や分析手法を学び、それを国際的な視点から適用する力を養う。また、実際の経済問題に対する理論の応用を通じて、問題解決能力を高めることも重視される。学生は経済学の知識を深めるだけでなく、多様な経済的背景を持つ人々とのコミュニケーション能力を培い、確かな人間観と世界観を構築することが求められる。これにより、国際的な視点から経済学を理解し、実社会での応用力を身につけることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Introduction to Linguistics		This course introduces students to the study of language. The course provides students with a comprehensive understanding about contemporary linguistics through subjects such as the origin and properties of language, the differences and similarities between animal and human communication, the properties of grammar, the types of language acquisition, as well as the relationship between language and culture. By giving ample examples from various languages, the centric focus of the course is on how reality is perceived and reflected in language, and also on how language and thinking are related to each other. The course is basically a lecture course, but there is also space for both open and group discussion in the class in order to promote a student-led learning process. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースでは、言語学について学ぶ。言語の起源と特性、動物と人間のコミュニケーションの違いと共通点、文法上の特性、言語習得のタイプ、言語と文化の関係などを通して、現代の言語学を総合的に理解する。様々な言語から豊富な例を挙げながら、現実がどのように認識され、言語に反映されるのか、また言語と思考がどのように関連しているのか、ということにコースの中心が置かれている。授業は基本的に講義形式だが、学生主導の学習プロセスを促進するため、授業では公開ディスカッションとグループディスカッションの両方の場を設ける。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方またはいずれかを行う。	
	Introduction to Anthropology		This course will introduce students to the central topics, concepts and methods of socio-cultural anthropology, which can be broadly defined as the study of human cultures and societies. It will survey the key topics in contemporary socio-cultural anthropology and offer insights into how the seemingly most commonsensical aspects of people's lives can be informed by the social contexts of which they consider themselves a part. The course focuses on anthropological theories, thus also providing a historical overview of the discipline. It draws on ethnographic examples and case studies from various societies, but contemporary Japan will be central, in order to provide students with an understanding of where we are living. Active participation in discussion will be fundamental. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースでは、社会文化人類学の中心的なトピック、概念、方法を紹介する。このコースでは、現代の社会文化人類学の主要なトピックを調査し、人々の生活の一見ありふれた側面が、どのように彼らがその一部であると考えた社会的文脈によってもたらされるのかについての洞察を提供する。このコースでは、人類学の理論に焦点を当て、この学問分野の歴史的概観も提供する。様々な社会におけるエスノグラフィーの事例やケーススタディーを用いるが、現代日本が中心となる。ディスカッションへの積極的な参加を基本とする。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方を用いる。	
	Introduction to the United Nations		The aim of this course is to introduce students to the United Nations' (UN) history, functions, structures, and contemporary challenges. By studying for this course, students should be able to understand the key concepts related to the UN and to apply these insights to contemporary international affairs. The course traces the development of the UN and its 'practices' within international politics. The course will consist of small group and class discussion. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースでは、国連 (UN) の歴史、機能、構造、および現代の課題について紹介することを目的とする。このコースの学習により、学生は国連に関連する重要な概念を理解し、これらの洞察を現代の国際情勢に応用することができるようになる。このコースでは、国際政治における国連の発展とその「実践」をたどる。コースは少人数のグループディスカッションとクラスディスカッションで構成される。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方またはいずれかを用いる。	
	Introduction to Peace Studies		This course reviews a wide range of theories exploring the nature and causes of conflict, the possibilities for conflict resolution, and the foundations of peace. The course will combine lecture and group work, exploring from past to contemporary case studies, so that it will help students to foster practical understandings of the cause of conflicts and discuss ways to resolve current global issues. At completion, students will possess an understanding of the key concepts of peace studies and a broad knowledge of different perspectives on peace and conflict and develop skills to address personal and group issues that require peaceful conflict transformation currently and in the future. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースでは、紛争の本質と原因、紛争解決の可能性、平和の基礎について、幅広い理論から検討する。講義とグループワークを組み合わせ、過去の事例から現代の事例までを探究することで、紛争の原因に関する実践的な理解を養い、現在の世界的な問題を解決する方法を議論する。修了時には、平和学の重要な概念を理解し、平和と紛争に関するさまざまな視点について幅広い知識を身につけ、現在および将来において平和的な紛争解決が必要とされる個人および集団の問題に対処するスキルを身につける。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方またはいずれか一方を用いる。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Introduction to Gender Studies		This course explores gendering processes in everyday social life and in identity dynamics within global society. It draws on a range of feminist perspectives in gender studies. Students will engage in debate and discussion to deepen their understanding of mini-lectures and of academic reading content. They will also engage in simulation activities and research projects. They will develop the capability to challenge mainstream discourses on femininities and masculinities and to evaluate policies in terms of gender equality. Students will be able to analyze a wide range of gender issues from interdisciplinary and global perspectives. They will be able to critically examine the influences of gender in the construction of personal identities and national identities in policy documents, news media, entertainment media, and in the academy. This course will use both/either formative and/or summative evaluation. このコースでは、日常的な社会生活やグローバル社会におけるアイデンティティの力学におけるジェンダー化のプロセスを探究する。ジェンダー研究における様々なフェミニストの視点を活用する。学生はディベートやディスカッションを行い、ミニレクチャーや学術的な読書内容の理解を深める。また、シミュレーション活動や研究プロジェクトにも取り組む。フェミニティとマスキュリニティに関する主流の言説に異議を唱え、ジェンダー平等の観点から政策を評価する能力を養う。学際的かつグローバルな視点から、幅広いジェンダー問題を分析できるようになる。政策文書、ニュース・メディア、エンターテインメント・メディア、そしてアカデミズムにおける個人的アイデンティティや国家アイデンティティの構築におけるジェンダーの影響を批判的に検討できるようになる。このコースでは、形成的評価と総括的評価の両方またはいずれかを用いる。	
	Introduction to Computational Linguistics		本科目では、文と談話のレベルに焦点を当て、言語に見いだせる規則性や法則性、制約を分析する。言語構造の理解を深めるために、まずは言語学の基礎概念と基本的な考え方を学ぶことから始める。授業を通じて、言語の具体的な規則や制約を明らかにし、それらを分析する力を養うとともに、見いだされた規則や制約の類似性を考慮しながら、より抽象的な規則や制約へと統合する力を修得することを目指す。この分析過程により、言語構造の理解を深め、複雑な言語現象に対する洞察力を高める。	
	History of Computing		本科目では、現在の計算機システムが至るところに存在するようになるきっかけとなった重要な進歩について、次の3つを取り上げて紹介する。1) そろばんのような機械式計算機や浮動小数点演算装置からマイコンやデスクトップコンピュータへ発展したハードウェアの進歩。2) パンチカードからクラウド型システムへのデータ処理の進化。3) プログラミング言語の進化。また、発見や発明につながった歴史的な人物や情勢について、現在知られているコンピュータデバイスの利用を形成した進歩や出来事に触れて紹介する。さらに、電子メールやWWW等、電子的メッセージングシステムの進化についても触れる。	
	Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities		この科目は、日本において特微的に誕生し、その後広く世界的にも広がってきた「デジタル・アーカイブ」の考え方、技術的方法、具体的な事例を理解し、さらに今後の課題について学ぶ。デジタル・アーカイブは、高度に発達した現代のマルチメディア情報処理技術を、歴史、文化、芸術分野を中心とする人文科学研究へ応用する考え方である。また、世界中の国々の歴史・文化・芸術についての情報を、研究者だけでなく一般の人々へも広く発信することにより、相互理解を深めるという、きわめてグローバルで現代的な課題である。	
	Understanding Language		本科目は「ことばの理解」をテーマとして、多様なトピックを取り扱う。普段意識することなく使っている「ことば」と「理解すること」を分析し、言語がどのように意味を伝え、コミュニケーションを形成するのかを探究することを目的とする。具体的には、言語の構造、意味の形成、理解のプロセスなどを学びながら、ことばがどのようにして相手に伝わり、互いの意図をどう共有するかを深く考察する。さらに、コミュニケーションのメカニズムやその重要性についても掘り下げ、日常的な対話から専門的な交流に至るまで、さまざまな状況での言語使用の理解を深めることを目指す。これにより、言語と理解の関係についての洞察を深め、より効果的なコミュニケーションスキルを養う。	
	Computers in Education		この科目では、世界における教育目的でのコンピュータ利用の実態を分析する。コンピュータの導入が教室内での指導方法、学習者の関与、学習経験にどのように影響を与えたかを検討し、教育現場でのコンピュータ利用の未来を描く。これを基に、日本だけでなく、世界の教育実践におけるコンピュータ利用の将来に関して独自の理論を構築することを目指す。受講生には、グループディスカッションや発表を通じて自分の意見を共有し、他のメンバーと積極的に意見交換を行うことが求められる。	
	Language in Politics		政治とは力であり、政治家、政党、マスメディアが発するメッセージは、多くの人々の意見や見解に直接的な影響を与える。この科目では、マスメディアを含むオピニオンリーダーたちが用いる言語を分析し、言葉の使われ方が大衆の指向性にどのように影響を与えるかを検討する。これを踏まえ、政治学における用語の理解を深め、政治における力とその役割についての意識を高め、政治家やマスメディアが政治を形成する上で言葉が持つ影響力について確かな見識を持つことを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Introductory Course to Climate Change and Global Warming		This course overviews the basics of climate change and global warming issues by reviewing the scientific analyses of UN reports and international efforts through following UNFCCC documents. We will look into the measures and other frameworks to address the challenges, including the basic structure of emissions trading. We will also examine the history of international agreements and study the backgrounds of the difficulties in the negotiations. 気候変動・地球温暖化問題の基本を、国連報告書の科学的分析、UNFCCC文書に続く国際的な取り組みを通して概観する。排出量取引の基本的な仕組みを含め、課題に対する対策やその他の枠組みを検討する。また、国際協定の歴史を検証し、交渉が難航した背景を学ぶ。	
	Introductory Course to International Project Development		The course starts with outlining the impacts of globalization and illustrates the development of international project as the example of the outcomes of globalization. It will examine the aspects of international project development by focusing on the infrastructure needs, basic structures, skills needed including engineering technology, risks, economics and related policies. We will look at the cases of problems in the course of actual development and study the features of doing business overseas in the world of globalization. このコースでは、まずグローバル化の影響を概説し、グローバル化の成果の例として国際プロジェクトの開発を説明する。このコースでは、国際プロジェクト開発の諸相を、インフラストラクチャーの必要性、基本構造、工学技術を含む必要なスキル、リスク、経済、関連政策に焦点を当てて検討する。また、実際の開発の過程で問題となった事例を取り上げ、グローバル化の中での海外ビジネスの特徴を学ぶ。	
	Understanding Visual Culture		This course deals with the basic concept of visual culture, with movies and TV. The aim of this course is to help students acquire an understanding of the relations among key technological, cultural, social, and industrial changes, their causes, and consequences. This course is provided in English. このコースでは、映画とテレビを中心に、映像文化の基本概念を扱う。このコースの目的は、主要な技術的、文化的、社会的、産業的変化の関係、その原因、結果について理解を深めることである。このコースは英語で行われる。	
	Introduction to Food Culture		This course examines the ways in which people use food to define themselves as individuals, groups, and communities. We will look at the meaning of food in different cultures by exploring how factors like ethnicity, gender, religion, and socio-economic status influence our food choices. We will also examine the various ways in which state policies and ideologies, business strategies and global processes relate to our food ways and preferences. このコースでは、人々が個人として、グループとして、コミュニティとして、自分自身を定義するために食べ物をどのように利用しているかを調べる。民族性、ジェンダー、宗教、社会経済的地位などの要因が、私たちの食の選択にどのような影響を与えるかを探ることで、異なる文化における食の意味を考察する。また、国の政策やイデオロギー、ビジネス戦略、グローバルなプロセスが、私たちの食のあり方や嗜好にどのように関係しているのか、様々な角度から検証する。	
	Cross Border Policy Issues		This course will conduct group-based research and discussions on selected Policy Science topics related to social, economic, cultural, and political issues of Japan and overseas countries. Each group is formed by international and Japanese students, and English will be used as the main instruction and communication language in the class. Students are expected to engage in constructive discussions based on different cultural backgrounds and experiences. 本講義では、日本および諸外国の社会・経済・文化・政治問題に関連する政策科学的トピックを選択し、グループ単位で研究・討議を行う。各グループは留学生と日本人学生で構成され、授業では主に英語を使用する。異なる文化的背景や経験に基づき、建設的な議論を行うことが期待される。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Introduction to Global Justice		This course is a theoretical and applied investigation of issues in global justice. Traditionally, justice has been theorized in terms of the obligations that exist between citizens and the state. Global justice by contrast is the study of what individuals are owed as they are affected by activities and relationships that cross state lines and which cannot be resolved by states alone or independently of non-state agents and institutions. The course will investigate different frameworks of global justice and how they apply to major global issues. Topics for discussion may include poverty and economic disparity; humanitarian intervention and universal human rights; environmentalism and climate change; immigration and citizenship; and national and cosmopolitan democracy. このコースは、グローバルな正義の問題を理論的かつ応用的に研究するものである。伝統的に、正義は市民と国家の間に存在する義務という観点から理論化されてきた。これとは対照的に、グローバルな正義とは、国家の枠を超えた活動や関係によって影響を受け、国家だけでは解決できない、あるいは非国家的な主体や制度とは無関係に解決できない、個人が負うべき義務について研究するものである。このコースでは、グローバルな正義のさまざまな枠組みを調査し、それらが主要なグローバルな問題にどのように適用されるかを検討する。貧困と経済格差、人道的介入と普遍的人権、環境主義と気候変動、移民とシビズンシップ、国家とコスモポリタン・デモクラシーなどが議論の対象となる。	
	Foundations of Data Science and AI		専門分野へのデータサイエンスやAIを活用することを念頭に、データサイエンスならびにAIに関する知識・技能を補完的・発展的に学ぶ。授業では、データ駆動型社会におけるデータサイエンスの位置づけやDXによる社会の転換の一つのきっかけであるAIについて、歴史や倫理など利活用するにあたり修得しておくことが望ましい知識を修得する。あわせて、AIの学習方法や作り方など構築運用するにあたり必要な知識・技能について演習を通じて学び、実際に利活用するための基本的な考え方について修得する。	
	Foundations of Data Engineering		専門分野へのデータサイエンスやAIを活用することを念頭に、ICTの発達により集約されたデータを分析・活用するデータエンジニアリングに関する知識・技能について学ぶ。 授業では、データを処理するために必要な統計および数理に関する基礎的な知識を修得するとともに、収集・蓄積されたデータから新たな価値を生み出すために必要な処理ならびに表現に関する知識・技能について学ぶ。 あわせて、実データを基に、取得から処理、解析までをPBL型の演習を通じて行うことにより、実際に利活用するために必要な知識・技能を修得する。	
	Cross-cultural Encounters 1		この科目では、学生生活や日常生活の話題を通じて、異文化間の多様な価値観に触れ、コミュニケーションを通じて相互理解を深めることを目的としている。母語と外国語の視点から、異文化間コミュニケーションや他者理解の基礎を学ぶことに重点を置く。学生は、異文化間での価値観の違いを理解し、効果的なコミュニケーションスキルを身につけることで、国際的な分野での活動や留学に向けた準備を行う。また、授業を通じて、様々なコミュニケーションの楽しさを発見し、今後の学びに役立てるための基礎的な知識とスキルを習得することを目指す。	
	Cross-cultural Encounters 2		この科目では、日本と諸外国との間での価値観の違いを理解しながら、寛容性や受容性を踏まえた交渉術や折衝術を学ぶことを目指す。学生は、異文化間での交渉や折衝の実践を通じて、効果的な課題解決能力を養う。また、共生のあり方についての考察を深めるとともに、実践的なスキルを身につける。学生は、異なる文化背景を持つ人々との効果的なコミュニケーション能力を高め、グローバルな環境での交渉や協力を実現するための基盤を築く。	
	Cross-cultural Studies		この科目は、自分の中にある先入観や偏見に気づき、ステレオタイプにとらわれることなく、異文化を理解しようとする姿勢を培うことを目的とする。言語、政治、開発、ジェンダー、グローバリゼーション、多文化共生などの現代社会の課題を取り上げる。海外長期滞在経験者や留学から帰国した学生の授業を推奨し、国際的なキャリアを目指す学生、大学院進学を目指す学生、SKP生などの短期留学生や正規留学生をも対象とする。	
	Cross-cultural Seminar		主に、アドバンスト型留学を目指す学生や、派遣が決まった学生を主な対象とする留学準備科目である。受講生が、人文・社会とかかわるテーマを扱った英語の学術文献・論文を読み、議論する。正規留学生およびSKP生などの短期留学生も対象とする。 国内学生と国際学生の学び合いが可能な環境で、留学生においては日本人学生と学びあえる授業となり、留学を目指す学生に関しては留学先の授業環境に適応する機会ともなる。受講生の人数に応じて、レベル別クラス実施も検討する。	
	Non-verbal Communication		本科目は、コミュニケーションの分野における最も基礎的かつ実践的、また有益なテーマを学際的・複合的なアプローチで検討するものである。授業では、基礎理論の解説とマルチメディア教材を活用した実践的な演習を通じて、コミュニケーションに関する深い理解を目指す。学生には自（異）文化理解力を高め、非言語コミュニケーションについての基礎的な知識を習得することが求められる。また、文化相互主義に基づくグローバルな視点を取り入れ、人間観や世界観の構築を図ることが期待される。これにより、多文化間での効果的なコミュニケーションを実現するための基盤を築く。	
	Academic Skills 1		本科目は、主にモチベーション向上型（1セメスター期間程度）の留学を希望する学生を対象とした留学準備科目である。まず、海外留学の意義や海外の高等教育事情について学ぶことから始める。次に、留学先で必要となる基礎的な学習スキルを習得する。具体的には、ライティング、リーディング、スピーキング、リスニングの4技能に加え、シラバスの読み方やオフィス・アワーの活用方法など、留学先での学習に必要なスキルを身につける。さらに、留学準備に欠かせない語学検定スコアの準備を行い、語学能力の向上を図る。これらの学習を通じて、留学に向けた具体的な準備を整え、自信を持って留学生活に臨むための基盤を築くことを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Academic Skills 2		本科目は、主にアドバンスト型留学(8か月から1年間の長期留学)を目指す学生や、派遣が決まった学生を対象とした留学準備科目である。まず、留学先で必要不可欠な総合的な学習スキルを習得することを目的とする。具体的には、学術文献や論文の効果的な検索方法や、タムペーパーの執筆技術などを学ぶ。次に、海外大学での授業に対応するために、ディスカッションやプレゼンテーションの方法を学び、授業参加や発表に必要なスキルを身につける。さらに、TOEFL iBT® やIELTSの試験対策を行い、留学先での語学能力を向上させるための準備を整える。このような学習を通じて、留学先での学問的および日常生活の両面で必要なスキルを総合的に身につけることを目指す。	
	University of Hawaii Program		学内での事前研修で、ハワイにまつわる科学技術や自然環境に関する講義を聴き、各自、現地での課題消化に備えた準備をする。ハワイ大学では、本プログラムのために特別に用意された理工系の内容の講座やハワイの文化に関する講座、そして、英語学習の講座を受講する。その中で各自が見つけたテーマに関してPowerPointを使ったプレゼンテーションをする。その他、各種フィールド・トリップやハワイ大学の学生との交流など、様々な企画が用意されている。帰国後、各自がプログラムの成果についてポスター・プレゼンテーションする。	
	グローバル社会の体験と理解		本科目は、グローバル社会の理解を涵養する導入的科目であり、日本を離れ、異なる文化や社会背景を有する海外の諸国・地域において、現地に赴くことにより当該地域に関する知識や理解を深めるとともに、グローバルな視野を育む。異文化環境における体験を通じて、異なる価値観や生活様式による困難やストレスへの適応性・レジリエンスを高め、さらに「日本」や「自文化」を客観的に観察・評価できる力を養う。また、海外の諸国・地域におけるフィールドワーク／プロジェクトなど実践的な学習活動を通じて、現地の生活や文化、経済活動などを主体的・自律的に体験し、グローバル・コンピテンシーの涵養に不可欠な「しなやかさ」と「たくましさ」を体得する。また、現地での学びを最大化するため、使用される外国語の実践的な学習も必要に応じて行う。	講義 26時間 実習 23時間
	Intensive Language Workshop		本科目は、海外の教育機関において特定の外国語に関する知識とスキルを、理論的および実践的な観点から包括的に学ぶことを目的とする。授業では、文法、語彙、表現、発音、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングといった外国語の基本的な各分野を網羅し、それぞれのスキルをバランスよく習得する。学習者は、集中的な外国語の訓練を受けることで、実際のコミュニケーション場面において効果的に考えや意見を共有し、交換する能力を高める。また、母語話者や非母語話者との協働を通じて、実践的な問題解決能力を養うことができる。これにより、海外での生活や学習の場面で必要とされる語学力を身につけ、国際的な環境での効果的なコミュニケーション能力を向上させることを目指す。	
	Language for Academic Communication		本科目は、海外の教育機関において、特定の外国語における高度なアカデミック・ランゲージについて学び、外国語による専門的な学習や研究に必要な知識やスキルの獲得を目指す。授業では、アカデミック・ランゲージの理解に不可欠なリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングを総合的に学び、また、特定のテーマ学習を通じて、アカデミック・ランゲージの知識やスキルを応用し、実践的に学びを深める機会も提供する。	
	Global Project-Based Learning		本科目は、海外諸国・地域を舞台に現代社会における横断的テーマに沿って、文化・社会背景の異なる学生が共同して探求する「問題解決型学習(PBL)」を行う。本科目を通じて、主体的に物事を捉え、問題解決のために様々な他者と協力して行動できるグローバル人材の育成を目指し、①「世界の多面的理解」、②「異文化間コミュニケーション能力」、③「多文化リーダーシップ力」、④「イノベティブな発想力」等の能力を涵養する。	講義 30.5時間 実習 10.5時間
	Area Study I		本科目は、海外の教育機関において、海外留学先の国・地域が有する文化、言語、社会、政治ならびに人々の生き方・考え方などについて、当該の国・地域固有の「論理」を学ぶことにより、実状や実態を正しく把握し理解することを目指す。また、学習を進めるにあたり、自身の「自文化」との比較を行い「特異性」や「共通点」を探ることで学びを深める。なお、当該国・地域の固有性について正しく理解するために、様々なアプローチ(講義学習、言語学習、演習等)による多面的な学習を実践する。	
	Area Study II		本科目は、海外の教育機関において、世界の特定の国や地域に着目し、その場所の特異性について、種々様々な学術的観点から考察する。文化、社会、人種、歴史、文明、戦争、衝突、関係性、宗教、技術、貿易、経済など多岐に亘るキーワードを取り上げ、各国・地域が固有に抱える問題とともに、その問題に対する学問的アプローチ方法についても検討し、議論する。本科目で取り上げた国や地域を一つの特徴的なケースとして理解することで、世界を考察し分析するための独自の高度な視野を涵養することを目指す。	
	Global Study		本科目は、海外の教育機関において、グローバル社会において顕在化する現象に着目し、それが引き起こす課題やその解決について、複数の観点から議論し、独自の考えを発展させ、課題解決策を生み出す力を涵養する。地球規模で行われるコミュニケーションは、国という概念を超え、新しい社会を生み出しつつあるが、同時に、それによって新たな難問群が生じる。本科目が取り上げたケースから、グローバル社会がもたらす功罪や、グローバル社会そのものを批判的に考察することを通じて、21世紀の地球市民のあり方について考えを深めることを目的とする。	
	Academic Communication(Online Learning)		本科目は、オンラインで集中的に特定の外国語について学び実践することで、外国語知識の定着とコミュニケーション能力の向上を図る。具体的には、海外の教育機関が提供する授業を通じて、アカデミック・ラーニングレベルでの外国語4技能(リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング)の修得と適切な活用をめざす。加えてオンラインを通じたコミュニケーション・スキルの向上を目指し、テーマ学習やディスカッションにて、互いの考えや意見を共有・交換、異文化間コミュニケーションを図る。学術的な外国語運用能力とオンライン上でのコミュニケーション・スキルを総合的に向上させることが到達目標となる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	Area Study(Online Learning)		本科目は、オンラインで集中的に特定の国・地域について学び、その実情や実態を正しく把握・理解することで、グローバルな視点で考察し分析するための視野を養うことを目指す。具体的には、海外の教育機関が提供する授業を通じて、テーマ学習やケーススタディを行い、特定の国・地域についての理解を深め、学術的観点から考察する。これらを通じて、主体的に物事を捉える力および外国語を運用した学術的アプローチの修得のみならず、オンライン環境下で他者と協力して行動できる姿勢、技術の獲得を目指す。	
	学びとキャリア		全学横断的に配置されている「キャリア教育科目」の導入科目に位置づけられ、容易には解決できない現代社会における諸課題について、専門家の基礎レクチャーを受けた上でグループ議論することを通して、大学で学ぶことの意義を理解する。グループワークは学部横断型のチームによって行い、多様な価値観や専門分野を超えた視点や考え方に触れる。これらを通して、「自己」や「社会」、さらに立命館大学での学修課程を見つめ直すことによって、大学での学びを体系化し、今後の学びについて確かな展望を持つことを目指す。	
	仕事とキャリア		全学横断的に配置されている「キャリア教育科目」の形成科目に位置づけられ、幅広いゲスト講師から多様な働き方（業界・職種・キャリアステージ）の講演を聞いた上で、仕事（職業人生）の広がりや意味、期待される成長プロセスを理解し、自己の長期的なキャリアビジョンを構想する機会とする。ゲスト講師の講演内容をより深く理解するために、事前・事後学習としてグループワークを行う。グループワークは学部横断型のチームによって行い、多様な価値観や専門分野を超えた視点や考え方に触れる。	
	コーオプ演習（理論）		本科目は、企業や団体から提示されるテーマに基づき、チームでの活動に必要な基礎的な知識と考え方を修得することを目的とする。問題発見や課題解決のスキルを学び、産官学連携に基づく体験的学習に参加する際の基盤を築く。企業活動を分析できる能力、多様なメンバーとのプロジェクト活動を推進するための基本的なスキル、創造的な企画立案に活用できる問題解決プロセスの応用、チームの検討内容を分かりやすく伝える力、そして企業環境の変化について情報を常に更新し、自らの活動に反映できる能力を養うことを目指す。	
	コーオプ演習（実践）		本科目は、学部横断的に編成された6名程度のチームが、企業や団体から提示される現実のテーマに基づいて、問題発見・課題解決のプロセスに沿ったプロジェクト型の活動を行うことを目的とする。各メンバーは自分の専攻学問を活かしてプロジェクトに参加し、多様な視点から現状を分析・検討し、解決策を提案する。これを踏まえ、テーマを論理的かつ批判的に分析し、チームでの結論を導く過程に貢献する能力、問題発見・課題解決プロセスを用いて創造的な企画立案を行う能力、チームの検討過程や結論を分かりやすく伝える能力、さらに困難な場面でも自律的な学習意志や態度を発揮する能力を養う。	
	現代社会とボランティア		本科目は、ボランティア活動の体験とその体験を言語化することを通じて、模範的な市民としての知識、能力、態度を習得することを目的とする。学生は他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決に主体的に取り組むための力を養う。この目的に基づき、体験学習の循環過程を理解し、より深い学びの姿勢を保つ能力を育むこと、異なる価値観を尊重し、対話的なコミュニケーション環境を創造する能力を高めること、さらに、社会的な課題の当事者の立場を認識し、主体的に尊重する能力を身につける。	
	シチズンシップ・スタディーズ		地域社会で行われる事業に参加し、その運営を支えることで、関わる人々の役割や責務を体験的に学ぶことを目指す。本講義では、地域活性化や課題解決を目的とする事業が、NPOや住民組織、自治体などによってどのように実現されるかを学び、その過程を通じて倫理観や正義感、責任感の涵養を促進する。具体的には、現場での実践経験と教室での学びを往還するサービスマーケティング手法を採用し、体験を学びに変えるプロセスを通じて、他者やコミュニティへの関心を深め、能動的かつ責任ある行動を取る力を育成する。これにより、地域社会に対する理解を深めるとともに、実践的なスキルと社会貢献の意識を高めることを目指す。	
	スポーツの歴史と発展		スポーツは、人類の歴史と深く結びつきながら誕生し、現代に至るまで絶え間なく発展してきた。スポーツの形態や内容、価値は、時代や社会、文化の影響を受けて変化し続けている。本講義では、スポーツと身体文化の歴史を紐解き、これまでの変遷を通じて「人間にとってスポーツとは何か」を探索する。具体的には、スポーツの起源から現代に至るまでの発展過程を分析し、スポーツがどのように人間社会に貢献し、または影響を与えてきたのかを考察する。スポーツの歴史的背景や文化的意義についての理解を深めるとともに、スポーツが人間の生活や価値観にどのように貢献しているのかを認識することを目指す。	
	スポーツと現代社会		現代のスポーツは、歴史的に形成された独特の形態や価値を保ちながらも、政治や経済、法、教育、メディア、テクノロジー等の社会的諸領域と結びついて多様な展開を見せている。そのため、今日のスポーツ現象を理解し、その課題を解決するには、グローバル化する現代社会の様々な情勢やスポーツの歴史的な性格を踏まえつつ、学際的に思考することが求められている。そこで本講義は、現代社会とスポーツ文化の関係性に迫り、その価値や機能、構造を課題と共に浮き彫りにしながらスポーツと社会の望ましいかわり方を探るものである。	
	スポーツのサイエンス		本科目では、スポーツおよび身体活動に関する基礎的な知識を、運動生理学および生化学を中心に学ぶことを目指す。運動生理学では、運動が身体に与える影響や、体内の生理的反応を理解することで、効果的なトレーニング方法や体力向上の原理を学ぶ。生化学では、エネルギー代謝や栄養素の役割について学び、スポーツや身体活動における最適な栄養摂取の重要性を認識する。これらの知識を基に、スポーツトレーニングの実践的なアプローチや、体力と健康の維持・向上の方法を探索し、生活習慣病の予防に向けた実践的な視点を養う。理論的な理解を深めるとともに、日常生活やスポーツ活動に役立つ実践的な知識とスキルを身につけることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
教 養 科 目	現代人とヘルスケア		本科目では、現代の健康問題に対する個々人の取り組み方を、身近な生活の中での具体的な諸問題を通じて考察することを目的とする。中心に据えるのは「健康の主人公」像の形成であり、これを実現するために「健康作りの処方箋」だけでなく、「健康の科学」に基づいた理論を学ぶ。これにより、「健康」が持つ広範で深い意味について冷静に考える能力を育み、「人間的自然」を通じて身体機能の恒常性と現実生活における矛盾関係を理解する。また、現代的な「健康問題」を心理的、肉体的、社会的な視点から総合的に捉える力を養い、「地球環境」との関連についても視野を広げて考える力を身につける。	
	スポーツ方法実習Ⅰ		本講義は、生涯を通じてスポーツを実践するために必要な知識と能力を広い範囲にわたって身につけることを目的としている。特に、スポーツや健康に関する基礎知識を提供するとともに、実際のスポーツ活動を学びの中心に据え、自己の身体性や非言語的コミュニケーションの意義を深く理解する。運動やスポーツにおける技術的なスキルを習得するだけでなく、長期的に健康を維持しながら運動を継続するための基盤を築くことを目指す。この講義を通じて、スポーツ活動がもたらす身体的、精神的、社会的な利益を実感し、生涯にわたって積極的に運動に取り組むための基礎的能力を養う。	
	スポーツ方法実習Ⅱ		本講義は、生涯にわたってスポーツを継続的に実践するために必要な幅広い知識と能力を習得することを目的としている。特に、スポーツや健康に関する理論的な知識だけでなく、実践そのものに重点を置く。授業では、自己の身体性や非言語的コミュニケーションの重要性を理解し、運動・スポーツの技術を習得することを通じて、健康を維持しながら長期間にわたって運動を続けるための基礎的能力を養成する。実践的な活動を通じて、スポーツがもたらす身体的・精神的・社会的な利益を体感し、生涯にわたる運動習慣の確立を目指す。	
	教養ゼミナール		教養ゼミナールは、各担当教員が専門に基づき設定したテーマに沿って、学生が主体的に行う小集団形式の教養科目である。このゼミナールでは、調査・研究・発表・討議などの活動を通じて、学生が異なる専門分野の知識や視点を共有し、学び合うことが求められる。特に、学部や回生が異なる学生との意見交換や共同作業により、異なる視点からの知的刺激を受けることで、複眼的な問題解決能力を養うことが目的である。これにより、学生は広い視野を持ち、自分の専門を他の専門と関連づけてより深く理解し、広い視野で物事を考える力を身につけることを目指す。	
	異文化間テーマ演習		本科目は、日本及び世界における様々な問題やトピックに関する資料や映像を基に、討論や発表を行うことで他文化や多文化についての理解を深めるための演習科目である。正規レベルの日本語力を有する留学生と日本人学生の協働学習を想定しており、互いの視点を尊重しながら学び合うことを重視する。この授業を通じて、他文化や多文化についての社会状況を多角的に観察・分析する力を養い、社会や文化を相対的に捉える能力を身につけることを目指す。	
	超領域リベラルアーツ		年度ごとに選定されたテーマに基づき、専門分野の異なる複数の教員と学生が、各々の見識に基づき、よりよい未来を拓くために人類が取り組むべき課題を探究する。クラス内で組織化したチーム内で専門や立場の異なる他者との対話や協働作業を通じて問いを問い直す創発的な知的生産の過程を経て、既存の価値観に縛られない自由な発想のもと望ましい社会像を構想した内容は、中間段階で広く社会に問いかける。最終的には豊かな感覚と緻密な観察のもと、深い思考と着実な実践に根差した未来志向の最適解を提示する。	
学 芸 員 課 程 科 目	生涯学習概論		生涯学習及び社会教育の本質と意義の理解を図り、教育に関する法律、自治体行財政や施策、学校教育と家庭教育の関連について学ぶ。さらに、社会教育施設や専門的職員の役割、学習活動への支援等の基本的考え方を学ぶ。生涯学習・社会教育の必要性や急速に変化する社会の実情を踏まえた課題の明確化、またそれをどのように解決するかを、事例を踏まえながら議論し、さまざまな手法や対処方法を提案する。さらには、生涯学習・社会教育を支援する者に求められる特徴的な能力等を考察する。	
	博物館概論		博物館学の基本、博物館の多様なジャンルと運営の現状、学芸員の活動の基本を踏まえ、世界の博物館、日本の博物館の歴史と現在を概観する。国内外の博物館の具体的な事例を通して、博物館の目的、機能、種類、歴史、施設、組織、運営を理解する。とりわけ学芸員の仕事、博物館の展示、展示の資料とその保存、情報技術とメディアの進化に伴う新たな課題と可能性、博物館と教育、社会連携、博物館の経営、現在の博物館の課題やその方策等について概説的、包括的に学ぶ。	
	博物館経営論		博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営に欠かせない組織や人材、経営手法・形態、連携などについて学ぶ。近年、博物館の社会的役割が大きく拡充しており、観光行政の中での重要性の高まりや、またデジタル技術の進展によって、その経営実態はさらに多様化・複雑化しており、多様な役割に見合う経営手法の重層性を社会の変化の中で理解し、博物館や学芸員の果たすべき多様な使命や内容、ならびにその重要性を考察する。	
	博物館資料論		美術館や博物館における資料調査や研究活動の意義と必要性、資料調査や研究活動に必要な基礎的な概念、資料収集、整理、保管、活用に関する基礎的な理論や方法に関する知識・技術を習得する。また美術館や博物館の収蔵品を文化資源学的に調査研究する基本的概念や研究手法・活動について理解することを通して、美術館・博物館が単なる収蔵庫ではなく、意味のある作品や資料を所有・保管するという根幹たる思想について考察を深め、作品や資料に対峙するうえでの高度な能力を養う。	
	博物館資料保存論		博物館・美術館等に収蔵されている「有形」文化財を対象に、保存・活用するうえで必要となる様々な要素について考察する。収蔵品が生産・生成された時代背景や環境、素材の分析や製作技法の理解、保存方法・修復技法、作品・資料ごとに必要となる保存環境や環境維持の技法等を広く学び、資料保存の基本的思想について理解する。博物館・美術館等の多様な収蔵品に対する具体的な資料保存の事例を参照し、その意義や応用手法について包括的に学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要 (デザイン・アート学部デザイン・アート学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要 授業 科目	講義等の内容	備考
学 芸 員 課 程 科 目	博物館展示論		人類の遺産、歴史、文化、作品、自然や科学が、いかにして美術館・博物館の「展示」として表現されてきたのかの歴史を確認し、さまざまな社会的な要求や技術の進化により、「展示」手法や「展示」の目的の多様化を国内外、多様な分野の事例を通じて理解する。「展示」という概念・手法を通じて、博物館の種類、展示の種類、展示の構造などの概要を学び、日本と世界の博物館の事例を通して、多様な博物館の特徴を理解する。また、デジタル技術によって生まれている展示の可能性や拡大するメッセージ性についても学ぶ。	
	博物館教育論		博物館施設における教育活動は、生涯学習社会実現のために必要な学習の場として一翼を担っている。生涯学習、社会教育の視点から、教育的役割を中心に据えた利用者のための博物館のあり方について考察する。また、学校教育においても、博物館を活用した学習効果の向上が大いに期待できることから、学習支援を担う専門職員としての博物館学芸員の学習支援に関する基礎的な知識と課題の考え方を学び、さらには、学習プログラム編成の技法の習得を目指す。	
	博物館情報・メディア論		博物館法に加えられた、電磁的記録の作成や活用業務にあたり、特に収蔵品を中心とする文化遺産・文化財に関するデジタル化された「情報」に焦点をあて、デジタル・アーカイブやバーチャル展示（メタバースを活用した展示や情報発信技術を含む）とその活用について学ぶ。デジタル化された文化遺産や文化財をデジタル資源としてとらえ、展示や発信に活かすだけではなく、データ分析や情報処理技術を応用して、博物館経営や学校教育・社会教育への利用、さらには、人文科学全体への寄与について、実際の研究事例を提示しながら学ぶ。また、それらのデジタルコンテンツを活用した成果物を制作することで、実務の技術も身につける。	
	博物館・学内実習		連携する美術館・博物館等における見学実習、学内の実習施設等において、現物資料やデジタル資料の取扱いや収集、保管、展示、整理、分類等の方法、調査研究の手法等について学ぶ実務実習、ならびに事前・事後の指導を行う。見学実習においては、地域の連携する博物館の展覧会の見学とともに、学内の博物館相当施設のバックヤードの見学・説明を行う。実務実習においては、デジタル技術・バーチャル空間を有効活用することで、実務のシミュレーションを可能とし、より実践的・具体的な指導を行う。講義は週1回2コマ連続とし、実務実習については、内容に応じて3コマ・4コマ集中型で、柔軟に運用する場合もある。	
	博物館・館園実習		学内実習で学んだ知識や技術をもとに、博物館の現場で実際に業務を経験することで、博物館の理念や設置目的、業務の流れや実践的な技術、またその応用等に対する経験と理解を深める。実際の博物館活動の現場で、博物館資料を取り扱い、教育普及活動、来館者対応実務を補助的に担うことにより、体験的に学芸員としての責任感や社会意識を身につけ、博物館で働く心構えを養う。経験豊富な学内担当者の事前・事後の指導を加えることで、分野・国内外での多様性についても意識を深めることができる。	

1. 書類等の題名 「校地校舎等の図面」 1 ページ 都道府県における位置関係の図面
2. 引用元 Google マップ <https://www.google.com/maps/>
3. 説明 地図中の立命館大学衣笠キャンパスの位置を印した。

【衣笠キャンパス】

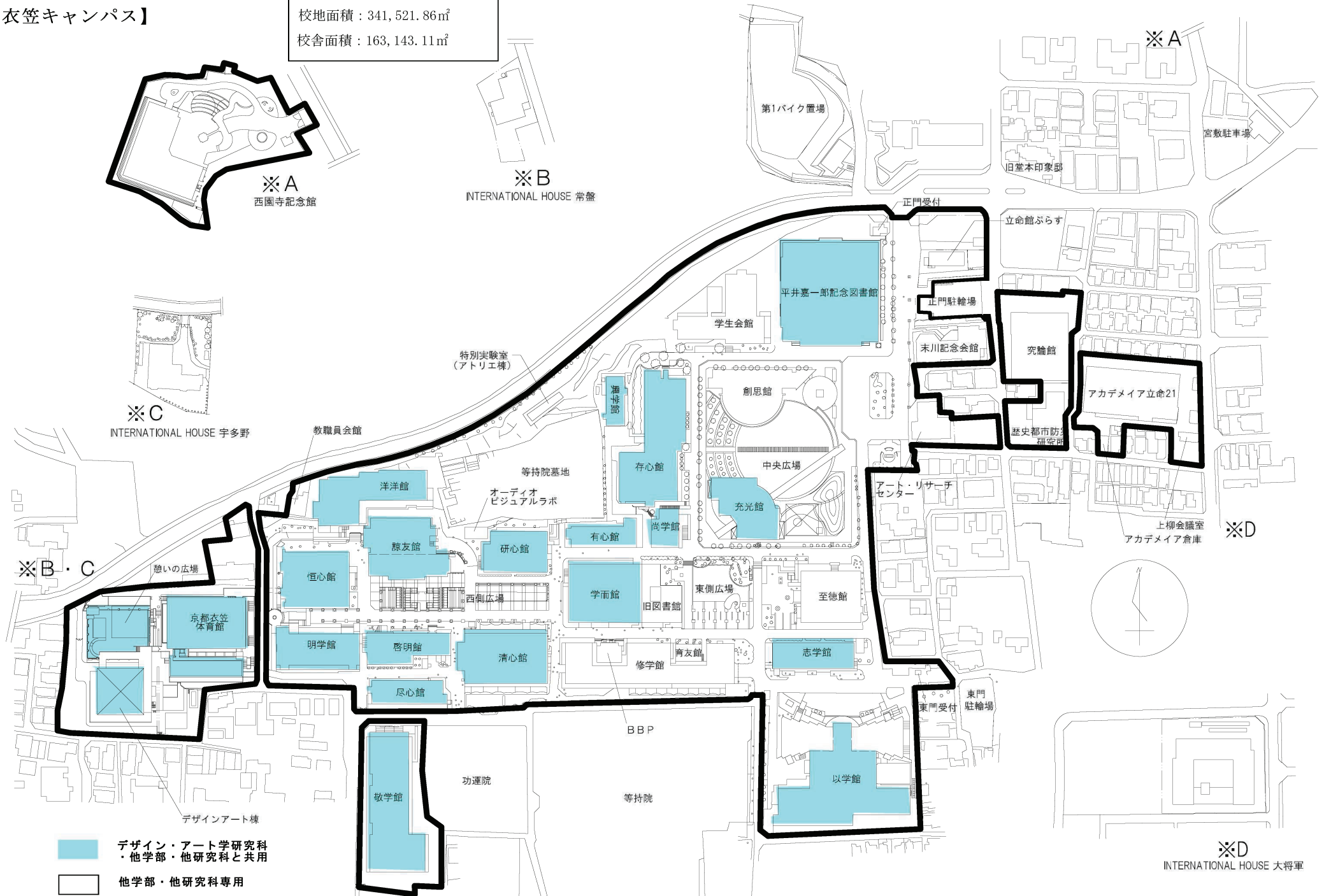


JR・近鉄 京都駅 (烏丸中央口)	京都 市バス 京都駅前	市バス 50 (B2のりば)	42分	立命館大学前 (終点)
		※ 市バス・JRバス 快速立命館 (B2のりば)	36分	
		市バス 205 (B3のりば)	38分	衣笠校前
	JRバス 京都駅前	JRバス 高雄・京北線 (JR3番のりば)	30分	立命館大学前
阪急 大宮駅	京都 市バス 四條大宮	市バス 52 55 (6番のりば)	25分	立命館大学前 (終点)
	JRバス 四條大宮	JRバス 高雄・京北線	18分	立命館大学前
JR・地下鉄 二条駅	京都 市バス 二条駅前	市バス 15	19分	立命館大学前 (終点)
		市バス 52 55	20分	
	JRバス 二条駅前	JRバス 高雄・京北線	14分	立命館大学前
阪急 西院駅	京都 市バス 西大路四條	市バス・JRバス 快速立命館 (Eのりば)	15分	立命館大学前 (終点)
		市バス 臨 (Eのりば)	17分	
		市バス 205 (Eのりば)	13分	
	京福 西院駅	京福電鉄 嵐山本線・北野線	22分	龍安寺駅 等持院・立命館大学 衣笠キャンパス前駅
地下鉄 西大路御池駅	京都 市バス 西大路御池	市バス・JRバス 快速立命館 (Bのりば)	11分	立命館大学前 (終点)
		市バス 臨 (Bのりば)	13分	
		市バス 205 (Bのりば)	9分	
		※ 市バス・JRバス 快速立命館 (Eのりば)	8分	立命館大学前 (終点)
JR 円町駅	京都 市バス 西ノ京円町	市バス 15 (Eのりば)	10分	立命館大学前 (終点)
		市バス 臨 (Eのりば)	9分	
		市バス 204 205 (Eのりば)	5分	
	JRバス 円町	JRバス 高雄・京北線	8分	立命館大学前
京阪 三条駅	京都 市バス 三条京阪前	市バス 12 (7番のりば)	53分	立命館大学前 (終点)
		市バス 15 (1番のりば)	34分	
		市バス 51 (1番のりば)	36分	
		市バス 59 (2番のりば)	40分	
地下鉄 北大路駅	京都 市バス 北大路バス スターミナル	市バス M1 (青のりばF)	16分	立命館大学前
		市バス 204 (青のりばG) 205 (青のりばF)	13分	わら天神前
				徒歩 約10分

立命館大学
衣笠キャンパス

※土日・連休

【衣笠キャンパス】

校地面積：341,521.86m²校舎面積：163,143.11m²

TITLE	NAME	SCALE			NO.
		1:4000	衣笠キャンパス全体図		

設置の趣旨等を記載した書類（本文）

目 次

1. 設置の趣旨及び必要性	・・・p2
2. 学部・学科等の特色	・・・p12
3. 学部・学科等の名称及び学位の名称	・・・p13
4. 教育課程の編成の考え方及び特色	・・・p13
5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	・・・p24
6. 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合 の具体的計画	・・・p33
7. 実習の具体的計画	・・・p34
8. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施す る場合の具体的計画	・・・p36
9. 取得可能な資格	・・・p37
10. 入学者選抜の概要	・・・p38
11. 教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色	・・・p40
12. 研究の実施についての考え方、体制、取組	・・・p41
13. 施設、設備等の整備計画	・・・p42
14. 管理運営	・・・p44
15. 自己点検・評価	・・・p44
16. 情報の公表	・・・p45
17. 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	・・・p45
18. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	・・・p49

1. 設置の趣旨及び必要性

(1) 中期計画における新学部・研究科構想の位置付け

立命館大学は 2030（令和 12）年の学園のあり方を定めた「学園ビジョン R2030」を策定し、①新たな価値を創造する次世代研究大学、②イノベーション・創発性人材を生み出す大学の 2 つの柱を 2030 年代の大学の姿として掲げ、施策群として整備した中期計画「チャレンジ・デザイン」を推進している。

それを実現するためには、本学にこれまで取り組んでこなかった「美的感性に裏打ちされた創造性の涵養」が必須の要素と考え、チャレンジ・デザインの施策の一つとして、総合大学ならではの本格的かつ独創的なデザイン・アートの教学研究拠点「デザイン・アート学部」および「デザイン・アート学研究科」の設置を構想した。

デザイン・アート学部は、デザイン学を一つのディシプリンとして捉え、歴史都市京都にある総合大学において、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した未来志向の新たなデザイン学を追究する教育研究を展開することを目的として設置するものである。

(2) デザイン・アート学部を設置する社会的背景及び必要性

経済活動が多様化し複雑性を増す社会環境のもと、企業をはじめとした組織体の活動においては、自らの存在意義を再確立し、モノやサービスの機能・品質がコモディティ化している時代に独自性をもって取り組みの差別化を図り、国内外の社会的ニーズを生み出すための創造性あるイノベーション人材の育成が求められている。加えて、物質的欲求が満たされ、人間の欲求が高次化することによって文化的消費も多様化、細分化される傾向にあり、多様性や個性への理解がなければ独創的な企業・組織活動は展開できない状況にある。

この状況に対して、人間社会や自然科学への新たな見方や新たな価値観等の着想を、デザイン・アートの持つ多様な機能・効用から得ることが有用となる。さらに、デザイン・アートを通じて創発性を高めることは、企業活動のみならず、地域社会における文化の創造力を高め、尺度や価値観が多様化する人々の幸福度やウェルビーイングを高めることに繋がる。また、文化芸術立国の実現に向けた「文化芸術推進基本計画（第一期）」（2018（平成 30）年）や経済産業省における「高度デザイン人材育成ガイドライン」（2019（令和元）年）の策定などに見られる政府の動向においても、デザイン・アートがもたらす美的価値および社会的・経済的価値、またその思考特性を通じた価値創出と人材の育成への期待が高まっていることが分かる。

一方、現在のデザイン・アートを取り巻く現況において、①デザインの専門性の喪失、②デザイン思考におけるアートの観点の喪失、③デザインの定義の曖昧性、④日本の歴史と文化を踏まえたデザイン教育の不在、⑤デジタルネイティブのデザイン教育の不在、が社会的課題として認識できる。

① デザインの専門性の喪失

国内でのデザインを取り巻く社会的状況の歴史的な変遷を見ると、インダストリアルデザインやブランドコミュニケーションデザインなど、デザインは経済活動への貢献の観点で発展してきた。しかし近年、デザインの社会化が進み、DX、持続可能な社会システムの構築、人間とデジタルの円滑な接点の設計、地域コミュニティの活性化など、多様な領域にデザインの実践が広がっている。この「デザインの民主化」により、専門知を持たない人々が独自の解釈でデザインを実践し、それを発信・流通させ

る機会が増加した。その結果、デザインの本質である共創による生活世界の形成や文化的アイデンティティの構築が軽視され、文脈を欠いた十分に洗練されていないモノゴトが社会に拡散し、生活環境の悪化や文化の多様性の喪失を招いている。

経済産業省では2018（平成30）年に「高度デザイン人材育成研究会」を設置し、デザインの専門性を維持するための教育の必要性を指摘している。2023（令和5）年のWDO世界デザイン会議東京では、デザインの専門性の再定義が必要であることが議論され、さらに経済産業省「これからのデザイン政策を考える研究会」（2023（令和5）年）では、デザインスキルが非専門家に開かれたことで、専門性の希薄化に拍車をかけている現状が課題として指摘されている。

このように現在、社会においてデザインの民主化によりデザイン知が拡散されたことで、逆説的に「デザインの専門性」という中心の喪失が起こっている。このような事態を批判的に検討し、同時代における「デザインの専門性」＝「デザイン学」という中心を（再）構築するために、現代社会におけるデザイン教育の意味・意義とそれのあるべき実践を担う場が求められている。

② デザイン思考におけるアートの観点の喪失

近年、「デザイン思考（design thinking）」が世界的に普及し、ビジネス活動においてデザインの考え方を活用することが主流となっている。しかし、このアプローチでは「問題解決」の側面が過度に強調され、本来デザインが持つ多様な知や意義が見落とされる傾向にある。

特にここで見落とされてきたのが、アートの観点として特徴的な「社会批判による問題提起」と「美的感性」である。経済産業省「アートと経済社会について考える研究会」（2023（令和5）年）では、アートが持つ社会批判の視点や感性の役割が、ビジネスや社会のイノベーションに不可欠であると指摘されている。このようなデザイン思考におけるアートの視pointsの喪失により、デザイン行為が近視眼的な問題解決手法に限定される状況が生じている。結果として、地球環境や社会的インクルージョンへの配慮、持続可能な社会への変革のビジョン形成といった本来デザインが担うべき視pointsが軽視され、社会生活における情動的・感性的な充足や本質的な豊かさの追求というアジェンダが不可視化されている。

また、経済産業省「創造的思考および創造的態度に関する調査研究」（2022（令和4）年）では、デザイン思考がアート思考など他の創造的手法と融合することなく「手法化」「形式知化」される危険性が指摘されている。これにより、デザイン思考が画一的なフレームワークに収束してしまう課題が浮かび上がっている。こうしたデザインとアートが社会的に分断され、それぞれが独立した役割を担うとする認識に対し、アートの感性や技術を基盤に、新たなデザイン学の創出が求められる。

バウハウス（ドイツの教育機関：1919-1933）が「技術と芸術の結合」を理念として近代デザインの基盤を築いたように、現代においてもデザインとアートの関係を本質的に捉え直し、再統合することが求められる。本学部では、これらの視pointsを統合し、新たなデザイン学の構築を目指す。

③ デザインの定義の曖昧性

「デザインと〇〇学（自然科学および人文・社会科学諸分野）との融合」のように、デザインの領域横断的な学際性への貢献が社会的・学術的に評価されながらも、そこでは「〇〇学」の専門的観点から有用なデザインの側面のみが限定的に解釈される場合が多く、デザインそのものの知見の広範囲な多様性が看過され狭義に捉えられてしまっている傾向にある。

よって、それぞれの応用分野において独自に解釈されるデザインの定義の齟齬によってミスコミュニケーションが誘発され、社会におけるデザインの共通認識の形成が難しく、その定義が曖昧模糊となる状況を生み出している。

経済産業省「これからのデザイン政策を考える研究会」（2023（令和5）年）では、デザインの意味が多様化するなかで、定義の不明確さがデザイン教育や政策立案の課題となっていることが指摘されている。また、WDO 世界デザイン会議東京（2023（令和5）年）でも、デザインの適用範囲が拡大する一方で、「デザインは目に見える形だけではなく、思考や社会の仕組みもデザインの対象である」という多様な視点が示され、デザインの定義が一層曖昧化している現状が浮き彫りとなった。

つまり、学際的多分野共創によって、新たな社会価値を創出するイノベーションを促進するはずのデザインの知見が、このミスコミュニケーションによってむしろイノベーションの阻害要因となってしまう問題を孕んでいる。この課題に対応するため、本学部では、各分野におけるデザインの意味を比較検討し、デザイン独自の共通の意義を見出す学びを構築する。これにより、分野間のミスコミュニケーションを解消し、学際的な連携を強化するとともに、デザインの本質的価値を再認識するための教育体系を確立することを目指す。

④ 日本の歴史と文化を踏まえたデザイン教育の不在

国内のデザイン系学部・学科は、工学系・美術系・経営系を基盤に開設されてきた。工学系・美術系ではバウハウスのカリキュラム思想（造形構成基礎教育、工房教育）に基づく教育が主流であり、経営系ではデザイン思考の経営学への適用が中心とされている。これらの枠組みは日本向けにローカライズされてはいるものの、その源流である欧州（バウハウス）や米国（デザイン思考）の歴史・文化を色濃く含んでおり、日本の歴史と文化を踏まえた独自のデザイン教育の確立には至っていない。

この課題は、UNESCO「World Conference on Culture and Arts Education 2024（WCCAE2024）」においても重要視されている。ここで文化・芸術教育は各国の社会的背景と密接に結びついており、グローバルな標準化ではなく地域固有の文化を統合することの重要性が指摘された。デザイン教育においても、欧米の枠組みを踏襲するのではなく、日本独自の美意識や文化的価値観を基盤としたアプローチが求められている。

また、オンタリオ州立芸術大学デザイン学部長の Tunstall が提唱する「リスペクトフル・デザイン」では、デザイン教育の脱植民地化を主張し、特定の文化的視点のみが支配的となる現状が批判されている。日本のデザイン教育も、欧米の枠組みに依存するのではなく、歴史的・社会的背景を踏まえた独自のデザインアプローチを確立する必要がある。

本学部・研究科が立地する京都は、世界的なデザイン・アートの拠点であり、多様な文化・歴史・芸術に日常的に触れられる環境を有する。この環境は、日本の歴史と文化を踏まえた美的感性の育成において掛け替えのないものであり、デザイン・アートの教育・研究において大きな優位性を持つ。

また、本学京都衣笠キャンパスには、世界有数のデジタル・ヒューマニティーズ型研究を推進するアート・リサーチセンターがあり、日本文化・芸術分野の研究成果を蓄積している。190 万点以上の文化芸術関連資料のアーカイブを活用し、京都の文化組織、文化人、企業とのネットワークを駆使することで、日本独自のデザイン教育の枠組みを構築することが可能となる。これは、UNESCO が提唱する「文化を基盤とした教育」とも合致し、国際的な視点を持ちながら日本独自のデザイン教育を発展させるた

めのモデルとなり得る。

⑤ デジタルネイティブのデザイン教育の不在

社会のデジタル化が急速に進展する中、デザインに関わる技術や思考ツールのデジタル化も加速している。しかし、デザイン教育やその基礎的な教育において、デジタル環境におけるモノと人との存在論・認識論・方法論を十分に検討した体系的な教育は未だ確立されていない。

この課題は、経済産業省「高度デザイン人材育成ガイドライン」(2019(平成元)年)においても指摘されており、デザインの対象がプロダクトデザインやグラフィックデザインにとどまらず、システムデザインやサービスデザイン、体験デザインへと拡張するなかで、デジタルリテラシーや新たなデザイン哲学を備えた人材の育成が不可欠であるとされている。しかしながら、こうした変化に対応する教育カリキュラムは十分に整備されておらず、デジタルネイティブ世代の特性を踏まえたデザイン教育の不在が顕在化している。

また、文化庁「文化芸術教育の充実・改善に向けた検討会議」(2023(令和5)年)では、デジタル技術の進展が文化・芸術教育の枠組みを変革しており、ICT やデジタルアーカイブを活用した新たな教育アプローチの必要性が強調されている。これに伴い、デジタル技術を単なるツールとして扱うのではなく、デジタル環境における表現の在り方を探求する教育の整備が急務である。

このような現況において、デジタルに関する知識や技術を体系的に身につけ、自らの感性に基づき表現できる人材を育成するために、④に述べたようにアート・リサーチセンターの研究蓄積、またその情報蓄積(デジタルアーカイブ)の技術の活用は欠かせない。また、学生の学修環境においても、学生が個人のPCを所有・持参して活用すること(BYOD)を前提とし、Zoomのような会議形式概念を超えた、デジタルワークプレイスやVDI(Virtual Desktop Infrastructure)の導入など、DXを積極的に推進することで、デジタル環境のさらなる整備を進める。これにより、物理的な学修環境を超えた、分散型で協働的なデザイン学修の場を構築することを目指す。

以上の社会環境の変化とデザイン・アートの現況に関わる5つの社会的課題を踏まえ、本学部では、現在から将来の社会情勢を展望しながら、アートの観点からデザインの位置づけを改め、空洞化しているデザイン学領域に責任をもち、日本の歴史と文化を踏まえた独自の視点とデジタルネイティブのデザイン教育によって、世界的なデザイン・アートのキャピタル・シティである京都において専門家を育成する。なお、この新たなデザイン学へ進化は、決してより古いデザイン学の否定や捨象によって生じているものではなく、むしろそれに立脚しつつ、より新しいデザイン学の領域からの逆包摂によって生じる。本学部はそうした進化の帰結としての、いわばデザイン学の総合知化を踏まえた上で、「総合大学だからこそできるデザイン・アートの知」の創造を謳う。

(3) 研究対象とする中心的な学問分野

本学部において、組織として研究対象とする中心的な学問分野は「デザイン学」である。

本学部ではこのデザイン学の研究に際し、カリキュラムがカバーする4つの領域を踏まえ、以下の4つの分野および方法論からアプローチする。

① 意味デザイン

意味デザインは、人間による感性や知性に基づいた営みから生み出される有形無形の資源を蓄積し、それらに対して新たな「意味」や「表現」を付与し、人間社会に還元していくプロセスである。ここでは、デザインされた文化的資源がさらに人間による文化的営みのなかでかたちを変え、それらが新たにデザインの対象となっていくサイクルが含まれる。この分野においては、文化情報学、芸術学、文化財科学、博物館学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

② 情報デザイン

人類史における様々な技術の発展は、情報の可視化、蓄積、伝達のかたちを変え、そのことを通じて情報自体が持つ意味の質や方向づけをも変えてきた。本学部が研究対象とする情報デザインは、感覚や認知の次元も含めてコミュニケーションを成り立たせている条件の総体に対して、新たな「かたち」や「機能」を与えることで、価値創造を目指すものである。この分野においては、情報工学、電気・電子工学、感性工学、認知科学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

③ 環境デザイン

人間は自己を取り巻く環境を創り出す主体であると同時に、その認知や行動は環境からの大きな影響を受ける。この意味で人間とそれを取り巻くモノやそれによって構成される空間の関係は相互的なダイナミズムがある。本学部が研究対象とする環境デザインは、たとえば一つの部屋から都市や地域に至るまで、さまざまなスケールの「環境」に対して、このダイナミズムを可視化し、そこに創造的な介入をおこなっていくプロセスである。この分野においては、建築・都市工学、地理学、地域社会学、生活科学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

④ 社会デザイン

本学部が研究対象とする社会デザインは、社会に流通・布置されているデザインされた人工物（製品・サービスのみならず、組織、制度を含む）の根底にある意味を対象に、それらに介在する全てのものの関係性を見直し、そこから得られる経験を再定義することで新たな価値の創出を目指すプロセスである。その実践は、一方で当然、人工物が生み出された理念をはじめ、生成過程や、人的物的リソース、それらの営みの主体となる組織やコミュニケーション自体のデザインが含まれるが、他方でそうした人工物が消費される生活や社会のあり方について、空間軸・時間軸をまたいだ洞察が必要となる。この分野においては、経営学、社会学、文化人類学、史学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

本学部では、アートの感性と技術を基盤に、これら 4 つの分野および方法論からのアプローチによって、自然科学と人文・社会科学領域を横断した新たなデザイン学を追究する教育研究を行う。

（４）教育理念及び人材育成目的

① 教育理念

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景にした、

人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、フィジカルからデジタルに拡張し融合した未来の生活世界を感性豊かに創造できる人材を育成すべく、次世代研究大学を謳う総合大学としての本学の新たな発展を図ることを目的とする。

本学部は、デザイン学を一つのディシプリンとして捉え、歴史都市京都にある総合大学が展開する未来志向の新たなデザイン学を追求しつつ、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した教育・研究を展開する。企業や地域社会との連携を重視し、豊かな文化・生活様式や未来への持続可能な社会の形成に関わる創造的な表現活動に取り組む。

② 人材育成目的

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、本学園の根幹である「建学の精神」、「教学理念」および「立命館憲章」に則り、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨がる知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」、「問い直し力」、「共創力」、「問題発見力」および「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成する。

(5) 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

デザイン・アート学部は、学部則に規定する所定単位（合計 124 単位以上）を修得し、以下の資質・能力を備えた者に対して、「学士（デザイン・アート）」の学位を授与する。

① 知識・技能

- 1) フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる知識を身につけている。
- 2) フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる技能を身につけている。
- 3) 職域を問わず多様な社会や組織において、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる。

② 思考力・判断力、表現力等の能力

- 1) 美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができる。
- 2) 職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく意志決定や行動を行うことができる。
- 3) 職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能を活用してリーダーシップを発揮できる。

③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

- 1) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、デザイン・アート領域における新たな問題を

汲み上げることができる。

- 2) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、新しいフィールドを開拓し、その対象や方法論を提起することができる。
- 3) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、自分の構想を具体化することができる。

(6) 教育課程の編成方針（カリキュラム・ポリシー）

人材育成目的に掲げた人材を育成するために、デザイン・アート学部の授業科目は、専門科目および教養科目に区分し、これを4年間に配当して編成する。専門科目は、Design in Society (DiS) 科目群、Design Studies (DS) 科目群、Design Language (DL) 科目群、卒業研究および Design Study Abroad に区分し、Design Language (DL) 科目群は、英語 (English)、技能群 (Skill) および知識群 (Knowledge) に区分し、技能群 (Skill) および知識群 (Knowledge) は、導入および専門に区分する。また、教養科目は、立命館科目、教養基盤科目 (A 群)、国際教養科目 (B 群)、社会で学ぶ自己形成科目 (C 群)、スポーツ・健康科目 (D 群) および学際総合科目 (E 群) に区分する。加えて、学芸員の資格を得ようとする者のために、学芸員課程の授業科目を設ける。

○専門科目

「Design in Society (DiS) 科目群」

ディプロマ・ポリシー (DP) に設定した以下の能力を育成するために、Design in Society (DiS) 科目群を開設する。

- ・職域を問わず多様な社会や組織において、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる。(DP① (3))
- ・職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく意志決定や行動を行うことができる。(DP② (2))
- ・職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能を活用してリーダーシップを発揮できる。(DP② (3))

この科目群は2回生以上に配当され、他者との協働において「生成するプロセス」への参画を通して、デザイン・アートの実践知を修得する。「デザイン学生成プロジェクト演習1・2」(2回生以上)では、専門領野の異なる複数の教員から考案されるデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいたプロジェクトへ参画する。「デザイン学総合研究1・2」(3回生以上)では、基幹教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトへ参画する。

「卒業演習1・2」(4回生)では、自身が興味を持つデザイン・アート領域に関わる新たな研究テーマを定め、それに基づいた卒業研究プロジェクトを構想し具現化する。

特にここで社会実践に参画し、多様な社会実践者との協働によって身につけられる社会的スキルは、卒業後に職域を問わず多様な社会や組織において活躍するためのキャリア形成に資するものとなる。

「Design Studies (DS) 科目群」

ディプロマ・ポリシー (DP) に設定した以下の能力を育成するために、Design Studies (DS) 科目

群を開設する。

- ・他者との協働と省察を通した社会実践活動を通して、デザイン・アート領域における新たな問題を汲み上げることができる。(DP③ (1))
- ・他者との協働と省察を通した社会実践活動を通して、新しいフィールドを開拓し、その対象や方法論を提起することができる。(DP③ (2))
- ・他者との協働と省察を通した社会実践活動を通して、自分の構想を具体化することができる。(DP③ (3))

この科目群は1回生以上に配当され、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶ。この「意味づけ」は、「モノゴトの概念化」というデザイン・アートにおいて最も重要な役割を担うものである。

1回生は、「デザイン学1・2」で本学部でのデザイン・アートの学びを構成する4領域（「意味」「情報」「環境」「社会」）からそれぞれの理論的・実践的アプローチを学ぶ。

2回生は、「デザイン学3A・3B・4」でデザイン・アートに関わるさまざまな社会実践者の取り組み、および基幹教員の研究実践から学ぶ。

3回生は、「デザイン学5・6」でデザイン・アートに関わる国内外での最新の社会実践事例から学び、議論し、意味づけをしていく。

このような古今東西のさまざまなモノやコトの生成について、ケーススタディから自分が参画したプロジェクト（他者との協働において生成するプロセス）への意味づけ（モノゴトの概念化）を深く広く行えるようになることを目指す。

特にここで国内外に渡る多様な社会実践者との対話によって理解されるあるべき社会のビジョンは、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造する役割を担う卒業後のキャリア形成に資するものとなる。

「Design Language (DL) 科目群」

ディプロマ・ポリシー (DP) に設定した以下の能力を育成するために、Design Language (DL) 科目群を開設する。

- ・フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる知識を身につけている。(DP① (1))
- ・フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる技能を身につけている。(DP① (2))
- ・美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができる。(DP② (1))
- ・他者との協働と省察を通した社会実践活動を通して、自分の構想を具体化することができる。(DP③ (3))

本学部では、デザイン・アートに関わるさまざまな「知識」や「技能」を、協働における他者とのコミュニケーションのための「言語 (ランゲージ)」と捉えている。本科目群に配置された授業科目はまず「知識群 (Knowledge)」「技能群 (Skill)」に区分され、各群の導入系科目を1回生以上に配当、専

門系科目を2回生以上に配当している。この科目群に置かれた「知識」と「技能」を身につけていくことで、さまざまな他者との協働を円滑に、そして効果的に実践していくことが可能となる。

さらにここに、DP③に示される他者との協働と省察を通した社会実践活動を円滑に実施するためのコミュニケーション能力を育成するために「英語 (English)」の区分を置く。ここで、グローバル化が進展する世界の中で、多文化な環境において他者と協働していくために、他者を理解し、円滑なコミュニケーションを実現することで自分の構想を具体化することに資するための基礎的英語能力を修得する。言語や文法の理解だけでなく、英語による情報を収集、分析し、自らの考えをまとめ発信できる力量の修得を目指す。

特にここで身につけられるデザイン・アートに関わる知識と技能および英語運用能力は、卒業後に職域・地域を問わず多様な国際社会や組織において活躍するためのキャリア形成に資するものとなる。

「卒業研究」

本学部では、以上の科目群での学びを通して自分の研究テーマを明確化したうえで、その学びの集大成として4回生での「卒業研究」に臨む。本学部では、卒業研究を必修科目としている。

「Design Study Abroad」

ディプロマ・ポリシー (DP) に設定した以下の能力を育成するために、Design Study Abroad 科目を開設する。

- ・フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる知識を身につけている。(DP① (1))
- ・フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる技能を身につけている。(DP① (2))
- ・美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができる。(DP② (1))
- ・他者との協働と省察を通した社会実践活動を通して、デザイン・アート領域における新たな問題を汲み上げることができる。(DP③ (1))

Design Study Abroad では、短期間の海外研修により国際的に視野を広げ、異文化におけるデザイン・アートのアプローチや実践を学ぶことで、学生自身が取り組むべき研究課題を広い視野から再認識することを目的とする。学生は海外のデザイン・アートに関連する研究教育機関、組織、企業、公共施設、スタジオ、ワークショップ等での研修を通じて、グローバルなデザイン・アートの潮流、および地域文化に根ざした独自の美的感性や表現のあり方を直接体験する。さらに、異文化交流を通じて多様な価値観を理解し、将来のキャリアに役立つ国際的なネットワークを築く機会を得ることを目指す。

○教養科目

DP③に示される他者との協働と省察を通した社会実践活動を円滑に実施し、DP② (3)に示される職域を問わず多様な社会や組織においてリーダーシップを発揮するための幅広い分野の知識を修得するために、教養科目群を開設する。

教養科目群では、総合大学の特長を活かして、学部の専門領域からより幅広い分野の知識を修得し、自らの専門分野を相対化させ深めるとともに、多面的に思考・判断できる力量を身につける。

【学修方法と学修成果の評価方針】

本学部のカリキュラムはキャンパス内に留まらず、「まち全体がラーニングプレイス」というコンセプトに基づき、大学の学びをキャンパスの外へと広げ、地域社会での多様な学びの「場」、企業や社会との連携を重視した実践的な教育・研究の「機会」を創出するとともに、デジタル・インフラもフルに活用した多様な学びの手法を取り入れながら実践される。

専門科目群の各授業科目では、プロジェクトベースの探究活動を基本とし、グループワーク、実習、フィールドワークなどの実践的な学びを通じて、学生が美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮できるよう設計する。これらの科目では、学修の成果を主に制作物やその制作プロセスをまとめたポートフォリオ、プロジェクト成果物、論文、報告書、展示・プレゼンテーション、口頭試問などによって評価する。なお、Design Language (DL) 科目群「知識群 (Knowledge)」や教養科目群において知識の獲得を目的とする一部の授業科目においては、学修成果を教場での記述式試験や論述レポートによって評価する。

【学生の主体的な学びの促進】

初年次教育から卒業研究までを一貫して、学生が主体的に学びを展開できるように支援する。特に、初年次教育では学生が自己の主体的な学び方を確立すること、DiS 科目群では社会実践に参画すること、DS 科目群では社会実践の経験を概念化すること、DL 科目群では知識や技能を身につけることを方針とした授業科目を提供する。

本学部では自分の学びのプロセス自体もデザインの対象と捉えている。つまり、ひとりひとりが自身のビジョンとその実現のための計画に基づき、DL 科目群に置かれた知識と技能をどの順番で、どのタイミングで身につけていくか、自分の学びを自分自身でデザインしていく主体的な姿勢が求められる。実際にどの授業科目をいつどのように履修していくかについては、各学年の年度末に基幹教員による個人面談によって、「前年度までの学修成果」「個人の学修ビジョン」「当該年度の授業科目履修計画」を確認・相談することで決めていく。

(7) 入学者受入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

【求める学生像】

デザイン・アート学部では、以下の資質・能力を備えた学生を求める。

① 知識・技能

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮し、フィジカルとデジタルに跨るデザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるために、高等学校卒業相当の基礎学力を有している者。

② 思考力・判断力、表現力等の能力

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮するために、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲を持つ者。

③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮して、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を構想し、他者との協働においてそれを具現化するための努力を惜しまない者。

【選抜のあり方と評価の方針】

デザイン・アート学部では、複数の受験機会と多様な入試方式を提供することで、個別学力検査、社会実践活動、作品ポートフォリオと面接、構想力テストなどを組み合わせて志願者の能力や資質を総合的に評価する。

【資料1】デザイン・アート学部における養成する人材像と3ポリシーの相関図

【資料2】デザイン・アート学部 カリキュラムマップ

【資料3】デザイン・アート学部 カリキュラムツリー

2. 学部・学科等の特色

本学部の特色として、以下の7点が挙げられる。

- ・デザイン学を一つのディシプリンとして捉え、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した新たなデザイン学を追究する教育研究を、総合大学としての本学の多様な文化研究資源を活用しながら展開する。
- ・アートを基盤とした新たなデザイン学の展開において、京都という地が持つ意味を重要視する。世界的にも有数のデザイン・アートのキャピタル・シティである京都に蓄積される様々な文化、歴史や芸術に日常的に触れることができる環境は、美的感性を育成するうえで掛け替えのないものである。また、本学部を設置する衣笠キャンパスには、190万点以上の文化芸術に関わる作品・資料のアーカイブを擁するアート・リサーチセンターをはじめとした研究機関があり、これらのリソースを教学に活用する。
- ・新たなデザイン学のディシプリンにおいて育成されるべき能力を、「問題解決力」、「問い直し力」、「共創力」、「問題発見力」、「創造的思考力」として定義する。これらの5つの能力は、いずれも美的感性による裏打ちを要するものである。これがデザイン学のベースにアートの知と技法が不可分に組み込まれるべき根拠でもある。
- ・ここでの美的感性は、ある物事や経験から引き起こされた自らの感覚・感情に基づき、観察、洞察、構成を経て、造形表現と身体表現として実現される実践的過程のなかに宿るものとして捉えられ、本学部のカリキュラムに編み込まれる。そしてこの美的感性に裏打ちされた5つの能力は、本学部のカリキュラムがカバーする4つの領野、すなわち「意味のデザイン」、「情報のデザイン」、「環境のデザイン」、「社会のデザイン」の4つのデザインを新たな次元で追求することを可能にする。
- ・デザイン・アートの学びが常に学内外の他者との協働において生成するプロセスのなかにあることを踏まえ、まち全体をラーニングプレイスと捉えた、大学の学びをキャンパスの外に広げた多様な社会での学びの場および企業や社会との連携において、豊かな文化・生活様式や未来への持続可能な社会の形成に関わる創造的な表現活動に取り組む。

- ・多様な社会での学びの場を高次元に構築するために、リアルとともに、オンライン・オンデマンド・バーチャル空間などを利用したバーチャル・キャンパス、バーチャルコミュニティ、バーチャル授業を導入し、柔軟な学びの機会を設定すること、学生間や教員と学生間の共同作業やコミュニティ形成のプラットフォームを構築する。
- ・総合大学である本学では、様々な分野を学ぶ学生がその専門領域の境界を越えて混ざり合い、それぞれの専門性を高めていく環境が整えられている。本学部の学生たちは、総合大学としての特徴を生かした学びを通じて、自らの省察を行いながらその専門性を相対化し、多様な学生と協働し、共創的な活動に取り組むことができる。

3. 学部・学科等の名称及び学位の名称

デザイン・アート学部の学部名称、学科名称および学位名称は、①アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した新たなデザイン学を追究する教育研究を、本学の多様な文化研究資源を活用しながら展開すること、②デザイン学のディシプリンの検討から導かれた能力としての、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、クリエイティブで柔軟な思考を涵養していくこと、③日本の歴史と文化を踏まえた独自のデザイン・アート教育を推進すること、の3点を鑑み、本学部がアートを基盤にしたデザイン学の教育研究を行うものであることを、国際的通用性を踏まえた英訳名称とともに的確に表現する名称としている。

特にここでのアートは英訳名称を含め、美術・芸術領域を表す意味に限定されず、その語源であるラテン語のアルスに立ち返り、本学部が謳う自然科学と人文・社会科学領域の横断的知性、多様な文化研究に基づいた教養や作法を駆使する技芸・学術という意味を包含する。具体的な学部、学科、学位名称は以下のとおりである。

学部名称

(名 称) デザイン・アート学部

(英訳名称) College of Arts and Design

学科名称

(名 称) デザイン・アート学科

(英訳名称) Department of Arts and Design

学位名称

(名 称) 学士(デザイン・アート)

(英訳名称) Bachelor of Arts and Design

4. 教育課程の編成の考え方及び特色

(1) 科目区分の設定及びその理由

設置の趣旨、教育理念、養成する人材像、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、および教育課程の編成方針(カリキュラム・ポリシー)を踏まえ、次のように教育課程を編成する。

本学部の授業科目は、「専門科目」と「教養科目」の2つの大区分を、その下に中区分、小区分を設定

し構成する（表 1）。「専門科目」のもとに中区分として学びの主軸となる「Design in Society (DiS) 科目群」、「Design Studies (DS) 科目群」、および「Design Language (DL) 科目群」を設け、さらに学びの学修成果として「卒業研究」を、留学プログラム区分として「Design Study Abroad」を設け、5 つに区分する。

小区分は「Design Language (DL) 科目群」の下に構成する。小区分には「英語 (English)」、「技能群 (Skill)」、「知識群 (Knowledge)」の 3 つに区分する。「技能群 (Skill)」と「知識群 (Knowledge)」については、「導入」および「専門」に授業科目を分類する。「導入」には、「技能群」の授業科目を「デザイン・アート技能基礎」と「アート表現基礎」に、「知識群」の授業科目を「デザイン・アート知識基礎」に授業科目を分類する。「専門」には、「意味」「情報」「環境」「社会」「特殊演習」「特殊講義」「アート表現応用」に授業科目を分類する。

表 1 科目区分

科目区分					
大区分	中区分	小区分			
専門科目	Design in Society（DiS）科目群	—			
	Design Studies（DS）科目群	—			
	Design Language（DL）科目群	英語(English)			
		技能群（Skill）	導入	デザイン・アート技能基礎 アート表現基礎	
			専門	意味 情報 環境 社会 アート表現応用 特殊演習	
		知識群 （Knowledge）	導入	デザイン・アート知識基礎	
			専門	意味 情報 環境 社会 特殊講義	
	卒業研究				
	Design Study Abroad				
教養科目	—				

① 専門科目

本学部の学びは、プロジェクトへの参画を中心とした「Design in Society 科目群」とプロジェクトでの経験を意味づけする「Design Studies 科目群」の学びの往還を主軸に展開し、各年度末に基幹教員との相談によって立てられる回生履修計画に基づき、「Design Language (DL) 科目群」から学生自身のビジョンの実現に必要な授業科目を選択し履修する。これらの学びを通して学びの集大成として 4 回生に「卒業研究」を配置する。さらに短期派遣留学プログラムの区分として「Design Study Abroad」を設定する。

各科目区分は以下のとおりとなる。

1) Design in Society (DiS) 科目群

この科目群は 2 回生以上に配当され、他者との協働において「生成するプロセス」への参画を通

して、デザイン・アートの実践知を修得することを目的に設定する。これは本学部がディシプリンとする新たなデザイン学のデザイン理論のひとつ「思考方法としてのデザイン」を構成する科目区分となり、ディプロマ・ポリシーの①知識・技能 (3) および②思考力・判断力、表現力等の能力 (2) (3) の能力を育成する。

ここでは、2 回生春学期に「デザイン学生成プロジェクト演習 1」、秋学期に「デザイン学生成プロジェクト演習 2」を配置し、専門領野の異なる複数の教員から考案されるデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいたプロジェクトへ参画する。3 回生春学期には「デザイン学総合研究 1」、秋学期に「デザイン学総合研究 2」を配置し、基幹教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトへ参画する。これらのプロジェクト実践型授業への参画を通じて、自分の研究テーマを明確化したうえで 4 回生の学びへ進み、4 回生春学期に「卒業演習 1」、秋学期に「卒業演習 2」を配置する。なお、「卒業演習 1」「卒業演習 2」における指導が「卒業研究」として 4 年間の学びの成果へとつながる。

Design in Society (DiS) 科目群は全授業科目を必修科目とし、合計 12 単位の修得を必要とする。具体的な授業科目は下表のとおりである (表 2)。

表 2 Design in Society (DiS) 科目群

科目区分	1 回生		2 回生		3 回生		4 回生	
	1 セメスター	2 セメスター	3 セメスター	4 セメスター	5 セメスター	6 セメスター	7 セメスター	8 セメスター
Design in Society [DiS]			●デザイン学生成 プロジェクト演習1 ②	●デザイン学生成 プロジェクト演習2 ②	●デザイン学 総合研究1②	●デザイン学 総合研究2②	●卒業演習1②	●卒業演習2②

●…必修科目、○内の数字は単位数

ここでは主要授業科目を以下の通りとする。

「デザイン学生成プロジェクト演習 1」、「デザイン学生成プロジェクト演習 2」、
「デザイン学総合研究 1」、「デザイン学総合研究 2」、「卒業演習 1」、「卒業演習 2」

2) Design Studies (DS) 科目群

この科目群は 1 回生以上に配当され、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶことを目的に設定する。この「意味づけ」は、「モノゴトの概念化」というデザイン・アートにおいて最も重要な役割を担うものである。これは本学部がディシプリンとする新たなデザイン学のデザイン理論のひとつ「省察的实践としてのデザイン」を構成する科目区分となり、Design in Society (DiS) 科目と学びの往還の構造となり、ディプロマ・ポリシーの③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度 (1) (2) (3) の能力を育成する。

ここでは、1 回生春学期に「デザイン学 1」、秋学期に「デザイン学 2」を配置し、本学部でのデザイン・アートの学びを構成する 4 領野からそれぞれの理論的・実践的アプローチを学ぶ。

2 回生からは、「Design in Society (DiS) 科目群」においてプロジェクトへの参画を通して経験し

たことに対して、どのように「意味づけ」していくのかについて、社会実践や研究実践からその考え方と方法について学ぶ。

2 回生春学期に「デザイン学 3A」、秋学期に「デザイン学 3B」および「デザイン学 4」を配置する。「デザイン学 3A」および「デザイン学 3B」は、デザイン・アートに関わるさまざまな社会実践者の取り組みおよび基幹教員の研究実践から学び、「デザイン学生生成プロジェクト演習 1」および「デザイン学生生成プロジェクト演習 2」における実践的学びを意味づけ（モノゴトの概念化）する。「デザイン学 4」では、3 回生 Design in Society (DiS) 科目群「デザイン学総合研究 1」および「デザイン学総合研究 2」のクラスを選択する際の視座となるべく新しいデザイン学の学びを深める。

3 回生春学期に「デザイン学 5」、秋学期に「デザイン学 6」を配置し、デザイン・アートに関わる国内外での最新の社会実践事例から学び、議論し、意味づけしていく。このような古今東西のさまざまなモノやコトの生成について、ケーススタディから「デザイン学総合研究 1」「デザイン学総合研究 2」を通して自分が参画したプロジェクト（他者との協働において生成するプロセス）への意味づけ（モノゴトの概念化）が、深く広く行えるようになることを目指す。

Design Studies (DS) 科目は全授業科目を必修科目とし、具体的な授業科目は下表のとおりである（表 3）。

表 3 Design Studies (DS) 科目群

科目区分	1 回生		2 回生		3 回生		4 回生	
	1 セメスター	2 セメスター	3 セメスター	4 セメスター	5 セメスター	6 セメスター	7 セメスター	8 セメスター
Design Studies [DS]	●デザイン学1④	●デザイン学2④	●デザイン学3A②	●デザイン学3B② ●デザイン学4②	●デザイン学5②	●デザイン学6②		

●…必修科目、○内の数字は単位数

ここでの主要授業科目は以下の通りとする。

「デザイン学 1」、「デザイン学 2」、「デザイン学 3A」、「デザイン学 3B」、「デザイン学 4」、
「デザイン学 5」「デザイン学 6」

3) Design Language (DL) 科目群

デザイン・アートに関わるさまざまな「知識」や「技能」を、協働における他者とのコミュニケーションのための「言語(ランゲージ)」と捉えている。本科目群に配置された授業科目は「英語(English)」
「技能群 (Skill)」「知識群 (Knowledge)」に区分され、「技能群 (Skill)」「知識群 (Knowledge)」の導入科目を 1 回生以上に配当、専門科目を 2 回生以上に配当する。

「英語 (English)」は、グローバル化が進展する世界の中で、多文化な環境において他者と協働していくために、他者を理解し、コミュニケーションを取るための基礎的英語運用能力を修得する。外国語を理解するだけでなく、デザイン・アートに関連する自らの経験や興味関心、テーマに関して、英語による情報を収集、分析し、自らの考えをまとめ発信できる力量の修得を目指すことを目的に設定し、本学部の専門教育と連携した内容とする。

また、「知識群 (Knowledge)」「技能群 (Skill)」に置かれた「知識」と「技能」を身につけていく

ことで、さまざまな他者との協働を円滑に、そして効果的に実践していくことが可能となることを目的に設定する。これは本学部がディシプリンとする新たなデザイン学のデザイン理論のひとつ「分野を横断する共通言語（リベラルアーツ）としてのデザイン」を構成する科目区分となる。さらにこの科目区分には「問題解決行動としてのデザイン」を構成する理系分野科目および「意味の創造としてのデザイン」を構成する文系分野科目を配置し、ディプロマ・ポリシーの①知識・技能（1）（2）、②思考力・判断力、表現力等（1）、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（1）（2）（3）の基盤なるコミュニケーション能力を育成する。

英語教育に関する授業科目では、1・2 回生で基礎力を養成することに重点を置き、「Design Language (DL) 科目群」の基礎的な科目群「英語 (English)」として「英語 P1」「英語 P2」「英語 P3」「英語 P4」を配置する。全授業科目を全学生の必修科目として配置する。

「技能群 (Skill)」と「知識群 (Knowledge)」においては、1 回生に導入系科目を、2 回生以降に専門系科目を配置し、基幹教員との相談によって立てられる履修計画に基づき、学生自身のビジョンの実現に必要な授業科目を選択し履修する。なお、知識群 (Knowledge) 科目はメディア授業（遠隔授業）を原則とする。技能群 (Skill) 科目は原則面接授業とし、技能習得のためのレクチャーやディスカッション、実践といった演習をオープンスタジオやオープンアトリエ等を活用して展開する。具体的な授業科目は下表のとおりである（表 4）。

表 4 Design Language (DL) 科目群

科目区分			1 回生		2 回生		3 回生		4 回生	
			1 セメスター	2 セメスター	3 セメスター	4 セメスター	5 セメスター	6 セメスター	7 セメスター	8 セメスター
Design Language [DL]	英語 [E]		●英語 P1②	●英語 P2②	●英語 P3②	●英語 P4②				
	技能群 [S]	導入 I	デザイン・アート技能基礎 [DL-S-I-a] アート・ドキュメンテーション② / デザイン・アートのための製図② / デザイン・アートのためのプログラミング② / デザインリサーチ② / デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング② / デジタルビジュアルデザイン基礎② / Web デザイン基礎②							
			アート表現基礎 [DL-S-I-b] デジタルアート表現基礎(絵画)② / デジタルアート表現基礎(立体造形)② / フィジカルアート表現基礎(絵画)② / フィジカルアート表現基礎(身体パフォーマンス)② / フィジカルアート表現基礎(立体造形)②							
	技能群 [S]	専門 M	デザインする/デザインされる 意味 [DL-S-M-a] アート作品のデジタル分析技術② / 工芸・美術・芸能の社会活用② / テキストマイニング②/ デザイン評価法② / デジタル文化資源の活用② / データベース構築法②/ パフォーマンス制作と記録②/ 美術品・工芸品のデジタル化技術②							
			デザインする/デザインされる 情報 [DL-S-M-b] 映像・音声アーカイブ② / コンピュータグラフィックス② / サウンド処理② デザインと AI・人工知能・機械学習② / デザインとバーチャルリアリティ② / デザインのためのビッグデータ解析② / デジタルファブリケーション② / Web アーカイブ技術② / Web コンテンツ活用システム②							

Design Language [DL]	技能群 [S]	専門 M	デザインする/デザインされる 環境 [DL-S-M-c] コミュニティデザイン② / ジオデザイン② / 地域調査法② / データビジュアライゼーション② / CAD/CG 演習② デザインする/デザインされる 社会[DL-S-M-d] アートマネジメント演習② / グラフィックファシリテーション② / サービスデザイン② / デザインエスノグラフィー② / ワークショップデザイン② アート表現応用 [DL-S-M-e] デジタルアート表現応用(インスタレーション)② / フィジカルアート表現応用(インスタレーション)② 特殊演習 [DL-S-M-f] デザイン・アート特殊演習②
	知識群 [K]	導入 I 専門 M	デザイン・アート知識基礎 [DL-K-I-a] インダストリアルデザイン論② / 京都・伝統文化論② / グローバルデザイン論② / 芸術批評論② / 地域デザイン論② / デザイン・アートとコンピュータ基礎② / デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション② / デザイン態度論② / デザイン理論② / デジタルヒューマニティーズ概論② / 人間中心デザイン論② デザインする/デザインされる 意味 [DL-K-M-a] 音楽とデザイン② / 芸能・演劇史② / 現代アート論② / 工芸・産業史② / 視覚芸術表現論② / 視覚文化・芸術史② / 身体表現論② / デザインと人類学② デザインする/デザインされる 情報 [DL-K-M-b] 感性・認知情報処理論② / デザインとコンピュータ応用② / デザインと知覚② / デザインと人間工学② / デザインのための数理② / デザインのためのデータマイニング② / デジタルアーカイブ概論② / デジタルメディアデザイン論② / メディア処理論② デザインする/デザインされる 環境 [DL-K-M-c] 建築意匠論② / 建築情報論② / コ・デザイン論② / 地理情報科学② / 都市デザイン② / ランドスケープ・庭園史② / 歴史まちづくり② デザインする/デザインされる 社会 [DL-K-M-d] アートマネジメント論② / 戦略的デザイン論② / デザイン・アートと国際社会② / デザイン・アートと世界史② / デザイン・アートと歴史・考古学② / デザインと行政② / デザインと知的財産権② / デザインとマーケティング② / デザインマネジメント論② / 美術教育論② / ミュゼオロジー② 特殊講義[DL-K-M-e] デザイン・アート特殊講義②

●…必修科目、○内の数字は単位数

ここでの主要授業科目は以下の通りとする。

「英語 P1」「英語 P2」「英語 P3」「英語 P4」

4) 卒業研究

4年間の学びの学修成果として卒業研究を設ける。

ここでは、学びの学修成果として4回生8セメスターに「卒業研究」を配置し、全学生必修とする（表5）。内容としては、デザイン・アート分野の制作物とそれに関わる報告論文、またはデザイン・アート分野に関わるテーマの論文とし、2単位とする。4回生の「卒業演習1」および「卒業演習2」とも連動させながら、その指導教員が指導を行う。

表5 卒業研究科目

科目区分	1回生		2回生		3回生		4回生	
	1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター
卒業研究								●卒業研究②

●…必修科目、○内の数字は単位数

ここでの主要授業科目は以下の通りとする。

「卒業研究」

5) Design Study Abroad

国内に留まらず、海外における様々な社会実践に触れ、参画し、多様な社会実践者との協働を経験する短期派遣留学プログラムのための区分を設ける。デザイン・アートに関連する様々な直接的な体験を通して、学生自身の取り組むべき研究課題を国際的な広い視野から再認識することを目的として、ディプロマ・ポリシーの①知識・技能（1）（2）、②思考力・判断力、表現力等（1）、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（3）の能力を育成する。

ここでは、本学部独自の日本固有の知と文化資源を海外の知見と結び付け、国際的な幅広い視野をもって自身の構想を具体化することを目的に、短期派遣留学プログラムを選択科目として配置する。配当回生は1回生以上、単位数は2単位とする（表6）。海外のデザイン・アートに関連する研究教育機関、組織、企業、公共施設、スタジオ、ワークショップ等での研修を通じて、グローバルなデザイン・アートの潮流及び地域文化に根差した独自の美的感性や表現のあり方を直接体験する内容とする。

表6 Design Study Abroad 科目

科目区分	1回生		2回生		3回生		4回生	
	1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター
Design Study Abroad	Design Study Abroad ②							

○内の数字は単位数

② 教養科目

本学の教養教育センターが提供する教養科目と様々な学部の授業を受講して単位を修得することができる他学部受講科目を教養科目として位置づけ、総合大学の特長を活かして、学部の専門領域からより幅広い分野の知識を修得し、自らの専門分野を相対化させ深めるとともに、多面的に思考・判断できる力量を身につけることを目的に設定する。

本学の教養教育センターが提供する教養教育の目標および到達目標は以下のとおりである。

- ア（知識・理解）学部固有の専門教育とは異なる知的体系や方法論による学習によって、自らの専門性を相対化し考察する能力の習得を目指す。
- イ（思考・判断・意識）豊かな教養と深い洞察力の獲得によって、人生の指針となる知性と知恵、価値観、考え方の涵養を目指す。
- ウ（態度・行動）他者と実践をともにする中で多様な価値観を踏まえて主体的に学習する姿勢を身につけ、現代社会を切り拓く力の育成を目指す。
- 上記教育目標を達成するため、教養科目の科目区分は下表のとおり設定する（表 7）。

教養科目の授業科目は以下の「立命館科目」および A 群から E 群に分類され、A 群には、思想と人間、現代と文化、芸術と創造、社会・経済と統治、世界の史的構成、自然・科学と人類および数理と情報、B 群には国際教養科目、異文化交流科目および海外留学科目、C 群は実社会の人々や受講生同士との対話や協働を通じて学ぶアクティブラーニングの形式を取り、特徴の異なるキャリア教育科目とサービスラーニング科目を置く。また、各授業科目は配当回生に基づき、「導入」「形成」「先端」に位置づける。「導入」科目は 1・2 回生に、「形成」科目は授業科目ごとに 1 回生以上、1 回生から 3 回生まで、2 回生以上、2・3 回生に、「先端」科目は 3 回生以上に配当する(表 7)。

表 7 教養科目の科目区分

群	分野、科目区分など	内容
立命館科目	—	学生自らが立命館大学で学ぶ意義を理解し、未来を描き、未来を創る人間への成長に向けて、その礎を築くための科目群
A 群 (教養基盤科目)	第 1 分野 思想と人間 第 2 分野 現代と文化 第 3 分野 芸術と創造 第 4 分野 社会・経済と統治 第 5 分野 世界の史的構成 第 6 分野 自然・科学と人類 第 7 分野 数理と情報	学問や社会生活を営む上で必然とされる文化・芸術に関する幅広い知識を通して得られる理解力、洞察力及び創造的活力の獲得を目的とする科目群
B 群 (国際教養科目)	国際教養科目区分 異文化交流科目区分 海外留学科目区分	グローバル化社会において必要となる異文化の相互理解の基礎となる科目群
C 群 (社会で学ぶ自己形成科目)	キャリア教育科目 サービスラーニング科目	実社会（企業・公益団体・地域社会等）との連携・協働・相互理解を通して、現代社会を生きる上で求められる市民としての倫理観・正義感・責任感の必要性を理解するとともに、問題発見や創造的課題解決を行う能力を身につける科目群

D 群 (スポーツ・健康科目)	—	スポーツに親しみ健康に関する意識を高めることは、若者の人間形成と健康づくりに重大な役割を果たします。この認識のもとに、スポーツ実践そのものを学びの対象とする実技科目と、スポーツを題材としたスポーツの歴史、スポーツの現代社会との関り、スポーツの科学的な研究ならびに健康づくりを題材としたヘルスケア、地域コミュニケーションをテーマとする講義科目によって構成される科目群
E 群 (学術総合科目)	—	現代社会に必要な課題をテーマとし、学際的・総合的な知の構築を目指し、とりわけ学生の主体的な授業参加を重視する科目群

③ 学芸員課程科目

本学部においては、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材の育成をめざす。これを踏まえ、国家資格である学芸員の資格を取得できるように、学芸員課程科目を設け、講義科目は 2 回生以上、実習科目である博物館・学内実習は 3 回生以上、博物館・館園実習は 4 回生に配当する。

本学部では、多くの情報量を持つコンテンツをアーカイブし、様々なデザイン実践の場で活用していくこと、ビジネス、地域社会、教育、異文化コミュニケーションなど様々な社会実践分野にデザインを応用すること等の学びを展開する。博物館法の一部が改正されたことに伴い、展示企画、運営、教育普及、教育活動等、益々多様化する博物館、美術館の事業が、本学部における学びを十分に発揮される場となることが想定され、資格取得のための授業科目としての位置づけに加え、専門の学びをさらに広げていく内容の科目群とする。

④ 他学部受講

他学部受講科目は、本学の各学部が専門科目を全学に開放する科目枠であり、他学部生の履修に際して教育効果があると他学部が認める授業科目である。本学部生は 3 回生以上に配当する。

上記の教養科目から 20 単位以上の履修を全学生必修とする。

(2) 4 年間の教育方法

本学部における 4 年間の教育方法を以下に示す（図 1）。

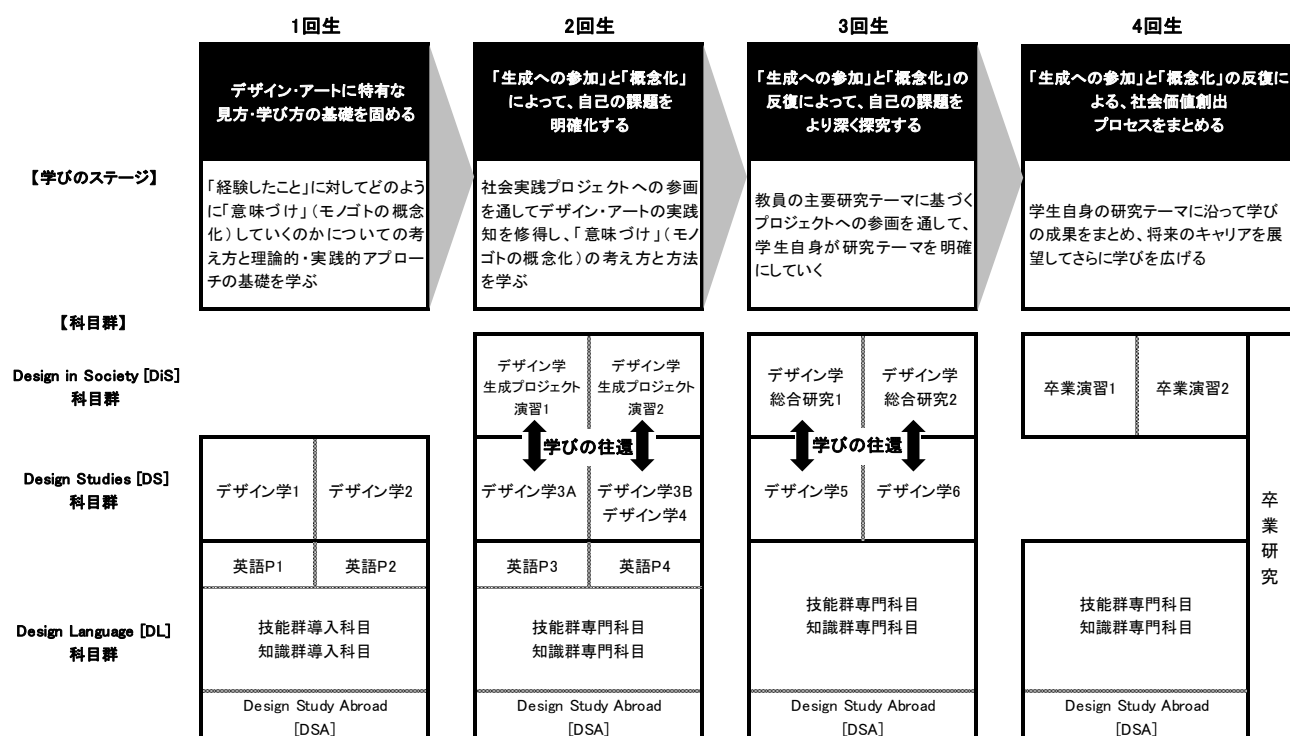


図 1 4 年間の教育方法（【学びのステージ】と【科目群】）

1 回生は、学部での専門的な学びの基礎となる力の修得を目標とする。プロジェクトへの参画を通して「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」（モノゴトの概念化）していくか、その考え方と理論的・実践的アプローチの基礎について学ぶ「Design Studies (DS) 科目群」を履修する。「Design Studies (DS) 科目群」のうち「デザイン学 1」および「デザイン学 2」は小集団科目としてクラス機能を持たせ、デザイン・アートの学びを構成する 4 領域（意味・情報・環境・社会）の様々な角度からの知見を得ることでデザイン・アートに関わる学びの基礎はもちろん大学での生活と学修の導入として位置づける。

「Design Language (DL) 科目群」においては、知識群および技能群の導入科目を履修し、協働における他者とのコミュニケーションのためのデザイン・アートに関わる「知識」「技能」の基礎を修得する。特にアートの視点から、対象（モチーフ）の在り方と自己との関係性を、五感を駆使して感じ取り、既成概念を問い直すプロセスを通じて本学部のデザイン・アートの学びを社会に展開するために通底する基本的な視座と姿勢を獲得する。さらに、幅広い教養科目や英語の学修などにより、4 年間の学びの基盤を形成する時期とする。

2 回生は、本学部の学びの主軸となるプロジェクト実践型授業が始まり、学びの展開期となる。他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して、デザイン・アートの実践知を修得することを目的とした「Design in Society (DiS) 科目群」の学びが開始し、小集団科目「デザイン学 生成プロジェクト演習 1」および「デザイン学 生成プロジェクト演習 2」の履修が始まる。この授業科目は理系文系

なくクラス編成を行うことで幅広い視野を修得させる。京都をフィールドにデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいたプロジェクトへ参画し、「Design Studies (DS) 科目群」の「デザイン学 3A」および「デザイン学 3B」を通して「意味づけ」(モノゴトの概念化)の考え方と方法を学び、プロジェクトへの参画と「意味づけ」の学びを往還することで生成する新たなデザインの意味について批判的に検討し、アップデートし続ける自律性を育む。「Design Language (DL) 科目群」においては、知識群および技能群の専門系科目の履修を開始する。

3 回生は、学びの発展期となり、「Design in Society (DiS) 科目群」の小集団科目「デザイン学総合研究 1」および「デザイン学総合研究 2」を通して、学生自身の関心テーマに沿った教員の主要テーマに基づくプロジェクトへ参画することで、研究テーマを明確化していく。「Design Language (DL) 科目群」においては、研究テーマに沿って履修する。

4 回生は、デザイン・アート学部における学びの集大成期となり、「Design in Society (DiS) 科目群」の小集団科目「卒業演習 1」および「卒業演習 2」を通して「卒業研究」に向けた学びを展開する。同時に、就職または進学等の将来のキャリアを展望してさらに学びを広げることを目的に「Design Language (DL) 科目群」を履修する。

(3) 単位時間数と教育効果の確保

本学部の授業科目の設定単位数の考え方は、立命館大学学則第 34 条に定めており、各授業科目の単位数は、1 単位あたり 45 時間の学習を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果および授業時間外に必要な学修等を考慮して、おおむね 15 時間から 45 時間までの範囲で次の基準により 1 単位と計算するものとする。

- ① 講義および演習については、教授会の定めるところにより毎週 1 時間から 2 時間までの範囲で、14 週の授業をもって 1 単位とする。
- ② 実験、実習および実技については、教授会の定めるところにより毎週 2 時間から 3 時間までの範囲で 14 週の授業をもって 1 単位とする。
- ③ 上記①の授業科目について、講義、演習、実験、実習または実技のうち 2 つ以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じて、②の基準を考慮して、教授会の定める時間の授業をもって 1 単位とする。

本学は、1 年間を春学期（前期）および秋学期（後期）の 2 つの学期に分け、各学期で授業を完結させるセメスター制を導入し、1 学期の授業期間を 14 週、週 1 回あたりの授業は 95 分、これに授業外学習および 20 分以上の VOD 授業で構成した授業を 2 単位とする。

また、本学部の授業期間の考え方は、同第 35 条に定めており、1 年間の授業を行う期間は、35 週にわたることを原則とし、各授業科目の授業は、本学部では 14 週にわたる期間を単位として行う。

以上のように適切な期間を確保し、授業の方法に応じて十分な教育効果を上げることができるよう配慮している。

(4) 人材育成目的、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程の編成方針（カリキュラム・ポリシー）との整合性

デザイン・アート学部教育課程は、前述の人材育成目的を達成するために卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）および教育課程の編成方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき編成し、相互に関連している。具体的には以下の資料の通りの相関、整合性となる。

【資料1】デザイン・アート学部における養成する人材像と3ポリシーの相関図

【資料2】デザイン・アート学部 カリキュラムマップ

【資料3】デザイン・アート学部 カリキュラムツリー

5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

(1) 授業方法・学生数・配当回生

授業の方法は「講義」「演習」「実習」とし、授業形態は「面接授業」および「メディア授業(遠隔授業)」とする。「メディア授業(遠隔授業)」は同時双方向型およびオンデマンド型、同時双方向型とオンデマンド型の併用を組み合わせた方法をとる。卒業認定・学位授与の方針および教育課程編成の方針を踏まえて以下のとおりそれぞれの関連性を持たせた教育方法、学生数、配当回生とする。

科目区分ごとの具体的な授業方法・学生数・配当回生は以下のとおりとなる。

「Design in Society (DiS) 科目群」

この科目群は、プロジェクト実践型授業となり、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して、デザイン・アートの学びを構成する4領域(意味・情報・環境・社会)からデザイン・アートの実践知を修得することを目的に配置し、いずれも「演習」として授業を展開する。小集団科目として位置づけ、必修科目とする。

「デザイン学生成プロジェクト演習1・2」および「デザイン学総合研究1・2」はプロジェクト実践型授業となるため、クラス規模は15～18名とする。2回生に配置する「デザイン学生成プロジェクト演習1・2」は、専門領域の異なる2名の教員から考案されるデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいたプロジェクトへ参画し、デザイン・アートの実践知を広げる。3回生に配置する「デザイン学総合研究1・2」は担当教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトへ参画し、幅広いテーマに触れるなかで自身の研究テーマを明確にしていく。1回生から3回生における経験で得たものを基に学生は自身の研究テーマを指導してもらう教員のゼミを選択し、指導教員の指導のもとで4回生に「卒業演習1・2」が展開され、4年間の学びの集大成として「卒業研究」を形作る。「卒業演習1・2」のクラス規模は8名程度とする。

各授業科目の配当回生は、基礎から段階的に学びを展開していくことを念頭に以下の通りとする。

2回生配当 デザイン学生成プロジェクト演習1 デザイン学生成プロジェクト演習2

3回生配当 デザイン学総合研究1 デザイン学総合研究2

4回生配当 卒業演習1 卒業演習2

「Design Studies (DS) 科目群」

この科目群では、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して「経験したこと」に対して自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶ。「デザイン学 1」「デザイン学 2」は「演習」として、「デザイン学 3A」「デザイン学 3B」「デザイン学 4」「デザイン学 5」「デザイン学 6」は「講義」として授業を展開し、全ての授業科目を必修科目とする。

「デザイン学 1」および「デザイン学 2」はデザイン・アートの学びを構成する 4 領域から理論的・実践的アプローチを学ぶ。具体的には、授業運営上の工夫として、「22～23 名×8 クラス」を目安に編成し、2 クラスごとに 4 つのスタジオを周回していき、春学期では「アート」、「デザイン」、「サイエンス」、「ヒューマニティーズ」、秋学期では「意味」、「情報」、「環境」、「社会」の領域に関して学び、2 回生から「Design in Society (DiS) 科目群」で展開するプロジェクト実践型授業を履修するうえでの基盤を創る。講義を通して課題制作等に取り組み、各領域の講義終了後はリフレクションの授業回を設ける。小集団科目として位置づける。

「デザイン学 3A」および「デザイン学 3B」は、基幹教員 1 名がコーディネーターとなり、「デザイン学 生成プロジェクト演習 1・2」で展開するプロジェクト先から外部講師を招聘し、社会実践者の取組から「意味づけ」についての考え方と方法を学ぶ。1 学年 180 名 1 クラスの「メディア授業(遠隔授業)」とするが、外部講師による講義後は学修支援システムを活用して講義に関わる質問や意見交換等を行い、双方向を意識した授業運営を行う。また、学修を振り返り、自身の学修成果を内在・定着させるための課題制作(報告書、ポートフォリオ、論述レポート等)に取り組む。

「デザイン学 4」は基幹教員の研究実践から「意味づけ」についての考え方と方法を学ぶ。基幹教員 1 名がコーディネーターとなり、オムニバス方式とする。各授業回では複数の基幹教員による対話の形で講義を実施する。「デザイン学 3A」および「デザイン学 3B」同様に 1 学年 180 名 1 クラスの「メディア授業(遠隔授業)」とし、学修支援システムを活用して講義に関わる質問や意見交換等を行い、双方向を意識した授業運営を行う。また学修を振り返り、自身の学修成果を内在・定着させるための課題制作(報告書、ポートフォリオ、論述レポート等)に取り組む。「デザイン学 4」を通して、「Design in Society (DiS) 科目群」の「デザイン学総合研究 1・2」で取り組みたい学びを明確化する。

「デザイン学 5」および「デザイン学 6」は、デザイン・アートに関わる基幹教員による研究実践や国内外での最新の社会実践事例から学び、議論し、意味づけしていく。古今東西の様々なモノやコトの生成について、ケーススタディから自分が参画したプロジェクト(他者との協働において生成するプロセス)への意味づけをより深く広く行えるようになることを目指す。「デザイン学 5」は「デザイン学」「意味」「情報」「空間」「社会」「アート」のテーマに分けてテーマごとに基幹教員が講義を行ない、「デザイン学 6」は基幹教員 1 名がコーディネーターとなり、国内外で活躍する社会実践者を外部講師として招聘して展開する。1 学年 180 名 1 クラス開講とするが、講義と 8 クラスに編成されるチュートリアルで構成し、学びを深めていくチュートリアルに際しては 8 クラスに分かれたうえでさらに複数のグループに分かれて講義で課された課題に関する議論を行い、担当教員、助教等が各クラスにてファシリテートする。「デザイン学 5」は面接授業であるが、「デザイン学 6」は「メディア授業(遠隔授業)」(講師により同時双方向型とオンデマンド型となる)とする。チュートリアルもオンラインで実施する。

配当回生は学びの基礎からの段階的な実践知の展開、深化に合わせて、以下のとおりとする。

1 回生配当 デザイン学 1、デザイン学 2

2 回生配当 デザイン学 3A、デザイン学 3B、デザイン学 4

3 回生配当 デザイン学 5、デザイン学 6

「Design Language (DL) 科目」

デザイン・アートの学びは、常に他者との協働において生成するプロセスのなかにあり、「知識」や「技能」を、他者とのコミュニケーションのための「言語（ランゲージ）」と捉えて、さまざまな他者との協働を円滑に、そして効果的に実践していくことを目的に授業科目を配置する。

<英語 (English) >

「英語 (English)」は「講義」として授業を展開し、必修科目とする。学生が専門領域に沿って自身の経験や興味関心、グループごとに設定するテーマを中心に学習を行い、その成果を英語で発信することに加え、発信するまでの活動のプロセスも含めて総体的に学習に取り組み、この活動を通して学生は「表現・発信」する能力を身につけていく。このような授業の特性から、教員による丁寧なフィードバックが学生一人一人に対して求められる。このことから、1 クラス 20 名以内となるようクラス編成を行う。

1 回生配当 英語 P1、英語 P2

2 回生配当 英語 P3、英語 P4

<技能群 (Skill) / 知識群 (Knowledge) >

「技能群 (Skill)」および「知識群 (Knowledge)」は、「導入」を 1 回生配当科目、「専門」を 2 回生配当科目と設定する。2 回生以上の配当回生は、協働的制作活動を軸としながら、各年度始めに基幹教員との相談によって立てられた履修計画に基づき、学生の学びの必要性に応じて技能群、知識群を履修していくこととなる。これらの科目群から 56 単位を卒業に必要な単位として設定する。

「技能群 (Skill)」ではスタジオ、ラボ、アトリエを利用し、原則「面接授業」として展開する。1 クラスにおける学生数は 25 名～50 名を中心とし、オープンスタジオを利用する授業科目は 100 名を超えない規模で実施する。

本学部はプロジェクトへの参画を中心に、通常のキャンパス教室内だけの学修にとどまらない「まち全体がラーニングプレイス」というコンセプトに基づきキャンパスの外へと広がる学びのスタイルとなる。したがって、知識を中心に学ぶ「知識群 (Knowledge)」については、原則、「メディア授業(遠隔授業)」として展開し、学びの場を限定しない柔軟な学びの環境を提供する。学生数は 1 クラス 100 名を超えない規模で実施する。

いずれも配当回生は「導入」を 1 回生、「専門」を 2 回生とする。

「卒業研究」

学びの集大成として位置づけ、必修科目とする。「Design in Society (DiS) 科目群」および「Design Studies (DS) 科目群」の学びの往還を通して明確となった学生自身の研究テーマを基に学修成果としてまとめる。なお、当該科目はデザイン・アート分野の制作物とそれに関わる報告論文、またはデザイン・アート分野に関わるテーマの論文とし、その作成に関する研究活動を単位として授与する。

なお、本学部ではメディア授業を活用するが、メディア授業告示及び本学で毎年確認している「メディアを利用した授業実施ガイドライン」に従い、効果的に実施する。

【資料 4】メディアを利用した授業実施ガイドライン（2025 年度版）

（2）履修指導方法等

本学部では、学生の学びのプロセス自体もデザインの対象と捉えている。ひとりひとりが自身のビジョンとその実現のための計画に基づき、DL 科目群に置かれた知識群と技能群をどの順番でどのタイミングで身につけて行くが、自分の学びを自分自身でデザインしていく主体的な姿勢が求められるが、それを可能とするために、以下の環境を整える。

① オリエンテーション・履修ガイダンス、窓口対応等

学生が履修に関する理解を深め学修目標を達成できるよう、入学時のオリエンテーションや各回生の学期当初に実施する履修ガイダンスにおいて、デザイン・アート学部の理念と教育の特色、多様な履修モデル、カリキュラムツリー、カリキュラムマップ、科目ナンバリング等を活用し、在籍する全学生に対し入学時から卒業までの履修指導を行う体制を整えるとともに、履修や学生生活の相談ができる窓口を設定する。また、留学生の在籍管理は、月 1 度の在籍管理チェックおよび 5 月 1 日時点の在留カードの提出を義務付け、管理している。

新入生に対しては、初年度の履修計画や授業履修において必要な道具等の準備をスムーズに行えることを目的に、入学前にオンデマンドを用いて本学部における学びを分かりやすく提示し、入学後の履修計画や具体的な学び方、必要な道具、卒業後の進路等のイメージを持って入学できるように工夫する。

② Reflection in Design Practice

各学年の年度末に、基幹教員による個人面談によって、「前年度までの学修成果」と「個人の学修ビジョン」「当該年度の科目履修計画」について確認・相談し、リフレクション活動を実施する。また、その際、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができるという人材育成目的をコンピテンシーとして捉え、評価するルーブリックを活用することで、学生個人の学修成果と到達度を回生ごと形成的に評価し、次年度の履修計画に活用する。

なお、リフレクションに臨む前に学生が自身のビジョンに基づき主体的に履修計画を立てられるよう『Reflection in Design Practice ハンドブック（仮）』を作成し、授業科目と授業科目の結びつきや授

業科目とプロジェクト内容の結びつき、教員の研究領域等を「見える化」する工夫を行う。

③ キャリアデザインを踏まえた履修モデル

本学部では、養成する人材を育成するべく、本学部でのデザイン・アートの学びを構成する「意味」「情報」「環境」「社会」の4領域に特化した履修モデルを設定する。履修モデルとしての基本的枠組みを示しながら、学生の「卒業研究」に向けたテーマや進路に沿って、各々必要な授業科目を履修する。具体的な履修モデルは以下のとおりである。

1) 「意味」領域特化型履修モデル

この特化型履修モデルでは、デザインとアートの知識・技能を応用してものごとや行動に新しい意味を見出し、社会的・文化的な価値を創造するリーダーシップを発揮することで、組織や社会を新たな方向に導くことができる人材を育成する。卒業後は、クリエイティブエージェンシー、文化施設（博物館、美術館など）、公共政策機関、企業のデザイン部門、デザインやクリエイティブに関わる非営利団体・スタートアップ企業などに勤めることが想定される。これらの職場で、デザイン・アートプロジェクトのマネジメント、クリエイティブディレクション、ブランド戦略、展示企画、アートマネジメント、地域振興、デザイン・アートによる社会貢献活動の推進などの仕事に従事することが期待される。

2) 「情報」領域特化型履修モデル

この特化型履修モデルでは、五感を通じて知覚されるものごとのデザインを通じて、人々の経験の質を向上させ、物理空間とデジタル空間の融合を進め、デジタル技術を活用した新しい感性体験を創出する人材を育成する。卒業後は、インタラクティブデザイン企業、デジタルクリエイティブエージェンシー、デジタルプロダクト開発企業、バーチャルリアリティ（VR）・拡張現実（AR）スタートアップ、イベント運営・テーマパーク運営企業、デジタル教育コンテンツ開発企業などに勤めることが想定される。これらの職場で、ユーザーエクスペリエンス（UX）デザイン、インタラクティブアートの企画・制作、デジタルインスタレーションの開発、VR/ARコンテンツのデザイン、展示設計、デジタル空間デザイン、デジタルマーケティングキャンペーンの企画・運営などの仕事に従事することが期待される。

3) 「環境」領域特化型履修モデル

この特化型履修モデルでは、人間とその周囲の環境の相互作用を理解し、持続可能で包摂的な環境のデザインを通じて、魅力的な生活空間を創出することで、社会全体の共生価値を向上させる人材を育成する。卒業後は、都市計画・地域開発企業、建築設計事務所、環境デザイン企業、エコロジーコンサルティング企業、公共機関、地域デザインに関わる非営利団体などに勤めることが想定される。これらの職場で、都市および地域の環境計画、サステナブルな建築やインテリアの設計、公共空間のデザイン、エコロジカルプロジェクトの推進、環境教育プログラムの企画・運営、地域コミュニティの活性化プロジェクトの企画・実施などの仕事に従事することが期待される。

4)「社会」領野特化型履修モデル

この特化型履修モデルでは、歴史のなかで人間が多元的に構築する制度や社会のかたちの生成原理を探究し、人々のデザイン・アートに関する資質や能力の育成、美的・倫理的な視点からの集团的合意形成、社会のビジョン形成に貢献する人材を育成する。卒業後は、デザインコンサルティング企業、クリエイティブコンサルティング企業、公共政策機関、デザイン・アート戦略シンクタンク、メディア企業、教育機関、文化機関（博物館、美術館など）などに勤めることが想定される。これらの職場で、デザイン・アート戦略立案、教育プログラムの開発と実施、文化事業の企画と運営、デザイン・アートに関わる政策立案、アートマネジメント、メディアコンテンツの制作などの仕事に従事することが期待される。

【資料5】 デザイン・アート学部履修モデル

(3) 年間履修登録上限単位数

卒業に必要な単位数の合計は 124 単位とする。本学ではプロジェクトへ参画する「Design in Society(DiS)科目群」や制作や作業を伴うことのある「Design Language(DL)科目群」の「技能群」等、授業時間以外の一定の学修時間が生じることから、学びの質保証、単位の実質化の観点、また計画的な学修を担保しながら 4 年間を通した学びを偏りなく履修することを目的に各回生の年間履修登録上限単位数を以下のとおり設定する（表 8）。ただし、資格取得に要する授業科目の履修は上限を超えてもよいものとする。

表 8 年間履修登録上限単位数

1 回生		2 回生		3 回生		4 回生	
1 セメスター	2 セメスター	3 セメスター	4 セメスター	5 セメスター	6 セメスター	7 セメスター	8 セメスター
20	20	20	20	20	20	20	20

(4) 卒業研究および卒業要件（科目区分別要卒単位数）

① 卒業研究

4 年間の学びの集大成として「卒業研究」を設定し、必修とする。「卒業研究」は、デザイン・アート分野の制作物とそれに関わる報告論文、またはデザイン・アート分野に関わるテーマの論文とする。

「Design in Society (DiS) 科目群」および「Design Studies (DS) 科目群」を軸とする学びを通して発見した問題を明確化し研究計画の具体化を進め、「卒業演習 1」および「卒業演習 2」の担当教員による指導のもと、制作物と報告論文または論文として成果を形づくる。「卒業研究」はその作成に関する研究活動及び成果を単位として授与し 1 単位 45 時間の学修を必要とする内容をもって、2 単位とする。

卒業研究を構成する「制作物」は、実践を含み、実社会の課題に対して実効性のある課題解決や先見性のある問題提起がなされ、新たな価値のある提案を行うものとする。具体的な形式としては、デザインプロトタイプ、デジタルプロダクト、アート作品、インスタレーション、映像作品、およびイベントやワークショップ等の実践プロセスを展示形式で解説したものが考えられる。「制作物に関わる報告論

文」は、制作物や実践を構想した社会的背景、コンセプトとビジョン、制作・実践プロセス、技術的・理論的な検証、評価と課題について記述する。報告論文の文字数は 8,000-10,000 字とし、制作・実践プロセスを明確に伝えるために図表や写真、スケッチ・イラスト等を積極的に活用するものとする。

デザイン・アート分野に関わるテーマの「論文」は、デザイン・アート分野に関わる独自の研究課題を設定し、文献レビュー、研究方法、データ収集と分析、考察、結論という構成でまとめる。論文の長さは 15,000-20,000 字とし、学術的な形式に従い、適切な引用と参考文献を含める。

「卒業研究」を評価するために評価基準を設け、主査 1 名、副査 1 名による審査を行う。また成果発信の場として「卒業制作展」を実施する。

② 卒業要件

卒業に必要な修得単位数は表 9 に示すとおりとする。

「Design in Society (DiS)」12 単位、「Design Studies (DS)」18 単位、「Design Language (DL)」英語 (E) 8 単位、「卒業研究」2 単位の合計 40 単位を必修科目とし、本学部の学びの主軸として位置付ける。「Design Language (DL)」技能群 (S)、知識群 (K) は 56 単位以上、教養科目は 20 単位以上とし、学びに偏りが生じないように設定する。これらの科目区分の他に「Design Study Abroad」区分（選択科目）を含めて、合計 124 単位を卒業要件とする。卒業に必要な 124 単位のうち、「メディア授業（遠隔授業）」は上限 60 単位となる。学生へは履修ガイダンスでその点を周知し、学生が履修状況を確認する WEB 画面では常時「メディア授業（遠隔授業）」の修得単位数および受講登録単位数を確認することができるようにする。さらに卒業に必要な単位として 60 単位を超える「メディア授業（遠隔授業）」の授業科目を算入できないようシステムで制御を行なう。

また、本学学則第 37 条の規定に則り、教授会が教育上有益と認めるときは、学生に他の大学等の授業科目を履修させることができることとしている。この場合、履修した授業科目について修得した単位については、上記「メディア授業（遠隔授業）」として修得した単位数と合わせて 60 単位を超えない範囲で卒業に必要な単位として認めることとする

表 9 卒業要件

科目区分		卒業必要単位数
Design in Society (DiS)		12 単位
Design Studies (DS)		18 単位
Design Language (DL)	英語 (E)	8 単位
	技能群 (S)	56 単位以上
	知識群 (K)	
卒業研究		2 単位
教養科目		20 単位以上
合計		124 単位以上

※Design Study Abroad の取得単位は合計の卒業必要単位数の充足に算入することができる。

(5) 教育方法の特色

専門科目においては、以下の特色をもって教育方法を展開する。

① プロジェクト実践型授業の実施

本学部での学びは、常に学内外の他者との協働において生成するプロセスのなかにある。これを踏まえ、本学部では、まち全体をラーニングプレイスと捉え、大学の学びをキャンパスの外に広げた多様な社会での学びの場において、豊かな文化・生活様式や未来への持続可能な社会の形成に関わる創造的な表現活動に取り組む。この中核となるのが、「Design in Society (DiS) 科目群」における「デザイン学生生成プロジェクト演習 1・2」(2 回生)、「デザイン学総合研究 1・2」(3 回生)、「卒業演習 1・2」(4 回生)にて実施されるプロジェクト実践型の授業形態である。「デザイン学生生成プロジェクト演習 1・2」で学生は、専門分野の異なる複数の教員から考案されるデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいた企業・組織との連携に基づく社会実践プロジェクトへ参画する。「デザイン学総合研究 1・2」で学生は、基幹教員の主要研究テーマに基づく社会実践プロジェクトへ参画する。さらに、「卒業演習 1・2」では、自身が興味を持つデザイン・アート領域に関わる新たな研究テーマを定め、それに基づいた卒業研究プロジェクトを構想し具現化する。

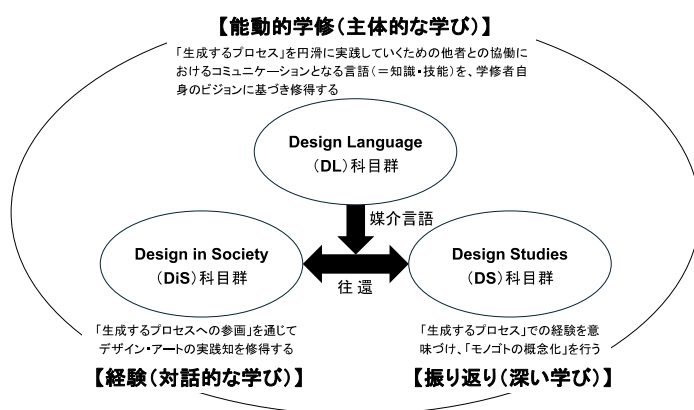
ここで「Inquiry-Based Learning」ともいえる自己主導課題探究型の社会との協働学習を実践し、異なる学習歴や多様な個性を持つ学生や社会人を混在させ、実社会で起こっている真正な課題に取り組む学びのコミュニティを形成する。さらに役割分担や相互補完などの協調的な経験をする事により、文理融合、分野横断となる学修を実体化させていく。学生はここで、既有知識や経験を実社会で起こっている真正な課題に繋げ、さらに他者や集団の理解や考えを取り込んで、その知識世界を構成的に発展させることになる。指導する教員体制も複数分野の異なる専門性を有する教員が集い集団で教育研究指導を実践する。

② アクティブラーニングを取り入れたカリキュラムと授業の実施

本学部のアクティブラーニングは、カリキュラムレベルと授業レベルの2層によって展開される。

・カリキュラムレベル

本学部のカリキュラムには、以下図に示すように、アクティブラーニングの構成要素である「主
リキュラムレベルでアクティブ



このカリキュラムに埋め込まれたアクティブラーニングによって新たなデザイン学を追求する本学部では、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができる人材を育成する。よって、これらをコンピテンシーとして捉え、評価するルーブリックを活用することで、学生個人の学修成果と到達度を回生ごと形成的に評価し、次年度の履修計画に活用する。履修計画は各年度始めに基幹教員との相談によって立てられる。

・授業レベル

前述のプロジェクト実践型授業を行う「Design in Society (DiS) 科目群」、およびプロジェクト実践の振り返りと意味付けを行う「Design Studies (DS) 科目群」、また「Design Language (DL) 科目」のうち実技・演習を中心に行う「技能群」科目においては、必然的に「主体的な・対話的な・深い学び」の要素を持つアクティブラーニングが実施されることになる。その円滑な実施を支えるために本学部では特に、学修を実施する学内施設要件に留意する。従来の固定型スクール形式の受け身を誘発する教室ではなく、アトリエ・スタジオ・イノベーションハブ型のオープンな環境整備において、デザイン・アート教育の特徴である「自己の発話が起点になる（主体的な学び）」「多声的な議論を可能にする（対話的な学び）」「他者の活動が可視化され、自己を相対的に捉える（深い学び）」を誘発することで、施設要件の面からもアクティブラーニングの実現を支える。

一方に残された「Design Language (DL) 科目」のうち知識修得を行う「知識群」においても、アクティブラーニングを実施することが本学部の特徴となる。特に、後述のようにこの知識群科目は、「メディア授業(遠隔授業)」を積極的に取り入れた授業形態となるため、前述のアクティブラーニングを支える環境要件をオンライン環境において実現する。つまり、「自己の発話が起点になる（主体的な学び）」「多声的な議論を可能にする（対話的な学び）」という点においては、教員と学生および学生間のディスカッションとコミュニケーションを行う仕組みの整備とその機会を持つことをこの群の授業に必須とする。また、「他者の活動が可視化され、自己を相対的に捉える（深い学び）」という点においては、各授業で本学部の教育研究の特色のひとつであるデジタルアーカイブの知見を活用した学修プロセスの可視化を行う仕組みを導入する。

③ 「メディア授業(遠隔授業)」の活用

学部の特徴的なコンセプトである「まち全体がラーニングプレイス」を具現化するために、多様な連携先とキャンパスを越えて学びの場を展開するため、本学部では、現実空間（リアルキャンパス）とともに、オンライン・オンデマンド・バーチャル空間（メタバース等）などを統合したバーチャル・キャンパスを構築する。

本学部カリキュラムの中心となる、複数のプロジェクト実践型授業（「Design in Society (DiS) 科目群」）を学外で十全に実施するためには、活動・移動時間の十分な確保が必要であり、授業時間割の配置構成に特段の配慮を要する。他方、この学外でのプロジェクト実施、その振り返りと意味づけ（「Design Studies (DS) 科目群」）、およびプロジェクト実践に資する知識・技能を修得すること（「Design Language (DL) 科目群」）を同時に実現することが、本学部カリキュラムの要諦でもある。

そこで本学部カリキュラムでは、「Design Studies (DS) 科目群」「Design Language (DL) 科目群」のうち、特別な施設・道具を要しない知識修得を中心に行う授業科目において、バーチャル・キ

キャンパス上での「メディア授業(遠隔授業)」形態を積極的に活用することで、学外でのプロジェクト実施の時空間的な機会確保を実現しながら、同時にプロジェクト実施に資する技能・知識の修得を実現する。なお、前項で言及したように、バーチャル・キャンパス上での「メディア授業(遠隔授業)」においても、すべての授業でアクティブラーニングを実施する。

6. 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的計画

本大学では大学設置基準第25条第2項の規定に基づき、立命館大学学則第33条第2項において、「教授会が必要と認めた場合には、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができる」と定めている。また、「メディアを利用した授業実施ガイドライン」を策定し、対面授業に近い環境および対面授業により得られる教育効果を有する授業方法について整理し、運用している。

本学部においては、企業や地域等と連携した課題探究型の学びが中心となり、「まち全体がラーニングプレイス」というコンセプトのもとに大学の学びをキャンパスの外に広げ、地域社会で多様な学びの場、企業や地域社会との連携を重視した実践的な教育・研究が展開され、多くの学修プロジェクトに学生が参画していくこととなる。こうしたカリキュラム上の特色から、場所や距離、時間の制約を少なくするため、オンデマンド授業、ライブオンライン授業などの形式を用い、様々なメディアを高度に利用した授業による教育を適切に展開し、柔軟な学びの機会を提供する。対象となる科目は、表10の通りとなる。

表10 多様なメディアを高度に利用した授業の対象科目

科目区分	科目
Design Studies (DS) 科目群	「デザイン学 3A」「デザイン学 3B」「デザイン学 4」「デザイン学 6」
Design Language (DL) 科目群 「知識群」	「インダストリアルデザイン論」「京都・伝統文化論」 「グローバルデザイン論」「芸術批評論」「地域デザイン論」 「デザイン・アートとコンピュータ基礎」 「デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション」「デザイン態度論」 「デザイン理論」「デジタルヒューマニティーズ概論」 「人間中心デザイン論」「音楽とデザイン」「芸能・演劇史」「現代アート論」 「工芸・産業史」「視覚芸術表現論」「視覚文化・芸術史」「身体表現論」 「デザインと人類学」「感性・認知情報処理論」 「デザインとコンピュータ応用」「デザインと知覚」「デザインと人間工学」 「デザインのための数理」「デザインのためのデータマイニング」 「デジタルアーカイブ概論」「デジタルメディアデザイン論」 「メディア処理論」「建築意匠論」「建築情報論」「コ・デザイン論」 「地理情報科学」「都市デザイン」「ランドスケープ・庭園史」 「歴史まちづくり」「アートマネジメント論」「戦略的デザイン論」 「デザイン・アートと国際社会」「デザイン・アートと世界史」 「デザイン・アートと歴史・考古学」「デザインと行政」 「デザインと知的財産権」「デザインとマーケティング」

	「デザインマネジメント論」「美術教育論」「ミュージオロジー」 「デザイン・アート特殊講義」
学芸員養成課程科目	「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」 「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館教育論」 「博物館情報・メディア論」

(1) 実施場所

本学部のカリキュラムの中心となる「Design in Society (DiS)」科目群は、企業や地域等とのプロジェクトへの参画を通じた実践的な学びを核とする。そのため、学生には個人 PC の所有および持参(BYOD)を必須とし、キャンパス内外での学びを柔軟に実現する環境を整備する。この環境により、キャンパス外で学ぶ機会が増加し、学生がプロジェクト参画の合間にも、利便性を保ちながら学習を継続できるよう支援する。

キャンパス内にはオンライン学修に対応する環境を用意するとともに、さらに時間的・空間的・人間関係において学びを補完するような環境をオンライン上に構築し、提供する。このような環境での学修を通じて、正課および課外活動において本学部独自のコミュニティ形成を促進し、学生が時間や場所にとらわれず、相互に交流し学び合える場として機能させる。

(2) 実施方法

Design Language (DL) 科目群における「知識群」は、原則「オンデマンド型授業」で展開する。それ以外の授業科目については、「オンデマンド型授業」や「ライブ配信型授業」のいずれか、またはその組み合わせで実施し、必要に応じて「面接授業」も導入する。

前述の学びを補完するオンライン環境では、様々なフォーラムやディスカッションを通じて教員と学生が交流できる場を提供する。

こうしたシステムの活用により、リアルタイムでの対話や即応性を備えた双方向授業を展開し、授業担当教員は教育効果を重視した設計を行う。さらに、教員は学生の出席状況や動画視聴履歴、教材の学修履歴をもとに理解度や学修状況を把握し、学生の進捗に応じて的確なフィードバックを提供することで、学びの質を向上させる。

7. 実習の具体的計画

ア 実習の目的

本学部では、学芸員の資格取得が可能となるように学芸員課程科目を設置する。学芸員課程科目に配置する「博物館・館園実習」では、「博物館・学内実習」で培った知識や技術をもとに、実際の博物館現場での業務を体験することで、博物館の理念や設置目的、業務の流れ、実践的な技術とその応用に対する理解を深めることを目的とする。具体的には、博物館資料の取り扱いや教育普及活動、来館者対応などの実務の一端を体験することで、学芸員としての責任感や社会的意識を体験的に養い、博物館職員としての心構えを身につける。また、経験豊富な学内担当教員による事前・事後の指導を通じて、分野や国内外の博物館活動における多様性への理解も促す。

イ 実習先の確保の状況

実習先は、地域内の登録博物館または博物館指定施設（大学附属博物館を含む）を中心に公立・私立の美術館、博物館等との連携により確保している。学生の実習希望を踏まえ、学外からの協力依頼を行い、実習受け入れ先の選定を行っている。

ウ 実習先との契約内容

実習受け入れに際しては、受け入れ可能期間、受け入れ可能人数、実習受け入れの調整窓口などを明記した承諾書を交わす。

エ 実習水準の確保の方策

実習は原則として5日間以上実施し、初日は館概要の説明や導入指導、2日目以降は展示構成、資料の保存・調査、教育普及活動、広報企画などの多様な業務を講義と実践を通じて体験させる。実習の質を確保するため、文化庁が示す博物館実習ガイドラインを遵守し、内容に一貫性を持たせている。

オ 実習先との連携体制

実習前には実習担当教職員が各館の実習担当者と実習内容・日程等を協議し、実習中は現地訪問を行うことで連携体制を強化する。また、実習後も実習内容に関する報告・評価を共有し、継続的な関係性を構築する。

カ 実習前の準備状況

実習の2週間前から健康観察を開始し、体調管理を徹底する。実習中に37.0度以上の発熱があった場合は、実習先に連絡のうえ実習を控えるよう指導する。あわせて、事前オリエンテーションにおいて、学芸員の倫理、実習における心構え、欠席・遅刻の連絡といった社会人としての基本的マナー、レポートの書き方、個人情報保護の重要性についても指導する。特にSNSの扱いに関しては注意喚起を行い、全学生に『個人情報取扱等に関する誓約書』を提出させることで、個人情報保護意識の徹底を図る。さらに、交通手段として自転車を利用する学生には、任意保険（自転車保険）への加入を義務付け、安全な移動を促す。

キ 事前・事後における指導計画

事前指導では、実習内容に関する基礎知識の確認、実習における心構え、資料の収集・保存・展示に関する基本技術を講義および演習形式で指導する。事後指導では、実習成果をレポートとしてまとめ、プレゼンテーション形式で発表を行い、教員からのフィードバックを受ける。

ク 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

実習担当教員は、学生の実習状況を把握するため、実習期間中に1回以上現地を訪問し、巡回指導を行う。実習担当教員は実習に係る授業を担当しており、実習の準備・実施・評価に一貫して関与する。必要に応じて助手を配置し、円滑な実習運営を支援する。

ケ 実習施設における指導者の配置計画

各実習先では、実務経験を有する学芸員が実習指導者として配置されており、学生に対し直接的な指導を行う。これにより、現場の専門的視点からの実習指導が可能となる。

コ 成績評価体制及び単位認定方法

実習の成績評価は、実習ノート、実習先での観察・面談、実習担当者との面談内容などをもとに、実習態度・学修成果を中心に評価する。最終的な評価は学部教授会において判定し、実習科目（1単位）の単位認定を行う。

【資料6】実習先の承諾書

8. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

本学では、全学組織である共通教育推進機構のもとにキャリア教育センターを置き、以下のような基本理念の下、産学連携教育を推進している。

- ・「学生の学びと成長の促進」を実現する教学プログラムである。
- ・社会での実践経験を通じて、学問に対する社会の要請と意義を認識する。
- ・社会や職業における諸課題を解決する実践的能力を身につけ、自律心と向上心を併せ持つ総合的な人間力を高める。

また、この理念に基づき基本方針を定め、完成度の高いプログラムを社会と手を携え展開することで、新時代に向けた人材育成を目指している。基本方針は以下の4点からなっている。

- ・学部の学習の場として仕組みを用意する。
- ・社員との交流等を通じ、広く組織・社会を見聞することができる。
- ・社会的規範および受入者との相互理解の上に成立させる。
- ・人材育成のあり方を広く社会に提起し、成果を還元することを目指す。

こうした理念や基本方針を踏まえ、教養科目に位置づけられ、問題発見・課題解決を念頭にプロジェクト活動を展開する「コーオブ演習（実践）」と、それをサポートする授業科目としての「コーオブ演習（理論）」が開設されている。

実際のプロジェクト活動を行う「コーオブ演習（実践）」では、多様な学部から参加する学生とチームを編成し、企業と連携して様々なプロジェクトに取り組む。総合大学に位置づくデザイン・アート学部としての特徴を生かし、専門での学びに加え、このような他学部生と共同で取り組む環境を整えることで、自らの専門性を相対化するとともに多様性の中での学びの機会を提供する。

ア 実習先確保の状況

実習先は本学のキャリア教育センターが確保する。実習先の確保にあたっては、これまでの実習生の受入れ実績を踏まえ、受入れ承諾の見込がある企業・団体等に対して要項を郵送するとともに、本学卒業生の在籍企業を中心に訪問するなどして実習先の確保を図る。

【資料 7】実習施設一覧

イ 実習先との連携体制

実習期間には、新規の受入れ先を中心に担当教員が訪問するなどして連携を密に取りつつ対応する。併せて、学生からの実習報告を確認しながら学生の状況に合わせた支援を行う。

また、不測の事態に備えて、実習中の事故等を対象とする保険に加入するとともに、緊急対応体制を整える。

ウ 成績評価体制及び単位認定方法

成績評価は、学内での研究会、実習先での活動及び報告書などの提出物の全体的な学修状況に基づき、担当教員において成績評価を行う。

なお、単位認定を伴わないインターンシップ・プログラムとして「オープン・カンパニー（仕事研究）・自由応募型インターンシップ」があり、これは企業・団体が「独自」でインターンシップを募集するものに学生が各自で受入企業・団体のホームページやインターンシップ専門サイトなどから募集情報を調べ、応募手続きを行い、参加する枠組みとして、自らのキャリアの展望や業種・職種・働き方を発見する機会を設けている。

9. 取得可能な資格

（1）取得可能な資格（学芸員）

本学部においては、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材の育成をめざす。そこで、新しいデザイン学のディシプリンのひとつとして「意味の創造としてのデザイン」を捉え、デザインを「モノに意味を与えること」とみなしている。

学芸員の仕事は、「モノ」に対して深い意味や背景を提供しそれを視覚的に表現することである。展示物の選択、配置、開設などを通じて、観客に作品の背後にある意味や歴史的文脈を提示する役割を担う。本学部の教育課程では、多くの情報量を持つコンテンツをアーカイブし、様々なデザイン実践の場で活用していくこと、ビジネス、地域社会、教育、異文化コミュニケーションなど様々な社会実践分野にデザインを応用すること等の学びを展開する。よって、学芸員は本学部卒業後の重要な進路のひとつである。また、博物館法の一部が改正され（令和 5 年 4 月 1 日施行）、博物館の事業に博物館資料のデジタルアーカイブ化が追加され、さらに他の博物館等との連携や地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むことが努力義務となった。展示企画、運営、教育普及、教育活動等において益々多様化する博物館、美術館の事業は、本学部における学びを十分に発揮される場となる。

このことから、国家資格である学芸員の資格を取得できるよう学芸員養成課程を設ける。なお、本学部の修了要件には課さず、希望者は卒業に必要な授業科目とは別に履修する必要がある。開講科目は表 11 に示すとおりとする。

表 11 学芸員養成課程 開講科目一覧

課程区分	科目名
学芸員養成課程	生涯学習概論② / 博物館概論② / 博物館経営論② / 博物館資料論② / 博物館資料保存論② / 博物館展示論② / 博物館教育論② / 博物館情報・メディア論② / 博物館・学内実習② / 博物館・館園実習①

○内の数字は単位数

10. 入学者選抜の概要

(1) 学生の受け入れ方針

デザイン・アート学部では、以下のアドミッション・ポリシーに基づく、入学者選抜を実施する。

① 知識・技能

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮し、フィジカルとデジタルに跨るデザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるために、高等学校卒業相当の基礎学力を有している者。

② 思考力・判断力、表現力等の能力

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮するために、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲を持つ者。

③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮して、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を構想し、他者との協働においてそれを具現化するための努力を惜しまない者。

(2) 選抜方法・選抜基準

デザイン・アート学部では、アドミッション・ポリシーに従い、以下、表 12 のような選抜方法で入学者の選抜を行う。なお、総合型選抜、外国人留学生入学試験で 82 名の募集定員を設け、一般選抜で 60 名の募集定員を設ける。学校推薦型選抜については、38 名の募集定員を設ける。

表 12 入試方式および募集定員

選抜方式	試験方式	募集定員	計
総合型選抜	総合評価方式（視覚表現型）	30 名	72 名
	総合評価方式（ポートフォリオ型）	35 名	
	スポーツ能力に優れた者の特別選抜入学試験	7 名	
留学生試験	外国人留学生入学試験（後期実施）	10 名	10 名
一般選抜	共通テスト方式	5 名	
	全学統一方式（文系）	35 名	
	学部個別配点方式（情報型理系）	15 名	

	後期分割方式 2 教科型	5 名	60 名
学校推薦型選抜	立命館大学推薦入学試験（附属校）	20 名	38 名
	立命館大学推薦入学試験（提携校）	4 名	
	推薦入学試験（指定校制）	14 名	

① 総合型選抜

総合評価方式（視覚表現型）は、構想力を重視する総合型選抜と位置づけており、選考を通じてアドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判断する。書類選考（エントリーシート、調査書等）、視覚表現（制作物）、面接による総合評価で審査を行い、基礎学力やデザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考力、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を構想する力を判断する。

総合評価方式（ポートフォリオ型）は、思考力・判断力、行動力や他者との協働力を重視する総合型選抜と位置づけており、選考を通じてアドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判断する。書類選考（エントリーシート、調査書等）、ポートフォリオにて1次選考を行い、面接にて2次選考を行う。基礎学力やデザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ姿勢・態度を審査する。

スポーツ能力に優れた者の特別選抜入学試験では、スポーツ活動の中で身につけた知覚的、身体的な感覚、技能をデザイン・アートの創造的な実践にどのように応用できるか、自身の競技経験をデザイン・アートの視点からどのように捉え直せるか、他者と協働して創造活動に取り組むこととスポーツ経験の関連性をどのように考えるかを問い、アドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判断する。書類選考、小論文、面接による総合評価で審査を行う。

② 留学生試験

外国人留学試験については、出願に際して、日本留学試験（EJU）の「日本語（記述問題含む）」および「総合科目」または「数学（コース1ないしコース2）」の1科目の受験が必要となる。さらに、日本留学試験（EJU）の「日本語（読解、聴解・聴読解）」で280点以上、「日本語（記述）」で35点以上を出願目安として設定する。日本留学試験（EJU）の成績、面接による総合評価で審査を行い、日本語運用能力や基礎学力、デザイン・アートに関わる知識や技能に基づく思考・意思決定・行動の実践意欲を審査し、アドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判断する。なお、留学生の在籍管理及び経費支弁能力の確認は在留資格取得時に学内の国際部と連携して実施する。

③ 一般選抜

一般選抜では、学力試験を実施して、高等学校までの基礎学力を評価し、デザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるための基礎学力を審査することを主眼としている。

共通テスト方式は、大学入学共通テスト出題教科から外国語科目を必須とし、選択科目（国語、数学、公民、地理歴史、理科、情報）から高得点2科目を採用し、3科目で審査する。全学統一方式（文系）は、外国語、国語を必須とし、選択科目（公民、地理歴史、数学）から1科目を選択し、3科目で審査する。学部個別配点方式（情報型理系）は、外国語、数学、情報の3科目で審査する。後期分割方式（2教科型）は、外国語、国語の2科目で審査し、アドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判

断する。

④ 学校推薦型選抜

学校推薦型選抜は、附属校推薦、提携校推薦、指定校推薦があり、いずれも、デザイン・アート学部への入学を強く希望し、デザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるための基礎学力、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲、多様な人々と協働して学ぶ態度を有する者を高等学校長の推薦に基づき、書類選考にて審査し、アドミッション・ポリシーに適合する人材かどうかを判断する。

(3) 実施体制

入学者選抜にあたる全学的体制は、全学組織である入学試験委員会を設けている。入学試験委員会は、入学試験の方式、試験科目や配点、入学試験、合否発表、入学手続に関する事項、試験問題の作成、入学試験の執行、試験答案の採点に関することなどを審議・実施する組織となる。入学試験委員会は、入学試験要項および入学試験執行の手順を明確化した実施要項の審議を行い、入学者選抜の公平性・適切性を確保している。また、公正な入学者選抜のための取り組みとして、一般選抜の試験問題の公開、解答例の公開を行い、総合型選抜では、試験内容や出題の意図、評価のポイントや解答状況を公開している。

(4) 科目等履修生や聴講生等、正規の学生以外の者の受け入れ

科目等履修生や聴講生等、正規の学生以外の者の受け入れについては、定員数を若干名とし、本学が定める条件に基づき、正規学生が学修する環境に支障がない範囲での受け入れを予定している。

1 1. 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色

(1) 教員規模

学部の人材育成目的を達成するために、学部の理念やコンセプト、教育手法を正しく共有する事に留意し、教育・研究のさらなる高度化・活性化に資する教員編成とする。

教員の研究分野は、デザイン学分野を中心に、芸術・美術学分野、情報分野、社会学分野、人文学分野など、展開する教育課程を支え、多様な教育研究活動が可能となるような人員を適切に配置する。学びの軸であり、全てが主要授業科目となる科目区分の Design in Society (DiS)、Design Studies (DS) はすべて基幹教員を配置し、デザイン・アートに関連する「知識」「技能」を学ぶ Design Language (DL) は、基幹教員を中心としつつ、多様な学びが可能となるように、多様な職位を活用して様々な分野で活躍する人材を招聘する。

基幹教員の数は、完成年度の 2029 (令和 11) 年度時点で、経営学部、文学部、情報理工学部、スポーツ健康科学部、グローバル教養学部、共通教育推進機構からの移籍教員 13 名、新規任用教員 12 名である。

なお、教員の任用や昇任については、「立命館大学教員任用・昇任規程」および同規程を踏まえた内規を定め、これに基づき行う。

完成年度において、基幹教員の博士号取得率は約 68%であり、十分な研究業績を有する教員を配置している。授業科目の担当体制については、「立命館大学専任教員責任時間規程」「立命館大学の任期を定め

た教員の任用等に関する規程」および、毎年度確認される「専任教員責任時間および標準担当時間等に関する申し合わせについて」に基づき、適切な科目担当時間となるように配置する。また、主要授業科目については、本学部の教育課程と授業の内容について責任をもって運営するために、基幹教員が中心に担当していく。

（２）年齢・職位の構成

完成年度の３月３１日において、専任教員の年齢構成は、２９歳以下０名（０％）、３０歳代２名（８．０％）、４０歳代１０名（４０．０％）、５０歳代９名（３６．０％）、６０～６４歳３名（１２．０％）、６５～６９歳１名（４．０％）、７０歳以上０名（０％）である。任期を定めない教員における本学の定年は、「大学教員定年規則」【資料８】に定める通り、教授６５歳であり、それを超える場合は「立命館大学特別任用教員規程」に基づき再雇用しつつ、当該教員の後任を任用する。任期・雇用期間に定めのある教員については、「立命館大学の任期を定めた教員の任用等に関する規程」、「立命館大学特別招聘教員規程」、「立命館大学任期制教員就業規則」および「立命館大学有期雇用教員就業規則」に定める任期、雇用期間および雇用年齢上限に基づき雇用する。なお、完成年度終了までに定年もしくは任期、雇用期間の満了を迎える教員は予定していない。

【資料８】大学教員定年規則

（３）組織的な運営体制

デザイン・アート学部の管理運営はデザイン・アート学部教授会が責任を持つ。

デザイン・アート学部教授会には、執行部を置き、学部長、複数の副学部長、および学生主事を持って構成する。また、学部運営を支援していく事務体制として、デザイン・アート学部事務室を置き、専任職員及び契約職員をはじめとして、教授会と連携して教育研究活動や厚生補導等を円滑に進められる体制を確保する。

１２．研究の実施についての考え方、体制、取組

（１）研究方針、環境整備

立命館大学では、１９９４（平成６）年の“理工学部のみわこ・くさつキャンパスへの移転”を契機に、産学官連携推進体制を整備し、大学の「知」や「技」を還元することで社会に貢献するとともに、大学自身の力量を向上させることで、教育・研究の高度化を促進してきた。

本学では、２０３０（令和１２）年に向けた学園ビジョンＲ２０３０立命館チャレンジ・デザインと共に、研究高度化中期計画を定めている。２０２１（令和３）年度からは「立命館大学第４期研究高度化中期計画（２０２１（令和３）～２０２５（令和７）年度）」を新たに策定し、「新たな社会共生価値と創発性人材を生み出す次世代研究大学の実現」を基本目標として、目標とする３つの大学像「博士後期課程学生を含む若手研究者から中核研究者まで、研究者のキャリアステージに応じた支援と基盤的な研究支援により、個の研究力量を高める大学」「グローバルな研究ネットワークの構築と研究成果の国際発信の強化により、「知のノード」となる大学」「特色ある学際共創研究と社会実装の推進により、社会・人類的課題の解決に貢献し、「総合知」を創出・活用する大学」を目指し、研究の高度化を推進している。

また、立命館大学では学外機関との交流を通じ、人類の福祉と社会の進歩に貢献する学問・研究を推進

する産学官交流の総合的窓口として、リサーチオフィスを設置している。立命館大学の産学官連携の調整・推進、研究組織（研究機構・研究所・研究センター）運営推進や、産学官連携コンソーシアムの事務局、知的財産マネジメントを担っている。研究者との密接な連携活動を組織的に行う体制となっており、スタッフは、全体（人文社会系・自然科学系）で、約150人である。技術移転、共同研究からベンチャー創出までワンストップサービスを提供している。

本学部では基幹教員ごとに研究室を設置し、各個人が研究に集中できるスペースを確保するとともに、教員間の積極的なコミュニケーションを促進するオープンラボを設けて、研究のコラボレーションも推進していく。

（2）研究活動をサポートする技術職員やURAの配置状況およびURA制度について

本学において技術職員については、1名がBKCリサーチオフィスに配置（2025（令和7）年2月時点）されている。主に放射光施設管理運営の役割を担っている。

URA制度については2015（平成27）年から導入し、異分野融合研究プロジェクトの推進、産学連携による研究開発、大型研究拠点マネジメント等に必要である高度な専門知識を持った人材をURAとして登用しリサーチオフィスに配置している。現在は27名がリサーチオフィスに配置（2024（令和6）年9月時点）されている。プレ・アワード、ポスト・アワード、研究戦略推進支援業務といった幅広い役割を担っている。

1 3. 施設、設備等の整備計画

ア 校地、運動場の整備計画

デザイン・アート学部は、衣笠キャンパス（京都市北区）に設置する。衣笠キャンパスは、現在 341,521.86 m²の校地面積を有し、4 学部（法学部、産業社会学部、国際関係学部、文学部）、6 研究科（法学研究科、社会学研究科、国際関係研究科、文学研究科、言語教育情報研究科、先端総合学術研究科）を設置している。

多数の教室や演習室、図書館に加え、保健センター、学生食堂などの施設のほか、福利厚生施設を含む各種の施設を整備しており、他学部、他研究科と十分に共用は可能である。

学生が休息や談話するスペースについては、キャンパス内の清心館 1 階のコモンスペースや存心館、以学館、諒友館に配置された食堂、平井嘉一郎記念図書館に併設されたカフェ、さらには東側広場や西側広場と複数のスペースを設けている。運動場については、原谷グラウンドを有し、衣笠体育館には 3 つのアリーナのほか、柔道場や最先端の機器をそろえたトレーニングルームも整備している。

イ 校舎等施設の実整備計画

デザイン・アート学部は、既存施設である充光館（地下 1 階・地上 3 階建）を改修して活用するとともに、新棟（地下 1 階・地上 2 階建）を整備し、2027（令和 9 年）4 月から供用を開始する。

既存施設の改修後は、地下 1 階に「オープンスタジオ（1 室）」、「オープンアトリエ（1 室）」、「デジタルスタジオ（1 室）」を整備し、これに加えて「ファクトリー」を整備する。1 階には、「レンタルラボ」を整備するとともに、「オープンラボ」も整備し、両施設を研究活動の拠点として一体的に運用する。また、2 階、3 階には、教員の個人研究室となる「ラボ（27 室）」を整備するとともに、研究スペースでも

ある「オープンラボ」スペースを整備する。

新棟については、地下1階に「オープンアトリエ（1室）」、「デジタルスタジオ（1室）」、これに加えて「ファクトリー」を整備する。1階には、「デジタルスタジオ（1室）」、「小教室（5室）」を整備し、2階には、「オープンスタジオ（2室）」を整備する。さらに、既存施設、新棟ともに、本学部の内外問わずに交流や共創、協働のできる場として「クリエイティブラウンジ」を整備し、作業や展示が行える環境を構築する。

これらの施設は、本学部とデザイン・アート学研究科で共同利用するが、充光館、新棟とも大学設置基準に定められている教育研究に必要な専用の講義室、研究室、実験・実習室、演習室等を備えており、これらを中心に既存の施設も含めて活用し、学部の教育課程および研究活動を進めていく。

なお、初年度は既存施設である充光館を活用し、2027年度以降は新棟も含めた教育研究活動を展開していく予定だが、2029年度（完成年度）の時間割案＜面接授業のみ＞【資料9】で示す通り、施設の利用状況においても教育・研究活動環境には十分に対応できる計画である。

【資料9】2029年度（完成年度）の時間割案＜面接授業のみ＞

ウ 図書等の資料及び図書館の整備計画

本学には、図書館施設として、衣笠キャンパスに平井嘉一郎記念図書館、修学館リサーチライブラリー、人文系文献資料室、朱雀キャンパスに朱雀リサーチライブラリー、びわこ・くさつキャンパスにメディアセンター（自然科学系図書館）、メディアライブラリー（社会科学系図書館）、大阪いばらきキャンパスにOICライブラリーをそれぞれ設置している。これらの施設を含めた大学全体の蔵書は、2025（令和7）年4月1日現在で3,593,573冊（製本雑誌含む）に達し、これに加えて129,440種の学術雑誌、そのうち65,322種の電子ジャーナルを収集・整備している。これらはほぼすべて、学生の利用が可能である。また、各キャンパスの図書館の資料を取り寄せて利用することも可能であり、全ての資料を学習や研究に利用できる環境を整備している。本学部の教育研究領域に関連する書籍で、蔵書している主なタイトルは表13に示すとおりである。

表13 蔵書する主なタイトル

書誌情報
Victorian studies : a quarterly journal of the humanities, arts, and sciences / Indiana University
Film quarterly
Media culture & society
Archives of Asian art
Art in America : an illustrated magazine
美学 / 美学会編
歌舞伎 : 研究と批評 / [歌舞伎学会編集]
美術史 / 美術史學會 [編]
浮世絵芸術 / 日本浮世絵協会 [編]
デザイン学研究作品集 = Annual design review of Japanese Society for the Science of Design / 日本デ

ザイン学会 [編]

デザイン学研究 / デザイン学会 [編]

デザイン学研究. 特集号 = Special issue of Japanese Society for Science of Design / 日本デザイン学会

日本芸術療法学会誌 = Japanese bulletin of arts therapy

Journal of the science of design

メディア研究 = Japan journal of Media, Journalism and Communication Studies / 日本メディア学会
[編集]

メディア研究 = Japan journal of Media, Journalism and Communication Studies / 日本メディア学会
[編集]

Design studies

Design management journal : dmi

デザイン科学研究：立命館大学デザイン科学研究センター紀要

14. 管理運営

デザイン・アート学部デザイン・アート学科の管理運営に関しては、立命館大学学則第12条にもとづき、立命館大学デザイン・アート学部教授会（以下、「教授会」）を設置する。

本教授会の役割は、(1)学部の学科および専攻の新設、増設、廃止または変更に関する事項、(2)学則および学部諸規程の制定または改廃に関する事項、(3)教員の人事に関する事項、(4)学科課程、授業および学力考査に関する事項、(5)学生の入学、卒業および学位の授与に関する事項、(6)学生の補導に関する事項、(7)学生の定数に関する事項、(8)学校法人および大学の諸規程において、教授会の議を経ることを要すると定められた事項を審議し、学長に対して意見を述べることに規定している。このほか、教授会は学長および学部長がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、学長および学部長の求めに応じ、意見を述べることができる。

また、教授会は、教授、准教授によって組織し、その開催頻度は原則隔週1回程度とする。また、助教も教授会に出席し、学部運営に参加する。

加えて、教授会のもとに、以下5つの委員会を設け、本学部の適切な管理運営を図る。

- (1) 企画委員会
- (2) 入試委員会
- (3) 学生委員会
- (4) FD委員会
- (5) 自己評価委員会
- (6) その他学部長が認めた委員会

15. 自己点検・評価

(1) 大学としての対応

本学では、立命館大学学則第2条にもとづいて、立命館大学自己評価委員会を設置するとともに、この委員会が定める方針の下で、本学の教育及び研究、組織及び運営ならびに施設及び設備に係る組織のすべてにおいて自己点検・評価を実施している。そのうえで、評価結果の報告を受けて、学長は、必要な

事項について当該組織の長に対して改善の実施を求め、その実現を図る仕組みとなっている。

また、本法人の役員または教職員でない学外の有識者が委員を務める、立命館大学大学評価委員会を設けている。この委員会は、学長の諮問を受けて本学の自己点検・評価結果の客観性及び妥当性等に関する評価を行う。さらに学長は、この評価結果のうち必要と考える事項について、当該組織の長に対してその改善の実施を求めることができる仕組みとなっている。

自己点検・評価や学部評価の結果は、本学が認証評価を受審している大学基準協会が定める評価基準等に則って取りまとめ、外部評価結果とともに報告書として公表している。さらに、これらの結果は、「教学ガイドライン」などの全学的な指針の形で本学の教学実践にフィードバックされるほか、各学部・研究科が毎年度末に取りまとめる「教学総括・次年度計画概要」の策定過程を通じて、教学内容の見直しや改善、発展に反映されている。

(2) 学部としての対応

本学では、上述のような「教学総括・次年度計画概要」の策定に加えて、教学のPDCAサイクルを実現するため、自己評価委員会を設けたうえで、学部教学の改善にむけた独自の取組みを進めてゆく予定である。

1 6. 情報の公表

本学では、下記の Web ページ等を通じて様々な情報を広く社会に公表しており、それらの情報には、教育研究活動に関する情報（教員の教育研究情報等）、学生の活動に関する情報（進路・就職状況等）、評価に関する情報（認証評価結果、自己点検・評価報告書、大学基礎データ等）、財務及び経営に関する情報（財務関連書類、及び事業報告書等）、設置校の基本的な情報（学生数、学部・研究科の設置申請書及び届出書、設置計画履行状況報告書等）などが含まれる。また、本学部においても、学部 Web ページを開設し、このような情報の開示を進めていく予定である。さらに、設置するデザイン・アート学研究科も同様に Web ページを開設し、学位論文に係る評価に当たっての基準の開示を進めていく。

立命館大学情報公開 Web ページ

<http://www.ritsumeikan-trust.jp/publicinfo/disclosure/univ/>

1 7. 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

(1) 授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修等

① 組織的な研修

本学では、建学の精神、教学理念ならびに人材育成目的、教育目標を実現するための、大学・学部・研究科・教学機関と協働した、教育および学生の学修の、質向上に資する支援を行うことを目的に教育開発推進機構を設置している。教育開発支援機構のもとには教育・学修支援センターを置き、教職協働と学生参画を基盤として、全学的な教学政策形成や継続的な評価・検証・改善のプロセスにおける支援、学部・研究科および学生の学修の質向上にむけた取り組み支援、全学的な方針に基づいたセンター独自の教育・学修支援、教員・学生支援およびそれに必要な調査・研究を行っており、そのひとつとして授業内容および方法の改善を図るべく FD 活動の推進やその他の教育改善に資する活動の支援を実

施している。具体的な取り組みは以下のとおりである。

1) 新任教員対象実践的プログラム

対 象 者：高等教育機関での教育歴が3年未満の教員（必須受講）、3年以上の教員（選択受講）

研修内容：本プログラムは、教員が自らの授業の設計、実施、評価に関して、学部・研究科等の教育目標と関連付けながら、その適切性、有効性をリフレクションし(振り返り)、改善できる能力と学生像を知り、コミュニケーションを取れる能力を、体系的かつ実践的に身につけることを目的に開発された研修プログラム。ワークショップ6コマ（必修4コマ、選択2コマ）、教育コンサルティング、FDミーティングの3本柱で構成する。

修了要件：ワークショップ6コマおよび1月開催の発表会に参加すること。

受講期間：1年間（最大2年間）

認 証：日本高等教育開発協会より「プログラム認証」（完全認証）を受領し、本プログラムを修了した教員には「修了証」を授与する。

2) オンデマンド講座視聴プログラム

対 象 者：全教職員（選択受講）

研修内容：大学における教育の質向上に取り組む上で視聴者にとって必要と思うテーマの重要な素養を身につけることを目的とし、教育・管理運営・研究の分野においてオンデマンド講座を通して学ぶ。1講座45分程度。

修了要件：全36講座のうち7講座以上の視聴と感想レポートを提出

受講期間：1年間

そ の 他：修了書を発行

3) その他

FDや高等教育の領域における問題点と課題についての「教学実践フォーラム」として年4回開催、授業改善に資する内容をテーマに実践事例の紹介、交流会である「FD座談会」、メディア授業を効果的に実施するための「教室機器操作体験会」、さらに教育効果を上げるために教員が実際に行っている工夫を紹介する「1分間FD」等を年数回開催、紹介するなど、全学の教員が参加できる様々な意見交換や交流の場を設けることによって教育改善の機会を設け大学全体の教育活動や能力の向上を図っている。また、これらの取り組みや成果を教育開発支援機構HPやニュースレター『ITL NEWS』の発行し、情報共有、情報発信を図っている。また紀要『立命館高等教育研究』を通して学園内の組織ならびに個々の教職員の教育に関する研究成果などを収集・蓄積・発信することにより、組織的なFD活動、SD活動の進展を目指している。

② 授業アンケートの実施と授業改善

学生が授業アンケートを通じて自らの学を振り返り、学への取り組みや達成度を確認すること、教員が学生に対して授業の成果を問い授業実践と改善につなげるものとする、教員の個別授業の改善にとどまらず学部・教学機関の教育上の組織的な授業改善に用いることなどを目的に、授業アンケート

を学期ごとに実施している。実施後の結果については、担当教員へ個票を返却し、担当教員はこれに対するコメントシートの返却、学生へのフィードバックを行っており、その内容は結果個票と学生向けシラバスに掲載している。

(2) 教員及び大学職員に必要な知識・能力の習得、必要な能力及び資質を向上させる研修の取り組み

① ハラスメント防止に関する取り組み

本学は、「立命館大学教職員の行動指針」を制定し、個人の尊厳を守り、多様性を尊重することで、全ての学生、生徒、児童および教職員が、安心して学び、教育・研究を行い、働くことのできる環境を確保することに努めており、このことが、学生等や教職員の成長にとって重要であると考えている。さらに「立命館大学ならびに学校法人立命館の設置する小学校、中学校および高等学校ハラスメント防止に関する規程」を制定するとともに、その内容をわかりやすく示すこと等を目的として「立命館大学・立命館附属校ハラスメント防止のためのガイドライン」を制定している。教員は所属学部・研究科等において毎年ハラスメント研修を実施し、職員については新任職員研修としてハラスメント防止のための研修を実施している。また新任課長・事務長研修においてもハラスメント防止のための研修を実施している。

② 教員の研究活動に関する取り組み

新任教員ガイダンスにおいて研究者に必要な研究倫理や研究費の適正執行、学内研究助成等について説明を行っている。着任後は、教員が研究活動に必要な知識や機会を得て研究力を向上させることができるよう、研究部、男女共同参画推進リサーチライフサポート室、そしてダイバーシティ&インクルージョン推進室が連携し、様々な取り組みを行っている。主な取り組みは以下のとおりとなる。

1) 男女共同参画を推進するための意識改革と情報発信

学長等のトップ役職者、学部長・研究科長、教育・研究粗衣気幹部などを対象とした幹部セミナーを実施し学内の意識改革を推進、また News Letter、ロールモデル集「研究日和」の発行、ホームページ・SNS 等で積極的に情報発信を行っている。

2) 研究力向上のための各種セミナーの開催

科研費獲得支援セミナー、学内公募説明会、学術英語論文のための基礎講座などを実施している。

3) 新任教員サポート

研究支援制度の紹介、新たなネットワークづくりの機会となる「Welcome to 立命館」の実施、問い合わせ等の窓口やパイプ役となる「研究コンシェルジュ」による研究立ち上げのための情報提供、教員の個々のニーズに合わせた研究サポートを紹介する「研究コミュニティと支援体制」セミナー等を実施している。

4) 女性研究者の裾野拡大

学部や学科、キャンパスを超えた研究交流となる「交流の場『立命研究者の会』」、本学所属研究

者の研究発表、フリーディスカッションを行うランチョンセミナー「ライスボールセミナー」等を実施、また文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）事業の船体を受け、女性研究者のキャリアをつなぐ支援、国際的に活躍できる女性研究リーダーの育成を目指したプログラムを創設している。さらに、意識改革のシンポジウム・セミナー開催や女性研究者紹介動画コンテンツの作成などを通して教員の研究力向上を推進している。

③ 職員の SD 関する取り組み

本学では、職員の業務が急激に多様化、複雑化、高度化していくなかで、①人材育成の場は職場が中心であり、職場における経験を通じた成長、経験値の向上を主眼とすべきであること、②教員個人のキャリアの捉え方として外形的なキャリアではなく仕事のやりがいの感じ方や志向性・価値観などの内的キャリアを重視すべきであることという考えから、「育成」の観点に立ち人事制度を捉え「育成型人事制度」を採っている。主に階層別研修、職位別研修、部門別研修、自己研鑽研修等の支援を行っており、具体的な取り組みは以下の 5 つに分類して実施している。なお、研修内容については年度ごとに見直しを行っており、以下の内容は 2024 年度実施の例となる。

1) 役割発揮

- ・オンボーディング支援（対象：新任職員）
内定者課題／新任職員研修／着任時 OJT／着任後研修／個別指名型研修派遣
- ・フォローアップ研修（対象：入職 2～3 年の職員）
- ・マネジメント力量形成（対象：課長・事務長）
管理職全体研修／課長・事務長向けテーマ別研修（人材育成、課マネジメント）
- ・自律的キャリア形成支援（世代別キャリアデザイン研修）

2) 職員共通力量形成

- ・グローバル力量形成（対象：全職員）
語学学習支援
(TOEIC L&R IP 団体受験[年 3 回]／語学検定試験受験補助／語学学習学内講座受講補助)
グローバルマインドセット
海外学生引率／海外大学オンラインコース履修支援／海外来訪受入対応時等研修／グローバルリーダー育成プログラム派遣)
- ・デジタルスキル (IT/DX リテラシー)
- ・資格取得補助（労働安全衛生者免許取得補助）

3) 業務分野固有力量形成

- ・部門別人材育成（各部において随時）
各部が策定した部門別人材育成計画に基づき実施する。
例えば、教学部においては、学部・研究科における教学の質の向上を図っていくためには、カリキュラムや授業の開発・実践および学生の学びと成長を促進する機能の高度化が必要であり、そのための教学部職員の専門的力量的向上を目指すべく、「教学部基盤力量研修」を実

施し、一方で職員に求められる広い視座を持つことを目的とした「他分野動向活用研修」を実施している。

「教学部基盤力量研修」

教学部新任・異動者研修／カリキュラム・コーディネート研修／データに基づいた教学マネジメント実践研修プログラム

「他分野動向活用研修」

立命館大学（教学部）の更なる国際化推進に向けて／moodle+R および Salesforce を活用した教員・学生支援／エンrollment・マネジメント 教務事務の力量形成／フューチャー・デザインの手法に関する事例研修）

4) 自律型力量形成

- ・オンデマンド学習（通年）
- ・学外団体研修・セミナー参加補助（随時）
- ・出向・研修派遣
- ・大学院進学支援（特別個人研修費、大学院進学に準ずる支援）（大学院入学の前年度、随時）
- ・自己研鑽のための休職制度（11 月頃募集）
- ・個人チャレンジ研修費（4 月）

5) マインドカルチャー

- ・部門政策理解研修（5 月～11 月）
- ・D&I 推進・多様な人材が働きやすい職場づくりにむけた理解度向上（ハラスメント防止研修、D&I 推進室セミナー）
- ・ワークインライフ（管理職人材育成・情報交換会・キャリア支援企画等）
- ・学内のコミュニティ形成（ラーニングコミュニティを通じた情報提供、共有）（通年）
- ・全学業務への参加を通じた成長（随時）

1 8. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

ア 教育課程における取組み

デザイン・アート学部では、カリキュラムの特徴でもある、企業・自治体といった多様なパートナーとのプロジェクトを通じて、社会的・職業的な視点を身につけることとなる。これらの学びにおいて、教員は学生の社会的・職業的自立に関して、学生が自身の将来を描き、そこに至るプロセスについて助言・指導し、学生自らの感性で新しい領域を切り拓く力を身につけさせる。

カリキュラムでは、多様なパートナーと展開するプロジェクトを、2～3 年次に配置する「デザイン学生成プロジェクト演習 1」「デザイン学生成プロジェクト演習 2」「デザイン学総合研究 1」「デザイン学総合研究 2」で実践する。社会で多様な実践を継続しているパートナーと行うプロジェクトでの学びを通じて、社会人として必要となる基礎な力量を身につける。また、2～3 年次に配置する「デザイン学 3A」「デザイン学 3B」「デザイン学 4」「デザイン学 5」「デザイン学 6」の授業科目を配置し、外部講師の活用や、基幹教員によるオムニバス形式を採用し、様々な領域、角度からプロジェクトで実践した経験を振り返

り、意味付けすることでモノゴトを概念化するような、社会の中で活動していくうえで備えるべき力量も身につける。

デザインやアートに関する「知識」や「技術」は、学生の必要性に応じて履修できる構造としているが、学生自らの将来像と結びつけながら、学ぶべき内容を適切にアドバイスできる体制を構築し、運営することを通じて、学生がキャリアの展望を持つ機会としていく。

こうした学びを積み重ね、4年次に配置する卒業演習では、それまでに身につけた専門性に関わる研究テーマを定め、卒業研究プロジェクトを構想し、具現化する。本学部の学びは、実際に社会での学びを通して得た知識や経験を、自らの関心から専門へとつなげ、さらには自らの将来像の具体化へと発展させていくプロセスであり、教員の指導のみならず、プロジェクトで連携する学外の指導者やグループを構成する他の学生との学びあいなど、協働の中で客観的視点を身につけていく機会が盛り込まれている。そのようなカリキュラムの中で、学生は社会的・職業的自立を身につけていくと考えている。

イ 教育課程外における取組み

本学部では、入学時のオリエンテーションをはじめとして、基幹教員の専門領域やキャリアの幅広さを生かし、正課内のみならず正課外での様々な学部独自企画を実施する。また、本学部の特長を踏まえ、学生は、大学院進学を射程に入れた学びや、国内・国外という切り分けをせず、自らの力量を発揮できる進路・就職先を選択していくこと想定される。これらの想定に応えるためにも、本学キャリアセンターや外部のデザイナーなどの就職やキャリアアップを専門とする企業などとも連携・協力を進めながら、ガイダンス、セミナー、ワークショップなど、卒業後の幅広い進路選択を見据えた支援を実施する。

本学キャリアセンターとの協力・連携では、早期にキャリアガイダンスを実施するなかで早くからキャリア意識を形成させ、キャリアの実現にむけて必要な準備を促していく。

外部企業との連携では、単なる就職支援だけでなく、学生が描く将来像に沿って身につけておくべき知識や技能など、カリキュラムを意識したアドバイスもできるような体制を構築する。

ウ 適切な体制の整備

全学的なキャリア形成支援の取り組み方針や実施計画などの策定を目的として、キャリアセンターを事務局として、進路・就職委員会、文系就職部会、理系就職部会を複数回実施している。

各学部では進路・就職委員会が置かれ、主体となってキャリアセンターと共同した取り組みを実施している。具体的な案件については、キャリアセンターの学部担当者と各事務室の就職担当者で連携を図りながら業務を進めている。

キャリア教育センターは、全学の教学部に置かれ、教学委員会を通じて各学部と連携している。本学部においては、キャリア支援委員会とキャリア形成に関わる学部執行の担当者を置き、キャリア形成のために必要な教育課程内外の各種方策の企画、実施、検証を行う。

また、本学部では、キャリア形成を「個々に応じた未来を拓くことができるように成長する」とことと定義し、キャリア支援委員会が、全学のキャリア教育センター（教育課程内）とキャリアセンター（教育課程外）と有機的・緊密な連携を行いながら、キャリア形成教育・支援に初年次より取り組んでいく。

以上

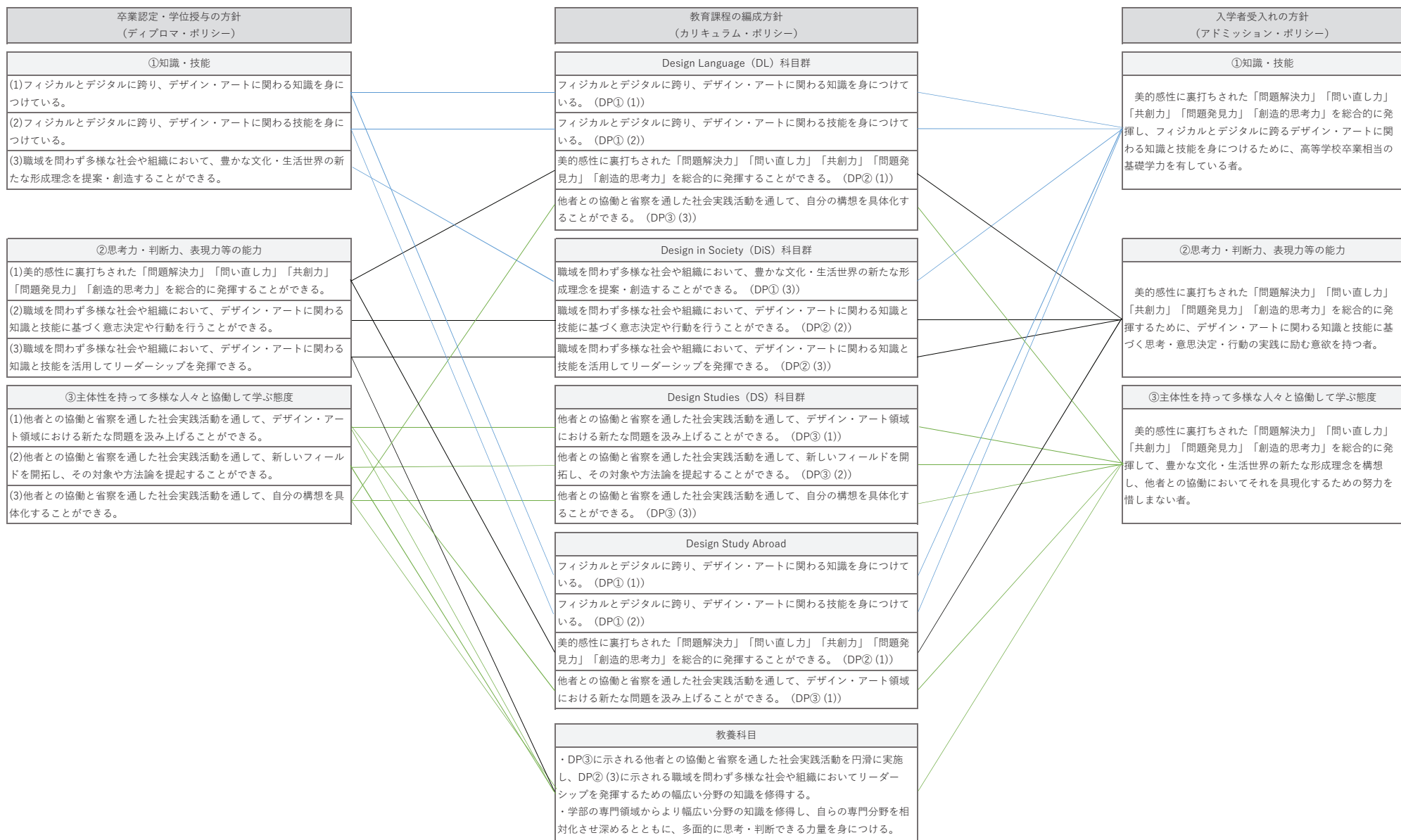
設置の趣旨等を記載した書類（資料）

目 次

【資料 1】 デザイン・アート学部における養成する人材像と 3 ポリシーの相関図	・・・ p2
【資料 2】 デザイン・アート学部 カリキュラムマップ	・・・ p3
【資料 3】 デザイン・アート学部 カリキュラムツリー	・・・ p7
【資料 4】 メディアを利用した授業実施ガイドライン（2025 年度版）	・・・ p8
【資料 5】 デザイン・アート学部履修モデル	・・・ p14
【資料 6】 実習先の承諾書	・・・ p18
【資料 7】 実習施設一覧	・・・ p19
【資料 8】 大学教員定年規則	・・・ p20
【資料 9】 2029 年度（完成年度）の時間割案＜面接授業のみ＞	・・・ p21

【資料1】デザイン・アート学部における養成する人材像と3ポリシーの相関図

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、本学園の根幹である「建学の精神」、「教学理念」、「立命館憲章」に則り、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨がる知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成する。



【資料2】デザイン・アート学部カリキュラムマップ

【人材育成目的】

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、本学園の根幹である「建学の精神」、「教学理念」、「立命館憲章」に則り、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨る知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成する。

【卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）】

デザイン・アート学部は、学部則に規定する所定単位（合計124 単位以上）を修得し、以下の資質・能力を備えた者に対して、「学士（デザイン・アート）」の学位を授与する。

① 知識・技能

- (1) フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる知識を身につけている。
- (2) フィジカルとデジタルに跨り、デザイン・アートに関わる技能を身につけている。
- (3) 職域を問わず多様な社会や組織において、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる。

② 思考力・判断力、表現力等の能力

- (1) 美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮することができる。
- (2) 職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく意志決定や行動を行うことができる。
- (3) 職域を問わず多様な社会や組織において、デザイン・アートに関わる知識と技能を活用してリーダーシップを発揮できる。

③ 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

- (1) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、デザイン・アート領域における新たな問題を汲み上げることができる。
- (2) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、新しいフィールドを開拓し、その対象や方法論を提起することができる。
- (3) 他者との協働と省察を通じた社会実践活動を通して、自分の構想を具体化することができる。

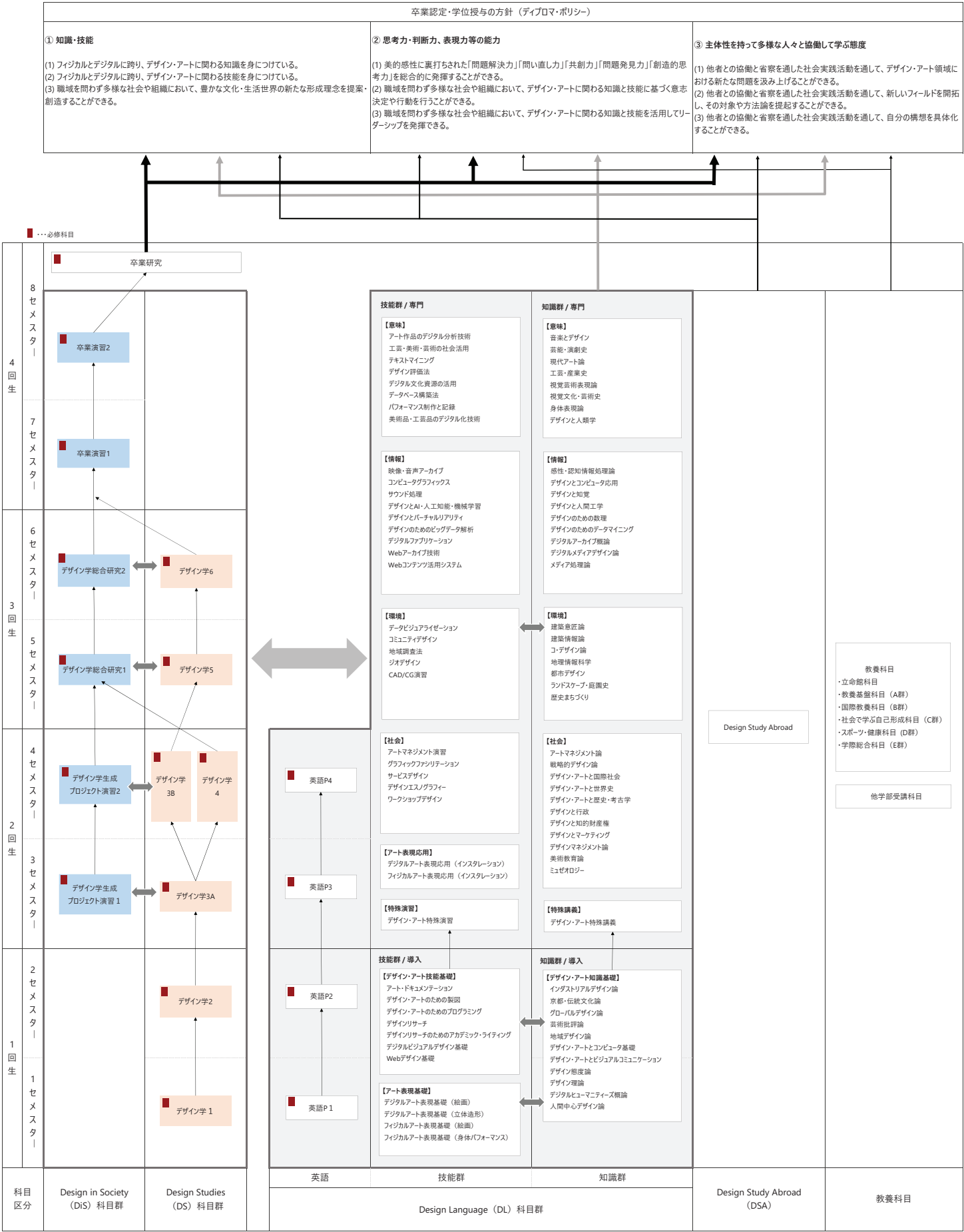
科目区分	科目区分2	科目区分3	科目名称	単位	配当 回生	履修 区分	①（１）	①（２）	①（３）	②（１）	②（２）	②（３）	③（１）	③（２）	③（３）
DiS	DiS	DiS	デザイン学生成プロジェクト演習1	2	2	必修	○	○	◎	◎	◎	○	◎	○	
DiS	DiS	DiS	デザイン学生成プロジェクト演習2	2	2	必修	○	○	◎	◎	◎	○	◎	○	
DiS	DiS	DiS	デザイン学総合研究1	2	3	必修	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
DiS	DiS	DiS	デザイン学総合研究2	2	3	必修	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
DiS	DiS	DiS	卒業演習1	2	4	必修	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
DiS	DiS	DiS	卒業演習2	2	4	必修	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
DS	DS	DS	デザイン学1	4	1	必修	○	○		○			◎	○	○
DS	DS	DS	デザイン学2	4	1	必修	○	○		○			◎	○	○
DS	DS	DS	デザイン学3A	2	2	必修	○	○	○	◎			◎	○	○
DS	DS	DS	デザイン学3B	2	2	必修	○	○	○	◎			◎	○	○
DS	DS	DS	デザイン学4	2	2	必修	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	○
DS	DS	DS	デザイン学5	2	3	必修	◎	○	◎	◎	○	○	◎	◎	◎
DS	DS	DS	デザイン学6	2	3	必修	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
DL	DLE	—	英語P1	2	1	必修				○					◎
DL	DLE	—	英語P2	2	1	必修				○				○	◎
DL	DLE	—	英語P3	2	2	必修				○				◎	◎
DL	DLE	—	英語P4	2	2	必修				○			◎	◎	◎
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	アート・ドキュメンテーション	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	デザイン・アートのための製図	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	デザイン・アートのためのプログラミング	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	デザインリサーチ	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	デジタルビジュアルデザイン基礎	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	デザイン・アート 技能基礎	Webデザイン基礎	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	アート表現基礎	デジタルアート表現基礎（絵画）	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	アート表現基礎	デジタルアート表現基礎（立体造形）	2	1	選択		◎		○					○

科目 区分	科目 区分2	科目 区分3	科目名称	単位	配当 回生	履修 区分	①（１）	①（２）	①（３）	②（１）	②（２）	②（３）	③（１）	③（２）	③（３）
DL	技能【導入】	アート表現基礎	フィジカルアート表現基礎（絵画）	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	アート表現基礎	フィジカルアート表現基礎（身体パフォーマンス）	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【導入】	アート表現基礎	フィジカルアート表現基礎（立体造形）	2	1	選択		◎		○					○
DL	技能【専門】	意味	アート作品のデジタル分析技術	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	工芸・美術・芸能の社会活用	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	テキストマイニング	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	デザイン評価法	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	デジタル文化資源の活用	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	データベース構築法	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	パフォーマンス制作と記録	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	意味	美術品・工芸品のデジタル化技術	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	映像・音声アーカイブ	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	コンピュータグラフィックス	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	サウンド処理	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	デザインとAI・人工知能・機械学習	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	デザインとバーチャルリアリティ	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	デザインののためのビッグデータ解析	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	デジタルファブリケーション	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	Webアーカイブ技術	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	情報	Webコンテンツ活用システム	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	環境	コミュニティデザイン	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	環境	ジオデザイン	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	環境	地域調査法	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	環境	データビジュアライゼーション	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	環境	CAD/CG演習	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	社会	アートマネジメント演習	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	社会	グラフィックファシリテーション	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	社会	サービスデザイン	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	社会	デザインエスノグラフィー	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	社会	ワークショップデザイン	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	アート表現応用	デジタルアート表現応用（インスタレーション）	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	アート表現応用	フィジカルアート表現応用（インスタレーション）	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	技能【専門】	特殊演習	デザイン・アート特殊演習	2	2	選択		◎		◎					◎
DL	知識【導入】	デザイン・アート知識基礎	インダストリアルデザイン論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート知識基礎	京都・伝統文化論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート知識基礎	グローバルデザイン論	2	1	選択	◎			○					○

科目 区分	科目 区分2	科目 区分3	科目名称	単位	配当 回生	履修 区分	①（１）	①（２）	①（３）	②（１）	②（２）	②（３）	③（１）	③（２）	③（３）
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	芸術批評論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	地域デザイン論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	デザイン・アートとコンピュータ基礎	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	デザイン・アートとビジュアルコミュニ ケーション	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	デザイン態度論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	デザイン理論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	デジタルヒューマニティーズ概論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【導入】	デザイン・アート 知識基礎	人間中心デザイン論	2	1	選択	◎			○					○
DL	知識【専門】	意味	音楽とデザイン	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	芸能・演劇史	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	現代アート論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	工芸・産業史	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	視覚芸術表現論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	視覚文化・芸術史	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	身体表現論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	意味	デザインと人類学	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	感性・認知情報処理論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デザインとコンピュータ応用	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デザインと知覚	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デザインと人間工学	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デザインのための数理	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デザインのためのデータマイニング	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デジタルアーカイブ概論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	デジタルメディアデザイン論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	情報	メディア処理論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	建築意匠論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	建築情報論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	コ・デザイン論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	地理情報科学	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	都市デザイン	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	ランドスケープ・庭園史	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	環境	歴史まちづくり	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	アートマネジメント論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	戦略的デザイン論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザイン・アートと国際社会	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザイン・アートと世界史	2	2	選択	◎			◎					◎

科目 区分	科目 区分2	科目 区分3	科目名称	単位	配当 回生	履修 区分	①（１）	①（２）	①（３）	②（１）	②（２）	②（３）	③（１）	③（２）	③（３）
DL	知識【専門】	社会	デザイン・アートと歴史・考古学	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザインと行政	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザインと知的財産権	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザインとマーケティング	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	デザインマネジメント論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	美術教育論	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	社会	ミュゼオロジー	2	2	選択	◎			◎					◎
DL	知識【専門】	特殊講義	デザイン・アート特殊講義	2	2	選択	◎			◎					◎
卒研	卒研	卒研	卒業研究	2	4	必修	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
DSA	DSA	DSA	Design Study Abroad	2	1	選択	◎	◎		◎			◎		

【資料3】デザイン・アート学部カリキュラムツリー



メディアを利用した授業実施ガイドライン（2025 年度版）

以下の通り、本学におけるメディアを利用した授業実施ガイドラインを策定する。通信教育を行う大学以外の大学は、学生がキャンパスに来て学ぶことを前提とした学校であり、本学も対面授業を行うことを前提に認可されている。よって、ガイドライン策定にあたっては、遠隔授業として取扱う科目であっても、対面授業に相当する教育効果を有する（同時性又は即応性を持つ双方向性（対話性）を有する）と認められる授業を実施することが必要であるという考えを前提としている。

なお、ここでいう「メディアを利用した授業」とは、全授業回を対面以外の方法で実施する授業ではなく、文科省の平成 13 年文部科学省告示第 51 号（いわゆる「メディア授業告示」）で運用の認められた、対面授業に近い環境および対面授業により得られる教育効果を有する授業方法を示す。

一方、「遠隔授業」とは、メディアを利用した授業時数が全授業時数の 1/2 以上となる科目のことを示す。

2025 年度から新学年暦（95 分×14 週＋20 分）の運用となるため、それに対応した内容とするが、新学年暦を導入しない一部の専門職大学院については、授業時間数および授業回数に関わる項目は従来の 90 分×15 週に合わせた運用を継続する。

1. メディアを利用して授業を行う場合

メディアを利用して授業を行う場合、通常の対面授業の実施に相当する授業として、以下のとおり実施する。

※ 以下、斜体字の項目については、文科省のメディア授業告示およびその他関連する文書に定められている内容である。

- (1) メディアを利用して行う授業は、「ライブ配信型授業」または「オンデマンド型授業」のいずれかの方法で実施する。一定の要件（以下、(2) および (3) 参照）を満たした場合、通常の対面授業の実施に相当する授業として認める。
 - ① ライブ配信型授業とは、テレビ会議システム（Zoom 等）を利用して、同時双方向に授業内容を教授する授業方法である。
 - ② オンデマンド授業とは、授業時間を固定的に設定せず、学修支援システム（manaba+R）を通じて、受講生に対して講義形式の動画、音声ファイル等を教材として提示し、授業内容を教授する授業方法である。
- (2) メディアを利用して行う授業を実施するにあたって、以下のとおり、面接授業に近い環境で行うとともに、教育の質保証に努めることが必要である。
 - ① 学生の授業内容に対する質問の機会を確保すること。
 - ② 学生一人一人へ確実に情報を伝達する手段や、学生からの相談に速やかに対応する体制が確保されていること。（※1）
 - ③ ライブ配信型授業の場合、授業中、教員と学生が、互いに映像・音声等によるやりとりを行うこと。
 - ④ ライブ配信型授業の場合、画面では黒板の文字が見づらい等の状況が予想される場合には、あら

はじめ学生に補助資料等を配布するなどの工夫をすること。

- ⑤ メディアを活用することにより、一度に多くの学生を対象にして授業を行うことが可能となるが、受講者数が過度に多くならないようにすること（※2）。

（※1）manaba+R のコンテンツやコースニュースで受講者に対してメールアドレスを公開するか、manaba+R「個別指導コレクション」での連絡方法を案内する、あるいは教員と速やかに連絡をとることが可能な方法を具体的に示すこと。

（※2）教学ガイドラインの定めのとおり、上限は 400 名とする（専門科目において、2 年連続して受講登録者が 400 名を超えた講義科目は、翌年度複数クラス開講とする）。

- （3） メディアを利用して行う授業を実施するにあたって、対面授業により得られる教育効果を有する必要があることから、①設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導と、②学生の意見交換の機会を確保するなどの双方向性を確保する。

ただし、オンデマンド型授業は、「同時」または「双方向」でない場合があるため、「授業の終了後すみやかに」（※3）①および②について学修支援システム（manaba+R）を通じて実施する。

（※3）「授業の終了後すみやかに」とは、課題提出等に影響を及ぼすようなタイミングでの回答や解説は行うことを示すのではなく、授業時間割を基準として、授業の当日もしくは翌日午前中をめどに回答や解説を返信することを言う。返信には、「次回授業にて解説する」等もあり得る。

- （4） 多様なメディアの活用方法として、教科書の提示や動画を含む資料を事前に配布し、学生の事前学習を前提とする反転授業を実施する場合（学生の授業外学習としての資料提示）については、本ガイドラインの対象としない。

- （5） メディアを利用して行う授業を実施するにあたって、授業の指導計画（シラバス等）（※4）に即して実施する。

（※4）メディアを利用して授業を行う回については、シラバス「授業スケジュール」の実施回にその旨明記する。シラバス変更が生じた場合は、学修支援システム（manaba+R）等を利用して事前に受講生に周知する。

- （6） メディアを利用して行う授業の講義時間等については、立命館大学学則第 34 条、大学院学則 21 条（単位計算方法）から授業時間数により単位数が定められていることから、講義・解説や質疑応答の時間を含めて 95 分の講義時間を確保するものとする。

- （7） メディアを利用して行う授業を実施するにあたっては、障害のある学生の受講条件に十分配慮する。

- （8） オンデマンド型授業の実施をする場合、以下の点に留意すること。

① 立命館大学学則第 34 条、大学院学則 21 条（単位計算方法）から授業時間数により単位数が定められていることから、講義・解説や質疑応答の時間を含めて 95 分相当の時間を確保する。

- ② オンデマンド配信授業の場合は、いつでも配信することが可能だが、原則、対面授業と同一の曜日時限（時間割どおり）に配信を開始する。
- ③ オンデマンド授業については、文科省の告示でも、「同時」性と「双方向」性の確保が求められていることから、その方法について、シラバスに明記し、対面授業と同等の教育効果が得られるように努めることとする。

- (9) 暴風警報または気象等に関する特別警報が発令された場合もしくは気象等により交通機関が不通となった場合は、立命館大学授業に関する規程第4条により、メディアを利用した授業回であっても対面授業と同じく休講として取扱う。

また、休講とした場合の補講としてメディア授業を実施した場合は、結果としてガイドラインで定める対面授業の回数を下回ったとしても、緊急避難的な特例として対面授業を実施したと見なすこととする。

2. 遠隔授業と対面授業の区別

遠隔授業および対面授業は、以下のとおり位置付ける。

- (1) メディアを利用した授業時数が全授業時数の 1/2 以上（14 回授業の場合であれば 7 回以上）（※5）の場合は、主として遠隔授業を実施するものとみなし、遠隔授業と位置付ける。
- (2) メディアを利用した授業時数が全授業時数の 1/2 未満（14 回授業の場合であれば 6 回以内）（※5）の場合は、主として対面授業を実施するものとみなし、対面授業と位置付ける。

（※5）対面とメディアを併用する授業において、受講生のグループ分けを行い交互に入れ替えるなどの対応を取る場合は、個々の受講生が出席可能な対面授業時数を基準とする。

なお、対面授業とメディアを利用した授業とを同時に実施し、いずれの形態により受講するかを学生自らが選択可能な科目については、半分以上の授業時数を対面で受講する機会が設けられているとは言えないことから、遠隔授業と位置付ける（全ての学生に対し、半分以上の授業時数を対面で受講するよう求めているが、障害を有する学生等への合理的配慮としてメディア授業を行う場合は例外とする）。

3. 遠隔授業を実施する場合

遠隔授業を実施する場合は、以下のとおりとする。

- (1) 遠隔授業を実施する場合については学則（立命館大学学則第 33 条（授業の方法））および大学院学則（立命館大学大学院学則第 20 条（授業の方法））に従う。
- (2) 遠隔授業の具体的な実施方法や対象となる授業科目については、学部則に定める（多様なメディアを高度に利用して行う遠隔授業科目を設けると記載し、対象科目は科目別表に記載）。
 - ① 科目の位置づけ上（概要、到達目標）、多様なメディアを高度に利用して、教室等以外の場所で履修させることが望ましい場合、教授会が必要と認めた場合には、遠隔授業として実施できる。ただし、当該科目の授業方法や教育効果、遠隔授業とすべき事由などについて、学部・研究科等は事前に教学部と調整し、設置をする学部・研究科等から教学委員会に起案し、審議・承認の

ち、学部則に反映させることとする（大学院科目については、研究科則への反映は不要）。なお、各学部、研究科においては、教学総括において遠隔授業の詳細な検証・評価を行うこと。

- ② メディアを利用した遠隔授業と認められた科目については、学部則に定めるため、変更についてはカリキュラム改革事項とし、全学の承認を得ることとする。但し、資格課程等で卒業要件に算入しない科目および大学院科目を遠隔授業として開講する場合、学部則・研究科則で定めることは不要だが、前述の教学部との事前調整と教学委員会での審議・承認を経た上で、大学院科目については研究科委員会での審議を経て、対象科目について開講方針文書に記載することとする。
- ③ 学外研究員、研究専念教員が特例により授業を担当する場合、大学院の科目については、ガイドラインの要件を満たし、担当教員と学生との間で、時差の問題など、学生の履修に影響がないことが確認されていれば、遠隔授業としての開講を可能とする。

学部のゼミ（演習・卒業研究）については、学部則に定める必要があることを鑑みて、遠隔授業の対象とはしない。

- （3） 立命館大学学則第 35 条、大学院学則第 22 条（各授業科目の授業期間）において、各授業科目の授業期間が定められている。遠隔授業を実施する場合においても、規程に対応した講義回数を確保する。
- （4） 遠隔授業の授業期間については、学年暦どおり（※6）に実施する。
（※6） 授業開始日、授業終了日について厳守し、祝日授業日、統一補講日についても同様である。
- （5） 遠隔授業の場合、対面授業に近い環境で行うことが必要であるため、ライブ配信型授業を推奨する。オンデマンド型授業の配信は、実際の時間割の開始時間に合わせて設定する。

以上

全14回授業の場合

(1) 遠隔授業（60単位上限に含む）

①ライブ配信型授業またはオンデマンド型授業が全授業時数の1/2以上（7回以上）

ライブ配信（7回）	対面授業（7回）
-----------	----------

オンデマンド（7回）	対面授業（7回）
------------	----------

②ライブ配信型授業とオンデマンド型授業の合計が全授業時数の1/2以上（7回以上）

オンデマンド （4回）	ライブ配信 （3回）	対面授業（7回）
----------------	---------------	----------

※オンデマンド及びライブ配信の回数は例示

オンデマンド（7回）	ライブ配信（7回）
------------	-----------

③全てライブ配信型またはオンデマンド型授業

ライブ配信（14回）

オンデマンド（14回）

(2) 対面授業（60単位上限に含まない）

①ライブ配信型授業が全授業時数の1/2未満（6回以内）

ライブ配信（6回）	対面授業（8回）
-----------	----------

②オンデマンド型授業が全授業時数の1/2未満（6回以内）

オンデマンド（6回）	対面授業（8回）
------------	----------

③ライブ配信型授業とオンデマンド型授業の合計が全授業時数の1/2未満（6回以内）

オンデマンド （3回）	ライブ配信 （3回）	対面授業（8回）
----------------	---------------	----------

※オンデマンド及びライブ配信の回数は例示

④全て対面授業

対面授業（14回）

(参考) 全15回授業の場合

(1) 遠隔授業 (60単位上限に含む)

①ライブ配信型授業またはオンデマンド型授業が全授業時数の1/2以上 (8回以上)

ライブ配信 (8回)	対面授業 (7回)
------------	-----------

オンデマンド (8回)	対面授業 (7回)
-------------	-----------

②ライブ配信型授業とオンデマンド型授業の合計が全授業時数の1/2以上 (8回以上)

オンデマンド (4回)	ライブ配信 (4回)	対面授業 (7回)
-------------	------------	-----------

オンデマンド (7回)	ライブ配信 (8回)
-------------	------------

③全てライブ配信型またはオンデマンド型授業

ライブ配信 (15回)

オンデマンド (15回)

(2) 対面授業 (60単位上限に含まない)

①ライブ配信型授業が全授業時数の1/2未満 (7回以内)

ライブ配信 (7回)	対面授業 (8回)
------------	-----------

②オンデマンド型授業が全授業時数の1/2未満 (7回以内)

オンデマンド (7回)	対面授業 (8回)
-------------	-----------

③ライブ配信型授業とオンデマンド型授業の合計が全授業時数の1/2未満 (7回以内)

オンデマンド (3回)	ライブ配信 (4回)	対面授業 (8回)
-------------	------------	-----------

※オンデマンド及びライブ配信の回数は例示

④全て対面授業

対面授業 (15回)

【資料5】デザイン・アート学部 履修モデル

① 「意味」 領野 特化型履修モデル（受講登録総単位数140単位）

回生	DiS	DS	DLE 英語	DLS	DLK	卒業研究	教養	登録単位数 /登録上限単位数
4回生	卒業演習 2 ② 卒業演習 1 ②	—	—	<u>Webアーカイブ技術②</u> <u>Webコンテンツ活用システム②</u> <u>音響・音声アーカイブ②</u>	<u>デザインと人間工学②</u> <u>感性・認知情報処理論②</u> <u>アートマネジメント論②</u> <u>ミューゼオロジー②</u>	卒業研究②		20/40
3回生	デザイン学総合研究 2 ② デザイン学総合研究 1 ②	デザイン学 6 ② デザイン学 5 ②	—	<u>デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング②</u> <u>美術品・工芸品のデジタル化技術②</u> <u>デジタル文化資源の活用②</u> <u>パフォーマンス制作と記録②</u> <u>データベース構築法②</u> <u>テキストマイニング②</u>	<u>人間中心デザイン論②</u> <u>視覚文化・芸術史②</u> <u>音楽とデザイン②</u> <u>現代アート論②</u> <u>身体表現論②</u> <u>デジタルアーカイブ概論②</u> <u>デザインと知覚②</u> <u>戦略的デザイン論②</u>	—	2科目×②	40/40
2回生	デザイン学生成プロジェクト演習 2 ② デザイン学生成プロジェクト演習 1 ②	デザイン学 4 ② デザイン学 3 B② デザイン学 3 A②	英語P4② 英語P3②	<u>フィジカルアート表現基礎（身体パフォーマンス）②</u> <u>アート・ドキュメンテーション②</u> <u>デザイン評価法②</u> <u>アート作品のデジタル分析技術②</u> <u>工芸・美術・芸術の社会活用②</u>	<u>芸術批評論②</u> <u>視覚芸術表現論②</u> <u>芸能・演劇史②</u> <u>工芸・産業史②</u>	—	4科目×②	40/40
1回生		デザイン学 2 ④ デザイン学 1 ④	英語P2② 英語P1②	<u>デザインリサーチ②</u> <u>デジタルアート表現基礎（絵画）②</u> <u>デジタルアート表現基礎（立体造形）②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（絵画）②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（立体造形）②</u>	<u>デザイン理論②</u> <u>デザイン態度論②</u> <u>京都・伝統文化論②</u> <u>デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション②</u>	—	5科目×②	40/40
要卒単位数	12	18	8	56		2	20	124

※○数字は単位数

※太字科目は「意味」領野のDL専門科目

※一重下線科目はDL導入科目

※二重下線科目は「意味」領野以外のDL専門科目

②「情報」領野 特化型履修モデル（受講登録総単位数142単位）

回生	DiS	DS	DLE 英語	DLS	DLK	卒業 研究	教養	登録単位数 /登録上限単位数
4回生	卒業演習 2② 卒業演習 1②	—	—	<u>グラフィックファシリテーション②</u> <u>デザイン評価法②</u> <u>データビジュアライゼーション②</u> <u>デジタルアート表現応用（インスタレーション）②</u>	<u>視覚芸術文化表現論②</u> <u>現代アート論②</u> <u>デザインマネジメント論②</u> <u>音楽とデザイン②</u>	卒業研究 ②		22/40
3回生	デザイン学総合研究 2② デザイン学総合研究 1②	デザイン学 6② デザイン学 5②	—	<u>デザインリサーチのためのアカデミック・ ライティング②</u> <u>デザインとAI・人工知能・機械学習②</u> <u>デザインとバーチャルリアリティ②</u> <u>デジタルファブリケーション②</u> <u>コンピュータグラフィックス②</u> <u>Webアーカイブ技術②</u> <u>サウンド処理②</u> <u>音響・音声アーカイブ②</u>	<u>デザインのためのデータマイニング②</u> <u>感性・認知情報諸理論②</u> <u>メディア処理論②</u> <u>デザインと人間工学②</u> <u>デジタルアーカイブ論②</u> <u>戦略的デザイン論②</u>	—	2科目×②	40/40
2回生	デザイン学生生成プロジェクト演習 2② デザイン学生生成プロジェクト演習 1②	デザイン学 4② デザイン学 3 B② デザイン学 3 A②	英語P4② 英語P3②	<u>デザイン・アートのためのプログラミング②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（絵画）②</u> <u>デジタルアート表現基礎（絵画）②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（身体パフォーマンス）②</u> <u>Webコンテンツ活用システム②</u>	<u>デザイン・アートとビジュアルコミュニケー ション②</u> <u>デジタルメディアデザイン論②</u> <u>デザインと知覚②</u> <u>デザインとコンピュータ応用②</u> <u>デザインのための数理②</u>	—	3科目×②	40/40
1回生		デザイン学 2④ デザイン学 1④	英語P2② 英語P1②	<u>デザインリサーチ②</u> <u>デジタルビジュアルデザイン基礎②</u> <u>Webデザイン基礎②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（立体造形）②</u> <u>デジタルアート表現基礎（立体造形）②</u>	<u>デザイン理論②</u> <u>デザイン態度論②</u> <u>デジタルヒューマニティーズ概論②</u> <u>デザイン・アートとコンピュータ基礎②</u>	—	5科目×②	40/40
要卒単位数	12	18	8	56		2	20	124

※○数字は単位数

※太字科目は「情報」領野のDL専門科目

※一重下線科目はDL導入科目

※二重下線科目は「情報」領野以外のDL専門科目

③「環境」領野 特化型履修モデル（受講登録総単位数134単位）

回生	DiS	DS	DLE 英語	DLS	DLK	卒業 研究	教養	登録単位数 /登録上限単位数
4回生	卒業演習 2 ② 卒業演習 1 ②	—	—	<u>グラフィックファシリテーション②</u> <u>デザイン評価法②</u> <u>デザインエスノグラフィー②</u>	<u>視覚芸術表現論②</u> <u>現代アート論②</u> <u>デザインマネジメント論②</u>	卒業研究 ②		18/40
3回生	デザイン学総合研究 2 ② デザイン学総合研究 1 ②	デザイン学 6 ② デザイン学 5 ②	—	<u>デザインリサーチのためのアカデミック・ ライティング②</u> CAD/CG演習② <u>デザインとバーチャルリアリティ②</u> <u>デザインのためのビッグデータ解析②</u> <u>デザインエスノグラフィー②</u> <u>デジタルファブリケーション②</u>	<u>デザイン・アートとビジュアルコミュニ ケーション②</u> 建築意匠論② 建築情報論② ランドスケープ・庭園史② 歴史まちづくり② <u>デザインと人類学②</u>	—	2科目×②	36/40
2回生	デザイン学生成プロジェクト演習 2 ② デザイン学生成プロジェクト演習 1 ②	デザイン学 4 ② デザイン学 3 B② デザイン学 3 A②	英語P4② 英語P3②	<u>フィジカルアート表現基礎（絵画）②</u> <u>デジタルアート表現基礎（絵画）②</u> コミュニティデザイン② ジオデザイン② 地域調査法② データビジュアライゼーション②	<u>グローバルデザイン論②</u> コ・デザイン論② 地理情報科学② 都市デザイン②	—	3科目×②	40/40
1回生		デザイン学 2 ④ デザイン学 1 ④	英語P2② 英語P1②	<u>デザインリサーチ②</u> <u>デジタルビジュアルデザイン基礎②</u> <u>フィジカルアート表現基礎（立体造形）②</u> <u>デジタルアート表現基礎（立体造形）②</u> <u>デザイン・アートのための製図②</u>	<u>デザイン理論②</u> <u>デザイン態度論②</u> <u>地域デザイン論②</u> <u>人間中心デザイン論②</u>	—	5科目×②	40/40
要卒単位数	12	18	8	56		2	20	124

※○数字は単位数

※太字科目は「環境」領野のDL専門科目

※一重下線科目はDL導入科目

※二重下線科目は「環境」領野以外のDL専門科目

④「社会」領野 特化型履修モデル（受講登録総単位数138単位）

回生	DiS	DS	DLE 英語	DLS	DLK	卒業 研究	教養	登録単位数 /登録上限単位数
4回生	卒業演習2② 卒業演習1②	—	—	アート作品のデジタル分析技術② 美術品・工芸品のデジタル化技術② デジタル文化資源の活用② 工芸・美術・芸術の社会活用②	現代アート論② 工芸・産業史② 視覚文化・芸術史②	卒業研究 ②		20/40
3回生	デザイン学総合研究2② デザイン学総合研究1②	デザイン学6② デザイン学5②	—	アートマネジメント演習② グラフィックファシリテーション② デジタルアート表現応用（インスタレーション）② フィジカルアート表現応用（インスタレーション）② デザイン評価法②	デザインとマーケティング② デザインと行政② デザインと知的財産権② デザイン・アートと国際社会② デザイン・アートと世界史② デザイン・アートと歴史・考古学② デザインと人類学② 視覚芸術表現論②	—	2科目×②	38/40
2回生	デザイン学生成プロジェクト演習2② デザイン学生成プロジェクト演習1②	デザイン学4② デザイン学3B② デザイン学3A②	英語P4② 英語P3②	フィジカルアート表現基礎（絵画）② デジタルアート表現基礎（絵画）② サービスデザイン② ワークショップデザイン② デザインエスノグラフィー②	戦略的デザイン論② デザインマネジメント論② アートマネジメント論② ミュージオロジー② 美術教育論②	—	3科目×②	40/40
1回生		デザイン学2④ デザイン学1④	英語P2② 英語P1②	デザインリサーチ② デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング② フィジカルアート表現基礎（立体造形）② デジタルアート表現基礎（立体造形）② フィジカルアート表現基礎（身体パフォーマンス）②	デザイン理論② デザイン態度論② デザイン・アートとビジュアルコミュニ ケーション② グローバルデザイン論②	—	5科目×②	40/40
要卒業単位数	12	18	8	56		2	20	124

※○数字は単位数

※太字科目は「社会」領野のDL専門科目

※一重下線科目はDL導入科目

※二重下線科目は「社会」領野以外のDL専門科目

1. 書類等の題名

実習先の承諾書

【資料 6】 p18-p23

2. 出典

立命館大学

3. 引用範囲

p1-p6

4. その他特記事項

学内資料のため非公開とする

1. 書類等の題名

実習先の承諾書

【資料 7】 p24

2. 出典

立命館大学

3. 引用範囲

p1

4. その他特記事項

学内資料のため非公開とする

【資料8】

○大学教員定年規則

昭和34年2月27日

規程第62号

第1条 大学教員の定年は、教授については満65歳とする。教授以外の教員については満60歳とする。

第2条 大学教員が定年に達したときは、その学年末に退職するものとする。

第3条 前2条にかかわらず、総長（学長）および副総長（副学長）の職にある者は、その在任中、教授に任用する。

第4条 この規程の改廃は、各教授会、大学協議会、常任理事会の議を経て理事会が行う。

附 則

この規則は、昭和34年3月1日から施行する。

附 則（1985年4月26日付第3条の改正並びに第4条及び附則第1項から第5項までの削除）

1 第3条による任用は、該当の学部教授会及び大学協議会の議を経て行なうものとする。

2 この規則は、1985年4月1日から適用する。

附 則（2000年3月8日副総長（副学長）職追加に伴う改正）

この規則は、2000年4月1日から施行する。

附 則（2004年3月26日改廃規定新設にともなう一部改正）

この規則は、2004年3月26日から施行する。

附 則（2008年7月11日総合理工学院設置に伴う一部改正）

この規程は、2008年7月11日から施行し、2008年4月1日から適用する。

【資料9】

デザイン・アート学部 時間割

科目名 & （クラス名） & 担当教員

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	月	新棟小教室1	デザイン学1（1）迎山和司				
春	月	新棟小教室2	デザイン学1（2）飯沼洋子				
春	月	新棟小教室3	デザイン学1（3）小田裕和				
春	月	新棟小教室4	デザイン学1（4）井登友一				
春	月	新棟小教室5	デザイン学1（5）堀井隆斗				
春	月	新棟小教室6	デザイン学1（6）木村智				
春	月	新棟小教室7	デザイン学1（7）松葉涼子				
春	月	新棟小教室8	デザイン学1（8）上平崇仁				
春	月	充光館デジタルスタジオ	データビジュアライゼーション（1）桐村喬				
春	月	新棟オープンスタジオ①	データベース構築法（1）松葉涼子				
春	月	新棟デジタルスタジオ①	デジタル文化資源の活用（1）岡田万里子				
春	月	以IG403	科学と技術の歴史（1）永島昂				
春	月	明MG003		Introduction to Linguistics（1） RAJKAIZSOMBORTIBOR			
春	月	明MG201		Introductory Course to International Project Development（1）稲澤泉			
春	月	明MG202		科学技術と倫理（1）林芳紀			
春	月	充光館オープンアトリエ			フィジカルアート表現基礎（身体パフォーマンス） （1）飯沼洋子		
春	月	新棟小教室1			英語P1（3）木村修平		
春	月	新棟オープンスタジオ①			CAD/CG演習（1）北本英里子/松岡正明/小島一郎		
春	月	充光館デジタルスタジオ			アート作品のデジタル分析技術（1）松葉涼子		
春	月	新棟デジタルスタジオ①			デジタルアート表現応用（インスタレーション） （1）迎山和司		
春	月	充光館オープンスタジオ			工芸・美術・芸能の社会活用（1）前崎信也		
春	月	恒KS306			Japan and the West（1）DANISMANIDRIS		
春	月	以IG302			現代平和論（1）池尾靖志		
春	月	明MG202			アメリカの社会と文化（1）水谷憲一		
春	月	新棟小教室1				英語P1（4）山下美朋	
春	月	新棟オープンスタジオ②				デザイン・アート特殊演習（1）八重樫文	
春	月	新棟オープンアトリエ				博物館・学内実習（1）実方葉子	
春	月	以IG302				スポーツと現代社会（1）権学俊	

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	月	明MG202				スポーツのサイエンス（1）橋本健志	
春	月	以IG402				現代社会と法（1）小田美佐子	
春	月	学GJ401					《留》日本の経済・経営（1）笹尾俊明
春	月	明MG001					Introduction to Peace Studies（1）小林主茂
春	月	以IG401					イスラーム世界の多様性（1）末近浩太
春	月	以IG302					スポーツの歴史と発展（1）市井吉興
春	月	清SE401					京都学（1）田中聡
春	月	志SG403					教養ゼミナール（1）山中司
春	月	明MG201					材料と化学（1）花崎知則
春	月	明MG202					心理学入門（1）若林宏輔
春	月	存ZS201					世界の言語と文化（1）田原憲和
春	月	明MG401					日本の近現代と立命館（1）小関素明
春	火	新棟小教室1	英語P1（1）木村修平				
春	火	新棟小教室2	英語P1（5）山下美朋				
春	火	新棟小教室3	英語P1（9）近藤雪絵				
春	火	充光館デジタルスタジオ	デザインのためのビッグデータ解析（1）杉山 直磯				
春	火	充光館オープンスタジオ	デザイン評価法（1）永盛祐介				
春	火	新棟デジタルスタジオ①	地域調査法（1）佐藤弘隆				
春	火	新棟小教室4	卒業演習1（1）井登友一				
春	火	新棟小教室5	卒業演習1（2）小田裕和				
春	火	新棟小教室6	卒業演習1（3）八重樫文				
春	火	新棟小教室7	卒業演習1（4）上平崇仁				
春	火	新棟小教室8	卒業演習1（5）大島陽				
春	火	オープンラボ①	卒業演習1（6）中山郁英				
春	火	オープンラボ②	卒業演習1（7）松葉涼子				
春	火	啓KM401	現代日本の政治（1）吉次公介				
春	火	新棟小教室3		英語P1（10）近藤雪絵			
春	火	新棟小教室1		英語P1（2）木村修平			
春	火	新棟小教室2		英語P1（6）山中司			
春	火	新棟小教室6		卒業演習1（10）赤間亮			

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	火	新棟小教室7		卒業演習1 (11) 中山雅人			
春	火	新棟小教室8		卒業演習1 (12) 堀井隆斗			
春	火	オープンラボ①		卒業演習1 (13) 橋口哲志			
春	火	オープンラボ②		卒業演習1 (14) 木村智			
春	火	新棟小教室4		卒業演習1 (8) 前崎信也			
春	火	新棟小教室5		卒業演習1 (9) 岡田万里子			
春	火	明MG201		Introduction to Global Justice (1) 安武留美			
春	火	洋YY302		Understanding Visual Culture (1) 永田彰子			
春	火	明MG202		メディアと現代文化 (1) 福岡良明			
春	火	以IG402		災害と安全 (1) 吉岡泰亮			
春	火	以IG302		生命科学と倫理 (1) 大谷いづみ			
春	火	明MG402		文化人類学入門 (1) YOTOVAMARIAIVANOVA			
春	火	新棟小教室2			英語P1 (7) 山中司		
春	火	新棟オープンアトリエ			コミュニティデザイン (1) 高木良枝		
春	火	充光館デジタルスタジオ			テキストマイニング (1) 杉山 直磯		
春	火	充光館オープンスタジオ			パフォーマンス制作と記録 (1) 小倉由佳子		
春	火	明MG001			Modern World History (1) 松坂裕晃		
春	火	以IG302			社会思想史 (1) 日暮雅夫		
春	火	新棟小教室2				英語P1 (8) 山中司	
春	火	存ZS207				現代社会とボランティア (1) 山口洋典	
春	火	明MG401				生命科学 (生物と生態系) (1) 石水毅	
春	火	明MG202					Non-verbal Communication (1) 谷村緑
春	火	以IG302					市民と政治 (1) 小堀眞裕
春	水	新棟デジタルスタジオ①	Webコンテンツ活用システム (1) 前崎信也				
春	水	充光館オープンスタジオ	サウンド処理 (1) 中山雅人				
春	水	新棟オープンスタジオ①	フィジカルアート表現応用 (インсталレーション) (1) 飯沼洋子				
春	水	以IG406		Cross-cultural Encounters 1 (1) 庄子萌			
春	水	明MG003		Introduction to Anthropology (1) SMITHNATHANIELM.			
春	水	明MG202		Introduction to Economics (1) 笹尾俊明			
春	水	以IG401		映像と表現 (1) 北浦寛之			

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	水	以IG302		現代の経営（1）依田祐一			
春	水	充光館オープンスタジオ			コンピュータグラフィックス（1）橋口哲志		
春	水	新棟オープンスタジオ①			デザインエスノグラフィー（1）上平崇仁		
春	水	新棟デジタルスタジオ①			映像・音声アーカイブ（1）杉山 直磯		
春	水	敬KG206			Cross-cultural Encounters 2（1）庄子萌		
春	水	以IG402			ジェンダーとダイバーシティ（1）柳原恵		
春	水	以IG302			現代の教育（1）河井亨		
春	水	明MG301			国の行政組織（1）紀國洋		
春	水	学GJ402			仕事とキャリア（1）中川洋子		
春	水	明MG402			地球科学（1）川方裕則		
春	水	志SG204				Academic Skills 1（1）羽谷沙織	
春	水	洋YY306				Liberal Arts Seminar（1）山中司	
春	水	存ZS204				ピア・サポート論（1）鳥居朋子	
春	水	以IG401				現代の国際関係と日本（1）鳥山純子	
春	水	明MG202				戦争の歴史と思想（1）金丸裕一	
春	水	清SE401				日本国憲法（1）植松健一	
春	水	存ZS207					学びとキャリア（1）中川洋子
春	水	明MG202					観光学（1）遠藤英樹
春	水	以IG403					東アジアと朝鮮半島（1）金友子
春	木	充光館オープンスタジオ	アート・ドキュメンテーション（1）植田彩芳子				
春	木	充光館デジタルスタジオ	デジタルアート表現基礎（立体造形）（1）迎山和司				
春	木	新棟小教室1	英語P3（3）木村修平				
春	木	新棟小教室2	英語P3（7）山中司				
春	木	充光館オープンアトリエ	グラフィックファシリテーション（1）野々山正章				
春	木	新棟オープンスタジオ①②	デザイン学5（1）桐村喬/磯邊美香/中山郁英/松葉涼子/中山雅人/木村智/植田彩芳子/迎山和司				
春	木	研KE402	新しい日本史像（1）小関素明				
春	木	新棟小教室1		英語P3（4）山下美朋			
春	木	新棟小教室2		英語P3（8）山中司			
春	木	新棟小教室5		デザイン学総合研究1（1）堀井隆斗			
春	木	新棟小教室6		デザイン学総合研究1（2）小田裕和			

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	木	新棟小教室7		デザイン学総合研究1 (3) 中山郁英			
春	木	新棟小教室8		デザイン学総合研究1 (4) 大島陽			
春	木	オープンラボ①		デザイン学総合研究1 (5) 岡田万里子			
春	木	オープンラボ②		デザイン学総合研究1 (6) 前崎信也			
春	木	以IG302		ヨーロッパの歴史 (1) 小林功			
春	木	恒KS201		Introduction to Gender Studies (1) KIMVIKTORIYA			
春	木	明MG202		生命科学 (分子と生命) (1) 鈴木健二			
春	木	新棟オープンアトリエ			デザイン・アートのための製図 (1) 木村智/高田美咲/西堀寛子		
春	木	充光館デジタルスタジオ			デジタルアート表現基礎 (絵画) (1) 迎山和司		
春	木	新棟オープンスタジオ①			アートマネジメント演習 (1) 植田彩芳子		
春	木	新棟デジタルスタジオ①			ジオデザイン (1) 関口達也		
春	木	充光館オープンスタジオ			デザインとAI・人工知能・機械学習 (1) 堀井隆斗		
春	木	新棟小教室1			英語P3 (1) 木村修平		
春	木	新棟小教室2			英語P3 (5) 山下美朋		
春	木	新棟小教室3			英語P3 (9) 近藤雪絵		
春	木	啓KM201			(留) 日本の文化・地理・歴史 (1) 西林孝浩		
春	木	明MG202			Introductory Course to Climate Change and Global Warming (1) 稲澤泉		
春	木	以IG403			メンタルヘルス (1) 安田裕子		
春	木	学GJ401			文芸創作論 (1) 岡本小百合		
春	木	新棟小教室3				英語P3 (10) 近藤雪絵	
春	木	新棟小教室1				英語P3 (2) 木村修平	
春	木	新棟小教室2				英語P3 (6) 山中司	
春	木	新棟小教室8				デザイン学総合研究1 (10) 有田洋子	
春	木	オープンラボ①				デザイン学総合研究1 (11) 中村大	
春	木	オープンラボ②				デザイン学総合研究1 (12) 飯沼洋子	
春	木	新棟小教室5				デザイン学総合研究1 (7) 中山雅人	
春	木	新棟小教室6				デザイン学総合研究1 (8) 北本英里子	
春	木	新棟小教室7				デザイン学総合研究1 (9) 佐藤弘隆	
春	木	学GJ403				映像メディア実践入門 (1) 辻野理花	
春	木	明MG002					Introduction to the United Nations (1) 石川幸子

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	木	以IG403					情報技術と社会（1）山下洋一
春	金	充光館オープンスタジオ	デザインリサーチ（1）小田裕和				
春	金	新棟オープンスタジオ①	フィジカルアート表現基礎（立体造形）（1）飯沼洋子				
春	金	充光館デジタルスタジオ	デザインとバーチャルリアリティ（1）中山雅人				
春	金	新棟デジタルスタジオ①	デジタルファブリケーション（1）大島陽				
春	金	充光館オープンアトリエ	ワークショップデザイン（1）中山郁英				
春	金	新棟小教室1	卒業演習1（15）佐藤弘隆				
春	金	新棟小教室2	卒業演習1（16）北本英里子				
春	金	新棟小教室3	卒業演習1（17）桐村喬				
春	金	新棟小教室4	卒業演習1（18）植田彩芳子				
春	金	新棟小教室5	卒業演習1（19）有田洋子				
春	金	新棟小教室6	卒業演習1（20）中村大				
春	金	新棟小教室7	卒業演習1（21）山下範久				
春	金	研KE402	文学と社会（1）禰美智章				
春	金	新棟小教室8		卒業演習1（22）迎山和司			
春	金	オープンラボ①		卒業演習1（23）飯沼洋子			
春	金	恒KS201		Introduction to Law（1）越智明			
春	金	明MG202		音楽原論（1）小寺未知留			
春	金	研KE402		宗教と社会（1）佐々充昭			
春	金	充光館オープンスタジオ			デジタルビジュアルデザイン基礎（1）磯邊美香		
春	金	新棟オープンスタジオ①			フィジカルアート表現基礎（絵画）（1）飯沼洋子		
春	金	新棟デジタルスタジオ②			Webアーカイブ技術（1）武内樹治		
春	金	新棟小教室1			デザイン学生成プロジェクト演習1（1）井登友一/山下範久		
春	金	新棟小教室2			デザイン学生成プロジェクト演習1（2）八重樫文/桐村喬		
春	金	新棟小教室3			デザイン学生成プロジェクト演習1（3）大島陽/中山雅人		
春	金	新棟小教室4			デザイン学生成プロジェクト演習1（4）前嶋信也/中村大		
春	金	新棟小教室5			デザイン学生成プロジェクト演習1（5）赤間亮/北本英里子		
春	金	新棟デジタルスタジオ①			美術品・工芸品のデジタル化技術（1）松葉涼子		
春	金	学GJ404			Academic Skills 2（1）羽谷沙織		
春	金	明MG202			世界と日本の食文化（1）中川加奈子		

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
春	金	KT 2 アリーナ			スポーツ方法実習Ⅰ (1) 金山千広		
春	金	新棟小教室5				デザイン学生生成プロジェクト演習1 (10) 有田洋子/ 迎山和	
春	金	新棟小教室1				デザイン学生生成プロジェクト演習1 (6) 岡田万里子 /堀井隆斗	
春	金	新棟小教室2				デザイン学生生成プロジェクト演習1 (7) 上平崇仁/ 橋口哲	
春	金	新棟小教室3				デザイン学生生成プロジェクト演習1 (8) 松葉涼子/ 佐藤弘隆	
春	金	新棟小教室4				デザイン学生生成プロジェクト演習1 (9) 木村智/植 田彩芳子	
春	金	興KO202				Cross-cultural Seminar (1) 羽谷沙織	
春	金	明MG202				科学的な見方・考え方 (1) 大上芳文	
春	金	明MG201				情報科学 (1) 佐竹賢治	
春	金	研KE402				論理と思考 (1) 伊勢俊彦	
春	金	存ZS301					社会学入門 (1) 金澤悠介
秋	月	新棟小教室1	デザイン学2 (1) 岡田万里子				
秋	月	新棟小教室2	デザイン学2 (2) 前崎信也				
秋	月	新棟小教室3	デザイン学2 (3) 橋口哲志				
秋	月	新棟小教室4	デザイン学2 (4) 中山雅人				
秋	月	新棟小教室5	デザイン学2 (5) 北本英里子				
秋	月	新棟小教室6	デザイン学2 (6) 佐藤弘隆				
秋	月	新棟小教室7	デザイン学2 (7) 有田洋子				
秋	月	新棟小教室8	デザイン学2 (8) 中山郁英				
秋	月	充光館オープンアトリエ	グラフィックファシリテーション (2) 野々山正章				
秋	月	充光館オープンスタジオ	データベース構築法 (2) 松葉涼子				
秋	月	充光館デジタルスタジオ	テキストマイニング (2) 杉山 直機				
秋	月	新棟デジタルスタジオ①	デジタルファブリケーション (2) 大島陽				
秋	月	恒KS201	Introduction to Linguistics (2) RAJKAIZSOMBORTIBOR				
秋	月	以IG301	現代環境論 (1) 杉本通百則				
秋	月	明MG202		Computers in Education (1) WHITEJEREMYSTEWARD			
秋	月	新棟小教室2			英語P2 (3) 木村修平		
秋	月	充光館デジタルスタジオ			アート作品のデジタル分析技術 (2) 松葉涼子		
秋	月	新棟オープンスタジオ①			コンピュータグラフィックス (2) 橋口哲志		
秋	月	新棟デジタルスタジオ①			デジタルアート表現応用 (インスタレーション) (2) 迎山和司		

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	月	充光館オープンスタジオ			工芸・美術・芸能の社会活用 (2) 前嶋信也		
秋	月	新棟小教室1			卒業研究 (1) 井登友一		
秋	月	オープンラボ①			卒業研究 (12) 堀井隆斗		
秋	月	新棟小教室6			卒業研究 (17) 桐村喬		
秋	月	新棟小教室7			卒業研究 (21) 山下範久		
秋	月	新棟小教室8			卒業研究 (22) 迎山和司		
秋	月	新棟小教室3			卒業研究 (4) 上平宗仁		
秋	月	新棟小教室4			卒業研究 (7) 松葉涼子		
秋	月	新棟小教室5			卒業研究 (9) 岡田万里子		
秋	月	以IG306			Cross-cultural Encounters 1 (2) 庄子萌		
秋	月	明MG001			Introduction to Gender Studies (2) KIMVIKTORIYA		
秋	月	新棟小教室2				英語P2 (4) 山下美朋	
秋	月	新棟オープンスタジオ②				デザイン・アート特殊演習 (2) 磯邊美香	
秋	月	新棟オープンアトリエ				博物館・学内実習 (2) 実方葉子	
秋	月	新棟小教室5				卒業研究 (10) 赤間亮	
秋	月	新棟小教室6				卒業研究 (11) 中山雅人	
秋	月	新棟小教室7				卒業研究 (18) 植田彩芳子	
秋	月	新棟小教室8				卒業研究 (20) 中村大	
秋	月	新棟小教室1				卒業研究 (3) 八重樫文	
秋	月	新棟小教室3				卒業研究 (5) 大島陽	
秋	月	新棟小教室4				卒業研究 (8) 前嶋信也	
秋	月	清SE401				観光学 (2) 遠藤英樹	
秋	月	以IG402				現代人とヘルスケア (1) 芳田哲也	
秋	月	明MG202					Language in Politics (1) DAUERHARRY
秋	火	新棟小教室1	英語P2 (1) 木村修平				
秋	火	新棟小教室2	英語P2 (5) 山下美朋				
秋	火	新棟小教室3	英語P2 (9) 近藤雪絵				
秋	火	充光館オープンアトリエ	CAD/CG演習 (2) 北本英里子/松岡正明/小島一郎				
秋	火	充光館デジタルスタジオ	デザインのためのビッグデータ解析 (2) 杉山 直磯				
秋	火	新棟オープンスタジオ①	フィジカルアート表現応用 (インスタレーション) (2) 飯沼洋子				

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	火	新棟小教室4	卒業演習2（1）井登友一				
秋	火	新棟小教室5	卒業演習2（2）小田裕和				
秋	火	新棟小教室6	卒業演習2（3）八重樫文				
秋	火	新棟小教室7	卒業演習2（4）上平崇仁				
秋	火	新棟小教室8	卒業演習2（5）大島陽				
秋	火	オープンラボ①	卒業演習2（6）中山郁英				
秋	火	オープンラボ②	卒業演習2（7）松葉涼子				
秋	火	敬KG108	ソーシャルデザイン論（2）永野聡				
秋	火	研KE402	心理学入門（2）若林宏輔				
秋	火	新棟小教室3		英語P2（10）近藤雪絵			
秋	火	新棟小教室1		英語P2（2）木村修平			
秋	火	新棟小教室2		英語P2（6）山中司			
秋	火	新棟小教室6		卒業演習2（10）赤間亮			
秋	火	新棟小教室7		卒業演習2（11）中山雅人			
秋	火	新棟小教室8		卒業演習2（12）堀井隆斗			
秋	火	オープンラボ①		卒業演習2（13）橋口哲志			
秋	火	オープンラボ②		卒業演習2（14）木村智			
秋	火	新棟小教室4		卒業演習2（8）前崎信也			
秋	火	新棟小教室5		卒業演習2（9）岡田万里子			
秋	火	恒KS201		Modern World History（2）松坂裕晃			
秋	火	清SE009		Understanding Visual Culture（2）永田彰子			
秋	火	明MG402		現代平和論（2）池尾靖志			
秋	火	学GJ308		超領域リベラルアーツ（2）山中司			
秋	火	新棟小教室2		英語P2（7）山中司			
秋	火	新棟デジタルスタジオ①		ジオデザイン（2）関口達也			
秋	火	充光館オープンスタジオ		デザインとAI・人工知能・機械学習（2）堀井隆斗			
秋	火	充光館オープンアトリエ		ワークショップデザイン（2）岡本晋			
秋	火	明MG202		日本経済概説（1）吉岡真史			
秋	火	新棟小教室2			英語P2（8）山中司		
秋	火	以IG402			スポーツと現代社会（2）権学俊		

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	火	研KE402				生命科学（生物と生態系）（2）石水毅	
秋	火	以IG302				哲学と人間（1）加國尚志	
秋	火	明MG002					Introduction to Peace Studies（2）小林主茂
秋	火	興KO202					シチズンシップ・スタディーズ（1）山口洋典
秋	火	明MG402					市民と政治（2）小堀眞裕
秋	水	充光館デジタルスタジオ	Webコンテンツ活用システム（2）前崎信也				
秋	水	充光館オープンスタジオ	サービスデザイン（1）井登友一				
秋	水	新棟デジタルスタジオ①	地域調査法（2）佐藤弘隆				
秋	水	明MG001	Japan and the West（2）DANISMANIDRIS				
秋	水	以IG305		Academic Skills 1（2）羽谷沙織			
秋	水	明MG001		Introduction to Anthropology（2）SMITHNATHANIELM.			
秋	水	以IG302		ジェンダーとダイバーシティ（2）柳原恵			
秋	水	敬KG216		教養ゼミナール（2）山中司			
秋	水	明MG202		文化人類学入門（2）YOTOVAMARIAIVANOVA			
秋	水	充光館オープンスタジオ			デザイン・アートのためのプログラミング（1）堀井隆斗		
秋	水	新棟デジタルスタジオ①			データビジュアライゼーション（2）桐村喬		
秋	水	充光館デジタルスタジオ			デジタル文化資源の活用（2）金子貴昭		
秋	水	新棟小教室3			卒業研究（13）橋口哲志		
秋	水	新棟小教室4			卒業研究（14）木村智		
秋	水	新棟小教室5			卒業研究（15）佐藤弘隆		
秋	水	新棟小教室6			卒業研究（16）北本英里子		
秋	水	新棟小教室7			卒業研究（19）有田洋子		
秋	水	新棟小教室1			卒業研究（2）小田裕和		
秋	水	新棟小教室8			卒業研究（23）飯沼洋子		
秋	水	新棟小教室2			卒業研究（6）中山郁英		
秋	水	明MG202			Introduction to Economics（2）笹尾俊明		
秋	水	研KE301			現代社会とボランティア（2）山口洋典		
秋	水	明MG101			中国の国家と社会（1）松本保宣		
秋	水	以IG402			美と芸術の論理（1）西林孝浩		
秋	水	以IG302			文学と社会（2）禰美智章		

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	水	明MG003				(留) 日本語学 (1) 三井久美子	
秋	水	清SE206				Cross-cultural Studies (1) 庄子萌	
秋	水	学GJ401				映像メディア実践入門 (2) 辻野理花	
秋	水	明MG101				現代の教育 (2) 河井亨	
秋	水	明MG201				現代社会と法 (2) 小田美佐子	
秋	水	以IG403				戦争の歴史と思想 (2) 金丸裕一	
秋	水	存ZS301				統計学 (1) 田中力	
秋	水	以IG203					Liberal Arts Seminar (2) 山中司
秋	水	学GJ309					コーオプ演習(実践) (1) 中川洋子
秋	木	充光館オープンアトリエ	デザイン・アートのための製図 (2) 木村智/高田美咲/西堀寛子				
秋	木	充光館デジタルスタジオ	デジタルアート表現基礎 (絵画) (2) 迎山和司				
秋	木	充光館オープンスタジオ	Webデザイン基礎 (1) 磯邊美香				
秋	木	新棟オープンアトリエ	コミュニティデザイン (2) 高木良枝				
秋	木	新棟オープンスタジオ①	サウンド処理 (2) 中山雅人				
秋	木	新棟デジタルスタジオ①	美術品・工芸品のデジタル化技術 (2) 松葉涼子				
秋	木	新棟小教室1	英語P4 (3) 木村修平				
秋	木	新棟小教室2	英語P4 (7) 山中司				
秋	木	明MG202	History of Computing (1) SVININMIKHAIL				
秋	木	明MG402	人間性と倫理 (1) 永守伸年				
秋	木	以IG402	日本国憲法 (2) 植松健一				
秋	木	新棟小教室1		英語P4 (4) 山下美朋			
秋	木	新棟小教室2		英語P4 (8) 山中司			
秋	木	新棟小教室6		デザイン学総合研究2 (1) 井登友一			
秋	木	新棟小教室7		デザイン学総合研究2 (2) 上平崇仁			
秋	木	新棟小教室8		デザイン学総合研究2 (3) 松葉涼子			
秋	木	オープンラボ①		デザイン学総合研究2 (4) 赤間亮			
秋	木	オープンラボ②		デザイン学総合研究2 (5) 八重樫文			
秋	木	明MG003		Introduction to Law (2) 越智萌			
秋	木	明MG201		Understanding Language (1) 杉野直樹			
秋	木	明MG202		生命科学 (分子と生命) (2) 鈴木健二			

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	木	以IG402		歴史観の形成 (1) 小関素明			
秋	木	充光館オープンスタジオ			デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング (1) 八重樫文/小田裕和		
秋	木	新棟オープンスタジオ①			フィジカルアート表現基礎 (絵画) (2) しばた みづき		
秋	木	新棟デジタルスタジオ①			Webアーカイブ技術 (2) 武内樹治		
秋	木	充光館デジタルスタジオ			デザインとバーチャルリアリティ (2) 中山雅人		
秋	木	新棟小教室1			英語P4 (1) 木村修平		
秋	木	新棟小教室2			英語P4 (5) 山下美朋		
秋	木	新棟小教室3			英語P4 (9) 近藤雪絵		
秋	木	敬KG214			Academic Skills 2 (2) 羽谷沙織		
秋	木	以IG402			近現代の科学技術 (1) 山本憲隆		
秋	木	明MG202			社会と福祉 (1) 石田賀奈子		
秋	木	オープンラボ①				デザイン学総合研究2 (10) 山下範久	
秋	木	オープンラボ②				デザイン学総合研究2 (11) 迎山和司	
秋	木	新棟小教室5				デザイン学総合研究2 (6) 橋口哲志	
秋	木	新棟小教室6				デザイン学総合研究2 (7) 木村智	
秋	木	新棟小教室7				デザイン学総合研究2 (8) 桐村喬	
秋	木	新棟小教室8				デザイン学総合研究2 (9) 植田彩芳子	
秋	木	新棟小教室3				英語P4 (10) 近藤雪絵	
秋	木	新棟小教室1				英語P4 (2) 木村修平	
秋	木	新棟小教室2				英語P4 (6) 山中司	
秋	木	学GJ312				(留) 日本の自然・科学技術 (1) 山本憲隆	
秋	木	学GJ308				(留) 日本の社会・政治 (1) 前田信彦	
秋	木	存ZS204				Cross-cultural Encounters 2 (2) 庄子萌	
秋	木	以IG302				エアースタディ入門 (1) 古賀慎二	
秋	木	諒RY301				異文化間テーマ演習 (1) 石塚健	
秋	木	明MG401				音楽原論 (2) 小寺未知留	
秋	木	以IG402				情報の数理 (1) 高山幸秀	
秋	木	研KE301				文芸創作論 (2) 岡本小百合	
秋	木	明MG002					Introduction to the United Nations (2) 石川幸子
秋	木	敬KG009					ピア・サポート論 (2) 鳥居朋子

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	木	明MG202					数理の世界 (1) 平岡由夫
秋	金	充光館デジタルスタジオ	デジタルアート表現基礎 (立体造形) (2) 由良泰人				
秋	金	充光館オープスタジオ	フィジカルアート表現基礎 (立体造形) (2) 池田剛介				
秋	金	新棟オープスタジオ①	パフォーマンス制作と記録 (2) 小倉由佳子				
秋	金	新棟デジタルスタジオ①	映像・音声アーカイブ (2) 杉山 直機				
秋	金	以IG402	科学・技術と社会 (1) 山口歩				
秋	金	新棟小教室1		卒業演習2 (15) 佐藤弘隆			
秋	金	新棟小教室2		卒業演習2 (16) 北本英里子			
秋	金	新棟小教室3		卒業演習2 (17) 桐村喬			
秋	金	新棟小教室4		卒業演習2 (18) 植田彩芳子			
秋	金	新棟小教室5		卒業演習2 (19) 有田洋子			
秋	金	新棟小教室6		卒業演習2 (20) 中村大			
秋	金	新棟小教室7		卒業演習2 (21) 山下範久			
秋	金	明MG202		Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities (1) 李亮			
秋	金	以IG302		宇宙科学 (1) 川方裕則			
秋	金	研KE402		現代日本の政治 (2) 吉次公介			
秋	金	充光館オープスタジオ		フィジカルアート表現基礎 (身体パフォーマンス) (2) 西田悠哉			
秋	金	新棟小教室1		デザイン学生生成プロジェクト演習2 (1) 井登友一/橋口哲志			
秋	金	新棟小教室2		デザイン学生生成プロジェクト演習2 (2) 大島陽/岡田万里子			
秋	金	新棟小教室3		デザイン学生生成プロジェクト演習2 (3) 松葉涼子/中村大			
秋	金	新棟小教室4		デザイン学生生成プロジェクト演習2 (4) 桐村喬/飯沼洋子			
秋	金	新棟小教室5		デザイン学生生成プロジェクト演習2 (5) 中山雅人/有田洋子			
秋	金	新棟小教室8		卒業演習2 (22) 迎山和司			
秋	金	以IG403		スポーツの歴史と発展 (2) 市井吉興			
秋	金	KT 2 アリーナ		スポーツ方法実習Ⅱ (1) 金山千広			
秋	金	研KE402		現代の世界経済 (1) 大橋陽			
秋	金	新棟小教室5			デザイン学生生成プロジェクト演習2 (10) 小田裕和/木村智		
秋	金	新棟小教室1			デザイン学生生成プロジェクト演習2 (6) 堀井隆斗/北本英里子		
秋	金	新棟小教室2			デザイン学生生成プロジェクト演習2 (7) 中山郁英/前崎信也		
秋	金	新棟小教室3			デザイン学生生成プロジェクト演習2 (8) 磯邊美香/佐藤弘隆		

学期	曜日	教室	1限	2限	3限	4限	5限
秋	金	新棟小教室4				デザイン学生生成プロジェクト演習2（9）上平崇仁/ 植田彩芳子	
秋	金	新棟小教室8				卒業演習2（23）飯沼洋子	
秋	金	以IG302				企業と社会（1）池田伸	
秋	金	明MG201					Cross Border Policy Issues（1）宮脇昇
秋	金	明MG202					経済と社会（1）橋本貴彦

学生の確保の見通し等を記載した書類（本文）

目 次

(1) 新設組織の概要	・・・ P2
① 新設組織の概要	・・・ P2
② 新設組織の特色	・・・ P2
(2) 人材需要の社会的な動向等	・・・ P2
① 新設組織で養成する人材の全国的、地域的、社会的動向の分析	・・・ P2
② 中長期的な 18 歳人口等入学対象人口の全国的、地域的動向の分析	・・・ P5
③ 新設組織の主な学生募集地域	・・・ P5
④ 既設組織の定員充足の状況	・・・ P5
(3) 学生確保の見通し	・・・ P6
① 学生確保に向けた具体的な取組と見込まれる効果	・・・ P6
ア 既設組織における取組とその目標	・・・ P6
イ 新設組織における取組とその目標	・・・ P9
ウ 当該取組実績の分析結果に基づく、新設組織での入学者の見込み数	・・・ P9
② 競合校の状況分析	・・・ P10
ア 競合校の選定理由と新設組織との比較分析、優位性	・・・ P10
イ 競合校の入学志願動向等	・・・ P14
ウ 新設組織において定員を充足できる根拠等	・・・ P16
エ 学生納付金等の金額設定の理由	・・・ P16
③ 先行事例分析	・・・ P19
④ 学生確保に関するアンケート調査	・・・ P19
⑤ 人材需要に関するアンケート調査等	・・・ P20
(4) 新設組織の定員設定の理由	・・・ P21

(1) 新設組織の概要

① 新設組織の概要

新設組織	入学定員	収容定員	所在地(教育研究を行うキャンパス)
立命館大学 デザイン・アート学部デザイン・アート学科	180	720	京都府京都市北区等持院北町 56-1

② 新設組織の特色

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨がる知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成する。

デザイン・アート学部と関連する既存組織として、映像学部があり、その概要は以下のとおりである。なお、新設学部を開設しても、関連する映像学部の学生募集停止や収容定員変更、改組は行わない。

既設組織	入学定員	収容定員	所在地(教育研究を行うキャンパス)
立命館大学 映像学部映像学科	240	960	大阪府茨木市岩倉町 2-150 京都府京都市北区等持院北町56-1

(2) 人材需要の社会的な動向等

① 新設組織で養成する人材の全国的、地域的、社会的動向の分析

グローバル化する経済において、市場環境の変化や情報技術の革新により、経済活動が多様化し、企業活動が複雑性を増している。いっそう、先行きの見通せない VUCA 時代において、社会的課題の解決が既存の方法論では通用しない状況にある。さらに、医療やテクノロジーの発達、様々なイノベーションの実装に伴い、経済活動の多くはデジタル経済圏に関わるものとなり、加えて、ライフサイエンスの進歩により、先進国を中心に長寿化が進み、人々のライフプランや生活様式、生活環境、働き方などの点で人々の尺度や価値観も多様化している。

このように社会状況が大きく変化する中で日本においては、変化に応じた社会の要請に応じつつ、関連する分野との連携を視野に入れた総合的な文化芸術政策の展開が求められており、2017(平成 29)年に文化芸術振興基本法が改正され、文化芸術自体が固有の意義と価値を有するという基本法を前提とした上で、観光やまちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等の関連分野における施策を基本法の範囲に取り込むとともに、2018(平成 30)年、新・文化芸術基本法第 7 条に基づく、「文化芸術推進基本計画(第 1 期)」が政府により策定された。計画においては、「文化芸術立国の実現」にむけて 4 つの目標が掲げられ、そのために以下の 6 つの戦略が提示されている。

<4 つの目標>

1) 「文化芸術の創造・発展・継承と教育」

文化芸術の創造・発展、次世代への継承が確実に行われ、全ての人々に充実した文化芸術教育と文化芸

術活動の参加機会が提供されている。

2) 「創造的で活力ある社会」

文化芸術に効果的な投資が行われ、イノベーションが生まれるとともに、文化芸術の国際交流・発信を通じて国家ブランド形成に貢献し、活力ある社会が形成されている。

3) 「心豊かで多様性のある社会」

あらゆる人々が文化芸術を通して社会に参画し相互理解が広がり、多様な価値観が尊重され、心豊かな社会が形成されている。

4) 「地域の文化芸術を推進するプラットフォーム」

地域の文化芸術を推進するためのプラットフォームが全国各地で形成され、多様な人材や文化芸術団体・諸機関が連携・協働し、持続可能で回復力のある地域文化コミュニティが形成されている。

<6つの戦略>

1) 「文化芸術の創造・発展・継承と豊かな文化芸術教育の充実」

2) 「文化芸術に対する効果的な投資とイノベーションの実現」

3) 「国際文化交流・協力の推進と文化芸術を通じた相互理解・国家ブランディングへの貢献」

4) 「多様な価値観の形成と包摂的環境の推進による社会的価値の醸成」

5) 「多様で高い能力を有する専門的人材の確保・育成」

6) 「地域の連携・協働を促進するプラットフォームの形成」

これら6つの戦略は、文化芸術を通じた「社会的・経済的価値化」として明確化され、デザイン・アートが社会的価値創造の文脈で重要となっていることが強く意識されている。

この第1期計画期間の矢先、新型コロナの世界的な規模での感染拡大が進み、文化芸術活動の減少をはじめ、観光需要の減少、海外との文化的交流の停滞など文化芸術の分野は甚大な影響を受けた。これに加えて、デジタル化の急速な進歩に伴うデジタルトランスフォーメーション(DX)の進展やAIなどの技術革新が、産業界のみならず、社会にまで広がる中で、人々の働き方や生活様式とともに、日本の文化芸術の活動形態やニーズにも影響を与えることになっている。

このような状況も踏まえ、2023(令和5)年3月には、「文化芸術推進基本計画(第2期)」が閣議決定され、第1期計画の評価と新型コロナウイルスの影響から散見された課題を踏まえて、7つの重点取組と16の施策群が設定されている。

<7つの重点取組と16の施策群>

1) ポストコロナの創造的な文化芸術活動の推進

① コロナ禍からの復興と文化芸術水準の向上等

② 基盤強化、自律的運営による文化芸術の持続可能な発展

2) 文化資源の保存と活用の一層の促進

③ 文化財の匠プロジェクトの推進等による文化資源の保存と活用の好循環の構築

④ 国際協力を通じた文化遺産の保存・活用(世界文化遺産・無形文化遺産等)

- ⑤ 国土強靱化に資する文化財の防火・防災対策の推進
- 3) 文化芸術を通じた次代を担う子供たちの育成
- ⑥ 文化芸術教育の改善・充実、子供たちによる文化芸術鑑賞・体験機会の確保
- 4) 多様性を尊重した文化芸術の振興
- ⑦ 障害者等の文化芸術の参画促進による共生社会の実現
- ⑧ 国語の振興、国内外での日本語教育の推進
- 5) 文化芸術のグローバル展開の加速
- ⑨ 世界を視座とした戦略的な文化芸術の展開
- ⑩ 海外との連携による文化芸術の好循環の創出
- 6) 文化芸術を通じた地方創成の推進
- ⑪ 国立美術館・博物館、国立劇場等の文化振興のナショナルセンターとしてのマネジメント機能の強化、博物館行政の充実
- ⑫ 地域における文化芸術振興拠点の整備・充実
- ⑬ 文化観光の推進による好循環の創出
- ⑭ 食文化をはじめとした生活文化の振興
- 7) デジタル技術を活用した文化芸術活動の推進
- ⑮ デジタル技術を活用した文化芸術の振興
- ⑯ DX 時代に対応した著作権制度の構築

文化芸術が観光や福祉、教育などの他の分野との連携の下で様々な価値を生み出しており、創造的な社会活動、経済活動の源泉として、デジタル化などの技術革新を取り込みながら新たな価値を生み出していくことへの期待が表れている。

また、経済産業省においては、2019(平成 31)年に「高度デザイン人材育成ガイドライン」が策定され、これからの社会に求められるデザイン人材像とその育成の仕組み等が整理・提示されている。そこでは、従来、デザイナーは現場で行う高い職能技術人材として捉えられていたが、より高い視座を持ち、より複雑な課題を自らの視点・感性で捉え直し、様々な形で表現できる高度デザイン人材としてその力を発揮することが示されている。

さらに、地域的動向や企業・行政の動きに関して言及すると、京都市では、パナソニックが 2018(平成 30)年に「Panasonic Design Kyoto」を開設し、デザイン拠点を形成している。さらに、京都駅南から東南エリアにかけてアートを基軸とする産業集積エリアを形成し、「文化×経済」活動を加速化させる試みがあり、2023(令和 5)年 10 月には京都市立芸術大学が京都駅東エリアに移転されている。ほかにも、イノベーション創発に向けた「Kyoto Research Park (KRP)」、イノベーション促進と文化発展、地域貢献を目的とする「菊浜エリア活性化プロジェクト」など、アートやクリエイティブ活動を推し進める機運が高まるとともに、多くの施策が実行されつつある。

行政においては、デジタル庁では、プロダクトデザイナーやビジュアルデザイナー、アクセシビリティアナリスト

や UX リサーチャー等のデザイン人材が要職を担っている。また、神戸市では 2020(令和 2)年度からの職員採用において「デザイン・クリエイティブ枠」を設けている。デザイン専門職の位置づけではなく、総合職の位置づけであり、新たな視点から業務を創発していく、周囲を巻き込みながら組織化し、神戸市全域の活性化に貢献する人材の位置づけである。このように、デザイン・アート分野の人は組織内でも組織外の一個人としても、従来の環境・場とは異なる領域での新たな役割として必要性が高まっている。

② 中長期的な 18 歳人口等入学対象人口の全国的、地域的動向の分析

全国の 18 歳人口は、2026(令和 8)年では、109.1 万人であるが、2035(令和 17)年には、97.1 万人へと減少することが予測されている【資料 1】。地域的な動向では、2035(令和 17)年には、2026(令和 8)年に比して、すべての地域で 18 歳人口が低減する見通しである【資料 1】。

立命館大学の学生構成を出身地域別にみると、近畿圏のみならず、東海圏や関東、北陸・甲信越、中国、九州・沖縄など全国の幅広い地域からの学生構成であることが把握され、近畿圏出身者が 53.8%、近畿圏外出身者が 46.2%の割合である【資料 2】。また、一般選抜の地域別志願者数では、2024(令和 6)年度の近畿圏からの志願割合は 49.5%、近畿圏外から 49.9%、2023(令和 5)年度の近畿圏からの志願割合は 48.6%、近畿圏外から 50.8%の志願割合となっている【資料 3】。

また、日本私立学校振興・共済事業団の「2024(令和 6)年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」によると、所在地が「京都府」における大学の入学定員充足率は、概ね定員充足が継続していると言える【資料 4】。さらに、全国の私立大学の学部系統別の入学定員充足率では、「芸術系」分野は 2023(令和 5)年から 2024(令和 6)年にかけて、105.32%、104.77%と 100%を超えている【資料 4】。

このように、全国的には 18 歳人口の減少が予測されるが、立命館大学は近畿圏に軸足を置きつつも、全国から学生を集めている。新設するデザイン・アート学部の学問領域や京都に立地し、多様な地域出身者で構成される本学の特長をいかすことで将来的にも相対的に少子化の進展が緩やかな地域からの十分に学生を確保することが可能であると考えている。

③ 新設組織の主な学生募集地域

デザイン・アート学部は、京都の衣笠キャンパスにて教学を展開する。本学の出身地域ごとの在籍者分布からも、京都府、大阪府、滋賀県、愛知県、兵庫県出身者がそれぞれ 2,000 名を超える規模で在籍している【資料 2】。

また、2024(令和 6)年度の一般選抜入試の地域別志願数でも、全志願数の約 95,000 のうち、近畿圏から約 47,000、東海圏から約 17,000 の志願数が把握される【資料 3】。デザイン・アート学部の学生募集地域についても、近畿圏、東海圏をはじめとする全国から入学者を確保する。また、留学生の募集においては、既存組織の傾向を踏まえ、中国や韓国をはじめとした東アジア諸国からの確保を想定している。他の美術・芸術系大学を見ても、中国を中心に多くの留学生の受け入れており、こうした国・地域の若者が日本アニメやゲームなどのコンテンツに魅力を感じ、日本の美術・芸術系大学への留学を志望していることがうかがえる。そのような背景を踏まえながら、留学生確保を見込んでいる。

④ 既設組織の定員充足の状況

過去 5 年間で行われた本学の一般選抜および共通テスト利用入試に関して、本学の学士課程の志願者数は、一般選抜については、延べ人数 59,641 名～68,503 名、実人数 34,284 名～37,274 名で推移している。実質倍

率は延べ人数で2.80倍～3.42倍、実人数では2.56倍～3.06倍と高い水準で推移している。また、共通テスト利用入試においては、延べ人数 23,871 名～28,414 名、実人数 19,012 名～22,150 名で推移しており、実質倍率は延べ人数で 2.23 倍～2.61 倍、実人数では 2.19 倍～2.53 倍となっており、それぞれ募集人数を大きく上回る志願者数となっている。そのうち、入学者についてみると、一般入学試験と共通テスト利用入試を合わせて 4,787 名から 5,124 名おり、入学定員の 59.9%～64.8%の入学者の確保ができています。学校推薦型選抜や総合型選抜入試、その他の入試においても安定した入試結果となっている。学科別にみても、過去 5 年間の志願者数は安定しており、入学定員充足率も適切なものとなっている【別紙 2】。

新設するデザイン・アート学部と関連のある既設組織の映像学部においては、下記のとおり、直近 5 年間の志願者数の平均は 2,306 名となっており、入学定員 240 名(2023 年度までは 160 名)に対して十分な志願者を集めており、入学定員充足率は、0.97～1.08 の間で推移しており、適正なものとなっている。

以上の状況をふまえて、本学の志願者層を着実に確保し、入学定員の充足も継続できることに疑いの余地はなく、今後もこの状況が維持されていくことが想定される。

<立命館大学映像学部の志願・入学等状況>

映像学部	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度	平均
志願者数	2,155	2,131	2,213	2,460	2,570	2,306
合格者数	410	441	415	759	612	527
入学者数	155	168	170	258	238	198
入学定員	160	160	160	240	240	192
入学定員充足率	0.97	1.05	1.06	1.08	0.99	1.03

(3) 学生確保の見通し

① 学生確保に向けた具体的な取組と見込まれる効果

ア 既設組織における取組とその目標

本学の学生募集にあたっては、大学内の部署である「入学センター」が中心となって、全学で以下のような取組を展開している。

1) 各キャンパスにおけるオープンキャンパスの実施

毎年、8 月初旬の 2 日間にわたり、衣笠キャンパス、OIC(大阪いばらきキャンパス)、BKC(びわこ・くさつキャンパス)の各キャンパスにて、オープンキャンパスを開催している。

直近 3 か年の参加者数については以下のとおりであり、参加者数は増加傾向にある。また、参加者のうち、アンケートに応じた高校生の志望度変化については、「とても向上した」「やや向上した」を合わせると概ね 9 割の回答者が志望意欲の向上を示している。

<オープンキャンパス参加者数>

参加者数	2022 年 8 月	2023 年 8 月	2024 年 8 月
衣笠キャンパス	7,706	10,354	10,421
OIC(大阪いばらきキャンパス)	5,359	10,284	12,203

BKC(びわこ・くさつキャンパス)	6,361	7,795	7,945
合計	19,426	28,433	30,569

<アンケート集計>

志望度変化	2022 年 8 月	2023 年 8 月	2024 年 8 月
とても向上した	63.4% (5,023)	56.1% (3,606)	52.3% (3,186)
やや向上した	29.7% (2,349)	34.8% (2,238)	36.9% (2,243)
変わらない	6.5% (515)	8.6% (553)	10.0% (607)
やや低下した	0.4% (28)	0.4% (28)	0.7% (43)
とても低下した	0.0% (3)	0.1% (7)	0.1% (7)
合計	100.0% (7,918)	100.0% (6,432)	100.0% (6,086)

過去 2 年のオープンキャンパスでは、既設組織である映像学部では、2023(令和 5)年に衣笠キャンパスで実施のオープンキャンパス(R6 年度入試)、2024(令和 6)年に OIC(大阪いばらきキャンパス)で実施のオープンキャンパス(R7 年度入試)に参加した映像学科志望者の 42.6%～52.4%が受験し、18.7%～22.0%が入学した【別紙 3】。これらの結果から、オープンキャンパスが受験・入学につながっていることがわかる。

2) 高校教員や塾・大学進学予備校教職員を対象とした「教員対象説明会」の実施

入試の設計概要とポイントについて説明することで、本学の入試についてより理解してもらうことを目標に、6 月と 7 月に数回、高等学校等の先生や塾・予備校の先生を対象に「教員対象説明会」を開催している。「教員対象説明会」では、大学紹介や当該年度の AO 入試、一般入試の説明を行っている。2023(令和 5)年、2024(令和 6)年の 2 年間で約 140 校延べ 170 名の高校教員が参加した。2024(令和 6)年度は対面とは別にオンラインでの動画配信もおこない、約 150 校の高校教員が登録・視聴をおこなった。また、2024(令和 6)年度は、AO 選抜につながるプログラムとして本学が実施している UNITE Program の説明会を、商業高校、IB、総合学科の教員を対象として合計 3 回オンラインで実施し、総計 60 名近い教員が参加した。

3) 高校生や保護者を対象とした「大学・入試説明会」の実施

6 月から 7 月にかけて、北海道・東北、関東・甲信越、東海、近畿、中国・四国、九州の各エリアで、高校生、保護者を対象とした「大学・入試説明会」を開催している。大学進学の疑問や不安を解決することを目標とした説明会であり、大学選びのポイント、大学入試の概要などの説明に加えて、在学生在が受験や学生生活の体験談を紹介する。具体的には、全国 18 か所(秋葉原、幕張、横浜、大宮、静岡、浜松、名古屋、福井、金沢、大阪茨木、大阪枚方、天王寺、津、西宮(2 回)、三宮、広島、高松、博多)で実施し、約 1,450 名が対面会場で参加したほか、オンラインでも 2 回実施し、約 300 名が参加した。

4) 複数大学が合同で実施する「入試相談会」への参加

幅広い地域において、本学の学部の学びや学生生活、入試情報などの受験生の質問・疑問に応じることを目標として、7 月から 10 月を中心に、北海道、関東、関西、中国、九州まで全国各地で実施される入試相談会に職員が参加している。大学情報センター主催「主要大学説明会」では、北海道、神奈川、愛知、大阪、

福岡会場に参画し、約 200 組の受験生が本学のブースに来場した。(全体の来場者数約 10,000 名)、また各地域新聞社主催の「大学進学フェスタ」では、京都 2 回、兵庫、千葉、広島、神奈川の各会場に参加し、200 組以上の受験生が本学のブースに来場した。(全体の来場者数は約 13,000 名)

5) 全国の主要都市で実施する「一般選抜入試説明会」の実施

幅広い地域において、一般選抜や共通テストを利用する入試方式を中心に、入試の考え方や方式の特徴を受験生に説明をして理解してもらうことを目標として、9 月から 10 月にかけて、関東、東海、北陸、西日本の各エリアで、「一般選抜入試説明会」を開催している。本説明会では、「大学・入試説明会」と同様に、高校生のみならず、保護者の参加も可能としている。全国 10 か所(秋葉原、静岡、浜松、金沢、福井、名古屋、岐阜、岡山、広島、福岡)で実施し、約 400 名の受験生、保護者が参加した。また、「3 月入試説明会」も 2 月下旬に全国 7 か所(東京、秋葉原、大宮、名古屋、京都、大阪茨木 2 回)で実施し、約 240 名が参加した。

6) キャンパス見学会

立命館大学への進学を考えている方に、気軽にキャンパスを見学してもらうことを目標として、オープンキャンパスとは別に「キャンパス見学会」を実施している。「キャンパス見学会」は 6 月と 9 月に 1 日ずつ、衣笠キャンパス、OIC(大阪いばらきキャンパス)、BKC(びわこ・くさつキャンパス)の各キャンパスで実施している。見学会では、大学紹介や入試説明会のほか、キャンパス内をツアー形式で案内する企画を実施している。なお、参加者数としては、衣笠キャンパスで約 2,100 名(6 月:1,100 名、9 月:1,000 名)、OIC(大阪いばらきキャンパス)で約 3,500 名(6 月:1,700 名、9 月 1,800 名)、BKC(びわこ・くさつキャンパス)で約 1,600 名(6 月:900 名、9 月:700 名)の予約があり、実参加者はそれぞれのキャンパスで予約数の 80%~90%の参加率であった。

7) 各種媒体の活用

各種媒体を用いた学生募集については、入学試験要項とあわせて、毎年度、各学部の教学内容および学生生活支援施策、進路・就職状況など大学全般を紹介する「大学案内」を発行し、各学部の教学内容および学生生活支援施策、進路・就職状況など大学全般を紹介して、受験生や保護者に広く行き渡るように工夫を凝らしている。また、学部で作成している「学部案内・学部パンフレット」には、各学部の概要、特徴や研究指導、施設、プログラムを掲載している。大学案内・学部パンフレットは「立命館大学入試情報サイト」から PDF データをダウンロードして取得することも可能としている。

8) 全国での入学試験の実施

本学は、全国各地で一般入試を実施しており、札幌、仙台、千葉(柏)、埼玉、東京、横浜、松本、金沢、福井、静岡、浜松、名古屋、三重、滋賀(草津)、京都、大阪茨木、大阪南、神戸、姫路、和歌山、岡山、広島、松江、山口、高松、松山、北九州、福岡、大分、熊本、鹿児島などが試験会場になっている。全国から志願者を集めるうえで、こうした入試実施体制が果たす役割は大きい。京都にある同志社大学が約 6 割の志願者、大阪にある関西大学が約 8 割の志願者を近畿 6 県から集めているのに対して、本学においては近畿の志願者は 5 割程度である。これは、本学が広く全国から志願者を集めていることの証しである。

イ 新設組織における取組とその目標

デザイン・アート学部においても、既存学部と同様に上記 1)～8)の活動に参画するとともに、これらの活動に加え、デザイン・アート学部特有の取り組みとして、美術系大予備校や画塾、美術科やデザイン科などの専門課程を有する高等学校等への訪問、説明などを通じて認知形成を図る。

1) アート、デザイン、クリエイティブ系の説明会への参画

毎年 5 月～8 月期を中心に開催されている「アート×デザイン×クリエイティブ進学フェア(株式会社さんぽう主催)」について、デザイン・アート学部の固有の取り組みとして、約 10 会場(大阪、京都、神戸、横浜、梅田、静岡、岡山、福岡、広島、名古屋等)について参加を計画し、とりわけ高等学校の美術科やデザイン科に所属の高校生や制作活動の経験を活かしたい高校生、アート、デザイン、クリエイティブ系の進路に関心のある高校生に対しての本学部の認知形成を図る。

2) 各高校内での校内説明会への参加

一部の高校では、進路指導の一環として、複数の学問分野の大学関係者を招聘し、高校内にて進路ガイダンスを実施する機会を設定している。このような機会を積極的に活用し、本学部の認知形成を図る。

3) ホームページ、ティザーサイト、各種媒体による情報発信

本学のホームページ上やデザイン・アート学部独自のティザーサイト上にて、教育課程や概要、学びの特色、教員紹介などの情報発信を行う。さらに、デザイン・アート学部独自の学びを紹介するパンフレットを複数作成し、美術科やデザイン科などを有する高等学校や美大予備校、画塾等の教育機関を中心に約 500 部を配布し、本学部の認知形成を図る。

4) デザイン・アート学部の説明会開催

東京、愛知、京都、岡山、広島、福岡などの都市を中心に、デザイン・アート学部の説明会を単独で開催する。現地の美大予備校や画塾と共同で開催するなど年間で 5 回の開催を目指し、100 名程度の参加者数を目標数として設定する。

5) オープンキャンパスの目標

新設組織となるデザイン・アート学部でも、既設学部と同様に 8 月期にオープンキャンパスを開催する。既設組織である映像学部のオープンキャンパス参加者受験率や入学率を踏まえ、デザイン・アート学部でのオープンキャンパスにおいては、参加者総数を 1,000 人、受験対象者数を 600 人、受験者数を 250 人、入学者数を 100 人程度と目標設定し、動員から受験誘導、入学誘導への施策を講じていく。【別紙 3】

ウ 当該取組の実績の分析結果に基づく、新設組織での入学者の見込み数

上記の取組を進めることにより、デザイン・アート学部の入学定員 180 名を確保する。これまで本学が学生募集の主たる対象としていた普通科高校のみならず、美術科やデザイン科などの専門課程を有する高等学校も募集対象となり、裾野が拡大することになる。

本学のデザイン・アート学部は、情報デザイン、社会デザイン、環境デザイン、意味デザインと4領域を融合的、統合的あるいは特定の領域に特化した学修を行えるカリキュラムであり、幅広い関心層を取り込むことが可能となる。さらに、入試形態も実技を含めた入試や学科試験のみで実施される入試など多様な入学者選抜の形態を用意しており、関心層の学習歴に応じた入試方式にチャレンジできる。このようなことから、入学定員を充足できると判断している。

② 競合校の状況分析

ア 競合校の選定理由と新設組織との比較分析、優位性

競合校の状況分析に際し、「京都市立芸術大学美術学部デザイン学科」、「同志社大学文化情報学部文化情報学科」、「武蔵野美術大学造形構想学部クリエイティブイノベーション学科」、「多摩美術大学美術学部統合デザイン学科」、「早稲田大学創造理工学部経営システム工学科、同学部社会環境工学科」、「法政大学デザイン工学部システムデザイン学科」、「慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科、環境情報学部環境情報学科」を選定した。選定理由については、以下のとおりとなる。

・京都市立芸術大学美術学部

本学と同様に京都に立地し、デザイン系統の学科を設置している点で類似性がある。

・同志社大学文化情報学部

本学と同様に京都に立地し、文理融合の教育研究を展開する点で類似性がある。

・武蔵野美術大学造形構想学部

本学と同様に私立大学であり、デザイン系統の学科を設置し、プロジェクト型の教育を実施している点で類似性がある。

・多摩美術大学美術学部

本学と同様に私立大学であり、デザイン系統の学科を設置し、幅広く融合的なデザイン教育を実施している点で類似性がある。

・早稲田大学創造理工学部

本学と同様に私立大学であり、幅広いデザイン教育を実施している点で類似性がある。

・法政大学デザイン工学部

本学と同様に私立大学であり、デザイン系統の学部・学科を設置している点で類似性がある。

・慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部

本学と同様に私立大学であり、文理融合の教育研究を展開し、幅広いデザイン教育を実施している点で類似性がある。

<競合する大学・学部・学科>

大学名	学部名	学位	入学定員	所在地
立命館大学	デザイン・アート学部 デザイン・アート学科	学士 (デザイン・アート)	180 名	京都府京都市北区等持院 北町 56-1
京都市立芸術大学	美術学部 デザイン学科	学士(芸術)	30 名	京都府京都市左京区北白 川瓜生山 2-116

同志社大学	文化情報学部 文化情報学科	学士(文化情報学)	294 名	京都府京田辺市多々羅都 谷 1-3
武蔵野美術大学	造形構想学部 クリエイティブ イノベーション学科	学士(造形構想)	76 名	東京都新宿区市谷田町 1- 4
多摩美術大学	美術学部 統合デザイン学科	学士(芸術)	120 名	東京都世田谷区上野毛 3- 15-34
早稲田大学	創造理工学部 経営システム工学科	学士(工学)	120 名	東京都新宿区大久保 3-4- 1
	創造理工学部 社会環境工学科	学士(工学)	90 名	東京都新宿区大久保 3-4- 1
法政大学	デザイン工学部 システムデザイン学科	学士(工学)	82 名	東京都新宿区市谷田町 2- 33
慶應義塾大学	総合政策学部 総合政策学科	学士(総合政策学)	425 名	神奈川県藤沢市遠藤 5322
	環境情報学部 環境情報学科	学士(環境情報学)	425 名	神奈川県藤沢市遠藤 5322

1) 教育内容と方法、受験時期など

競合校における教育内容等に関する特長としては、①特定のデザイン領域に特化する学び、②いくつかの分野の融合する学び、③プロジェクトを中核に据えた学びの特長が把握される。

特定のデザイン領域に特化する学びを特長とする、京都市立芸術大学では、グラフィックデザインや映像デザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン、建築デザインなどの分野から専門を選択する。武蔵野美術大学では、ソーシャルイノベーション、サービスデザイン、UX デザイン、UI デザイン、ビジョンデザイン、地域デザイン、共創デザインなどを学ぶ。

複数の分野を融合させた学びを特長とする、同志社大学では、文理融合でデータサイエンスの活用を行い、データの収集、解析を通じて新しい事実を発見する手法を学ぶ。早稲田大学創造理工学部経営システム工学科では、技術とマネジメントの融合を行い、生産システム、経営管理システム、数値情報システムの 3 つの技術習得を目指す。また、同学部の社会環境工学科では、魅力ある都市や地域の計画とデザインを融合させ、環境保全や社会基盤の整備を学ぶ。慶應義塾大学の総合政策学部、環境情報学部では、多様な研究分野を自らの関心や目標に応じて融合させ学びを進める特色がある。

プロジェクトを中核に据えた学びを特長とする、法政大学では、技術のみならず、人間のニーズや行動を考慮したシステムデザインを学び、実際のプロジェクトや演習を通じた学びを中核に据えている。多摩美術大学では、プロジェクトベースの学習を中心に、コミュニケーションやモノづくりに限らず、あらゆる領域を一つのデザインとして捉え、多様な視点から学び、3 年次からはゼミ形式での「プロジェクト」を通じて、社会や生活の中の課題を解決するためのデザインを学ぶ。武蔵野美術大学では、実践的なプロジェクトを企業や自治体と連携して構築し、実社会での課題解決に取り組み、スキルと経験を積むことを重視している。

本学のデザイン・アート学部では、「デザイン学」や「アート」、さらに、「意味」「情報」「環境」「社会」の 4 つ

の領野と方法論を横断的・融合的に学び、理論や知識とともに、必要となる技能を修得する。また、1 回生からの「デザイン学」をはじめとする「Design Studies」科目群、2 回生からの「デザイン学生プロジェクト演習」をはじめとする「Design in Society」科目群を通じて、1 回生から上回生まで様々な実社会と連携したプロジェクトを通じた学びを推し進める。徹底したプロジェクト型の教育とその振り返りと意味づけを理解する学びの循環を重視している。このように、複数の分野を融合させ、プロジェクトを中心に据えた学びの双方を実践するカリキュラムが構成されている。

また、「Design Studies」科目群や「Design in Society」科目群では、複数のオムニバス授業や共同授業が構成され、「デザイン学」「工学」「文学」「美術」「学術」などの学位を有する教員集団が最新の研究や実践を教授できる体制を敷いており、自然科学と人文・社会科学を融合する教育を実質化できることも大きな特長があるといえる。

さらに、総合大学にある芸術系・美術系学部であるデザイン・アート学部では、学部での領野の融合的な学びのみならず、本学の他学部との横断的・融合的な学びも可能となることが大きなアドバンテージとなる。

なお、各大学とも総合型選抜、学校推薦型選抜、一般入試選抜の入試方式を有しており、総合型、学校推薦型については、9 月から 11 月の間で入試時期の設定、1 か月から 2 か月程度での手続締め切りの設定、一般入試選抜では、2 月期での試験、2 月末での一次手続、3 月中旬から下旬での二次手続期間が設定されている。慶応義塾大学については、春入学と秋入学の両方で入試選抜を実施している。本学のデザイン・アート学部では、3 月上旬に受験可能となる一般入試選抜を設けており、受験生のニーズに応じる措置を講じている。

2) 学生納付金、修学支援など

競合校の学生納付金は、国公立の設置形態や専門分野の領域による施設設備の整備等により多少異なるものの、芸術系・美術系分野で制作活動や実技・実習を伴い、専門的な施設設備を必要とする武蔵野美術大学造形構想学部や多摩美術大学美術学部と本学のデザイン・アート学部の学生納付金は、ほぼ同水準となる。

学生に対する修学支援としては、競合校では、給付奨学金制度を有しており、同志社大学給付奨学金、武蔵野美術大学特別給付奨学金、創立 80 周年記念奨学金(多摩美術大学)、新・法政大学 100 周年記念奨学金(法政大学)、大隈記念奨学金(早稲田大学)、学問のすすめ奨学金(慶応義塾大学)などが整備されている。本学の修学支援としての経済支援型、成長支援型の奨学金制度は、正課外活動や生活支援まで幅広く整備されており、総合大学のスケールメリットを活かした独自の財政型支援制度が整備されている点に大きな特色がある。また、修学支援の一環として、正課・課外の枠をこえ、学生の学びと成長を多面的にとらえて支援する「包括的学習者支援」として、2017(平成 29)年より、「Student Success Program」を開始し、アカデミックの観点、学生生活の観点の両面からスキルアップさせるべく、各種のセミナーを提供している。さらに、「学修計画シート」や「タイムスケジュール確認シート」、「定期試験・レポート対策シート」等、学びの支援ツールの提供やコーディネーターとの面談などの学生支援の取り組みを進めている。

<競合校の学生納付金（初年度納付金総額）>

大学	学部・学科	初年度総額	入学金	授業料	施設費・維持費・ 実習費ほか
立命館大学	デザイン・アート学部 デザイン・アート学科	1,900,000	200,000	1,700,000	—
京都市立芸術大学	美術学部 デザイン学科	817,800 1,017,800	282,000(市内) 482,000(市外)	535,800	—
同志社大学	文化情報学部 文化情報学科	1,249,000	200,000	873,000	176,000
武蔵野美術大学	造形構想学部 クリエイティブ イノベーション学科	1,928,000	300,000	1,210,000	418,000
多摩美術大学	美術学部 統合デザイン学科	1,915,000	230,000	1,247,000	438,000
早稲田大学	創造理工学部 経営システム工学科	1,864,000	200,000	1,584,000	80,000
早稲田大学	創造理工学部 社会環境工学科	1,880,000	200,000	1,584,000	96,000
法政大学	デザイン工学部 システムデザイン学科	1,811,000	240,000	1,172,000	399,000
慶應義塾大学	総合政策学部 総合政策学科	1,720,000	200,000	1,130,000	390,000
慶應義塾大学	環境情報学部 環境情報学科	1,720,000	200,000	1,130,000	390,000

<立命館大学における学生支援制度>

区分	奨学金名称
正課での学びと成長を支援	西園寺記念奨学金(成績優秀者枠) +R 学部奨学金 学びのコミュニティ学外活動奨励奨学金(正課授業)
課外での成長を支援	立命館大学課外自主活動団体助成制度(チャレンジ助成) 立命館大学課外自主活動団体助成制度(基盤活動助成) 立命館大学課外自主活動団体助成制度(重点強化助成) 立命館大学 Challenge 奨学金(個人) 立命館大学アスリート・クリエイター育成奨学金 立命館大学校友会未来人財育成奨励金(団体支援) 異文化交流に関する助成金
海外留学支援	立命館大学海外留学チャレンジ奨学金

	立命館大学海外留学サポート奨学金
難関試験への挑戦を支援	立命館大学エクステンションセンター特別奨励生 立命館大学西園寺記念奨学金(難関試験合格者枠)
経済支援	立命館大学学費減免制度 立命館大学家計急変学費減免 立命館大学父母教育後援会家計急変奨学金 立命館大学父母教育後援会会員弔慰金 立命館大学父母教育後援会災害支援奨学金 立命館大学父母教育後援会会員災害見舞金 など

3) 就職支援、資格など

いずれの大学も学生の就職支援に関しては、キャリアセンターを設置し、支援を行っている。多摩美術大学、武蔵野美術大学では、就職以外の進路を目指す学生へのアーティスト支援講座も実施されている。

本学のデザイン・アート学部では、「Reflection in Design Practice」として、専任教員や職員、専門家を中心とした体制で、低回生時からの学修支援、目標管理支援、ポートフォリオ作成支援、各学期の振り返り、キャリア形成支援を実施していく仕組みを敷いており、アカデミックアドバイジングからキャリアサポートまで幅広く、きめ細やかな学生支援に大きな特長がある。

なお、京都市立芸術大学美術学部や同志社大学文化情報学部、武蔵野美術大学造形構想学部、早稲田大学創造理工学部、慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部では、教員免許状の取得が可能となる。また、本学のデザイン・アート学部、同志社大学文化情報学部、多摩美術大学美術学部では、学芸員資格の取得が可能となる。

イ 競合校の入学志願動向等

競合校 7 大学 8 学部 9 学科の志願・入学者状況より、すべての競合学部・学科において、入学定員が充足していることが把握される。

また、入学定員に対する志願者数でも、入学定員の数倍、数十倍の志願者を確保しており、例えば、2024 年度入試では、京都市立芸術大学で 3.9 倍、同志社大学で 8.5 倍、武蔵野美術大学で 6.7 倍、多摩美術大学で 11.8 倍、早稲田大学で約 5 倍程度、法政大学にいたっては 23 倍の志願者数を確保している。設置形態や立地、入学定員の規模も異なる競合校ではあるが、すべての競合校において志願者確保、競争倍率の確保、入学者確保と入学定員の充足を複数年にわたり継続できていることが明らかである。

このような状況に加えて、前述したデザイン・アート学部の競合校との優位性を考慮すると、十分に入学定員の充足ができると想定している。

<京都市立芸術大学美術学部デザイン学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	98	31	30	30	1.00
2022 年度	98	30	30	30	1.00
2023 年度	155	30	30	30	1.00

2024 年度	116	31	30	30	1.00
2025 年度	125	30	30	30	1.00

<同志社大学文化情報学部文化情報学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	1,900	695	281	294	0.96
2022 年度	1,475	704	303	294	1.03
2023 年度	2,133	955	332	294	1.13
2024 年度	2,501	883	313	294	1.06
2025 年度	掲載なし	掲載なし	掲載なし	掲載なし	掲載なし

<武蔵野美術大学造形構想学部クリエイティブイノベーション学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	337	165	84	76	1.10
2022 年度	445	190	84	76	1.10
2023 年度	451	182	84	76	1.10
2024 年度	491	196	84	76	1.10
2025 年度	540	掲載なし	掲載なし	76	掲載なし

<多摩美術大学美術学部統合デザイン学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	1,115	228	132	120	1.10
2022 年度	1,189	246	125	120	1.04
2023 年度	1,386	282	132	120	1.10
2024 年度	1,410	319	132	120	1.10
2025 年度	1,340	263	120	120	1.00

<早稲田大学創造理工学部経営システム工学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	721	146	113	120	0.94
2022 年度	682	158	119	120	0.99
2023 年度	629	154	127	120	1.06
2024 年度	660	148	137	120	1.14
2025 年度	671	137	掲載なし	掲載なし	掲載なし

<早稲田大学創造理工学部社会環境工学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	394	106	71	90	0.79
2022 年度	464	133	93	90	1.03
2023 年度	507	129	92	90	1.02
2024 年度	452	113	86	90	0.96
2025 年度	472	110	掲載なし	掲載なし	掲載なし

<法政大学デザイン工学部システムデザイン学科>

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	2,015	345	79	82	0.96
2022 年度	2,134	395	93	82	1.13
2023 年度	2,254	359	91	82	1.11
2024 年度	1,927	334	82	82	1.00
2025 年度	1,688	掲載なし	掲載なし	掲載なし	掲載なし

<慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科> 2021 年度～2024 年度は 10 月 1 日付

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	掲載なし	掲載なし	430	425	1.01
2022 年度	掲載なし	掲載なし	462	425	1.09
2023 年度	掲載なし	掲載なし	418	425	0.98
2024 年度	掲載なし	掲載なし	425	425	1.00
2025 年度	掲載なし	掲載なし	376	425	0.88

<慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科> 2021 年度～2024 年度は 10 月 1 日付

年度	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	充足率
2021 年度	掲載なし	掲載なし	415	425	0.98
2022 年度	掲載なし	掲載なし	469	425	1.10
2023 年度	掲載なし	掲載なし	412	425	0.97
2024 年度	掲載なし	掲載なし	455	425	1.07
2025 年度	掲載なし	掲載なし	401	425	0.94

ウ 新設組織において定員を充足できる根拠等

競合する各校は定員を充足している。

エ 学生納付金等の金額設定の理由

デザイン・アート学部の学生納付金等については、年間 170 万円と設定している。1 年次は入学金 20 万円、学生納付金 170 万円、2 年目以降も同様に 170 万円と標準修業年限で 700 万円(入学金含む)の学生納付

金等の金額を設定している。

デザイン・アート学部は衣笠キャンパスにて教学展開を実施するが、教学内容に応じた施設整備や設備改修や増強が不可欠であり、専門施設や専門機器も整備しなければならない。このような状況も考慮しつつ、以下の点に留意した学生納付金等の設定を行っている。

1) 教学体系の維持と学部収支の安定性

設定した入学定員による学生納付金収入の見込みに対する教育研究費、施設設備費、人件費等の管理経費などの必要経費の支出見込みを踏まえ、教育研究環境を充実させるための学部収支の安定性を考慮して学生納付金等の金額を設定している。

また、本学部は、学問分野、カリキュラム、施設等の特徴から少人数教育を展開するものであり、卒業論文や卒業制作をはじめ、1 年次から 4 年次までの各回生で一定数の必修科目を課している。3 回生以降の指導では、1 名の教員が 10 名前後の指導を行うよう設計しており、少人数教育を中心とする教学体系の維持が重要である。なお、入学定員 180 名、収容定員 720 名で構成しており、完成年度で収支均衡となるよう学生納付金の設計を行っている。

2) 競合校との比較

競合校の学生納付金は、国公立の設置形態や施設設備の整備等により多少異なる。比較すると、私立芸術系学部の学生納付金は初年度総額で 190 万円程度、入学金を除くと、年間 160～170 万円程度で設定されている。そのため、競合校の初年次納付金と比較しても、デザイン・アート学部の学生納付金は、学生確保に影響を及ぼす金額設定にはなっていない。

3) 私立大学芸術系・美術系大学の学費額と同等の水準

私立芸術系学部の学生納付金は年間 170～190 万円程度で設定されており、このような水準を参考としている。デザイン・アート学部では、芸術系・美術系大学と同様に、オープンラボやオープンアトリエなどの制作活動を中心とした専門施設を整備するとともに、3D プリンタやレーザーカッターなどの精密機器や木工系の汎用工作機なども整備し、これらの設備・備品の維持・更新を計画化しておく必要もある。また、本学の既存学部の学生納付金との関係では、デザイン・アート学部は高校時で文系所属の学生、理系所属の学生の双方を受け入れ、文理が融合、並走する教学体系を構築しており、本学の文系学部と理系学部の学生納付金の間に位置づけられる学生納付金の水準となっている。

<芸術系・美術系他大学 2025 年度学費>

大学	学部	学科	初年度納付金総額 (入学金・施設費等含む)
日本大学	芸術学部	デザイン学科	1,850,000
名古屋芸術大学	芸術学部	芸術学科デザイン領域	1,840,000
嵯峨美術大学	芸術学部	デザイン学科	1,750,000
京都芸術大学	芸術学部	情報デザイン学科	1,920,000
京都精華大学	デザイン学部	ビジュアルデザイン学科	1,779,000

近畿大学	文芸学部	文化デザイン学科	1,712,000
大阪芸術大学	芸術学部	デザイン学科	1,720,000

< 競合校で挙げた私立大学芸術系・美術系大学のとの比較 >

大学	学部	学科	初年度納付金総額 (入学金・施設費等含む)
武蔵野美術大学	造形構想学部	クリエイティブイノベーション学科	1,928,000
多摩美術大学	美術学部	統合デザイン学科	1,915,000

< 立命館大学の各学部学費 2025(令和7)年度学費 >

学部	学科・学域・専攻	初年度納付金総額(入学金・施設費等含む)
法学部	法学科	1,287,000
経済学部	経済学科	1,323,600
経営学部	経営学科	1,287,000
	国際経営学科	1,421,400
産業社会学部	子ども社会専攻	1,547,000
	上記専攻以外	1,474,200
文学部	地域研究学域	1,466,600
	人間研究学域教育人間学専攻 日本史研究学域考古学・文化遺産専攻	1,443,600
	上記学域・専攻以外	1,443,600
理工学部	数理科学科	1,860,800
	上記学科以外	1,921,400
国際関係学部	国際関係学科	1,598,800
政策科学部	政策科学科	1,494,200
情報理工学部	情報理工学科	1,921,400
映像学部	映像学科	2,230,800
薬学部	薬学科(6年制)	2,396,800
	創薬科学科(4年制)	2,176,600
生命科学部	全学科	1,954,400
スポーツ健康科学部	スポーツ健康学科	1,577,000
総合心理学部	総合心理学科	1,533,800
食マネジメント学部	食マネジメント学科	1,544,200
グローバル教養学部	グローバル教養学科	2,500,000

③ 先行事例分析

該当なし

④ 学生確保に関するアンケート調査

学生確保に関するアンケート調査は、デザイン・アート学部が開設される2026(令和8)年4月に大学進学時期を迎える高校生を対象とし、2024(令和6)年8月～2025(令和7)年5月までの間で実施、分析した。調査に際しては、学部の概要や設置の理念、学びの特徴、アドミッションポリシー、設置場所(アクセス)、学生納付金、競合する大学・学部名称などを中心に必要な情報を明示し、実施した【資料5】。

アンケート調査の実施、回収、分析については、信頼性担保の観点より外部の専門機関である「株式会社高等教育総合研究所」に委託して実施している。

<アンケート調査の概要>

調査対象	令和8年3月に高校卒業予定である高校2年生(令和6年度時点) 令和7年度4月～5月の調査では高校3年生となった同対象者回答を集計した。	
調査エリア	主たる学生募集エリアと想定される全国の高等学校 262校から調査の協力を得た。また、オープンキャンパスおよび入試説明会に会場した学生には個別で調査の協力を得ており、集計ではこれらの重複はない。	
調査内容	回答者の基本情報(性別、居住地) 卒業後の進路希望 志望する大学等の設置者 興味のある学問分野 受験・入学意向	
調査方法	高校側の希望に基づき、紙方式・WEB方式のいずれかでアンケート調査を実施。	
回収件数	有効回収数(校数)	有効回答数 33,586 件
調査時期	令和6年8月～令和7年5月	
調査実施機関	株式会社高等教育総合研究所	

調査の結果、高校卒業後の進路に「大学」、その上で志望する大学の設置者に「私立」を選択し、興味のある学問分野として「美術」「デザイン」「美術その他」の複数またはいずれかを選択した上で、立命館大学デザイン・アート学部を受験・入学意向を示した人数を確認した。「大学」進学かつ「私立」を選択し、興味のある学問分野として「美術」「デザイン」「美術その他」の複数またはいずれかを選択する者は合計 2,470 人であった。

その上で、デザイン・アート学部を「第一志望として受験する」としたのは 201 人、「第二志望として受験する」としたのは 154 人、「第三志望以降として受験する」としたのは 422 人と合計で 777 人であった。なお、「第一志望として受験する」とした上で「入学する」は 182 人であった。

＜デザイン・アート学部を受験意向や入学意向＞

受験意向	人数	入学意向	人数
第一志望として受験	201	入学する	182
		志望順位が上位の志望校が不合格の場合に入学	* 15
第二志望として受験	154	志望順位が上位の志望校が不合格の場合に入学	88
		入学する	* 63
第三志望以降として受験	422	志望順位が上位の志望校が不合格の場合に入学	339
		入学する	* 58

*無効回答

上記のとおり、デザイン・アート学部を第一志望として受験し、合格した場合、入学すると回答した学生数は、入学定員の 180 名を上回る 182 名となった。

アンケート調査結果や既設組織の志願者確保の状況から、デザイン・アート学部の学生確保の見通しが問題ないと判断している。

⑤ 人材需要に関するアンケート調査等

人材需要に関するアンケート調査は、デザイン・アート学部が 2026(令和 8)年に開設されて後、卒業時の採用や人材需要の見通しを調査することを目的に、2024(令和 6)年 11 月～2025(令和 7)年 1 月までの間で実施している。

調査対象は、東証スタンダードまたは東証プライム上場企業から製造業、卸売業、小売業、建築業、IT 関連業務などデザイン・アート学部が育成する人材像に適した業種と選定した。調査に際しては、学生確保の見通しアンケートと同様に、学部の概要や設置の理念、学びの特徴、アドミッションポリシー、設置場所(アクセス)、学生納付金、競合する大学・学部名称などを中心に必要な情報を明示し、実施した【資料 6】。

アンケート調査の実施、回収、分析については、信頼性担保の観点より外部の専門機関である「株式会社高等教育総合研究所」に委託して実施している。

＜アンケート調査の概要＞

調査目的	2026(令和 8)年度に立命館大学が設置構想中である「デザイン・アート学部デザイン・アート学科(入学定員 180 名)」の設置における卒業後の採用・就職(人材需要)の見込みを測定することを目的とする。		
調査対象	調査対象	東証スタンダードまたは東証プライム上場企業からデザイン・アート学部が育成する人材像に適した業種	
	業種	製造業、卸売業、小売業、建築業、IT 関連業務	
	調査地域	首都圏を中心とした全国	
	依頼件数	3,226 件	
調査内容	・回答対象先の基本情報(業種・所在地・従業員／職員規模) ・立命館大学デザイン・アート学部デザイン・アート学科卒業生の人材ニーズ ・立命館大学デザイン・アート学部デザイン・アート学科卒業生の採用意向		

調査時期	2024(令和6)年11月～2025(令和7)年1月
調査方法	調査対象事業所に対し、アンケートを郵送し、依頼することにより実施 (紙方式とWEB方式での回答方法を案内し、いずれかの方法で回答を依頼)
回収件数	有効回答数 365 件(回収率 11.3%)

調査の結果、依頼した 3,226 件のうち 365 件の有効回答を受け、以下のとおりに分析を行った。デザイン・アート学部デザイン・アート学科で養成する人材ニーズについては、「ニーズは高い」が 79 事業所(21.6%)、「ニーズはある程度高い」が 191 事業所(52.3%)となり、合計すると全体の 7 割を上回る 270 事業所(74.0%)が人材ニーズの高さを認める結果となった。また、199 事業所(54.5%)が採用意向を示し、その上での採用可能人数(単年度あたり)の合計は、入学定員を大きく上回る 299 名であることが把握された。このように、アンケート調査結果から、デザイン・アート学部の人材需要についての見通しが問題ないものと判断している。

●養成する人材の社会ニーズ

人材ニーズは高い・ある程度高い	270 事業所	74.0%
人材ニーズはない・あまりない・わからない・無回答	95 事業所	26.0%
合計	365 事業所	100%

●卒業生の採用意向

採用したい	199 事業所	54.5%
採用しない・わからない・無回答	166 事業所	45.5%
合計	365 事業所	100%

●単年度の採用可能人数

	1 名	2 名	3 名	4 名	5 名 以上	人数未定 最低 1 名	無回答	合計
採用したい 回答数	51	20	10	2	14	100	2	199
採用可能人数 計 (回答数×採用可能人数)	51 名	40 名	30 名	8 名	70 名	100 名	0 名	299 名

※5 名以上は 5 名として計算

※人数未定・最低 1 名は 1 名として計算

※無回答の場合、集計から除外

(4)新設組織の定員設定の理由

新設学部であるデザイン・アート学部は、総合大学である本学がデザインやアートの領域を教育研究の対象とし、未来社会を感性豊かに創造できる人材を育成するとともに、アートの技術と感性を基盤に自然科学と人文・社会科学を横断した教育研究領域を開拓し、新たなデザイン学を追究する。

また、文化芸術が他の分野との融合のもと、様々な価値を生み出しており、創造的な社会活動や経済活動の源泉として、デジタル化などの技術革新を取り込みながら新たな価値を生み出すことが期待されている。このよう

な期待は、「高度デザイン人材育成ガイドライン」の策定やデザイン拠点を形成する地域の動向、さらにはデザイン人材やデザイン職の企業・行政での位置づけにも表れている。

2019(平成 31)年に日本経済団体連合会が実施した「人材育成に関するアンケート調査」では、デジタルやデザイン素養等の専門能力や幅広い知識の取得や開発を進めるため、8割弱の企業が「外部との連携に取り組む」と回答し、うち5割を超える企業が連携先として「大学や高等教育機関」を挙げており、デザイン人材や人材育成を行う大学への期待がうかがえる。また、2024(令和 6)年に株式会社グッドパッチが実施した「企業におけるデザイン投資やデザイナーのトレンド」に関する調査では、デザインセンターを設置する企業の増加やデザインエグゼクティブが在籍している割合が2022(令和 4)年の21%から25%まで増加していることも把握されている。

このようなデザインやアートにかかわる人材育成に関する期待も鑑みて、デザイン・アート学部は入学定員を180名、収容定員を720名として設定する。本学部では前述のとおり、プロジェクト型の教育と少人数教育を徹底しており、さらには入学者確保が見込まれることから、定員の設定について合理性があると判断している。

以上

学生の確保の見通し等を記載した書類（資料）

資料目次

資料 1	リクルート進学総研マーケットレポート 2024	・・・ P2
資料 2	立命館大学地域別在籍者数	・・・ P3
資料 3	立命館大学地域別志願者・合格者数	・・・ P4
資料 4	令和 6（2024）年度私立大学・短期大学等入学志願動向	・・・ P5
資料 5	立命館大学 2026 年度構想についての高校生アンケート調査報告書	・・・ P6
資料 6	立命館大学デザイン・アート学部デザイン・アート学科（仮称）、 デザイン・アート学研究科デザイン・アート学専攻（仮称）設置構想についての 人材需要アンケート調査報告書	・・・ P26
別紙 1	新設組織が置かれる都道府県への入学状況	・・・ P51
別紙 2	既設学科等の入学定員の充足状況（直近 5 年間）	・・・ P52
別紙 3	既設学科等の学生募集のための PR 活動の過去の実績	・・・ P82

1. 書類等の題名

リクルート進学総研 マーケットリポート 2024 (Vol.130 2025 年 2 月号)

【資料 1】 p2-p7

2. 出典

株式会社リクルート リクルート進学総研

3. 引用範囲

https://souken.shingakunet.com/research/pdf/2024_souken_report/2024_souken_report.pdf
p1-p6

4. その他特記事項

なし

立命館大学 地域別在籍者数 （2024年5月1日現在）

（単位：名）

都道府県名	男	女	合計
北海道	528	327	855
青森県	12	13	25
岩手県	16	12	28
宮城県	65	52	117
秋田県	17	9	26
山形県	21	11	32
福島県	39	19	58
茨城県	132	59	191
栃木県	63	35	98
群馬県	97	24	121
埼玉県	146	62	208
千葉県	154	76	230
東京都	438	213	651
神奈川県	177	86	263
新潟県	71	55	126
富山県	198	103	301
石川県	243	135	378
福井県	226	138	364
山梨県	56	32	88
長野県	201	90	291
岐阜県	387	221	608
静岡県	534	274	808
愛知県	1,560	911	2,471
三重県	373	178	551
滋賀県	1,844	1,139	2,983

都道府県名	男	女	合計
京都府	3,147	2,857	6,004
大阪府	3,561	2,290	5,851
兵庫県	1,407	973	2,380
奈良県	470	561	1,031
和歌山県	223	145	368
鳥取県	85	56	141
島根県	49	22	71
岡山県	288	184	472
広島県	510	301	811
山口県	160	110	270
徳島県	88	67	155
香川県	204	142	346
愛媛県	184	112	296
高知県	97	58	155
福岡県	606	400	1,006
佐賀県	66	43	109
長崎県	71	49	120
熊本県	115	71	186
大分県	102	52	154
宮崎県	43	30	73
鹿児島県	99	62	161
沖縄県	95	70	165
その他	1,596	807	2,403
合 計	20,864	13,736	34,600

※出身高校等の所在地をもとに集計。
※その他は、高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）、海外の学校等の合計。

立命館大学 地域別志願者・合格者数

〈立命館大学〉

■一般選抜 地域別志願者・合格者数

(単位:名)

都道府県名		2024年度		2023年度		増減数	
		志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
北海道・東北	北海道	651	202	739	230	-88	-28
	青森県	104	33	53	28	51	5
	岩手県	72	19	78	26	-6	-7
	宮城県	269	80	230	61	39	19
	秋田県	56	17	49	14	7	3
	山形県	93	24	75	12	18	12
	福島県	146	27	96	27	50	0
	小計	1,391	402	1,320	398	71	4
関東	茨城県	663	197	517	143	146	54
	栃木県	265	94	300	100	-35	-6
	群馬県	294	101	311	113	-17	-12
	埼玉県	600	161	656	203	-56	-42
	千葉県	577	175	615	193	-38	-18
	東京都	2,032	609	2,097	653	-65	-44
	神奈川県	916	273	879	275	37	-2
	小計	5,347	1,610	5,375	1,680	-28	-70
北陸・甲信越	新潟県	332	101	389	156	-57	-55
	富山県	1,348	483	1,323	577	25	-94
	石川県	1,610	595	1,668	646	-58	-51
	福井県	1,391	473	1,144	426	247	47
	山梨県	357	86	257	74	100	12
	長野県	1,147	350	1,210	386	-63	-36
	小計	6,185	2,088	5,991	2,265	194	-177
東海	岐阜県	2,081	838	2,106	887	-25	-49
	静岡県	3,206	1,206	3,348	1,400	-142	-194
	愛知県	9,530	3,817	9,380	3,827	150	-10
	三重県	2,215	710	2,436	865	-221	-155
	小計	17,032	6,571	17,270	6,979	-238	-408
近畿	滋賀県	6,700	2,216	6,244	2,231	456	-15
	京都府	8,927	3,014	9,047	3,241	-120	-227
	大阪府	19,023	5,382	17,656	6,080	1,367	-698
	兵庫県	8,990	2,709	8,222	2,838	768	-129
	奈良県	2,837	935	2,391	902	446	33
	和歌山県	900	246	825	315	75	-69
小計	47,377	14,502	44,385	15,607	2,992	-1,105	
中国	鳥取県	401	103	435	151	-34	-48
	島根県	230	69	288	93	-58	-24
	岡山県	1,887	576	1,727	693	160	-117
	広島県	3,832	1,328	3,561	1,433	271	-105
	山口県	1,006	321	1,011	402	-5	-81
小計	7,356	2,397	7,022	2,772	334	-375	
四国	徳島県	440	184	406	154	34	30
	香川県	1,625	475	1,270	457	355	18
	愛媛県	1,185	446	1,106	432	79	14
	高知県	406	116	401	143	5	-27
	小計	3,656	1,221	3,183	1,186	473	35
九州・沖縄	福岡県	3,670	1,377	3,520	1,401	150	-24
	佐賀県	351	113	341	102	10	11
	長崎県	357	122	262	114	95	8
	熊本県	664	267	667	235	-3	32
	大分県	300	122	234	110	66	12
	宮崎県	213	71	266	97	-53	-26
	鹿児島県	625	210	445	145	180	65
	沖縄県	607	115	550	160	57	-45
小計	6,787	2,397	6,285	2,364	502	33	
その他	648	176	551	153	97	23	
合計		95,779	31,364	91,382	33,404	4,397	-2,040

地域	2024年度		2023年度	
	志願者数	割合	志願者数	割合
近畿	47,377	49.5%	44,385	48.6%
近畿外	47,754	49.9%	46,446	50.8%
その他	648	0.7%	551	0.6%
合計	95,779	100.0%	91,382	100.0%

※割合(パーセンテージ)の算出は小数点2桁以下を四捨五入している。

※学校基本調査の考え方に準拠。

※各年度の志願者を対象として集計。

※出身高校の所在地をもとに集計。

※その他は、高等学校卒業程度認定試験(旧大学入学資格検定)、海外の学校等の合計。

1. 書類等の題名

令和6（2024）年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向
【資料4】 p10-p30

2. 出典

日本私立学校振興・共済事業団

3. 引用範囲

p1、2、8-p24

4. その他特記事項

なし

立命館大学

2026年度構想についての高校生アンケート調査

報告書

目次

1. 高校生アンケート調査 概要	2
2. 調査実施高等学校等一覧	3
3. 高校生アンケート調査 集計結果	6
4. 高校生アンケート調査 結果の要点	11

(添付資料)

高校生アンケート調査用紙.....	14
立命館大学2026年度設置構想中の学科または入学定員増構想中の学科概要.....	16

1.高校生アンケート調査 概要

調査目的	令和8年（2026年）度に立命館大学が構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」（入学定員：180名）の設置、および「総合心理学部 総合心理学科」（入学定員280名から30名増・310名）、「理工学部 数理科学科」（入学定員97名から20名増・117名）の入学定員増における志願者・入学者等の学生確保の見込みを測定することを目的とする。
調査対象	[調査対象] 令和8年3月に高校卒業予定である高校2年生（令和6年度時点） 令和7年度4月～5月の調査では高校3年生となった同対象者の回答を集計した。 [調査地域] 前述の3学科の主たる学生募集エリアと想定される全国の高等学校262校から調査の協力を得た。 また、オープンキャンパス及び入試説明会に来場した学生には個別で調査の協力を得た。
調査内容	・回答者の基本情報（性別、居住地） ・卒業後の志望進路 ・志望する大学等の設置者 ・興味のある学問分野 ・立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」のうち最も興味のある学科 ・立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」への受験・入学意向
調査時期	「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」：令和6年8月～令和7年5月 「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」：令和6年8月～令和7年2月
調査方法	高校側の希望に基づき、紙方式・WEB方式のいずれかでアンケート調査を実施。 [紙方式] ① 高校での実施依頼分については、各高校の希望に基づき、アンケート用紙・「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」概要を必要部数送付。ホームルームで配付の上、その場で回答し回収いただいた。 ② オープンキャンパスおよび入試説明会実施分については、協力を承諾いただいた来場者に対し、個別にアンケート用紙・アンケート用紙・「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」概要を配布し、その場で回答いただいた。 [WEB方式] 担当教員のメールアドレスにアンケート調査サイトURLおよびアクセス用QRコードを送付。自校対象生徒のタブレット端末等に配信の上、原則その場で回答し送信するよう促していただいた。
回収件数	有効回答数33,586件

2.調査実施高等学校等一覧

※有効回答数33,586件うち33,078件（全262校実施分）の調査実施高等学校内訳。

※回収数の多い高校から降順で記載。

高校名	回収数	高校名	回収数	高校名	回収数
九州国際大学付属高等学校	496	高槻北高等学校	268	聖ウルスラ学院英智高等学校	216
広陵高等学校	479	八尾高等学校	266	苫小牧東高等学校	216
横浜清風高等学校	435	立命館慶祥高等学校	266	武雄高等学校	214
専修大学松戸高等学校	401	宇都宮中央女子高等学校	264	興國高等学校	213
洛南高等学校	397	東大谷高等学校	263	山脇学園高等学校	211
大商学園高等学校	376	早稲田摂陵高等学校	260	工学院大学附属高等学校	211
千葉英和高等学校	361	立命館宇治高等学校	258	致遠館高等学校	211
浜松開誠館高等学校	356	長崎東高等学校	258	金沢高等学校	208
崇徳高等学校	353	北陸学院高等学校	250	城南高等学校	208
京都成章高等学校	340	彦根東高等学校	245	明誠学院高等学校	208
西南学院高等学校	336	各務原西高等学校	244	富田高等学校	207
大阪学芸高等学校	332	北陸高等学校	244	佐原高等学校	206
関東国際高等学校	331	高崎経済大学附属高等学校	242	朝倉高等学校	205
名東高等学校	330	立命館高等学校	237	大阪信愛学院高等学校	204
札幌第一高等学校	327	土浦第二高等学校	235	滝川高等学校	201
須磨学園高等学校	325	京都文教高等学校	232	横手高等学校	194
春日丘高等学校	312	狭山高等学校	227	豊丘高等学校	192
福岡舞鶴高等学校	308	樫原高等学校	224	浪速高等学校	192
玉川高等学校	299	尼崎北高等学校	222	初芝富田林高等学校	188
草津東高等学校	299	仁川学院高等学校	222	甲西高等学校	187
広島県瀬戸内高等学校	298	岐阜総合学園高等学校	221	和歌山信愛高等学校	186
立命館守山高等学校	295	高松東高等学校	221	いちりつ高等学校	184
熊谷高等学校	290	菰崎高等学校	220	京都聖母学院高等学校	183
高松商業高等学校	286	二松学舎大学附属柏高等学校	218	柴島高等学校	181

高校名	回収数	高校名	回収数	高校名	回収数
伊丹市立伊丹高等学校	181	福岡雙葉高等学校	123	滋賀学園高等学校	88
大垣南高等学校	179	翔凜高等学校	122	大阪学院大学高等学校	87
水口高等学校	170	成立学園高等学校	122	小松大谷高等学校	87
大垣西高等学校	169	アサンプション国際高等学校	122	広島工業大学高等学校	86
京都翔英高等学校	167	久留米信愛高等学校	121	静岡城北高等学校	85
聖徳学園高等学校	164	愛知工業大学名電高等学校	120	三浦学苑高等学校	84
東明館高等学校	162	上宮高等学校	120	加古川東高等学校	84
筑前高等学校	162	天王寺学館高等学校	118	東筑紫学園高等学校	84
近江兄弟社高等学校	160	多治見西高等学校	116	今治東中等教育学校	83
咲くやこの花高等学校	157	天白高等学校	116	八幡高等学校	83
岡山学芸館高等学校	154	寝屋川高等学校	116	桜丘高等学校	81
磐田東高等学校	154	生駒高等学校	115	智辯学園奈良カレッジ高等部高等学校	79
神戸鈴蘭台高等学校	151	福岡高等学校	114	明善高等学校	78
湘南学院高等学校	147	佐久長聖高等学校	111	東住吉高等学校	75
東洋大学附属姫路高等学校	146	帝京大学可児高等学校	111	佐賀清和高等学校	75
近畿大学泉州高等学校	144	花園高等学校	111	山梨英和高等学校	74
大阪産業大学附属高等学校	142	慶進高等学校	107	幕張総合高等学校	74
長崎南山高等学校	142	関西大倉高等学校	104	徳島北高等学校	74
福岡西陵高等学校	141	阪南大学高等学校	104	淳心学院高等学校	74
明星高等学校	141	鵬翔高等学校	103	東高等学校	74
暁高等学校	139	藤嶺学園藤沢高等学校	103	矢上高等学校	73
近畿大学附属豊岡高等学校	138	郡山高等学校	103	関高等学校	73
金光学園高等学校	137	武生東高等学校	102	久米田高等学校	73
京都高等学校	136	高川学園高等学校	99	大津緑洋高等学校	73
市岡高等学校	134	自由ヶ丘高等学校	97	今治北高等学校	73
小城高等学校	134	朋優学院高等学校	96	上田染谷丘高等学校	73
開智高等学校	134	清林館高等学校	95	明治学院高等学校	73
香川誠陵高等学校	132	杜若高等学校	94	桂高等学校	71
奈良学園登美ヶ丘高等学校	132	多治見北高等学校	93	金沢伏見高等学校	71
英明高等学校	132	高瀬高等学校	92	関西高等学校	71
石見智翠館高等学校	131	箕面高等学校	92	小倉南高等学校	69
江戸川女子高等学校	123	加藤学園高等学校	91	尚綱学院高等学校	69

高校名	回収数	高校名	回収数	高校名	回収数
刀根山高等学校	69	滝川第二高等学校	46	愛知高等学校	31
京都先端科学大学附属高等学校	68	東山高等学校	45	賢明女子学院高等学校	31
大門高等学校	67	城南学園高等学校	44	箕面自由学園高等学校	30
堅田高等学校	67	神港学園高等学校	43	西宮市立西宮高等学校	27
向上高等学校	66	上宮太子高等学校	43	名古屋西高等学校	27
広島城北高等学校	66	大阪高等学校	42	下館第一高等学校	26
親和女子高等学校	63	八王子学園八王子高等学校	41	愛知産業大学三河高等学校	26
樹徳高等学校	62	四條畷学園高等学校	41	佐野日本大学高等学校	26
東海大学付属諏訪高等学校	62	橋本高等学校	40	明治学園高等学校	26
日本大学三島高等学校	62	伊丹西高等学校	40	旭野高等学校	22
祐誠高等学校	62	布施高等学校	39	岡崎城西高等学校	18
香川県藤井高等学校	58	山城高等学校	39	大阪偕星学園高等学校	16
尺誠学園高等学校	57	洲本高等学校	39	高松第一高等学校	16
栃木女子高等学校	57	南砺福野高等学校	39	野田学園高等学校	16
緑高等学校	57	摂津高等学校	39	京都明德高等学校	15
高松中央高等学校	57	九州産業大学付属九州産業高等学校	38	牧野高等学校	15
常総学院高等学校	55	神戸星城高等学校	38	泉北高等学校	13
四天王寺東高等学校	52	高岡南高等学校	38	作陽学園高等学校	13
水戸葵陵高等学校	52	岩田高等学校	38	羽衣学園高等学校	12
育英西高等学校	51	桜塚高等学校	37	サビエル高等学校	10
クラーク記念国際高等学校	51	和泉高等学校	37	下関南高等学校	10
山陽学園高等学校	51	大野高等学校	37	祇園北高等学校	9
本庄東高等学校	51	尼崎（市立）高等学校	37	横須賀学院高等学校	9
福山曉の星女子高等学校	51	山口県桜ヶ丘高等学校	35	初芝橋本高等学校	8
新居浜西高等学校	50	岩村田高等学校	35	向陽高等学校	7
中京高等学校	50	近江高等学校	35	常翔学園高等学校	7
東洋大学附属牛久高等学校	49	鳴尾高等学校	35	皇學館高等学校	5
愛知啓成高等学校	49	錦城高等学校	32	文化学園長野高等学校	5
京都工学院高等学校	48	奈良大学附属高等学校	32	福知山成美高等学校	4
神戸女学院高等学校	48	屋代高等学校	31	湯梨浜学園高等学校	1
高山西高等学校	47	松本県ヶ丘高等学校	31	神辺旭高等学校	1
				安心院高等学校	1

3.高校生アンケート調査 集計結果

※「回答割合」 (%) はいずれも、小数点第二位を四捨五入。

問1 あなたの現在の居住地をお答えください。(あてはまるもの1つ)

選択肢	回答数	回答割合
北海道	835	2.5%
青森県	7	0.0%
岩手県	2	0.0%
宮城県	284	0.8%
秋田県	198	0.6%
山形県	4	0.0%
福島県	3	0.0%
茨城県	457	1.4%
栃木県	336	1.0%
群馬県	324	1.0%
埼玉県	467	1.4%
千葉県	1,340	4.0%
東京都	1,139	3.4%
神奈川県	1,002	3.0%
新潟県	2	0.0%
富山県	263	0.8%
石川県	615	1.8%
福井県	390	1.2%
山梨県	296	0.9%
長野県	349	1.0%
岐阜県	1,297	3.9%
静岡県	730	2.2%
愛知県	1,569	4.7%
三重県	178	0.5%

選択肢	回答数	回答割合
滋賀県	1,986	5.9%
京都府	1,777	5.3%
大阪府	6,127	18.2%
兵庫県	2,525	7.5%
奈良県	817	2.4%
和歌山県	319	0.9%
鳥取県	7	0.0%
島根県	173	0.5%
岡山県	609	1.8%
広島県	1,352	4.0%
山口県	376	1.1%
徳島県	287	0.9%
香川県	1,042	3.1%
愛媛県	214	0.6%
高知県	2	0.0%
福岡県	2,550	7.6%
佐賀県	713	2.1%
長崎県	403	1.2%
熊本県	2	0.0%
大分県	46	0.1%
宮崎県	105	0.3%
鹿児島県	17	0.1%
沖縄県	22	0.1%
無回答	28	0.1%
合計	33,586	100.0%

問2 あなたの性別をお答えください。(あてはまるもの1つ)

選択肢	回答数	回答割合
男性	15,492	46.1%
女性	15,764	46.9%
答えたくない	839	2.5%
無回答	1,491	4.4%
合計	33,586	100.0%

問3 卒業後の進路をどのように考えていますか。(あてはまるものすべて※)

選択肢	回答数	回答割合
① 大学	31,032	92.4%
② 短期大学	1,077	3.2%
③ 専門職大学	681	2.0%
④ 専門職短期大学	195	0.6%
⑤ 専門学校	3,026	9.0%
⑥ 就職	1,016	3.0%
⑦ その他	454	1.4%

※複数回答設問のため回答数はのべ数。回答割合＝各回答数÷全回答者数で算出。

問4 問3で①～④を選択した方に質問です。(※問3で①～④を選択しなかった方は問5に進んでください) 志望する大学等の設置者の希望を選択してください。(あてはまるものすべて※)

選択肢	回答数	回答割合
私立	20,895	66.4%
国立	15,186	48.3%
公立	10,709	34.0%

※複数回答設問のため回答数はのべ数。回答割合＝各回答数÷全回答者数で算出。

※問4の回答割合は問3で①～④のいずれかまたは複数を選択した31,457人(実人数)を全回答者数として算出。

問5 高校を卒業後、学びたいと考えている興味のある学問分野を次の中から選択してください。
(あてはまるものすべて※) ※現時点で進学を希望されていない方も進学する場合を想像してお答えください。

選択肢	回答数	回答割合
美術	1,540	4.6%
デザイン	2,755	8.2%
音楽	1,879	5.6%
芸術その他	1,085	3.2%
心理学	4,683	13.9%
文学	3,377	10.1%
史学	1,473	4.4%
哲学	1,281	3.8%
人文科学その他	894	2.7%
数学	1,501	4.5%
物理学	1,432	4.3%
化学	1,493	4.4%
生物	1,765	5.3%
地学	516	1.5%
理学その他	865	2.6%
機械工学	2,768	8.2%
電気通信工学	2,153	6.4%
土木建築工学	1,650	4.9%
応用理学	576	1.7%
応用化学	853	2.5%
工学その他	1,482	4.4%
法学・政治学	3,410	10.2%
商学・経済学	6,843	20.4%
社会学	2,999	8.9%
社会科学その他	762	2.3%
農学	1,327	4.0%
農芸化学	349	1.0%

選択肢	回答数	回答割合
農業工学	250	0.7%
農業経済学	237	0.7%
水産学	480	1.4%
農学その他	459	1.4%
医学	1,914	5.7%
歯学	594	1.8%
薬学	1,840	5.5%
看護学	2,594	7.7%
保健その他	2,070	6.2%
商船学	268	0.8%
家政学	360	1.1%
食物学	1,183	3.5%
被服学	368	1.1%
住居学	261	0.8%
児童学	615	1.8%
家政その他	139	0.4%
教育学	3,175	9.5%
小学校課程	1,188	3.5%
中・高校課程	2,169	6.5%
体育学	1,565	4.7%
教育その他	640	1.9%
教養学	584	1.7%
総合科学	439	1.3%
国際学	3,151	9.4%
人間科学	1,232	3.7%
その他	1,809	5.4%
無回答	0	0.0%

※複数回答設問のため回答数はのべ数。回答割合＝各回答数÷全回答者数で算出。

問6 立命館大学が2026年度に設置構想中または入学定員増構想中の以下の学部学科のうち、あなたが最も興味のあるものを次より1つ選択してください。

選択肢	回答数	回答割合
デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称・設置構想中)	10,471	31.2%
総合心理学部 総合心理学科(入学定員増構想中)	15,107	45.0%
理工学部 数理科学科(入学定員増構想中)	7,462	22.2%
無回答	546	1.6%
合計	33,586	100.0%

問7 あなたは問6で興味があるとされた学部学科の受験を希望しますか。次より1つ選択してください。

選択肢	回答数	回答割合
① 第一志望として受験する	1,141	3.4%
② 第二志望として受験する	1,146	3.4%
③ 第三志望として受験する	3,719	11.1%
④ 受験しない	27,224	81.1%
無回答	356	1.1%
合計	33,586	100.0%

問8 上記、問7で①～③を選択した方に質問です。あなたは問6で興味があるとされた学部学科に合格した場合、入学を希望しますか。次より1つ選択してください。

選択肢	回答数	回答割合
入学する	1,738	28.9%
志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	3,832	63.8%
入学しない	417	6.9%
無回答	19	0.3%
合計	6,006	100.0%

※問8のうち、問7で「第一志望として受験する」を選択した回答者のみの回答（問6の学科別）

デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称・設置構想中)

選択肢	回答数	回答割合
入学する	307	82.3%
志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	41	11.0%
入学しない	25	6.7%
無回答	0	0.0%
合計	373	100.0%

総合心理学部 総合心理学科（入学定員増構想中）

選択肢	回答数	回答割合
入学する	429	85.5%
志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	54	10.8%
入学しない	18	3.6%
無回答	1	0.2%
合計	502	100.0%

理工学部 数理科学科（入学定員増構想中）

選択肢	回答数	回答割合
入学する	209	81.6%
志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	34	13.3%
入学しない	9	3.5%
無回答	4	1.6%
合計	256	100.0%

4.高校生アンケート調査 結果の要点

受験・入学意向五重クロス集計結果（「3. 高校生アンケート調査 集計結果」より）

(1) デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称)

高校卒業後の進路に「大学」、その上で志望する大学の設置者に「私立」を選択し、興味のある学問分野として「美術」「デザイン」「美術その他」の複数またはいずれかを選択した上で、立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称)」に受験・入学意向を示した人数を確認した。

「大学」進学、かつ「私立」を選択し、興味のある学問分野として「美術」「デザイン」「美術その他」の複数またはいずれかを選択する者は合計2,470人で、その上で同学部学科を「第一志望として受験する」としたのは201人、「第二志望として受験する」154人、「第三志望以降として受験する」422人と合計すると777人であった。

なお「第一志望として受験する」とした上で「入学する」は182人であった。「第二志望として受験する」または「第三志望以降として受験する」とした上で「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」は合計で427人いた。

進路		学校種		学問分野		学部		受験意向		入学意向	
大学	31,032	私立	20,517	美術、 デザイン、 美術その他	2,470	デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称・設置構想中)	1,878	第一志望として受験する	201	入学する	182
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	15
								第二志望として受験する	154	入学する	63
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	88
								第三志望以降として受験する	422	入学する	58
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	339

(2) 総合心理学部 総合心理学科

高校卒業後の進路に「大学」、その上で志望する大学の設置者に「私立」を選択し、興味のある学問分野として「心理学」を選択した上で、立命館大学「総合心理学部 総合心理学科」に受験・入学意向を示した人数を確認した。

「大学」進学、かつ「私立」を選択し、興味のある学問分野として「心理学」を選択する者は合計3,350人で、その上で同学部学科を「第一志望として受験する」としたのは313人、「第二志望として受験する」296人、「第三志望以降として受験する」556人と合計すると1,165人であった。

なお「第一志望として受験する」とした上で「入学する」は285人であった。「第二志望として受験する」または「第三志望以降として受験する」とした上で「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」は合計で635人いた。

進路		学校種		学問分野		学部		受験意向		入学意向	
大学	31,032	私立	20,517	心理学	3,350	総合心理学部 総合心理学科 (入学定員増構想中)	2,655	第一志望として受験する	313	入学する	285
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	24
								第二志望として受験する	296	入学する	108
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	185
								第三志望以降として受験する	556	入学する	81
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	450

(3) 理工学部 数理科学科

高校卒業後の進路に「大学」、その上で志望する大学の設置者に「私立」を選択し、興味のある学問分野として「数学」を選択した上で、立命館大学「理工学部 数理科学科」に受験・入学意向を示した人数を確認した。

「大学」進学、かつ「私立」を選択し、興味のある学問分野として「数学」を選択する者は合計778人で、その上で同学部学科を「第一志望として受験する」としたのは100人、「第二志望として受験する」82人、「第三志望以降として受験する」178人と合計すると360人であった。

なお「第一志望として受験する」とした上で「入学する」は87人であった。「第二志望として受験する」または「第三志望以降として受験する」とした上で「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」は合計で207人いた。

進路		学校種		学問分野		学部		受験意向		入学意向	
大学	31, 032	私立	20, 517	数学	778	理工学部 数理科学科（入学定員増構想中）	778	第一志望として受験する	100	入学する	87
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	10
								第二志望として受験する	82	入学する	27
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	55
								第三志望以降として受験する	178	入学する	18
										志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する	152

立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称)」 設置構想および「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」 入学定員増構想についての高校生対象アンケート(対象：高校2年生の皆さん)

立命館大学では2026年4月より「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称)」を設置構想、また「総合心理学部 総合心理学科」の入学定員を280名から310名に増員、「理工学部 数理科学科」の入学定員を97名から117名に増員することを構想中です。本学ではこのアンケート調査結果を参考に、本構想の充実を図っていきたいと考えています。なお、この調査の結果は、統計資料としてのみ用い、他の用途に使用することはありません。

※本アンケート調査への回答は1回のみとなります。本アンケート調査と同一内容の立命館大学が実施したアンケートに過去に回答した方は回答できません。

※本アンケート調査は立命館大学から委託された第三者機関（株式会社高等教育総合研究所）が実施しています。

※本アンケート調査および学部概要資料に記載されている内容については予定であり、変更される可能性があります。

記入要領	1. 回答は所定の欄を塗りつぶしてください。 2. 回答用紙を汚したり、折り曲げたりしないでください。 3. 記入は必ず鉛筆及びシャープペンシルで濃く書いてください。	記入例	良い例
			悪い例

◆最初にあなた自身についてお聞きします。

問1 あなたの現在の居住地をお答えください。(あてはまるもの1つ)

- ① 北海道 ② 青森県 ③ 岩手県 ④ 宮城県 ⑤ 秋田県 ⑥ 山形県 ⑦ 福島県
⑧ 茨城県 ⑨ 栃木県 ⑩ 群馬県 ⑪ 埼玉県 ⑫ 千葉県 ⑬ 東京都 ⑭ 神奈川県
⑮ 新潟県 ⑯ 富山県 ⑰ 石川県 ⑱ 福井県 ⑲ 山梨県 ⑳ 長野県 ㉑ 岐阜県
㉒ 静岡県 ㉓ 愛知県 ㉔ 三重県 ㉕ 滋賀県 ㉖ 京都府 ㉗ 大阪府 ㉘ 兵庫県
㉙ 奈良県 ㉚ 和歌山県 ㉛ 鳥取県 ㉜ 島根県 ㉝ 岡山県 ㉞ 広島県 ㉟ 山口県
㊱ 徳島県 ㊲ 香川県 ㊳ 愛媛県 ㊴ 高知県 ㊵ 福岡県 ㊶ 佐賀県 ㊷ 長崎県
㊸ 熊本県 ㊹ 大分県 ㊺ 宮崎県 ㊻ 鹿児島県 ㊼ 沖縄県

問2 あなたの性別をお答えください。(あてはまるもの1つ)

- ① 男性 ② 女性 ③ 回答しない

◆高校卒業後の進路や、興味のある学びについてお聞きします。

問3 卒業後の進路をどのように考えていますか。(あてはまるものすべて)

- ① 大学 ② 短期大学 ③ 専門職大学 ④ 専門職短期大学
⑤ 専門学校 ⑥ 就職 ⑦ その他

▶問4 問3で①～④を選択した方に質問です。(※問3で①～④を選択しなかった方は問5に進んでください)
志望する大学等の設置者の希望を選択してください。(あてはまるものすべて)

- ① 私立 ② 国立 ③ 公立

→裏面に続く

問5 高校を卒業後、学びたいと考えている興味のある学問分野を次の中から選択してください。
(あてはまるものすべて) ※現時点で進学を希望されていない方も進学する場合を想像してお答えください。

芸 術	① 美術	② デザイン	③ 音楽	④ 芸術その他		
人文科学	⑤ 心理学	⑥ 文学	⑦ 史学	⑧ 哲学	⑨ 人文科学その他	
理 学	⑩ 数学	⑪ 物理学	⑫ 化学	⑬ 生物	⑭ 地学	⑮ 理学その他
工 学	⑯ 機械工学	⑰ 電気通信工学	⑱ 土木建築工学	⑲ 応用理学	⑳ 応用化学	㉑ 工学その他
社会科学	㉒ 法学・政治学	㉓ 商学・経済学	㉔ 社会学	㉕ 社会科学その他		
農 学	㉖ 農学	㉗ 農芸化学	㉘ 農業工学	㉙ 農業経済学	㉚ 水産学	㉛ 農学その他
保 健	㉜ 医学	㉝ 歯学	㉞ 薬学	㉟ 看護学	㊱ 保健その他	
商 船	㊲ 商船学					
家 政	㊳ 家政学	㊴ 食物学	㊵ 被服学	㊶ 住居学	㊷ 児童学	㊸ その他
教 育	㊹ 教育学	㊺ 小学校課程	㊻ 中・高校課程	㊼ 体育学	㊽ 教育その他	
そ の 他	㊾ 教養学	㊿ 総合科学	㉑ 国際学	㉒ 人間科学	㉓ その他	

ここからは別添の立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称)」
入学定員増構想中の「総合心理学部 総合心理学科」「理工学部 数理科学科」の概要資料を見てお答えください。

問6 立命館大学が2026年度に設置構想中または入学定員増構想中の以下の学部学科のうち、あなたが最も興味のあるものを次より1つ選択してお答えください。

- ① デザイン・アート学部 デザイン・アート学科(仮称・設置構想中)
- ② 総合心理学部 総合心理学科 (入学定員増構想中)
- ③ 理工学部 数理科学科 (入学定員増構想中)

問7 あなたは問6で興味があるとされた学部学科の受験を希望しますか。
次より1つ選択してください。

- ① 第一志望として受験する
- ② 第二志望として受験する
- ③ 第三志望以降として受験する
- ④ 受験しない

▶問8 上記、問7で①～③を選択した方に質問です。

あなたは問6で興味があるとされた学部学科に合格した場合、入学を希望しますか。
次より1つ選択してください。

- ① 入学する
- ② 志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する
- ③ 入学しない

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

2026年4月 設置構想中

立命館大学

衣笠キャンパス

デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）

学部の概要

所在地：立命館大学 衣笠キャンパス（〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1）

入学定員 180名（収容定員：720名） ※2026年度予定

修業年限：4年

取得学位：学士（デザイン・アート）

養成する人材：デザイン・アート学部は、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず、創造性に満ちた文化的生活や社会生活様式、あるべき未来社会像を具現化できる人材を育成します。

設置の理念

歴史都市京都にある総合大学において、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した未来志向の新たなデザイン学を追究する教育研究を展開することを目的として設置するものです。

学びの特徴

社会実践プロジェクトを通じた文理融合、分野横断のカリキュラム。

デザイン・アート学部のカリキュラムには、アクティブラーニングの構成要素である「主体的な・対話的な・深い学び」が以下の科目群からなるカリキュラム構造に埋め込まれており、カリキュラムレベルでアクティブラーニングを実現します。自身の関心や志向性に基づき、「意味デザイン」「社会デザイン」「環境デザイン」「情報デザイン」の4領域に関する「知識」や「技能」を学びつつ、プロジェクト型あるいは課題探究型の協働学習を通じて相互補完や役割分担を経験することにより、文理融合、分野横断となる学修を実体化させます。

Design Studies [DS] 科目群

この科目群は、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通じて「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶことを目的としています。さまざまなモノやコトの生成について、ケーススタディから自分が参画したプロジェクトへの意味づけ（モノコトの概念化）を深く広く行えるようになることを目指します。

Design in Society [DiS] 科目群

この科目群は、他者との協働において「生成するプロセス」への参画を通じて、デザイン・アートの実践知を修得することを目的としています。ここで社会実践に参画し、多様な社会実践者との協働によって身につけられる社会的スキルは、職域を問わず多様な社会や組織で活躍するためのキャリア形成につながるものとなります。

Design Language [DL] 科目群

デザイン・アートに関わるさまざまな「知識」や「技能」を、協働における他者とのコミュニケーションのための「言語（ランゲージ）」と捉えた上で、「知識群（Knowledge）」「技能群（Skill）」に区分した科目配置を行っています。この科目群に置かれた「知識」と「技能」を身につけていくことで、さまざまな他者との協働を円滑に、効果的に実践していくことが可能となります。

まち・社会全体がラーニングプレイス。

多様な社会での学びの場を高次元に構築するために、大学キャンパスを超え、京都、日本国内外の社会との連携。さらに、オンライン・オンデマンド・バーチャル空間などを利用したバーチャルキャンパス、バーチャルコミュニティ、バーチャル授業を導入し、柔軟に学生間や教員と学生間の共同作業やコミュニティ形成のプラットフォームを構築します。

（入学受入れ方針）アドミッションポリシー

「知識・技能」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮し、フィジカルとデジタルに跨るデザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるために、高等学校卒業相当の基礎学力を有している者。

「思考力・判断力、表現力等の能力」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮するために、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲を持つ者。

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮して、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を構想し、国内外の他者との協働においてそれを具現化するための努力を惜しまない者。

2026年4月 入学定員増構想中

立命館大学

大阪 いばらき キャンパス

総合心理学部 総合心理学科

学部の概要

所在地：立命館大学 大阪 いばらき キャンパス (〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150)
 入学定員：310名 (収容定員：1,240名) ※2026年度、280名から310名への定員増構想中
 修業年限：4年
 取得学位：学士(心理学)
 養成する人材：総合心理学部は、次の資質を兼ねそなえた人材を養成します。

- ① 心理学の諸分野の基礎知識に基づいて、人間の心と行動を科学的に探求し思考することができる。
- ② 幅広い教養に基づいて、心理学的知見を他の分野の知見と関係づけて、人間を総合的・多面的に理解することができる。
- ③ 人間と人間関係について多面的な関心をもち、個性と多様性を尊重しつつ他者と協働し、問題解決に貢献することができる。
- ④ 日本語と外国語の基本的なコミュニケーション能力をもち、情報やデータを加工し分析する基礎的能力を身に付け、自らの見解を論理的に主張することができる。
- ⑤ 大学で修得した成果に基づいて、職業人や市民として社会に貢献しようとする倫理観と、学び続けようとする意欲を身に付けている。

設置の理念

人間と社会・文化との関係についての深い思慮と、複雑な課題を切り拓く勇気と実行力を備えた未来社会の主体を育成するために、人間の心と行動を探求する心理学とその方法、人間の総合的なあり方を探求する人文社会科学などの関連分野を教育すること。

学びの特徴

ユニットによる学びで総合力を養成。

自分の進路を考えながら履修モデルに沿って、複数の科目から構成される科目のまとまりであるユニットを組み合わせる履修します。専門科目は3つの専門ユニット(認知・行動ユニット、発達・キャリアユニット、社会・文化ユニット)と6つの領域(知覚・認知領域、行動・科学領域、発達・支援領域、キャリア・組織領域、社会・共生領域、文化・共生領域)から構成されており、心理学の専門分野を系統的に学びます。

認知・行動ユニット

知覚心理学や認知心理学、行動分析学、認知行動療法をはじめとする領域の専門的知識を学修します。実験的な手法を用いて、特に量的なデータを扱った研究ができる学生を育成します。

発達・キャリアユニット

人間の生涯発達や組織行動、行動経済学をはじめとする領域の専門的知識を学修します。高度な統計手法や行動観察法を用いて、質的、量的なデータを扱った研究ができる学生を育成します。

社会・文化ユニット

コミュニティワーク、多文化コミュニケーション、法と倫理などの領域の専門的知識を学修します。フィールドワークや行動観察法、会話の分析などを用い、質的、量的なデータを扱った研究ができる学生を育成します。

実践的な学びを通じて、課題解決力を身につける。

①実感を伴うアクティブラーニングで課題にアプローチ

学生自らが課題を発見し、調査・研究を通じて解決にはたらきかけ、論文作成や発表・議論につなげるプロジェクト型の学びを実施します。さらに、充実した実験施設を活用した実験・実習や地域・臨床現場と連携したフィールドワークを通じ、より実感と深い理解を伴った実践力を養います。

②プロジェクト発信型英語プログラムで運用能力を高める

グローバル化の進展により、さまざまな国や文化とのかかわりがより密接になりつつあります。総合心理学部では、相手を正しく理解し、自分の考えを伝えることができるよう実践的な国際教育プログラムを整備しています。その代表であるプロジェクト発信型英語プログラムでは、学生自身が興味・関心を持った分野やテーマについて、世界中から情報を集め、リサーチやディスカッションを行い、その成果を英語で発信します。国際的に活躍できるプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を養成します。

〈臨床実践教育〉実践・実習を通じて心理学のスペシャリストを目指す

臨床心理学の基礎知識を学ぶとともに、実習を通じて対人援助の実践方法を学びます。具体的には、対人援助の領域で活躍されている方々との対話を通じて、臨床実践のあり方を学び、適性を知るとともに、カウンセリング面接・グループ面接・認知行動療法・家族療法などのロールプレイで具体的な技法や知識を学びます。

アドミッションポリシー (入学者受け入れ方針)

総合心理学部では、本学部の人材育成目的と教育目標に共感し、本学部で学ぼうとする強い意志を持った学生を求めます。このため、入学時点において以下の学力、関心などを有することを求めます。

- 1 高等学校などの教育によって修得した基礎的な学力を有していること。
特に、国語と外国語に関する知識、理解力や表現力を有していること。
- 2 数学、社会、理科などの分野における知識や思考力を有していること。
- 3 人間の心と行動、現代における人間の在り方についての問題に関心を有していること。

2026年4月 入学定員増構想中

立命館大学 理工学部 数理科学科

びわこ・くさつキャンパス

学部の概要

所在地：立命館大学 びわこ・くさつキャンパス(〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1)

入学定員：117名(収容定員:468名) ※2026年度、97名から117名への定員増構想中

修業年限：4年

取得学位：学士(理学)

養成する人材：立命館大学 理工学部は、独創性と高い倫理観に裏付けされ、科学技術の新領域を拓き未来社会を支える人材を育成することを目的としています。

理工学部 数理科学科は、専門教育の中で数学的思考力を研鑽し現代数学の理論的・応用的知識を身に付け、卒業後は研究職・教育職・専門職・公職等にあつて、数学・理学・工学のみならず幅広い領域において数学を研究・活用し、数学を通して広く社会に貢献できる人材を育成します。

設置の理念

立命館大学 理工学部では、理学と工学の融合に基づく独自の教育研究を通して、自らの意志で新しい知的価値を創造できる研究者、専門技術者を育成し、国内外の人々の平和と安寧に寄与すべく、科学・技術上の様々な問題を解決することを目指しています。理工学部 数理科学科は、数学という普遍的性格をもつ学問を、学ぶことで身につく論理的思考力と発想力を活かし、人類の福祉と発展に貢献することを、目的としています。

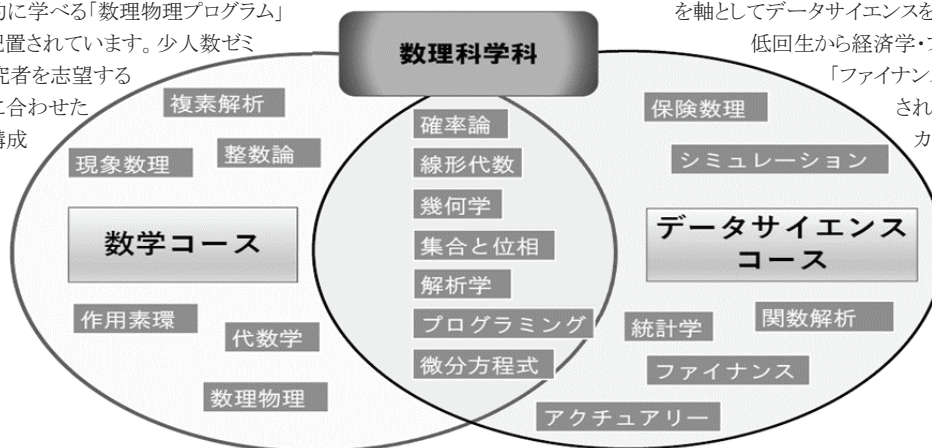
学びの特徴

基礎から興味を深めていく2コース制を導入。

理工学部 数理科学科は、研究者・教員・公務員・情報関連企業の技術者など、幅広い領域で活躍する卒業生を輩出してきました。現在は数学コースとデータサイエンスコースの2コース制が導入されています。微分積分や線形代数をはじめとする数学コースとデータサイエンスコースの諸分野共通の知識が修得できるよう、低回生においては基礎的科目および少人数クラスの演習・セミナーを配置しています。高回生になるに従い、純粋数学の理論を学ぶ解析・代数・幾何の専門科目群、確率・統計の専門科目群およびコンピュータを使った実践的科目群を配置しています。

【数学コース】

数学コースは、純粋数学に重点をおいて学び、物理学も系統的に学べる「数理物理プログラム」が低回生から配置されています。少人数ゼミなど、教員・研究者を志望する学生のニーズに合わせたカリキュラムで構成されています。



【データサイエンスコース】

データサイエンスコースでは、確率論・数理ファイナンスを軸としてデータサイエンスを基礎から学べます。低回生から経済学・ファイナンスを学べる「ファイナンスプログラム」が配置されています。このようなカリキュラムであるため金融機関への就職のみならず多様な分野に卒業生を送り出しています。

アドミッションポリシー
(入学受け入れ方針)

理工学部は、数学と理科の確かな学力と論理的思考力を兼ね備えた、以下のような意欲的な学生を求めます。

- 1 旺盛な好奇心と鋭い問題意識を持ち、物事の本質をよく理解し、課題を見つけようと努力する者
- 2 科学技術や社会の動向に関心を持ち、幅広い視野から創造的に物事をとらえようとする者
- 3 他人の立場が理解でき、寛容な精神を持ち自己を律することができる者
- 4 確かな自分の意見を持ち、新しいことに挑戦する気構えがある者

ア ク セ ス		
大阪いばらきキャンパス	衣 笠 キ ャ ン パ ス	びわこ・くさつキャンパス
■JR ・「茨木駅」下車、徒歩約5分 ■阪急 ・「南茨木駅」下車、徒歩約10分 ■大阪モノレール ・門真市駅方面から「南茨木駅」下車、徒歩約10分 ・大阪空港駅方面から「宇野辺駅」下車、徒歩約10分	■京都駅から ・市バス50、JRバス快速立命館「立命館大学前(終点)」下車 ・市バス205「衣笠校前」下車徒歩10分 ・JRバス高尾・京北線「立命館大学前」下車 ■阪急電車西院駅から ・市バス・JRバス快速立命館・臨「立命館大学前(終点)」下車 ・市バス205「衣笠校前」下車徒歩10分 ※アクセス例 一部	■JR 「南草津駅」下車のち、近江鉄道バス「立命館大学」行きまたは立命館大学経由「松ヶ丘五丁目」行き、「県立長寿社会福祉センター」行きに乗り換え約20分 ■京阪中書島駅から 直行便バスにて約35分 ※学休日、土日の運行はしません。

初 年 度 学 費 （ 他 大 学 を 含 む ）		
デザイン・アート学科 (仮称)	大学・学部・学科名	初年度納付金（入学金・授業料等の合計）
	立命館大学 デザイン・アート学部 デザイン・アート学科	1,900,000 円程度を予定
	武蔵野美術大学 造形構想学部 クリエイティブイノベーション学科	1,928,000 円
	多摩美術大学 美術学部 統合デザイン学科	1,965,000 円
	早稲田大学 創造理工学部 経営システム工学科・社会環境工学科	1,885,000 円
	法政大学 デザイン工学部 システムデザイン学科	1,824,000 円
	慶応義塾大学 SFC（総合政策学部 総合政策学科・環境情報学部 環境情報学科）	1,671,350 円
総合心理学部	大学・学部・学科名	初年度納付金（入学金・授業料等の合計）
	立命館大学 総合心理学部 総合心理学科	1,533,800 円
	早稲田大学 文学部 心理学コース	1,295,000 円
	立教大学 現代心理学部 心理学科	1,433,500 円
	上智大学 総合人間科学部 心理学科	1,439,650 円
	同志社大学 心理学部 心理学科	1,341,000 円
	中京大学 心理学部 心理学科	1,440,000 円
理工学部 数理科学科	大学・学部・学科名	初年度納付金（入学金・授業料等の合計）
	立命館大学 理工学部 数理科学科	1,860,800 円
	中央大学 理工学部 数学科	1,838,000 円
	芝浦工業大学 システム理工学部 数理科学科	1,795,020 円
	同志社大学 理工学部 数理システム学科	1,666,000 円
	関西学院大学 理学部 数理科学科	1,711,000 円
	関西大学 システム理工学部 数学科	1,780,000 円
	近畿大学 理工学部 理学科数学コース	1,718,500 円
	京都産業大学 理学部 数理科学科	1,453,500 円

※立命館大学の各学部の学費はいずれも予定のものです。 ※他大学の学費は各大学ホームページ掲載情報に基づきます(2024 年 7 月時点)。

立命館大学

デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）

デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）

設置構想についての人材需要アンケート調査

報告書

令和7年2月

株式会社高等教育総合研究所

－学生確保(資料)－26－

目次

1. 人材需要アンケート調査 概要	2
2. 人材需要アンケート調査 集計結果	3
3. 人材需要アンケート調査 結果の要点	11

(添付資料)

人材需要アンケート調査用紙	13
「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」概要	15
デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）およびデザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）リーフレット	17

1.人材需要アンケート調査 概要

調査目的	令和 8 年（2026 年）度に立命館大学が構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」（入学定員：180 名）、および「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」（入学定員：20 名）の設置における卒業・修了後の採用・就職（人材需要）の見込みを測定することを目的とする。
調査対象	[調査対象] 東証スタンダードまたは東証プライム上場企業から 前述の学部・研究科が育成する人材像に適した業種 [業種] 製造業、卸売業、小売業、建築業、IT 関連業等 [調査地域] 首都圏を中心とした全国 [依頼件数] 3,226 件
調査内容	・回答対象先の基本情報（業種・所在地・従業員／職員規模） ・立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」卒業生・修了生の人材ニーズ ・立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」卒業生・修了生の採用意向
調査時期	令和 6 年 11 月～令和 7 年 1 月
調査方法	調査対象事業所に対しアンケートを郵送し依頼することにより実施 （紙方式・web 方式での回答方法を案内し、いずれかで回答を依頼）
回収件数	有効回答数 365 件（回収率 11.31%）

2.人材需要アンケート調査 集計結果

※「構成比」 (%) はいずれも、小数点第二位を四捨五入。

問1 貴社の本社または貴団体の本部所在地について、お答えください。

選択肢	回答数	回答割合	選択肢	回答数	回答割合
北海道	4	1.1%	滋賀県	1	0.3%
青森県	0	0.0%	京都府	10	2.7%
岩手県	0	0.0%	大阪府	61	16.7%
宮城県	1	0.3%	兵庫県	14	3.8%
秋田県	1	0.3%	奈良県	0	0.0%
山形県	1	0.3%	和歌山県	1	0.3%
福島県	0	0.0%	鳥取県	1	0.3%
茨城県	0	0.0%	島根県	0	0.0%
栃木県	3	0.8%	岡山県	2	0.5%
群馬県	2	0.5%	広島県	7	1.9%
埼玉県	9	2.5%	山口県	0	0.0%
千葉県	4	1.1%	徳島県	1	0.3%
東京都	142	38.9%	香川県	3	0.8%
神奈川県	20	5.5%	愛媛県	1	0.3%
新潟県	5	1.4%	高知県	0	0.0%
富山県	3	0.8%	福岡県	7	1.9%
石川県	6	1.6%	佐賀県	0	0.0%
福井県	1	0.3%	長崎県	0	0.0%
山梨県	0	0.0%	熊本県	0	0.0%
長野県	5	1.4%	大分県	1	0.3%
岐阜県	3	0.8%	宮崎県	1	0.3%
静岡県	8	2.2%	鹿児島県	0	0.0%
愛知県	32	8.8%	沖縄県	0	0.0%
三重県	1	0.3%	無回答	3	0.0%
			合計	365	100.0%

問2 貴社・貴団体の業種（主な事業内容）として、最もあてはまるものをお選びください。（あてはまるもの1つ）

選択肢	回答数	回答割合
農・林・漁・鉱業	1	0.3%
建設業	40	11.0%
電気・ガス・熱供給・水道業	2	0.5%
製造業	117	32.1%
通信業	7	1.9%
IT 関連業	39	10.7%
放送、新聞、出版業	0	0.0%
運輸業、郵便業	8	2.2%
金融業（銀行・信託・証券・貸金）	14	3.8%
保険業	1	0.3%
学術研究、専門・技術サービス	7	1.9%
卸売業、小売業	69	18.9%
不動産業、物品賃貸業	12	3.3%
旅行業	1	0.3%
宿泊業、飲食サービス業	12	3.3%
教育・学習支援業	3	0.8%
生活関連サービス業、娯楽業	2	0.5%
医療	3	0.8%
福祉	3	0.8%
その他サービス業	16	4.4%
国家公務	0	0.0%
地方公務	0	0.0%
非営利団体	0	0.0%
その他	4	1.1%
無回答	4	1.1%
合計	365	100.0%

問3 貴社・貴団体の従業員数について、ご回答ください。

選択肢	回答数	回答割合
20 名未満	2	0.5%
20 名～100 名未満	5	1.4%
100 名～300 名未満	54	14.8%
300 名～1,000 名未満	132	36.2%
1,000 名以上	169	46.3%
無回答	3	0.8%
合計	365	100.0%

問4 立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」が養成する人材についての社会ニーズについてお答えください。（あてはまるもの1つ）

選択肢	回答数	回答割合
ニーズは高い	79	21.6%
ニーズはある程度高い	191	52.3%
ニーズはあまりない	34	9.3%
ニーズはない	2	0.5%
わからない	55	15.1%
無回答	4	1.1%
合計	365	100.0%

問5 立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」が養成する人材について採用したいと思われますか。（あてはまるもの1つ）

選択肢	回答数	回答割合
採用したい	199	54.5%
採用しない	9	2.5%
わからない	154	42.2%
無回答	3	0.8%
合計	365	100.0%

問6 問5で「採用したい」とされた場合、単年度で採用可能な人数をお答えください。

選択肢	回答数	回答割合
1人	51	25.6%
2人	20	10.1%
3人	10	5.0%
4人	2	1.0%
5人以上	14	7.0%
人数は未定だが、最低1人	100	50.3%
無回答	2	1.0%
合計	199	100.0%

問7 立命館大学大学院が設置構想中の「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」が養成する人材についての社会ニーズについてお答えください。（あてはまるもの1つ）

選択肢	回答数	回答割合
ニーズは高い	72	19.7%
ニーズはある程度高い	196	53.7%
ニーズはあまりない	32	8.8%
ニーズはない	2	0.5%
わからない	63	17.3%
無回答	0	0.0%
合計	365	100.0%

問8 立命館大学大学院が設置構想中の「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」が養成する人材について採用したいと思われますか。（あてはまるもの1つ）

選択肢	回答数	回答割合
採用したい	183	50.1%
採用しない	16	4.4%
わからない	163	44.7%
無回答	3	0.8%
合計	365	100.0%

問9 問8で「採用したい」とされた場合、単年度で採用可能な人数をお答えください。

選択肢	回答数	回答割合
1人	51	27.9%
2人	15	8.2%
3人	6	3.3%
4人	2	1.1%
5人以上	15	8.2%
人数は未定だが、最低1人	94	51.4%
無回答	0	0.0%
合計	183	100.0%

※立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」について期待される点、ご要望がありましたらご自由にご記入ください。

番号	回答
1	CAD を利用し設計などを学ぶこと
2	弊社事業内容として、デザインは少し関連がありますがアートはあまり関連がないため上記のような回答とさせていただいておりますが、クリエイティブな分野に長けた学生様にご活躍いただけることを楽しみにしております。
3	多角的にものごとをみることでできる人に成長する印象を受けました。お会いできることがとても楽しみです。
4	商品のデザインや販促 POP のデザインなど
5	IT 技術（情報、AI、人工知能、機械学習）の学びなど、当社で活かすことができる
6	現在のところ当社ではデザイン・アートに関する職種がありませんが第 1 期生が卒業される時期に職制としてデザインに関する職制があればぜひ採用したいと思います。
7	デザイナー職採用はございませんが、営業職として商品の訴求に活かせる力（販促物関連）を期待したいです
8	幹部候補としての入社を期待する
9	デザイン・アート学部として、アートの感性と技術を基盤に多様性が豊かになる社会における諸問題を解決していく教育をしていただきたいと考える。
10	コミュニケーション能力、言語化能力、妥協することもたまには必要...といった、社会的スキル
11	CAD などが使える人材
12	様々な学科をデザインとしていて、実際のヴィジュアルデザインだけなのが斬新だと思いました。印刷会社にはどの学科、専攻も活かせると感じましたので、是非卒業生をお待ちしてます。
13	文系（美術系）院卒は採りにくいのが企業人事の本音だと思います。 京都の他美大との比較、差別化ポイントが知りたいです。 広告プロモーションイベントのプロデューサー職を採用しているため、大学の講義で社員からお話しさせていただくことは可能ですので、ご相談いただけますと幸いです。
14	・「デザイン」という単語が持つ意味や印象が非常に幅広く、様々な業界や領域において、重要なファクターや事象を顕すことが多い現代社会においては、関連するスキルや経験値を持つ人材のニーズについて、今後間違いなく増加傾向にあるものと感じています。 ・「理念」や「学びの特徴」といった内容について、幾分、抽象的・概念的な表現が多く、少々分かり難いような印象も受けました。期待される成果や目的、研究対象となる範囲やレイヤ、具体的なキャリア構想、等のイメージが掴めるような、補助的なアウトプットがもう少しあれば、理解が進み、より訴求が成されるのではないかと感じました。
15	弊社のようなコンクリート二次製品メーカーの場合どのようなのか。営業職や工場の製造工程管理職で従事できるのか
16	地方創生分野でも活躍できる人材が育てられると嬉しい。
17	広報や SNS マーケティングの知識も豊富な方だと非常にご活躍いただけると思います。
18	単なるデザイン学ではなく組織や社会の課題解決につながる点を期待しています

	採用面だけで評価するのであれば、当社内では以下のポジションでの活躍を期待できます
19	①EIZO 本社の国内営業業務、販売促進業務 →文系学生が中心。デザインアートでの学びが直接的に作用するわけではないが、映像制作やカメラマン向け製品も扱っているため、芸術分野への興味関心との親和性は高い。 ・アイレムソフトウェアエンジニアリング(EIZO グループ)におけるデザイナー業務 →パチンコ/パチスロの映像制作や、ゲーム開発を行うグループ会社。美術系学生(デジタル)が中心。
20	デザイン思考と経済活動の結びつきについて具体的なイメージがわからず、期待、要望がわからない。(何となくデザイン思考は必要な気がしています)
21	弊社では自ら考えたことを形にするために行動することを推奨しているので、主体的に学ぶ力を伸ばせる学科を期待しています。
22	小売業の当社は、マネジメントが出来る「地頭力」を優先して採用しているので、現段階では回答しかねる
23	一年生のうちから、専門以外の就職知見を広げてあげてください。
24	企業のブランディングにはクリエイティブな考え方や時代に沿った情報発信が必要だと考えます。このような課題に対して解決策を提示できる人材の育成を期待します。
25	デザイン本来の意義を正しく探求し、多様化する社会の中でも確固たる信念のもと自分のデザインを追求できる人材の育成が求められると考えます。
26	この欄に記載する内容ではないかもしれませんが、弊社では主に営業職を募集する形になり、学生側がデザイン系の学部学科を出て弊社に入社を望むか不明だったため、わからないと回答させていただきました。
27	人口減少が続く中で、様々なマーケットも縮小していくことが想定される。その分外国人が増え、今後の日本文化も変わっていくと思われる。その中でデザインやアートはどのような変遷を見せるのか大変興味がある。
28	製造業においては力を発揮できるのは限られた部署となりますが、他の業界からのニーズはすごく高いと思います。技術のみだけでなく、感性が高い学生は、様々な分野で社会で活躍出来ると思いますので、そこを磨いていただけると良いと思います。
29	アートを通して独自性や様々な観点から物事を見る感性を磨くことで、社会に出た時に柔軟性や企画力として生かされると良いなと感じました。
30	グループウエスコの都市計画部門への興味関心、および関連した学問を履修している学生は会社のニーズがあります。
31	1つの事業に対して多角的な視点で考察のできる人材の養成をされることを期待しており、大変に興味深い学域であると印象を受けた次第です。
32	アパレル商社ですので、企業デザイナーとして幅広く活躍できるのではないかと感じております
33	現在当社に貴学の出身者はいませんが、専攻に参加される学生は年に数名ほどいらっしゃいます。やはり、基本的な学力、知識には申し分ないという方がほとんどで、新学部においても運営のために間口を広げるあまりに学生のレベルが下がってしまうということは、あってはならないと思います。
34	グループ実習、コミュニケーション力
35	グローバル人材の育成
36	ホテル業はセンスや感性も大切なため、バランスが取れているようでしたら積極的に採用いたします。
37	未来志向の新たなデザインという点ではニーズはあると思うが、そこにアートが掛け合わせると、どうなるかが読めない。

38	・創造性 ・建築、メニューブック、店内装飾、SNS の広告デザインに対する能力発揮
39	広告や教材作成にて、人数は限られますが、クリエイターのニーズはございます。もし、興味をもっていただける学生がおりましたら、採用は前向きに検討したいと考えております。
40	問題発見力、解決力のある人材の採用ニーズが高いと感じました。
41	企業における様々なデザインについて任せられるような学生様を輩出していただきたいです。
42	現在、募集の予定はございませんが、将来的に WEB 広告などの作成が可能な人材を採用する可能性がございます。

3.人材需要アンケート調査 結果の要点

デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）

立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」で養成する人材のニーズについては「ニーズは高い」79 箇所（21.6%）、「ニーズはある程度高い」191 箇所（52.3%）で合計すると 270 箇所（74.0%）がそのニーズの高さを認める結果となった。

また、199 箇所（54.5%）が採用意向を示し、その上での採用可能人数（単年度）合計は予定する入学定員 180 名の 1.7 倍となる 299 人であった。

問4 養成する人材の社会ニーズ

人材ニーズは高い・ある程度高い	270 事業所	74.0%
人材ニーズはない・あまりない・わからない・無回答	95 事業所	26.0%
合計	365 事業所	100.0%

問5 卒業生の採用意向

採用したい	199 事業所	54.5%
採用しない・わからない・無回答	166 事業所	45.5%
合計	365 事業所	100.0%

問9 単年度の採用可能人数

	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人以上	人数は未 定だが、 最低 1 人	無回答	合計
「採用したい」の回答数	51	20	10	2	14	100	2	199
採用可能人数 計 (回答数×採用 可能人数)	51 人	40 人	30 人	8 人	70 人	100 人	0 人	299 人

※「5人以上」は5人として計算した。

※「人数は未定だが、最低1人」は1人として計算した。

※採用可能人数へ無回答の場合は集計から除外した。

デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）

立命館大学院「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」で養成する人材のニーズについては「ニーズは高い」72 箇所（19.7%）、「ニーズはある程度高い」196 箇所（53.7%）で合計すると 268 箇所（73.4%）がそのニーズの高さを認める結果となった。

また、183 箇所（50.1%）が採用意向を示し、その上での採用可能人数（単年度）合計は予定する入学定員 20 名の 13.8 倍となる 276 人であった。

問7 養成する人材の社会ニーズ

人材ニーズは高い・ある程度高い	268 事業所	73.4%
人材ニーズはない・あまりない・わからない・無回答	97 事業所	26.6%
合計	365 事業所	100.0%

問8 卒業生の採用意向

採用したい	183 事業所	50.1%
採用しない・わからない・無回答	182 事業所	49.9%
合計	365 事業所	100.0%

問9 単年度の採用可能人数

	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人以上	人数は未 定だが、 最低 1 人	無回答	合計
「採用したい」の回答数	51	15	6	2	15	94	0	183
採用可能人数 計 (回答数×採用 可能人数)	51 人	30 人	18 人	8 人	75 人	94 人	0 人	276 人

※「5 人以上」は 5 人として計算した。

※「人数は未定だが、最低 1 人」は 1 人として計算した。

※採用可能人数へ無回答の場合は集計から除外した。

**立命館大学「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」および
「デザイン・アート学研究所 デザイン・アート学専攻（仮称）」
設置構想についての人材需要アンケート**

立命館大学では、2026 年 4 月開設に向けて、「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」、立命館大学大学院では「デザイン・アート学研究所 デザイン・アート学専攻（仮称）」を設置構想中です。歴史都市京都にある総合大学において、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した未来志向の新たなデザインを追究する教育研究を展開することを目的として設置するものです。別紙リーフレット等の資料にて、学部等概要をご案内申し上げますのでご高覧いただけますと幸いです。

つきましては、採用意向に関する調査にご協力をお願いいたします。なお、調査結果につきましては、本構想の文部科学省への申請に係る統計資料のみに使用することとし、他に転用することは一切致しません。

※このアンケート調査は立命館大学から委託された第三者機関（株式会社高等教育総合研究所）が実施しています。
※本アンケートおよびリーフレットに記載されている内容については予定であり、変更される可能性があります。

記入要領	1. 回答は 所定の欄を塗りつぶしてください 。 2. この用紙は電算処理しますので汚さないようにしてください。 3. 記入は必ず 鉛筆及びシャープペンシル で濃く書いてください。	【記入例】 ☒ 北海道 ☐ 茨城県
------	--	--

問1 貴社の本社または貴団体の本部所在地について、お答えください。（あてはまるもの1つ）

- | | | | | | | |
|---------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|---------------------------|----------------------------|
| ☐ 北海道 | ☐ 青森県 | ☐ 岩手県 | ☐ 宮城県 | ☐ 秋田県 | ☐ 山形県 | ☐ 福島県 |
| ☐ 茨城県 | ☐ 栃木県 | ☐ 群馬県 | ☐ 埼玉県 | ☐ 千葉県 | ☐ 東京都 | ☐ 神奈川県 |
| ☐ 新潟県 | ☐ 富山県 | ☐ 石川県 | ☐ 福井県 | ☐ 山梨県 | ☐ 長野県 | ☐ 岐阜県 |
| ☐ 静岡県 | ☐ 愛知県 | ☐ 三重県 | ☐ 滋賀県 | ☐ 京都府 | ☐ 大阪府 | ☐ 兵庫県 |
| ☐ 奈良県 | ☐ 和歌山県 | ☐ 鳥取県 | ☐ 島根県 | ☐ 岡山県 | ☐ 広島県 | ☐ 山口県 |
| ☐ 徳島県 | ☐ 香川県 | ☐ 愛媛県 | ☐ 高知県 | ☐ 福岡県 | ☐ 佐賀県 | ☐ 長崎県 |
| ☐ 熊本県 | ☐ 大分県 | ☐ 宮崎県 | ☐ 鹿児島県 | ☐ 沖縄県 | | |

問2 貴社・貴団体の業種（主な事業内容）として、最もあてはまるものをお選びください。（あてはまるもの1つ）

- | | | | |
|--|------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| ☐ 農業、林業、漁業、鉱業 | ☐ 建設業 | ☐ 電気、ガス、熱供給、水道業 | ☐ 製造業 |
| ☐ 通信業 | ☐ IT 関連業 | ☐ 放送、新聞、出版業 | ☐ 運輸業、郵便業 |
| ☐ 金融業（銀行・信託・証券・貸金） | ☐ 保険業 | ☐ 学術研究、専門・技術サービス | ☐ 卸売業、小売業 |
| ☐ 不動産業、物品賃貸業 | ☐ 旅行業 | ☐ 宿泊業、飲食サービス業 | ☐ 教育・学習支援業 |
| ☐ 生活関連サービス業、娯楽業 | ☐ 医療 | ☐ 福祉 | ☐ その他サービス業 |
| ☐ 国家公務 | ☐ 地方公務 | ☐ 非営利団体 | ☐ その他 |

問3 貴社・貴団体の従業員・職員規模として、最もあてはまるものをお選びください。（あてはまるもの1つ）

- | | | |
|---|--------------------------------------|---------------------------------------|
| ☐ 20 名未満 | ☐ 20 名以上 100 名未満 | ☐ 100 名以上 300 名未満 |
| ☐ 300 名以上 1,000 名未満 | ☐ 1,000 名以上 | |

ここからは別添の立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」
および「デザイン・アート学研究所 デザイン・アート学専攻（仮称）」の
「リーフレット」および「概要資料」をご確認いただき、ご回答をお願いいたします。

⇒ 裏面に続く

◆デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）についてお聞きします。

問4 立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」が養成する人材についての社会ニーズについてお答えください。（あてはまるもの1つ）

- ☐ ニーズは高い ☐ ニーズはある程度高い ☐ ニーズはあまりない
☐ ニーズはない ☐ わからない

問5 立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」が養成する人材について採用したいと思われませんか。（あてはまるもの1つ）

- ☐ ①採用したい ☐ ②採用しない ☐ ③わからない



問6 問5で「①採用したい」とされた場合、単年度で採用可能な人数をお答えください。

- ☐ 1人 ☐ 2人 ☐ 3人
☐ 4人 ☐ 5人以上 ☐ 人数は未確定だが、最低1人

◆デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）についてお聞きします。

問7 立命館大学大学院が設置構想中の「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」が養成する人材についての社会ニーズについてお答えください。（あてはまるもの1つ）

- ☐ ニーズは高い ☐ ニーズはある程度高い ☐ ニーズはあまりない
☐ ニーズはない ☐ わからない

問8 立命館大学大学院が設置構想中の「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」が養成する人材について採用したいと思われませんか。（あてはまるもの1つ）

- ☐ ①採用したい ☐ ②採用しない ☐ ③わからない



問9 問8で「①採用したい」とされた場合、単年度で採用可能な人数をお答えください。

- ☐ 1人 ☐ 2人 ☐ 3人
☐ 4人 ☐ 5人以上 ☐ 人数は未確定だが、最低1人

※ 立命館大学が設置構想中の「デザイン・アート学部 デザイン・アート学科（仮称）」および「デザイン・アート学研究科 デザイン・アート学専攻（仮称）」について期待される点、ご要望がありましたらご自由にご記入ください。

※宜しければ貴社名をお教えてください。こちらは、どの企業にご返送いただいたかを把握するための質問であり、アンケートの回答は統計的に処理され、特定の企業・団体が識別できる情報として公表されることはございません。（ゴム印の押印でも問題ございません）

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

立 命 館 大 学

デザイン・アート学部 デザイン・アート学科

仮 称
設置構想中

学 部 の 概 要

所 在 地 : 立命館大学 衣笠キャンパス(〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1)

入 学 定 員 180名(収容定員:720名) ※2026年度予定

修 業 年 限 : 4年

取 得 学 位 : 学士(デザイン・アート)

養 成 す る 人 材 : デザイン・アート学部は、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず、創造性に満ちた文化的生活や社会生活様式、あるべき未来社会像を具現化できる人材を育成します。

設置の理念

歴史都市京都にある総合大学において、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した未来志向の新たなデザイン学を追究する教育研究を展開することを目的として設置するものです。

学 び の 特 徴

社会実践プロジェクトを通じた文理融合、分野横断のカリキュラム。

デザイン・アート学部のカリキュラムには、アクティブラーニングの構成要素である「主体的な・対話的な・深い学び」が以下の科目群からなるカリキュラム構造に埋め込まれており、カリキュラムレベルでアクティブラーニングを実現します。自身の関心や志向性に基づき、「意味デザイン」「社会デザイン」「環境デザイン」「情報デザイン」の4領域に関する「知識」や「技能」を学びつつ、プロジェクト型あるいは課題探究型の協働学習を通じて相互補完や役割分担を経験することにより、文理融合、分野横断となる学修を実体化させます。

Design Studies [DS] 科目群

この科目群は、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通じて「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶことを目的としています。さまざまなモノやコトの生成について、ケーススタディから自分が参画したプロジェクトへの意味づけ(モノゴトの概念化)を深く広く行えるようになることを目指します。

Design in Society [DiS] 科目群

この科目群は、他者との協働において「生成するプロセス」への参画を通じて、デザイン・アートの実践知を修得することを目的としています。ここで社会実践に参画し、多様な社会実践者との協働によって身につけられる社会的スキルは、職域を問わず多様な社会や組織で活躍するためのキャリア形成につながるものとなります。

Design Language [DL] 科目群

デザイン・アートに関わるさまざまな「知識」や「技能」を、協働における他者とのコミュニケーションのための「言語(ランゲージ)」と捉えた上で、「知識群(Knowledge)」「技能群(Skill)」に区分した科目配置を行っています。この科目群に置かれた「知識」と「技能」を身につけていくことで、さまざまな他者との協働を円滑に、効果的に実践していくことが可能となります。

まち・社会全体がラーニングプレイス。

多様な社会での学びの場を高次元に構築するために、大学キャンパスを超え、京都、日本国内外の社会との連携。さらに、オンライン・オンデマンド・バーチャル空間などを利用したバーチャルキャンパス、バーチャルコミュニティ、バーチャル授業を導入し、柔軟に学生間や教員と学生間の共同作業やコミュニティ形成のプラットフォームを構築します。

(入 学 者 受 け 入 れ 方 針)

「知識・技能」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮し、フィジカルとデジタルに跨るデザイン・アートに関わる知識と技能を身につけるために、高等学校卒業相当の基礎学力を有している者。

「思考力・判断力、表現力等の能力」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮するために、デザイン・アートに関わる知識と技能に基づく思考・意思決定・行動の実践に励む意欲を持つ者。

「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」

美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に発揮して、豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を構想し、国内外の他者との協働においてそれを具現化するための努力を惜しまない者。

上記内容は構想中の内容であり、今後変更となる場合があります。

■JR・近鉄京都駅から衣笠キャンパス

市バス50にて42分、市バス・JRバス「快速立命館」にて36分、「立命館大学前(終点)」下車
市バス205にて38分、「衣笠校前」下車、徒歩10分
JRバス「高尾・京北線」にて30分、「立命館大学前」下車

■JR円町駅から衣笠キャンパス

市バス・JRバス「快速立命館」にて8分、「立命館大学前(終点)」下車
市バス15にて10分、「臨」にて9分、「立命館大学前(終点)」下車
市バス204/205にて5分、「衣笠校前」下車、徒歩10分
JRバス「高尾・京北線」にて8分、「立命館大学前」下車

■阪急電車西院駅から衣笠キャンパス

市バス・JRバス「快速立命館」にて15分、「臨」にて17分、「立命館大学前(終点)」下車
市バス205にて13分、「衣笠校前」下車、徒歩10分

■京阪電車三条駅から衣笠キャンパス

市バス12にて53分、市バス15にて34分、市バス51にて36分、「立命館大学前(終点)」下車
市バス59にて40分、「立命館大学前」下車



大学・学部・学科名	初年度納付金（入学金・授業料等の合計）
立命館大学 デザイン・アート学部 デザイン・アート学科	1,900,000円程度を予定
武蔵野美術大学 造形構想学部 クリエイティブイノベーション学科	1,928,000円
多摩美術大学 美術学部 統合デザイン学科	1,965,000円
早稲田大学 創造理工学部経営システム工学科・社会環境工学科	1,885,000円
法政大学デザイン工学部システムデザイン学科	1,824,000円
慶応義塾大学 SFC（総合政策学部総合政策学科・環境情報学部環境情報学科）	1,671,350円

※ 立命館大学デザイン・アート学部の学費は予定のものです。

※ 他大学の学費は各大学ホームページ掲載情報に基づきます(2024年7月時点)。

上記内容は構想中の内容であり、今後変更となる場合があります。

College of Arts & Design

R RITSUMEIKAN
UNIVERSITY

2026.4－
立命館大学 衣笠キャンパス

デザイン・アート学部(仮称) デザイン・アート学研究科(仮称) 設置構想中

※設置計画は、現在構想中であり、内容に変更が生じる可能性があります。

デザイン・アート学部/研究科の特色

歴史・文化都市「京都」に位置する衣笠キャンパスにおいて、未来志向の新たなデザイン学の追求とアートの技術・感性を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した教育・研究の展開を行います。

リアルだけでなく、オンライン・オンデマンド・バーチャル空間などを利用したバーチャルキャンパスなどを導入し、多様な社会に適したより柔軟で高次元の学びの環境を整備予定です。

美的感性に裏打ちされた、「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけた、クリエイティブで柔軟な思考を涵養します。

デザイン・アートの現状と課題

現在、デザイン・アートを取り巻く状況には、以下のようなものが社会的課題として認識できます。

1ーデザインの専門性の喪失

日本国内のデザインの歴史的変遷を見ると、デザインが多様な分野に拡張し、専門知が拡散しています。その結果、デザインの本来の意義が十分に理解されず、専門性が失われています。この事態を改善し、デザイン学を再構築する場が求められています。

2ーデザイン思考におけるアートの観点の喪失

デザイン思考が普及する中で、デザインの「問題解決」の側面が過度に注目され、アートの観点が見落とされています。デザインとアートの関係を再評価し、再結合することが求められています。

3ーデザインの定義の曖昧性

デザインの領域横断的な学際性が評価される一方で、応用分野ごとにデザインの定義が異なり、ミスコミュニケーションが発生しています。本学部では、各分野のデザインの意味を比較検討し、共通の意義を見出します。

4ー日本の歴史と文化を踏まえたデザイン教育研究の不在

日本の歴史と文化を基にした独自のデザイン教育研究が不足しています。京都の文化資源を最大限に活用し、日本独自のデザイン教育を展開します。

5ーデジタルネイティブのデザイン教育研究の不在

デジタル化の進展に伴い、デジタル環境に適応したデザイン教育研究が必要です。デジタル技術を駆使し、学生が自らの感性に基づいた表現や研究を行える環境を整備します。

本学部・研究科では、社会環境の変化とデザイン・アートの現状における5つの課題を踏まえ、アートの観点からデザインの位置づけを見直します。そして、空洞化しているデザイン学領域に責任を持ち、日本の歴史と文化を反映した独自の視点とデジタルネイティブのデザイン教育研究を推進します。これにより、世界的なデザイン・アートの拠点である京都で、専門家、研究者、高度専門職業人を育成します。この新しいデザイン学への進化は古いデザイン学を否定するのではなく、それに基づき、新たなデザイン学の領域からの融合によって生じます。本学部・研究科は、この進化を基に、総合大学としての特性を生かし、「総合大学だからこそできるデザイン・アートの知」の創造を目指します。

教育理念

デザイン・アート学部は、デザイン学を一つのディシプリンとして捉え、歴史都市京都にある総合大学が展開する未来志向の新たなデザイン学を追求しつつ、アートの感性と技術を基盤に自然科学と人文・社会科学領域を横断した教育・研究を展開することを目的として設置するものです。企業や地域社会との連携を重視し、豊かな文化・生活様式や未来への持続可能な社会の形成に関わる創造的な表現活動に取り組みます。

人材育成目的

デザイン・アート学部は、人工知能や仮想・複合現実などのデジタル情報技術の発展を背景に、人間本来の思考と創造性のあり方自体が問い直されるべき社会的要請に応えるために、本学園の根幹である「建学の精神」、「教学理念」、「立命館憲章」に則り、長い歴史と重厚な文化のもとで革新的な知が創出されてきた京都という都市において、フィジカルとデジタルに跨がる知の蓄積と循環機能を戦略基盤に持ち、他者との協働と省察による社会実践活動を通して、美的感性に裏打ちされた「問題解決力」「問い直し力」「共創力」「問題発見力」「創造的思考力」を総合的に身につけながら、職域を問わず多様な社会や組織において豊かな文化・生活世界の新たな形成理念を提案・創造することができる人材を育成します。

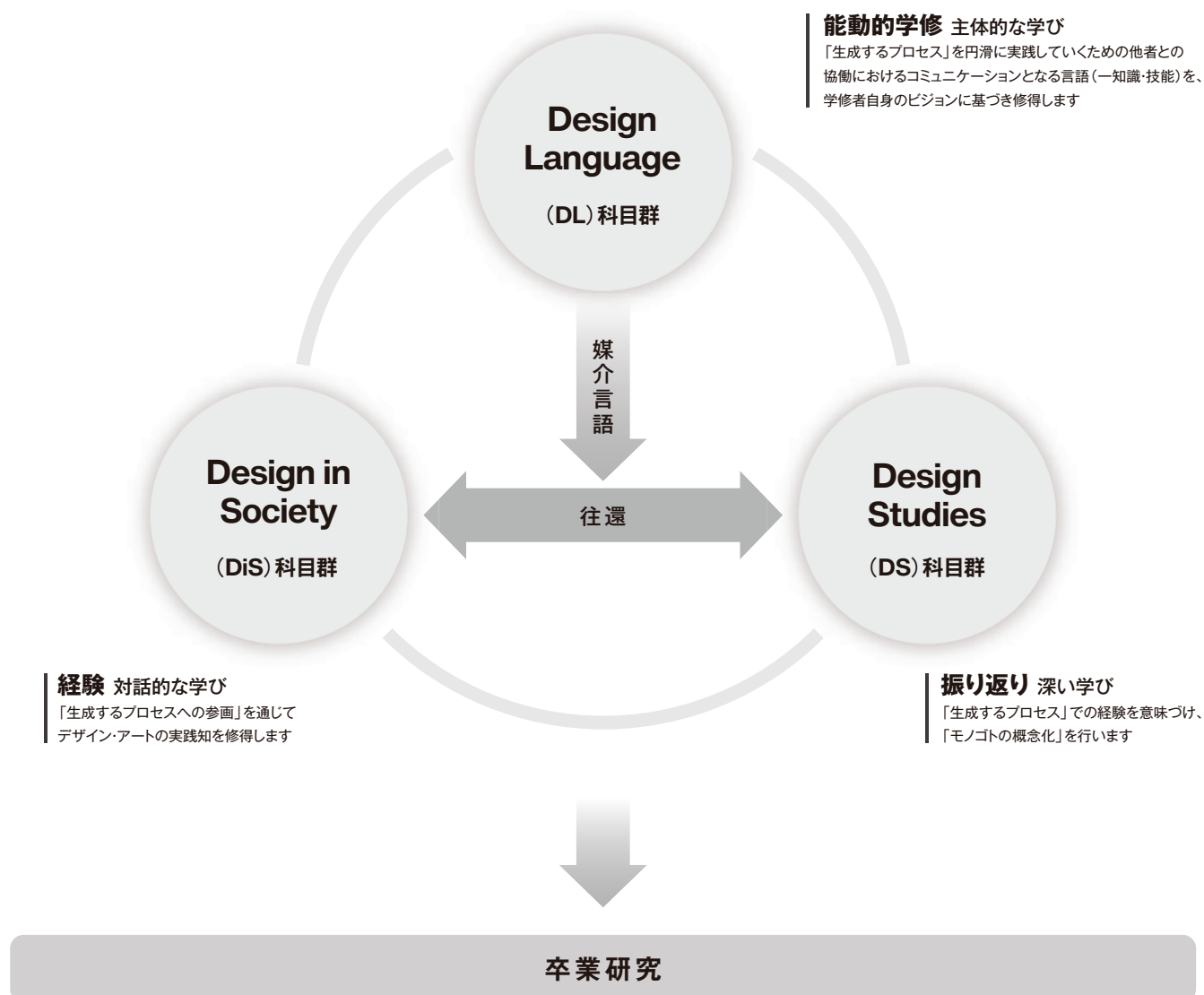
デザイン・アート学部における カリキュラムレベルでのアクティブラーニング

デザイン・アート学部のカリキュラムには、アクティブラーニングの構成要素である「主体的な・対話的な・深い学び」がその構造に埋め込まれており、カリキュラムレベルでアクティブラーニングを実現します。

デザイン・アート学部での学びは、常に学内外の他者との協働において生成するプロセスのなかにあります。

デザイン・アート学部では、「まち全体をラーニングプレイス」と捉え、大学の学びをキャンパスの外に広げた多様な社会での学びの場において、豊かな文化・生活様式や未来への持続可能な社会の形成に関わる創造的な表現活動に取り組みます。

この中核となるのが「Design in Society (DiS) 科目群」で実施されるプロジェクト実践型の授業形態となります。



デザイン・アート学部のカリキュラム

● Design in Society [DiS] 科目群

この科目群は2回生以上に配当され、他者との協働において「生成するプロセス」への参画を通じて、デザイン・アートの実践知を修得することを目的としています。

ここで社会実践に参画し、多様な社会実践者との協働によって身につけられる社会的スキルは、卒業後に職域を問わず多様な社会や組織において活躍するためのキャリア形成に資するものとなります。

「デザイン学生成プロジェクト演習1・2」(2回生以上)

専門性の異なる複数の教員から考案されるデザイン・アートに関わる最新のテーマ・トピックに基づいたプロジェクトへ参画する。

「デザイン学総合研究1・2」(3回生以上)

教員の主要研究テーマに基づくプロジェクトへ参画する。

「卒業演習1・2」(4回生)

自身が興味を持つデザイン・アート領域に関わる新たな研究テーマを定め、それに基づいた卒業研究プロジェクトを構想し具現化する。

科目区分	1回生		2回生		3回生		4回生	
	1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター
Design in Society [DiS]			デザイン学 生成プロジェクト 演習1	デザイン学 生成プロジェクト 演習2	デザイン学 総合研究1	デザイン学 総合研究2	卒業演習1	卒業演習2

● Design Studies [DS] 科目群

この科目群は1回生以上に配当され、他者との協働において生成するプロセスへの参画を通して「経験したこと」に対して、自分自身がどのように「意味づけ」していくか、その考え方と方法について学ぶことを目的としています。

古今東西のさまざまなモノやコトの生成について、ケーススタディから自分が参画したプロジェクト(他者との協働において生成するプロセス)への意味づけ(モノゴトの概念化)を深く広く行えるようになることを目指します。

「デザイン学1・2」(1回生)

本学部でのデザイン・アートの学びを構成する4領域(「意味」「情報」「環境」「社会」)からそれぞれの理論的・実践的アプローチを学ぶ。

「デザイン学3A・3B・4」(2回生)

デザイン・アートに関わるさまざまな社会実践者の取り組み、および教員の研究実践から学ぶ。

「デザイン学5・6」(3回生)

デザイン・アートに関わる国内外での最新の社会実践事例から学び、議論し、意味づけをしていく。

科目区分	1回生		2回生		3回生		4回生	
	1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター
Design Studies [DS]	デザイン学1	デザイン学2	デザイン学3A	デザイン学3B デザイン学4	デザイン学5	デザイン学6		

●Design Language [DL] 科目群

デザイン・アートに関わるさまざまな「知識」や「技能」を、協働における他者とのコミュニケーションのための「言語(ランゲージ)」と捉えた上で、本科目群に配置された科目はさらに「知識群(Knowledge)」「技能群(Skill)」に区分され、各群の導入系科目を1回生以上に配当、専門系科目を2回生以上に配当しています。

この科目群に置かれた「知識」と「技能」を身につけていくことで、さまざまな他者との協働を円滑に、そして効果的に実践していくことが可能となることを目的としています。

デザイン・アートの学びを構成する4領域とアートの視点

意味デザイン

意味デザインは、人間による感性や知性に基づいた営みから生み出される有形無形の資源を蓄積し、それらに対して新たな「意味」や「表現」を付与し、人間社会に還元していくプロセスであり、ここでは、デザインされた文化的資源がさらに人間による文化的営みのなかでかたちを変え、それらが新たにデザインの対象となっていくサイクルが含まれる。この分野においては、文化情報学、芸術学、文化財科学、博物館学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

情報デザイン

人類史における様々な技術の発展は、情報の可視化、蓄積、伝達のかたちを変え、そのことを通じて情報自体が持つ意味の質や方向づけをも変えてきた。デザイン・アート学部が研究対象とする情報デザインは、感覚や認知の次元も含めてコミュニケーションを成り立たせている条件の総体に対して、新たな「かたち」や「機能」を与えることで、価値創造を目指すものである。この分野においては、情報工学、電気・電子工学、感性工学、認知科学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

環境デザイン

人間は自己を取り巻く環境を創り出す主体であると同時に、その認知や行動は環境からの大きな影響を受ける。この意味で人間とそれを取り巻くモノやそれによって構成される空間の関係は相互的なダイナミズムがある。デザイン・アート学部が研究対象とする環境デザインは、例えば、一つの部屋から都市や地域に至るまで、さまざまなスケールの「環境」に対して、このダイナミズムを可視化し、そこに創造的な介入をおこなっていくプロセスである。この分野においては、建築・都市工学、地理学、地域社会学、生活科学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

社会デザイン

社会デザインは、社会に流通・布置されているデザインされた人工物(製品・サービスや組織、制度を含む)の根底にある意味を対象に、それらに介在する全てのものの関係性を見直し、そこから得られる経験を再定義することで新たな価値創出を目指すプロセスである。その実践は、人工物が生み出された理念をはじめ、生成過程や、人的物的リソース、それらの営みの主体となる組織やコミュニケーション自体のデザインが含まれるが、そうした人工物が消費される生活や社会のあり方について、空間軸・時間軸をまたいだ洞察が必要となる。この分野においては、経営学、社会学、文化人類学、史学などの知識を基盤とした方法論からデザイン学にアプローチする。

科目区分			1回生		2回生		3回生		4回生	
			1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター
Design Language [DL]	英語 [E]		英語P1	英語P2	英語P3	英語P4				
	技能群 [S]	導入 I	デザイン・アート技能基礎 [DL-S-1-a] デザインリサーチ/デザインリサーチのためのアカデミック・ライティング/デジタルビジュアルデザイン基礎/Webデザイン基礎/アート・ドキュメンテーション/デザイン・アートのためのプログラミング/デザイン・アートのための製図 アート表現基礎 [DL-S-I-b] デジタルアート表現基礎(絵画)/デジタルアート表現基礎(立体造形)/フィジカルアート表現基礎(身体パフォーマンス)/フィジカルアート表現基礎(絵画)/フィジカルアート表現基礎(立体造形)							
		専門 M	デザインする/デザインされる意味 [DL-S-M-a] デザイン評価法/アート作品のデジタル分析技術実習/美術品・工芸品のデジタル化技術実習/工芸・美術・芸術の社会活用実習/デジタル文化資源の活用実習/パフォーマンス制作と記録/データベース構築実習/テキストマイニング デザインする/デザインされる情報 [DL-S-M-b] デザインとAI・人工知能・機械学習/デザインとバーチャルリアリティ/デザインのためのビッグデータ解析/Webアーカイブ技術/Webコンテンツ活用システム デジタルファブリケーション/コンピュータグラフィックス/サウンド処理/音響・音声アーカイブ デザインする/デザインされる環境 [DL-S-M-c] コミュニティデザイン/ヴィジュアルライゼーション/CAD/CG演習/実測演習/地域調査法/ランドスケープ・プランニング デザインする/デザインされる社会 [DL-S-M-d] デザインエスノグラフィ/サービスデザイン/アートマネジメント実習/ミュージアロジー実習/グラフィックファシリテーション/ワークショップデザイン アート表現応用 [DL-S-M-e] デジタルアート表現応用(インスタレーション)/フィジカルアート表現応用(インスタレーション)							
	知識群 [K]	導入 I	デザイン・アート知識基礎 [DL-K-1-a] デザイン理論/グローバルデザイン論/デザイン態度論/デザイン・アートとビジュアルコミュニケーション/インダストリアルデザイン論/デジタルヒューマニティーズ概論/デザイン・アートとコンピュータ基礎/地域デザイン論/人間中心デザイン論/京都・伝統文化論/芸術批評論							
		専門 M	デザインする/デザインされる意味 [DL-K-M-a] 視覚芸術表現論/デザインと人類学/芸能・演劇史/工芸・産業史/視覚文化・芸術史/身体表現論/音楽とデザイン/現代アート論 デザインする/デザインされる情報 [DL-K-M-b] デジタルメディアデザイン論/デザインと知覚/デザインとコンピュータ応用/デザインのための数理/デジタルアーカイブ概論/感性・認知情報処理論/メディア処理論/デザインと人間工学/デザインのためのデータマイニング デザインする/デザインされる環境 [DL-K-M-c] コ・デザイン論/都市デザイン/景観論/地理情報科学/建築意匠論/建築・インテリア空間設計論/日本庭園文化史/歴史まちづくり デザインする/デザインされる社会 [DL-K-M-d] 戦略的デザイン論/デザインとマーケティング/デザインと行政/デザインと知的財産権/デザインマネジメント論/アートマネジメント論/ミュージアロジー/美術教育論 デザイン・アートと国際社会/デザイン・アートと世界史/デザイン・アートと歴史・考古学							

デザイン・アート学研究科のカリキュラム

デザイン・アート学研究は、アートの技術と感性を基盤に自然科学と人文・社会科学を横断した研究領域を開拓し、新たなデザイン学を追究することを目的として構想しています。

修士課程 (2年制)

様々な領域の学部からの進学者を対象とした一般的な修業年限の2年制コース

科目区分		1回生		2回生	
		1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター
研究指導科目		新領域 デザイン・アート学研究Ⅰ	新領域 デザイン・アート学研究Ⅱ	新領域 デザイン・アート学研究Ⅲ	新領域 デザイン・アート学研究Ⅳ
新領域 デザイン・アート学 基盤科目群		新領域 デザイン・アート学特論Ⅰ	新領域 デザイン・アート学特論Ⅱ		
		新領域デザイン・アート リサーチ方法論研究Ⅰ	新領域デザイン・アート リサーチ方法論研究Ⅱ		
新領域 デザイン・ アート ランゲージ 科目群	理論	グローバルデザイン論/デジタルメディアデザイン論/コンピューティングデザイン論/デジタルデータデザイン論/ デジタルデザインヒューマニティーズ論/ローカルデザイン論/ デザインリーダーシップ論/戦略的デザインマネジメント論/戦略的アートマネジメント論			
	技能	デジタルアート表現演習(夏期集中)/フィジカルアート表現演習(夏期集中)/デザインフィールドワーク演習(夏期集中)			
		デジタルデザイン表現演習/ デザイン科学評価法演習/質的デザイン評価法演習 デジタルアーカイブ演習/ファシリテーションデザイン演習			

修士課程 (1年制)

デザイン関連の社会人、将来のアカデミックフィールドを目指す社会人向けの1年制コース

「新領域デザインストラテジー専修」と「新領域アートディレクション専修」の2専修を設置

科目区分		1回生	
		1セメスター	2セメスター
研究指導科目		新領域デザインストラテジー研究Ⅰ 新領域アートディレクション研究Ⅰ	新領域デザインストラテジー研究Ⅱ 新領域アートディレクション研究Ⅱ
新領域 デザイン・アート学 基盤科目群		新領域デザイン・アート学特論Ⅰ 新領域デザイン・アートルイサーチ方法論研究Ⅰ	新領域デザイン・アート学特論Ⅱ 新領域デザイン・アートルイサーチ方法論研究Ⅱ
新領域 デザイン・ アート ランゲージ 科目群	理論	グローバルデザイン論 デジタルメディアデザイン論 デジタルデザインヒューマニティーズ論	ローカルデザイン論 デザインリーダシップ論 戦略的デザインマネジメント論 戦略的アートマネジメント論
	技能	デジタルアート表現演習 (夏期集中)/フィジカルアート表現演習 (夏期集中)/デザインフィールドワーク演習 (夏期集中)	
		デジタルデザイン表現演習 デザイン科学評価法演習 質的デザイン評価法演習	ファシリテーションデザイン演習 デジタルアーカイブ演習

博士課程後期課程 (2027年設置構想中)

科目区分		1回生		2回生		3回生	
		1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター
研究指導科目		新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅰ	新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅱ	新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅲ	新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅳ	新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅴ	新領域 デザイン・アート学 特別研究Ⅵ
新領域デザイン・ アート学 応用プロジェクト 科目群		新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅰ	新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅱ	新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅲ	新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅳ	新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅴ	新領域 デザイン・アート学 応用プロジェクト 研究Ⅵ

キャリアモデル

デザイン・アート学部を卒業後は、企業等への就職や大学院進学などのこれまでの進路・進学のみならず、次のような活動やキャリアモデルが想定されています。

- 企業組織の戦略とデザイン戦略の統合を担う。
- テクノロジーを熟知し、組織ビジョンの構想から実現までをトータルで設計・実行する。
- 社会的、経済的コンテキストを踏まえ、新たなビジネスやサービスの開発を通じて、社会的課題に対して解決策を提示する。
- 地域社会の生活や産業と結びついて新たなデザインの課題を提起するような政策的な活動を行う。
- デザイン・アートの視座から、現在、未来を透視し、あるべき生活世界の新たな理念形成を推進していく。
- 創造的で共感できるビジョンを探索し、それを他者と共有し、巻き込んでいくプロジェクト実践を行う。

デザインストラテジスト、デザインコンサルタント/デザインリサーチャー、
クリエイティブディレクター/アートディレクター、ビジネスデザイナー、デジタルデザインエンジニア、
エクスペリエンスデザイナー、共創型ローカルデザイナー、アートナビゲーター/イベントプロデューサー、
キュレーター/デジタルアーキビスト、ビジョンデザイナー、カルチュラルデザイナー など

デザインストラテジスト

ビジネスとデザイン・アートの融合により可能となる事業戦略の立案

デザインコンサルタント / デザインリサーチャー

企業・組織におけるデザイン戦略の策定やブランディングなど企業や組織の持続的な価値提供の支援

クリエイティブディレクター / アートディレクター

組織への共感や信頼を高めるためのさまざまな施策・ツール等の企画立案から制作までの全ての工程をまとめる

ビジネスデザイナー

組織の理念を可視化し、事業価値と顧客価値の両立、サービス、ビジネスをリードする

デジタルデザインエンジニア

デジタルプロダクトの開発プロセスおよび、人間とコンピューター・デジタル技術の相互作用をデザインする

エクスペリエンスデザイナー

ユーザーがサービスや製品から得られる体験価値をデザインする

共創型ローカルデザイナー

地域活性化において価値の創出、情報発信、人材育成などをデザインする

アートナビゲーター / イベントプロデューサー

アートの社会動向や作品などに関する幅広い知識を生かし、アートの社会的価値を広く伝える/アートの社会的価値を応用展開することによる各種イベントの企画運営責任者

キュレーター / デジタルアーキビスト

博物館や美術館等で資料収集、展示、調査研究に携わる専門職員:学芸員/アーカイブのデジタル化についての知識と技能を持ち、総合的な文化情報の管理・活用をする専門家

ビジョンデザイナー

新しいビジョンを提示、これからのあるべき生活世界の形成に向けた社会課題や市場を構想する

カルチュラルデザイナー

社会や組織に新たな文化を創り、ライフスタイルとして提案する取り組みを実践する

4年間の学びのステージ

初回生教育から卒業研究までを一貫して、学生が主体的に学びを展開できるように支援します。

特に、初回生教育では学生が自己の主体的な学び方を確立すること、DiS科目群では社会実践に参画すること、DS科目群では社会実践の経験を概念化すること、DL科目群では知識や技能を身につけることを方針とした科目を提供します。

学びのステージ	Design in Society [DiS] 科目群	Design Studies [DS] 科目群	Design Language [DL] 科目群
1回生 デザイン・アートに 特有な見方・学び方 の基礎を固める		デザイン学1 デザイン学2	技能群導入科目 知識群導入科目
▼			
2回生 「生成への参加」と 「概念化」によって、 自己の課題を 明確化する	デザイン学 生成プロジェクト 演習1	往還 デザイン学3A	技能群専門科目 知識群専門科目
	デザイン学 生成プロジェクト 演習2	往還 デザイン学3B デザイン学4	
▼			
3回生 「生成への参加」と 「概念化」の反復に よって、自己の課題を より深く探究する	デザイン学 総合研究1	往還 デザイン学5	技能群専門科目 知識群専門科目
	デザイン学 総合研究2	往還 デザイン学6	
▼			
4回生 「生成への参加」と 「概念化」の反復に よる、社会価値創出 プロセスをまとめる	卒業演習1 卒業演習2		技能群専門科目 知識群専門科目



卒業研究

Q&A

高校では文系クラスに所属していますが、文系・理系でデザイン・アート学部の勉強に向き不向きはありますか？

文系クラスでも理系クラスの学生のみなさんでも支障はありません。教育内容をよく理解して関心のある学生のみなさんのチャレンジをお待ちしています。

デザイン・アート学部ではカリキュラムのほかにどのような特徴がありますか？

共同、共創の場となるプロジェクト活動を重視し、大学キャンパスだけでなく、京都、日本国内外を学びの場とした「まち全体がラーニングプレイス」というコンセプトを掲げています。

デザイン・アート学部に進学希望なのですが、企業等への就職で不利ではありませんか？

デザイン・アートの価値創出やデザイン人材は社会から求められており、左頁「キャリアモデル」に記載のようなキャリアが形成できます。

私は、社会人で時間的な余裕がありませんが、デザイン・アート学研究科で学ぶことは可能ですか？

社会人のみなさんが学びやすいよう修士課程には「1年制コース」を設置予定です。
また、オンラインやオンデマンド授業を組み込む予定としており、仕事と学業の両立が可能となります。

衣笠キャンパス ACCESS

■ JR・近鉄京都駅から

市バス 50 にて 42 分、市バス・JR バス「快速立命館」にて 36 分、「立命館大学前(終点)」下車

市バス 205 にて 38 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バス「高尾・京北線」にて 30 分、「立命館大学前」下車

■ JR 円町駅から

市バス・JR バス「快速立命館」にて 8 分、「立命館大学前(終点)」下車

市バス 15 にて 10 分、「臨」にて 9 分、「立命館大学前(終点)」下車

市バス 204/205 にて 5 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バス「高尾・京北線」にて 8 分、「立命館大学前」下車

■ 阪急電車西院駅から

市バス・JR バス「快速立命館」にて 15 分、「臨」にて 17 分、「立命館大学前(終点)」下車

市バス 205 にて 13 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

■ 京阪電車三条駅から

市バス 12 にて 53 分、市バス 15 にて 34 分、市バス 51 にて 36 分、「立命館大学前(終点)」下車

市バス 59 にて 40 分、「立命館大学前」下車



R RITSUMEIKAN
UNIVERSITY

立命館大学 デザイン・アート学部 デザイン・アート学研究科

事務局(朱雀キャンパス 5F 総合企画課) 〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1番地

TEL: 075-813-8130 | <https://www.ritsumei.ac.jp>

新設組織が置かれる都道府県への入学状況

別紙 1

○出身高校の所在地県別の入学者数の構成比（上位 5 都道府県）※直近年度

	都道府県名	人 数	構成比
1	京都府	8,543人	24.4%
2	大阪府	6,653人	19.0%
3	滋賀県	3,139人	9.0%
4	兵庫県	2,589人	7.4%
5	奈良県	1,386人	4.0%
	全 体	35,019人	100.0%

※「学校基本調査」の「出身高校の所在地県別入学者数(4-1)」を参照し、作成

○新設組織が置かれる都道府県の定員充足状況

	新組織所在地 (都道府県)	充足率		
		令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
1	京都府	101.59%	99.93%	98.19%
2				

※2024（令和6）年度 私立大学・短期大学等入学志願動向14頁（地域別の動向 大学・学部別）を参照し、作成

○新設組織の学問分野（系統区分）の定員充足状況

	系統区分	充足率		
		令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
1	芸術系	105.50%	105.32%	104.77%
2				

※2024（令和6）年度 私立大学・短期大学等入学志願動向20頁を参照し、作成

1. 書類等の題名

既設学科等の入学定員の充足状況（直近5年間）

【別紙2】 p52-p81

2. 出典

立命館大学 学内資料

3. 引用範囲

p1-p30

4. その他特記事項

学内資料のため非公開とする

既設学科等の学生募集のためのPR活動の過去の実績

別紙3

①募集を行った学科等名称及び取組の名称：オープンキャンパス（映像学部映像学科）

	R6年度入試	R7年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)	835人	1075人	①取組概要 毎年、8月の第1週の週末となる土曜日、日曜日に3キャンパスにてすべての学部がオープンキャンパスを開催している。 ②過去の取組実績を踏まえた新設組織の入学者数の見込みに関する分析 新設組織となるデザイン・アート学部でも、既設学部と同様に8月期にオープンキャンパスを開催する。既設組織である映像学部では、オープンキャンパス参加者における受験・進学希望のある参加者において受験率は42%～52%である。また、入学率は18%～22%の状況が把握される。 デザイン・アート学部でのオープンキャンパスにおいては、参加者総数を1,000人、受験対象者数を600人、受験者数を250人、入学者数を100人程度と目標設定し、動員から受験誘導、入学誘導への施策を講じていく。これにより、入学定員の約55%を確保できる想定となり、残る45%(80人)は、既設学部と同様の各種の取組に加え、デザイン・アート学部独自の「アート、デザイン、クリエイティブ系説明会」や「美大予備校等と連携した説明会」などを中核に据えた活動を通じて定員確保を行う。
うち受験対象者数 (b)	332人	423人	
うち受験者数 (c)	174人	180人	
うち入学者数 (d)	73人	79人	
(受験率 c/b)	52.4%	42.6%	
(入学率 d/b)	22.0%	18.7%	

教 員 名 簿

学 長 又 は 校 長 の 氏 名 等						
調書 番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額基本給 (千円)	現 職 (就任年月)
一	学長	ナカタニ ヨシオ 仲谷 善雄 ＜平成31年1月＞		学術博士		学校法人立命館総長 立命館大学長 (平成31年1月～令和8年12月)

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
													授 教 会	教 務 委 員 会	そ の 他	「その他」の場合、会議等の名称		
1	基 (主 専)	教授 (学部 長)	アキマ ヒヨリ 赤間 亮 ＜令和8年4月＞		文学修士※		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学総合研究2 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学4※ 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 3後 4前 4後 2後 4後	2 2 2 2 0.3 2	1 1 1 1 1 1	立命館大学 文学部 教授 (平成3.4)	○				5日	
2	基 (主 専)	教授	アリタ ヨウ子 有田 洋子 ＜令和8年4月＞		博士 (芸術学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究1 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学2 デザイン学4※ 美術教育論 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3前 4前 4後 1後 2後 2・3前 4後	2 2 2 2 2 4 0.3 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	島根大学 学術研究院教育学系 准教授 (平成27.4)	○				5日	
3	基 (主 専)	教授	イノヰリ ユウイチ 井登 友一 ＜令和8年4月＞		博士 (経営科 学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究2 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学1 デザイン学3A デザイン学4※ サービスデザイン デザインマネジメント論 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3後 4前 4後 1前 2前 2後 2・3後 2・3後 4後	2 2 2 2 2 4 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	立命館大学 経営学部 教授 (令和7.4)	○				5日	
4	基 (主 専)	教授	ウエダ アサヨコ 植田(川島) 彩芳子 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究2 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学4※ デザイン学5※ アート・ドキュメンテーション アートマネジメント演習 ミュゼオロジー 卒業研究 博物館・館園実習	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3後 4前 4後 2後 3前 1前 2・3前 2・3後 4後 4通	2 2 2 2 2 0.3 0.3 2 2 2 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	立命館大学 共通教育推進機構 教授 (令和7.4)	○				5日	
5	基 (主 専)	教授	オオシマ ヨウ 大島 陽 ＜令和8年4月＞		Master of Architectur e (米国)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究1 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学4※ デザイン学6 デジタルファブ리케이션 卒業研究 Design Study Abroad	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3前 4前 4後 2後 3後 2・3前・後 4後 1・2・3・4 前・後	2 2 2 2 2 0.3 2 4 2 2	1 1 1 1 1 1 1 2 1 1	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授 (令和7.4)	○				5日	

—教員名簿—3—

—教員名簿—4—

[illegible]

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
			授 会										教 務 委 員 会	そ 他	「その他」の場合、会議等の名称			
19	基 (主 専)	准教授	北本 英里子 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究1 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学2 デザイン学4※ CAD/CG演習 建築情報論 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3前 4前 4後 1後 2後 2・3前・後 2・3前 4後	2 2 2 2 2 4 0.3 4 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 2 1 1	神奈川工科大学 情報学部 准教授 (令5.4)	○				5日	
20	基 (主 専)	准教授	木村 智 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究2 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学1 デザイン学4※ デザイン学5※ デザイン・アートのための製図 建築意匠論 都市デザイン※ ランドスケープ・庭園史※ 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3後 4前 4後 1前 2後 3前 1前・後 2・3後 2・3後 1・4 2・3前 4後	2 2 2 2 2 4 0.3 0.3 4 2 2 1.4 1.4 2	1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1	立命館大学 理工学部 講師 (令4.4)	○				5日	
21	基 (主 専)	准教授	佐藤 弘隆 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究1 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学2 デザイン学4※ 地域調査法 歴史まちづくり 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3前 4前 4後 1後 2後 2・3前・後 2・3後 4後	2 2 2 2 2 4 0.3 4 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 2 1 1	愛知大学 地域政策学部 准教授 (令5.4)	○				5日	
22	基 (主 専)	准教授	中山 郁英 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究1 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学2 デザイン学3B デザイン学4※ デザイン学5※ ワークショップデザイン デザインと行政 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2後 3前 4前 4後 1後 2後 2後 3前 2・3前・後 2・3前 4後	2 2 2 2 4 2 0.3 0.3 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 1	立命館大学 経営学部 准教授 (令7.4)	○				5日	
23	基 (主 専)	准教授	橋口 哲志 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		デザイン学生生成プロジェクト演習1 デザイン学生生成プロジェクト演習2 デザイン学総合研究2 卒業演習1 卒業演習2 デザイン学2 デザイン学4※ コンピュータグラフィックス 感性・認知情報処理論 デジタルメディアデザイン論 メディア処理論 卒業研究	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2前 2後 3後 4前 4後 1後 2後 2・3前・後 2・3前 2・3後 2・3前 4後	2 2 2 2 2 4 0.3 4 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1	立命館大学 立命館グローバル・ イノベーション研究 機構 准教授 (令5.10)	○				5日	

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
			授 教 会										教 務 委 員 会	そ の 他	「その他」の場合、会議等の名称			
24	基 (主 専)	助 教	磯邊 美香 ＜令和8年4月＞		修士 (芸術)		デザイン学生成プロジェクト演習2 デザイン学5 デジタルビジュアルデザイン基礎 Webデザイン基礎 デザイン・アート特殊演習 デザイン・アートとビジュアルコミュニ ケーション デザイン・アート特殊講義	○ ○	2後 3前 1前 2後 2・3・4 前・後 1前 2・3・4 前・後	2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	立命館大学 経営学部 助教 (令7.4)	○				5日	
25	基 (主 専)	助 教	杉山 直磯 ＜令和8年4月＞		修士 (学術)		デザイン学6 テキストマイニング 映像・音声アーカイブ デザインのためのビッグデータ解析 デザインのためのデータマイニング	○	3後 2・3前・後 2・3前・後 2・3前・後 2・3後	2 4 4 4 2	1 2 2 2 1	大阪産業大学 デザイン工学部 契約助手 (令4.4)	○				5日	
26	そ の 他	教 授	秋吉 恵 ＜令和9年4月＞		博 士 (開発学)		平和人権フィールドスタディ		2・3通	2	1	立命館大学 共通教育推進機構 教授 (平28.4)						
27	そ の 他	教 授	池田 伸 ＜令和8年4月＞		修 士 (経済学)		企業と社会		1・2後	2	1	立命館大学 経営学部 教授 (令和6.4)						
28	そ の 他	教 授	石川 幸子 ＜令和8年4月＞		博 士 (紛争平和 学)		Introduction to the United Nations		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 教授 (令和6.4)						
29	そ の 他	教 授	石田 賀奈子 ＜令和8年4月＞		修 士 ※ (社会福祉 学)		社会と福祉		1・2後	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成29.4)						
30	そ の 他	教 授	石塚 健 ＜令和8年4月＞		博 士 (文学) (韓国)		異文化間テーマ演習		1・2後	2	1	立命館大学 経済学部 教授 (平成30.4)						
31	そ の 他	教 授	石水 毅 ＜令和8年4月＞		博 士 (理学)		生命科学（生物と生態系）		1・2前・後	4	2	立命館大学 生命科学部 教授 (平成24.4)						
32	そ の 他	教 授	市井 吉興 ＜令和8年4月＞		博 士 (社会学)		スポーツの歴史と発展		1・2前・後	4	2	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成23.4)						
33	そ の 他	教 授	稲澤 泉 ＜令和8年4月＞		博 士 (地球環境 学)		Introductory Course to Climate Change and Global Warming Introductory Course to International Project Development		1・2前 1・2前	2 2	1 1	立命館大学 経済学部 教授 (平成29.4)						
34	そ の 他	教 授	植松 健一 ＜令和8年4月＞		修 士 (法学)		日本国憲法		1・2前・後	4	2	立命館大学 法学部 教授 (平成24.4)						
35	そ の 他	教 授	遠藤 英樹 ＜令和8年4月＞		博 士 (観光学)		観光学		1・2前・後	4	2	立命館大学 文学部 教授 (平成25.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調書番号	教員区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業 科目	配当 年次	担当 単位 数	年間 開講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申請に係る大学等の職務 に従事する週当たり平均 日数	申請に係る学部等以外 の組織（他の大学等 に置かれる学部等 を含む）での基幹教 員としての勤務状況
			授教会										教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称			
36	その他	教授	オホカミ ヨシフミ 大上 芳文 ＜令和8年4月＞		工学博士		科学的な見方・考え方		1・2前	2	1	立命館大学 理工学部 教授 (令和7.4)						
37	その他	教授	オホタニ イヅミ 大谷 いづみ ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		生命科学と倫理		1・2前	2	1	立命館大学 衣笠総合研究機構 教授 (令和7.4)						
38	その他	教授	オオハシ アキラ 大橋 陽 ＜令和8年4月＞		博士 (経済学)		現代の世界経済		1・2後	2	1	立命館大学 経済学部 教授 (令和4.4)						
39	その他	教授	オモリキ モトアキ 小関 素明 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		日本の近現代と立命館 歴史観の形成 新しい日本史像		1・2前 1・2後 1・2前	2 2 2	1 1 1	立命館大学 文学部 教授 (平成9.4)						
40	その他	教授	オキダ ミサコ 小田 美佐子 ＜令和8年4月＞		博士 (法学)		現代社会と法		1・2前・後	4	2	立命館大学 法学部 教授 (平成16.4)						
41	その他	教授	オクニ タカシ 加國 尚志 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		哲学と人間		1・2後	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成14.4)						
42	その他	教授	オサダ ユウスケ 金澤 悠介 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		社会学入門		1・2前	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成29.4)						
43	その他	教授	オナヤマ チヒロ 金山 千広 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		スポーツ方法実習Ⅰ スポーツ方法実習Ⅱ		1・2前 1・2後	1 1	1 1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成28.4)						
44	その他	教授	オキワケ コウイチ 金丸 裕一 ＜令和8年4月＞		文学修士※		戦争の歴史と思想		1・2前・後	4	2	立命館大学 経済学部 教授 (平成7.4)						
45	その他	教授	オウカタ ヒロノリ 川方 裕則 ＜令和8年4月＞		博士 (理学)		宇宙科学 地球科学		1・2後 1・2前	2 2	1 1	立命館大学 理工学部 教授 (平成18.4)						
46	その他	教授	オノダニ ヒロシ 紀國 洋 ＜令和8年4月＞		博士 (経済学)		国の行政組織		1・2前	2	1	立命館大学 経済学部 教授 (平成12.4)						
47	その他	教授	キムラ シュウヘイ 木村 修平 ＜令和8年4月＞		博士 (政策・メ ディア)		英語P1 英語P2 英語P3 英語P4	○ ○ ○ ○	1前 1後 2前 2後	6 6 6 6	3 3 3 3	立命館大学 生命科学部 教授 (平22.4)						
48	その他	教授	クワン ハナジюн 権 学俊 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		スポーツと現代社会		1・2前・後	4	2	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成20.4)						
49	その他	教授	クノ キヌコ 久野 和子 ＜令和8年4月＞		修士 (教育学)		メディアと図書館		1・2前・後	4	2	立命館大学 文学部 教授 (令和4.1)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教員 区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業 科目	配当 年次	担当 単位 数	年間 開講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 日 数	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称		
50	その他	教授	古賀 慎二 ＜令和8年4月＞		文学修士		エリアスタディ入門		1・2後	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成3.4)						
51	その他	教授	小林 功 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		ヨーロッパの歴史		1・2前	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成20.4)						
52	その他	教授	小堀 眞裕 ＜令和8年4月＞		博士 (法学)		市民と政治		1・2前・後	4	2	立命館大学 法学部 教授 (平成8.4)						
53	その他	教授	佐尾 俊明 ＜令和8年4月＞		博士 (経済学)		(留) 日本の経済・経営 Introduction to Economics		1・2前 1・2前・後	2 4	1 2	立命館大学 経済学部 教授 (令和3.4)						
54	その他	教授	佐々 充昭 ＜令和8年4月＞		哲学博士 (韓国)		宗教と社会		1・2前	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成17.4)						
55	その他	教授	SVININ MIKHAIL ＜令和8年4月＞		Ph. D. St. Petersburg Institute (ロシア)		History of Computing		1・2後	2	1	立命館大学 情報理工学部 教授 (令和7.4)						
56	その他	教授	末近 浩太 ＜令和8年4月＞		博士 (地域研究)		イスラーム世界の多様性		1・2前	2	1	立命館大学 国際関係学部 教授 (平成18.4)						
57	その他	教授	杉野 直樹 ＜令和8年4月＞		教育学修士 ※		Understanding Language		1・2後	2	1	立命館大学 情報理工学部 教授 (平成16.4)						
58	その他	教授	杉本 通百則 ＜令和8年4月＞		博士 (商学)		現代環境論		1・2後	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成19.4)						
59	その他	教授	鈴木 健二 ＜令和8年4月＞		医学博士		生命科学 (分子と生命)		1・2前・後	4	2	立命館大学 薬学部 教授 (平成15.4)						
60	その他	教授	高山 幸秀 ＜令和8年4月＞		博士 (理学)		情報の数理		1・2後	2	1	立命館大学 理工学部 教授 (令和6.4)						
61	その他	教授	田中 聡 ＜令和8年4月＞		文学修士※		京都学		1・2前	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成24.1)						
62	その他	教授	田中 力 ＜令和8年4月＞		農学修士※		統計学		1・2後	2	1	立命館大学 経営学部 教授 (平成2.4)						
63	その他	教授	田原 憲和 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		世界の言語と文化		1・2前	2	1	立命館大学 法学部 教授 (平成24.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 へ の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
			授 業 会										教 務 委 員 会	そ の 他	「その他」の場合、会議等の名称			
64	その他	教授	フリガナ 鳥居 朋子 ＜令和8年4月＞		博士 (教育学)		ピア・サポート論		1・2前・後	4	2	立命館大学 教育開発推進機構 教授 (平成21.4)						
65	その他	教授	トヤマ シンコ 鳥山 純子 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		現代の国際関係と日本		1・2前	2	1	立命館大学 国際関係学部 教授 (平成30.4)						
66	その他	教授	ナカカワ ヨリコ 中川 洋子 ＜令和8年4月＞		博士 (マネジメ ント)		学びとキャリア 仕事とキャリア コーオプ演習 (理論) コーオプ演習 (実践)		1・2前 2・3前 2・3通 2・3後	2 2 2 2	1 1 1 1	立命館大学 共有教育推進機構 教授 (平成25.4)						
67	その他	教授	コシハシ 孝浩 西林 孝浩 ＜令和8年4月＞		修士 (文学)		(留) 日本の文化・地理・歴史 美と芸術の論理		1・2前 1・2後	2 2	1 1	立命館大学 文学部 教授 (平成16.4)						
68	その他	教授	ハシモト 貴彦 橋本 貴彦 ＜令和8年4月＞		博士 (経済学)		経済と社会		1・2後	2	1	立命館大学 経済学部 教授 (平成24.4)						
69	その他	教授	ハシモト 健志 橋本 健志 ＜令和8年4月＞		博士 (人間・環 境学)		スポーツのサイエンス		1・2前	2	1	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授 (平成22.4)						
70	その他	教授	ハナサキ トミノリ 花崎 知則 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		材料と化学		1・2前	2	1	立命館大学 生命科学部 教授 (平成12.4)						
71	その他	教授	ハヤシ ヨシノリ 林 芳紀 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		科学技術と倫理		1・2前	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成24.4)						
72	その他	教授	ハ'ルズ トーマス クリフトン PALS Thomas Clifton ＜令和9年4月＞		Master of Arts in Education (米国)		University of Hawaii Program		2・3後	2	1	立命館大学 理工学部 教授 (平成22.4)						
73	その他	教授	フクノ ヨシアキ 福岡 良明 ＜令和8年4月＞		博士 (人間・環 境学)		メディアと現代文化		1・2前	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成20.4)						
74	その他	教授	ホワイティ ジェレミー ステュワート WHITE JEREMY STEWART ＜令和8年4月＞		博士 (人間・環 境学)		Computers in Education		1・2後	2	1	立命館大学 情報理工学部 教授 (平成21.4)						
75	その他	教授	マエダ 信彦 前田 信彦 ＜令和8年4月＞		博士 (社会学)		(留) 日本の社会・政治		1・2後	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成17.4)						
76	その他	教授	マサモト ヤスノブ 松本 保宣 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		中国の国家と社会		1・2後	2	1	立命館大学 文学部 教授 (平成14.4)						
77	その他	教授	ミヤコシ ノボル 宮脇 昇 ＜令和8年4月＞		博士 (政治学)		Cross Border Policy Issues		1・2後	2	1	立命館大学 政策科学部 教授 (平成16.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担当授業科目の名称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
			授 教 会										教 務 委 員 会	そ 他	「その他」の場合、会議等の名称			
78	その他	教授	安田 裕子 ＜令和8年4月＞		博士 (教育学)		メンタルヘルス		1・2前	2	1	立命館大学 総合心理学部 教授 (平成23.4)						
79	その他	教授	山口 歩 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		科学・技術と社会		1・2後	2	1	立命館大学 産業社会学部 教授 (平成7.4)						
80	その他	教授	山口 洋典 ＜令和8年4月＞		博士 (人間科学)		平和人権フィールドスタディ 現代社会とボランティア シチズンシップ・スタディーズ		2・3通 1・2前・後 2・3後	2 4 2 2	1 2 2 1	立命館大学 共有教育推進機構 教授 (平成23.4)						
81	その他	教授	山崎 文徳 ＜令和9年4月＞		博士 (商学)		平和人権フィールドスタディ		2・3通	2	1	立命館大学 経営学部 教授 (平成24.4)						
82	その他	教授	山下 美朋 ＜令和8年4月＞		博士 (外国語教育学)		英語P1 英語P2 英語P3 英語P4	○ ○ ○ ○	1前 1後 2前 2後	4 4 4 4	2 2 2 2	立命館大学 生命科学部 教授 (平28.4)						
83	その他	教授	山下 洋一 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		情報技術と社会		1・2前	2	1	立命館大学 情報理工学部 教授 (平成9.4)						
84	その他	教授	山中 司 ＜令和8年4月＞		博士 (政策・メディア)		英語P1 英語P2 英語P3 英語P4 Liberal Arts Seminar 教養ゼミナール 超領域リベラルアーツ	○ ○ ○ ○	1前 1後 2前 2後 1・2前・後 1・2前・後 3・4前・後	6 6 6 6 4 4 4	3 3 3 3 2 2 2	立命館大学 生命科学部 教授 (平20.4)						
85	その他	教授	山本 憲隆 ＜令和8年4月＞		工学博士		近現代の科学技術 (留) 日本の自然・科学技術		1・2後 1・2後	2 2	1 1	立命館大学 理工学部 教授 (令和6.4)						
86	その他	教授	吉岡 真史 ＜令和8年4月＞		経済学士		日本経済概説		1・2後	2	1	立命館大学 経済学部 教授 (令和6.4)						
87	その他	教授	吉次 公介 ＜令和8年4月＞		博士 (政治学)		現代日本の政治		1・2前・後	4	2	立命館大学 法学部 教授 (平成25.4)						
88	その他	教授	依田 祐一 ＜令和8年4月＞		博士 (経営学)		現代の経営		1・2前	2	1	立命館大学 経営学部 教授 (平成27.4)						
89	その他	教授	RAJKAI ZSOMBOR TIBOR ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		Introduction to Linguistics		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 教授 (平成24.4)						
90	その他	教授	李 亮 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		Digital Archives: Applications of ICT to the Humanities		1・2後	2	1	立命館大学 情報理工学部 教授 (平成23.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調書番号	教員区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業科目	配当 年次	担当 単位数	年間 開講数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申請に係る大学等の職務 に従事する週当たり平均 数	申請に係る学部等以外 の組織（他の大学等 に置かれる学部等 を含む）での基幹教 員としての勤務状況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称		
91	その他	准教授	イシカワ リョウコ 石川 涼子 ＜令和8年4月＞		博士 (政治学)		グローバル社会の体験と理解 Intensive Language Workshop Language for Academic Communication Global Project-Based Learning Area Study I Area Study II Global Study		1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後	2 2 4 4 2 2 4	1 1 2 2 1 1 8	立命館大学 国際教育推進機構 准教授 (平成25.4)						
92	その他	准教授	オモイダシ 萌 ＜令和8年4月＞		博士 (法学)		Introduction to Law		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和2.4)						
93	その他	准教授	カワイ トオル 河井 亨 ＜令和8年4月＞		博士 (教育学)		現代の教育		1・2前・後	4	2	立命館大学 スポーツ健康科学部 准教授 (平成25.4)						
94	その他	准教授	カンダUBODA Prabath ブッヂェイカ Buddhika ＜令和8年4月＞		博士 (言語学)		Global Project-Based Learning		1・2前・後	2	1	立命館大学 国際教育推進機構 准教授 (平成25.4)						
95	その他	准教授	キタウラ ヒロユキ 北浦 寛之 ＜令和8年4月＞		博士 (人間・環境学)		映像と表現		1・2前	2	1	立命館大学 映像学部 准教授 (令和6.4)						
96	その他	准教授	キム ウィクトリヤ KIM VIKTORIYA ＜令和8年4月＞		博士 (人間科学)		Introduction to Gender Studies		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和4.4)						
97	その他	准教授	キム リチヤ 金 友子 ＜令和8年4月＞		修士※ (文化学)		東アジアと朝鮮半島		1・2前	2	1	立命館大学 国際関係学部 准教授 (平成25.4)						
98	その他	准教授	コチハラ ミチル 小寺 未知留 ＜令和8年4月＞		博士 (音楽学)		音楽原論		1・2前・後	4	2	立命館大学 文学部 准教授 (令和2.4)						
99	その他	准教授	コハナシ キズシゲ 小林 主茂 ＜令和8年4月＞		Ph. D. in International Relations and Political Science (スイス)		Introduction to Peace Studies		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和4.4)						
100	その他	准教授	コマミ カス'ヨシ 駒見 一善 ＜令和8年4月＞		修士※ (国際関係学)		グローバル社会の体験と理解 Intensive Language Workshop Language for Academic Communication Academic Communication(Online Learning) Area Study(Online Learning)		1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前 1・2前	2 4 4 2 2	1 2 2 1 1	立命館大学 国際教育推進機構 准教授 (平成26.4)						
101	その他	准教授	コンド'リ ユキエ 近藤 雪絵 ＜令和8年4月＞		博士 (言語コミュニケーション文化)		英語P1 英語P2 英語P3 英語P4	○ ○ ○ ○	1前 1後 2前 2後	4 4 4 4	2 2 2 2	立命館大学 薬学部 准教授 (平23.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
													授 会	教 務 委 員 会	そ の 他	「その他」の場合、会議等の名称		
102	その他	准教授	サタケ ケンシ 佐竹 賢治 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		情報科学		1・2前	2	1	立命館大学 情報理工学部 准教授 (平成10.4)						
103	その他	准教授	ショウジ セキ 庄子 萌 ＜令和8年4月＞		Doctor of Philosophy (英国)		Cross-cultural Encounters 1 Cross-cultural Encounters 2 Cross-cultural Studies グローバル社会の体験と理解		1・2前・後 1・2前・後 1・2後 1・2前・後	4 4 2 2	2 2 1 1	立命館大学 国際教育推進機構 准教授 (令和4.4)						
104	その他	准教授	スミス ナマニエル SMITH NATHANIEL M. ＜令和8年4月＞		PhD, Anthropolog y (米国)		Introduction to Anthropology		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和3.4)						
105	その他	准教授	ダウアー ハリー DAUER HARRY ＜令和8年4月＞		Master of Education (米国)		Language in Politics		1・2後	2	1	立命館大学 情報理工学部 准教授 (平成19.4)						
106	その他	准教授	タニムラ ミドリ 谷村 緑 ＜令和8年4月＞		博士 (言語文化 学)		Non-verbal Communication		1・2前	2	1	立命館大学 情報理工学部 准教授 (令和2.4)						
107	その他	准教授	ダニスマン イドリス DANISMAN IDRIS ＜令和8年4月＞		博士 (地域研究 学)		Japan and the West		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和4.4)						
108	その他	准教授	ナカシマ タカシ 永島 昂 ＜令和8年4月＞		博士 (経済学)		科学と技術の歴史		1・2前	2	1	立命館大学 産業社会学部 准教授 (平成27.4)						
109	その他	准教授	ナカ タ アキコ 永田 彰子 ＜令和8年4月＞		PhD (Film Studies) (英国)		Understanding Visual Culture		1・2前・後	4	2	立命館大学 映像学部 准教授 (令和5.4)						
110	その他	准教授	ナカ ノ ヤシシ 永野 聡 ＜令和8年4月＞		博士 (建築学)		ソーシャルデザイン論		1・2前・後	4	2	立命館大学 産業社会学部 准教授 (平成30.4)						
111	その他	准教授	ナカノリ フナトシ 永守 伸年 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		人間性と倫理		1・2後	2	1	立命館大学 文学部 准教授 (令和5.4)						
112	その他	准教授	ナリタ ヒロキ 成田 大起 ＜令和8年4月＞		博士 (政治学)		社会思想史		1・2前	2	1	立命館大学 政策科学部 准教授 (令和6.4)						
113	その他	准教授	ニシムラ ヒデアキ 西門 秀人 ＜令和8年4月＞		博士 (工学)		データサイエンス・AI基礎 データエンジニアリング基礎 Foundations of Data Science and AI Foundations of Data Engineering		1・2前・後 1・2前・後 1・2前 1・2後	4 4 2 2	2 2 1 1	立命館大学 共通教育推進機構 准教授 (令和5.9)						
114	その他	准教授	ハシグイ ササリ 羽谷 沙織 ＜令和8年4月＞		博士 (教育学)		Cross-cultural Seminar Academic Skills 1 Academic Skills 2 グローバル社会の体験と理解 Intensive Language Workshop Language for Academic Communication Area Study I Area Study II Global Study		1・2前 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後 1・2前・後	2 4 4 4 2 2 2 4 8	1 2 2 2 1 1 2 2 2	立命館大学 国際教育推進機構 准教授 (平成22.1)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調書番号	教員区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業 科目	配当 年次	担当 単位 数	年間 開講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 へ の 参 画 状 況				申請に係る大学等の職務 に従事する週当たり平均 日 数	申請に係る学部等以外 の組織（他の大学等 に置かれる学部等 を含む）での基幹教 員としての勤務状況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称		
115	その他	准教授	マツサカ ヒロアキ 松坂 裕晃 ＜令和8年4月＞		PhD (History) (米国)		Modern World History		1・2前・後	4	2	立命館大学 国際関係学部 准教授 (令和5.4)						
116	その他	准教授	ミツイ ナミコ 三井 久美子 ＜令和9年4月＞		修士※ (言語・文 化学)		(留) 日本語学		2・3後	2	1	立命館大学 国際関係学部 准教授 (平成28.4)						
117	その他	准教授	ヤギハラ ナツミ 柳原 恵 ＜令和8年4月＞		博士 (学術)		ジェンダーとダイバーシティ		1・2前・後	4	2	立命館大学 産業社会学部 准教授 (令和2.4)						
118	その他	准教授	ヨシミ トモフミ 禧美 智章 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		文学と社会		1・2前・後	4	2	立命館大学 文学部 准教授 (令和5.4)						
119	その他	准教授	ヨトワ マリア イヴナノワ YOTOVA MARIA IVANOVA ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		文化人類学入門 Introduction to Food Culture		1・2前・後 1・2後	4 2	2 1	立命館大学 食マネジメント学部 准教授 (平成30.4)						
120	その他	准教授	ワキハタシ コウスケ 若林 宏輔 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		心理学入門		1・2前・後	4	2	立命館大学 総合心理学部 准教授 (平成25.4)						
121	その他	講師	イケオ ケスシ 池尾 靖志 ＜令和8年4月＞		修士 (国際関係 学)		現代平和論		1・2前・後	4	2	立命館大学 産業社会学部 大学非常勤講師 (平成31.4)						
122	その他	講師	イケタ コウスケ 池田 剛介 ＜令和8年4月＞		修士 (美術)		フィジカルアート表現基礎（立体造形）		1前・後	2	1	京都教育大学 美術領域専攻 非常勤講師 (令和2.4)						
123	その他	講師	イセ トシヒコ 伊勢 俊彦 ＜令和8年4月＞		文学修士※		論理と思考		1・2前	2	1	立命館大学 文学部 授業担当講師 (令和7.4)						
124	その他	講師	イナムラ ヤマキ ユリコ 今村(山根) 友里子 ＜令和9年4月＞		博士 (工学)		ランドスケープ・庭園史※		2・3前	0.6	1	舞鶴工業高等専門学 校 講師 (平成31.4)						
125	その他	講師	ウエダ カンジ 植田 憲司 ＜令和9年4月＞		修士 (文学)		アートマネジメント論		2・3前	2	1	京都経済短期大学 経営情報学科 専任講師 (令和4.4)						
126	その他	講師	ウツミ ジュンヤ 内海 潤也 ＜令和9年4月＞		修士 (哲学)		視覚芸術表現論		2・3後	2	1	公益財団法人 石橋財団アーティ ン美術館 学芸員 (令和3.2)						
127	その他	講師	オオタ トモキ 太田 智己 ＜令和8年4月＞		博士 (美術)		芸術批評論		1後	2	1	佛教大学 歴史学部 准教授 (令和4.4)						
128	その他	講師	オカダ ヒロキ 岡田 秀之 ＜令和9年4月＞		修士 (美学芸術 学)		博物館経営論		2・3前	2	1	福田美術館 学芸課長 (令和1.10)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
			授 授 会										教 務 委 員 会	そ の 他	「その他」の場合、会議等の名称			
129	その他	講師	岡本 晋 ＜令和9年4月＞		修士 (工学)		ワークショップデザイン		2・3前・後	2	1	一般社団法人moon 代表理事 (令和7.3)						
130	その他	講師	岡本 小百合 ＜令和8年4月＞		修士 (文学)		文芸創作論		1・2前・後	4	2	立命館大学 経済学部 授業担当講師 (令和4.4)						
131	その他	講師	小倉 由佳子 ＜令和9年4月＞		修士 (文学)		パフォーマンス制作と記録		2・3前・後	4	2	ロームシアター京都 公益財団法人京都市 音楽芸術文化振興財 団 プログラムディレク ター (平成28.4)						
132	その他	講師	金丸 敏幸 ＜令和8年4月＞		博士 (人間・環 境学)		Introduction to Computational Linguistics		1・2後	2	1	立命館大学 言語教育情報研究科 授業担当講師 (令和4.4)						
133	その他	講師	金子 貴昭 ＜令和8年4月＞		博士 (文学)		デジタルヒューマニティーズ概論 デジタル文化資源の活用		1後 2・3前・後	2 2	1 1	京都先端科学大学 人文学部 准教授 (令和5.4)						
134	その他	講師	栗原 祐司 ＜令和9年4月＞		学士 (教養)		生涯学習概論		2・3前	2	1	国立科学博物館 理事・副館長 (令和5.4)						
135	その他	講師	小島 一郎 ＜令和9年4月＞		修士 (メディア 表現)		CAD/CG演習		2・3前・後	4	2	株式会社ライゾマ ティクス (平成22.4)						
136	その他	講師	作田 知樹 ＜令和9年4月＞		修士 (文学)		デザインと知的財産権		2・3後	2	1	東京藝術大学 大学美術館 ゲスト講師 (令和3.9)						
137	その他	講師	実方(菊地) 葉子 ＜令和10年4月＞		修士 (文学)		博物館・学内実習		3前・後	4	2	公益財団法人 泉屋博物館 学芸部長 (平成9.4)						
138	その他	講師	しばた(柴田) みづき ＜令和8年4月＞		博士 (美術)		フィジカルアート表現基礎（絵画）		1前・後	2	1	京都芸術大学 通信教育部 リベラルアーツセン ター 講師 (令和6.4)						
139	その他	講師	関口 達也 ＜令和9年4月＞		博士 (工学)		ジオデザイン		2・3前・後	4	2	京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授 (令和3.6)						
140	その他	講師	高木 良枝 ＜令和9年4月＞		修士 (芸術)		コミュニティデザイン		2・3前・後	4	2	立命館大学 政策科学部 授業担当講師 (令和7.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教 員 区 分	職 位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年 齢	保 有 学 位 等	月 額 基 本 給 (千円)	担 当 授 業 科 目 の 名 称	主 要 授 業 科 目	配 当 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申 請 に 係 る 大 学 等 の 職 務 に 従 事 す る 週 当 た り 平 均 数 日	申 請 に 係 る 学 部 等 以 外 の 組 織 (他 の 大 学 等 に 置 か れ る 学 部 等 を 含 む) で の 基 幹 教 員 と し て の 勤 務 状 況
													授 教 会	教 務 委 員 会	そ 他	「その他」の場合、会議等の名称		
141	その他	講師	高田 美咲 ＜令和8年4月＞		学士 (芸術)		デザイン・アートのための製図		1前・後	4	2	高田美咲デザイン事務所 (平成30.12)						
142	その他	講師	高広 伯彦 ＜令和9年4月＞		博士 (経営科学)		デザインとマーケティング		2・3前	2	1	同志社大学大学院 ビジネス研究科 教授 (令和7.4)						
143	その他	講師	武内 樹治 ＜令和9年4月＞		博士 (文学)		Webアーカイブ技術		2・3前・後	4	2	奈良文化財研究所 企画調整部文化財情報研究室 アソシエイトフェロー (令和6.5)						
144	その他	講師	谷口 武司 ＜令和8年4月＞		工学学士		インダストリアルデザイン論		1後	2	1	法政大学 デザイン工学部 兼任講師 (平成24.4)						
145	その他	講師	辻野 理花 ＜令和8年4月＞		博士 (社会学)		映像メディア実践入門		1・2前・後	4	2	立命館大学 映像学部 講師 (令和7.4)						
146	その他	講師	辻村 和正 ＜令和8年4月＞		Master of Architecture (米国)		人間中心デザイン論		1前	2	1	大阪経済大学 情報社会学部 非常勤講師 (令和5.9)						
147	その他	講師	中川 加奈子 ＜令和8年4月＞		博士 (社会学)		世界と日本の食文化		1・2前	2	1	立命館大学 法学部 授業担当講師 (令和6.4)						
148	その他	講師	永盛 祐介 ＜令和9年4月＞		博士 (感性科学)		デザイン評価法		2・3前	2	1	東京都市大学 デザイン・データ科学部 准教授 (令和5.4)						
149	その他	講師	中山 摩衣子 ＜令和9年4月＞		修士 (文学)		博物館展示論		2・3後	2	1	京都市京セラ美術館 学芸員 (令和2.4)						
150	その他	講師	西田 悠哉 ＜令和8年4月＞		学士 (文学)		フィジカルアート表現基礎 (身体パフォーマンス)		1前・後	2	1	京都市立美術工芸高等学校 非常勤講師 (令和7.4)						
151	その他	講師	西堀 寛子 ＜令和8年4月＞		修士 (工学)		デザイン・アートのための製図		1前・後	4	2	株式会社大塚工務店 (令和5.10-令和7.3)						
152	その他	講師	西山 剛 ＜令和9年4月＞		博士 (文学)		博物館資料論		2・3後	2	1	京都府京都文化博物館 主任学芸員 (令和6.4)						
153	その他	講師	野々山 正章 ＜令和9年4月＞		修士 (環境情報学)		グラフィックファシリテーション		2・3前・後	4	2	株式会社ゆめみ CD0 兼 プリンシパ ル・プロダクトデザ イナー (令和2.10)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調書番号	教員区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業 科目	配当 年次	担当 単位 数	年間 開講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 の 参 画 状 況				申請に係る大学等の職務 に従事する週当たり平均 日数	申請に係る学部等以 外の組織（他の大学 等に置かれる学部等 を含む）での基幹教 員としての勤務状況
													教授会	教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称		
154	その他	講師	ハヤカワ イワサキ 早川(岩崎) 小百合 ＜令和9年4月＞		博士 (工学)		都市デザイン※		2・3後	0.6	1	京都大学 人と社会の未来研究 院 特定助教						
155	その他	講師	ヒラノカ ヨシオ 平岡 由夫 ＜令和8年4月＞		博士 (理学)		数理の世界		1・2後	2	1	立命館大学 理工学部 理工系基礎教育専任 講師 (平成29.4)						
156	その他	講師	フクシ ユウヤ 福士 雄也 ＜令和9年4月＞		修士 (文学)		博物館資料保存論		2・3前	2	1	京都国立博物館 学芸部 研究員 (平成26.9)						
157	その他	講師	マツオカ マサフミ 松岡 正明 ＜令和9年4月＞		修士 (工学)		CAD/CG演習		2・3前・後	4	2	建築情報学会 育成委員 (令和3.4)						
158	その他	講師	マツノ ミホ 松園 美帆 ＜令和9年4月＞		修士 (知識科学)		デザインと人類学		2・3後	2	1	近畿大学 経営学部 非常勤講師 (令和4.4)						
159	その他	講師	マルカワ ヒロユキ 丸川 雄三 ＜令和9年4月＞		博士 (工学)		博物館情報・メディア論		2・3後	2	1	国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 教授 (令和6.4)						
160	その他	講師	ミヅタ ケンイチ 水谷 憲一 ＜令和8年4月＞		修士 (アメリカ研究)		アメリカの社会と文化		1・2前	2	1	立命館大学 教養教育センター 大学非常勤講師 (令和3.4)						
161	その他	講師	ミヅタ イヅナ 水谷(井福) 亜希 ＜令和9年4月＞		修士 (芸術学)		博物館教育論		2・3前	2	1	京都工芸繊維大学 非常勤講師 (令和3.4)						
162	その他	講師	ムラノ マサキ 村野 正景 ＜令和9年4月＞		修士 (比較社会文化)		博物館概論		2・3後	2	1	静岡大学学術院 情報学領域 准教授 (令和6.4)						
163	その他	講師	モリ アサキ 森 一貴 ＜令和8年4月＞		Master of Arts (Art and Design) (フィンランド)		地域デザイン論		1前	2	1	東北芸術工科大学 デザイン工学部 専任講師 (令和6.4)						
164	その他	講師	モリオカ トヨシ 森岡 東洋志 ＜令和9年4月＞		修士※ (工学)		デザインと知覚		2・3後	2	1	大阪芸術大学短期大 学部 デザイン美術学科 アートサイエンス コース 非常勤講師 (平成31.4)						
165	その他	講師	ヤスダケ ルミ 安武 留美 ＜令和8年4月＞		Ph. D. in History (米国)		Introduction to Global Justice		1・2前	2	1	立命館大学 経営学部 授業担当講師 (令和5.4)						

教 員 の 氏 名 等																		
(デザイン・アート学部デザイン・アート学科)																		
調 書 番 号	教員 区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	主要 授業 科目	配当 年次	担当 単位 数	年間 開講 数	現 職 (就任年月)	教 育 課 程 の 編 成 等 の 意 思 決 定 に 係 る 会 議 等 へ の 参 画 状 況				申請に係る大学等の職務 に従事する週当たり平均 数	申請に係る学部等以外 の組織（他の大学 等に置かれる学部等 を含む）での基幹教 員としての勤務状況
			教授会										教務委員会	その他	「その他」の場合、会議等の名称			
166	その他	講師	ヤギワ 英輔 ＜令和9年4月＞		博士 (地域研究)		音楽とデザイン		2・3前	2	1	京都女子大学大学院 発達教育学研究科 非常勤講師 (令和6.4)						
167	その他	講師	ヤマコシ 理央 ＜令和8年4月＞		公共政策学 修士 (専門職)		グローバルデザイン論		1前	2	1	株式会社三菱総合研 究所 シニアプロジェクト マネージャー (平成28.2)						
168	その他	講師	ユウ ヤスト 由良 泰人 ＜令和8年4月＞		準学士 (映像)		デジタルアート表現基礎（立体造形）		1前・後	2	1	大阪電気通信大学 総合情報学部 教授 (令和2.4)						
169	その他	講師	ヨシタキ 泰亮 吉岡 泰亮 ＜令和8年4月＞		博士 (政策科学)		災害と安全		1・2前	2	1	立命館大学 政策科学部 授業担当講師 (令和2.4)						
170	その他	講師	ヨシタ テロキ 芳田 哲也 ＜令和8年4月＞		博士 (医学)		現代人とヘルスケア		1・2後	2	1	立命館大学 法学部 大学非常勤講師 (平成28.4)						

基幹教員の年齢構成・学位保有状況										
職 位	学 位	29 歳 以 下	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	60 ～ 64 歳	65 ～ 69 歳	70 歳 以 上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	3 人	5 人	3 人	人	人	11 人	
	修 士	人	人	人	4 人	人	1 人	人	5 人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准 教 授	博 士	人	1 人	5 人	人	人	人	人	6 人	
	修 士	人	人	1 人	人	人	人	人	1 人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修 士	人	1 人	1 人	人	人	人	人	2 人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	1 人	8 人	5 人	3 人	人	人	17 人	
	修 士	人	1 人	2 人	4 人	人	1 人	人	8 人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短 期 大 学	人	人	人	人	人	人	人	人	
	そ の 他	人	人	人	人	人	人	人	人	

（注）

1 この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。

2 この書類は、基幹教員についてのみ作成すること。

3 この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。

4 「基幹教員の年齢構成・学位保有状況」欄の「基幹教員」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合、「専任教員」と読み替えること。

5 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。